



消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書



木部暢子 [編]

2012年8月

はじめに

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」は、国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクトとして 2009 年 10 月にスタートしました。2010 年度からは毎年 1 回、共同研究者や若手研究者が 1 カ所に集まって共同で調査を行う合同調査を実施しています。これまで、2 回の合同調査を行いました。それは、次のとおりです。

第 1 回合同調査 鹿児島県喜界島方言調査（2010 年 9 月）

第 2 回合同調査 沖縄県宮古方言調査（2011 年 9 月）

本書は、このうち、第 2 回合同調査 宮古方言調査の調査報告書です。

調査の折りには、たくさんの方にお世話になりました。まず、暑いなか、また、お忙しいなか、公民館まで足を運んでくださり、親切に宮古のことばを教えてくださいました方々に深く御礼申し上げます。みなさんのおかげで、このような報告書を作成することができました。また、川上哲也宮古島市教育長をはじめとして、教育委員会生涯学習部生涯学習振興課のみなさんには、調査の準備から、調査の実施、文化講演会に至るまで、大変お世話になりました。特に、生涯学習振興課文化財係主任主事の新城宗史さんには、地元の方々のご紹介や日程調整などで、お世話をおかけしました。深く感謝申し上げます。

この報告書の内容は、宮古のことば全体から見ると、ごく一部のわずかなものにすぎませんが、宮古のことばの研究や記録・保存の資料として、少しでも多くの方々に使っていただけると幸いに存じます。また、国立国語研究所ホームページの「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」のページで、本書のPDF版を公開しています。こちらもぜひ、ご覧ください。

2012年 8 月 1 日

国立国語研究所 木部 暢子

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書

目 次

はじめに

1	プロジェクトの概要（木部 暢子）	1
2	調査の概要（木部 暢子）	5
3	宮古方言の概要	
	宮古諸方言の音韻一体系と比較一（トマ ペラール・林 由華）	13
	南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告（五十嵐 陽介）	53
	宮古語の動詞活用一代表形、否定形、過去形、中止形一 （かりまた しげひさ）	69
4	宮古方言の特徴	
	宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討（松浦 年男）	111
	宮古群島若年層による方言音声認識の実態一 ^{ウイブストゥ} 老人と若者の間一 ^{バカムヌ} （中島 由美・徳永 晶子・諸岡 大悟）	127
5	宮古方言データ集	
	凡例および表記について（木部 暢子）	149
	宮古方言基礎語彙 a データ	161
	宮古方言基礎語彙 b データ	195
	宮古方言文法項目 データ	217
	宮古方言基礎語彙 共通語索引	261
	宮古方言文法項目 一覧	267
6	宮古方言研究文献目録	273
7	文化講演会	281

執筆者紹介

1 プロジェクトの概要

木部 暢子（国立国語研究所）

1 プロジェクトの目的

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」は、国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクトとして2009年にスタートした。プロジェクトの目的は以下のとおりである。

グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると、日本語方言の中では、沖縄県のほぼ全域の方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は、他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や、他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く、一地域の方言研究だけでなく、歴史言語学、一般言語学の面でも高い価値を持っている。また、これらの方言では、小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く、バリエーションがどのように形成されたか、という点でも注目される。

本プロジェクトでは、フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して、これら危機方言の調査を行い、その特徴を明らかにすると同時に、言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行う。

（国立国語研究所ホームページより）

2 研究方法

消滅危機方言の調査は緊急を要する。そのため、フィールド調査に実績を持つ国内外の研究者を組織化し、調査研究を効率的に進める必要がある。また、質の高いデータを残すために、これまで、必ずしも統一的でなかった方言（言語）の調査方法や記述方法に統一性を持たせる必要がある。さらに、将来の方言（言語）研究を担う若手研究者の育成も必要である。以上を踏まえて、本プロジェクトでは次の2種類の調査をベースとして研究を進めている。

(1) 共同研究者が各自のフィールドで行う各地点調査研究

(2) 共同研究者が一同に会して行う合同調査研究

(1) はそれぞれの共同研究者がそれぞれのフィールドで行う調査研究で、共同研究者はその成果をプロジェクトの共同研究発表会で発表し、自分の調査研究を発展させるきっかけとしている（共同研究発表会では、若手研究者の研究を支援するために、共同研究者以外の若手研究者が発表を行うこともある）。

(2) は調査地点を定め、その地点の音声・アクセント・文法・基礎語彙・談話等を総合的に記述する調査である。この調査には、共同研究者だけでなくポスドク、学振特別研究員、大学院生といった若手研究者も参加し、参加者が共同で調査・データ整理・報告書の作成を行っている。これまで、鹿児島県喜界島方言調査（2010 年 9 月）、沖縄県宮古方言調査（2011 年 9 月）の 2 回の調査を行った。

3 共同研究発表会

フィールド調査のほかに、年 2・3 回、公開の共同研究発表会を開催し、研究者同士の意見交換を行っている。平成 23 年度は以下のような研究会を開催した。

■平成 23 年度 第 1 回（「語彙の音韻特性」と合同開催）

日時：平成 23 年 5 月 21 日（土）・5 月 22 日（日）

場所：神戸大学

5 月 21 日（土）[公開シンポジウム] N 型アクセントの原理と成立

1. 上野善道（東京大学名誉教授 / 国立国語研究所客員教授）
「N 型アクセントとは何か」
2. 木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系教授）
「九州 2 型アクセントの実態」
3. 窪菌晴夫（国立国語研究所 理論・構造研究系教授）
「鹿児島県甕島方言のアクセント規則」
4. 松森晶子（日本女子大学教授 / 国立国語研究所客員教授）
「隠岐島 3 型アクセントの再解釈」
5. 新田哲夫（金沢大学教授 / 国立国語研究所プロジェクト共同研究員）
「福井市周辺部の N 型アクセント」

ディスカッション

司会：ウエイン・ローレンス（ニュージーランド オークランド大学／国立国語研究所プロジェクト共同研究員）

5 月 22 日（日）プロジェクト共同研究発表会

1. まつもと ひろたけ（「危機言語」プロジェクト共同研究員）
「奄美喜界島方言のアリ・リ系のかたちをめぐって」
2. 高橋 康德（東京外国語大学大学院・日本学術振興会特別研究員）
「上海語変調におけるピッチ下降現象」

■平成 23 年度 第 2 回（「語彙の音韻特性」と合同開催）

日時：平成 23 年 7 月 16 日（土）・7 月 17 日（日）

場所：国立国語研究所

7 月 16 日

1. 青井隼人（東京外国語大学大学院／日本学術振興会特別研究員）

「舌端の狭めを伴う母音の音声的記述：宮古多良間方言の事例研究

2. 又吉里美（志學館大学）

「沖縄津堅島方言の文末詞について」

7月17日

3. 新永 悠人（東京大学大学院/JSPS）・小川 晋史（国立国語研究所）

「北琉球奄美湯湾方言のアクセントについて」

4. 五十嵐陽介（広島大学）田窪行則（京都大学/国立国語研究所客員教授），林由華（京都大学非常勤講師），久保智之（九州大学）

「琉球語宮古池間方言の三型アクセント体系」

■平成23年度 第3回「方言研究とテキスト—現状と展望」

日時：平成24年2月18日（土） 13:00～17:35

場所：2月19日（日） 10:00～15:30

2月18日

1. 日高水穂（関西大学）

「昔話の「語りの型」とその地域差」

2. 新田哲夫（金沢大学）

「日本語史資料としての方言テキスト」

3. 高木千恵（大阪大学）

「関西方言の自然談話にみるワ行五段動詞ウ音便形の衰退と残存」

2月19日（日）

パネルディスカッション

1. 大槻知世（東京大学学部4年生）

「津軽方言における推量形式『ビョン』の使用状況」

2. 麻生玲子（東京外国語大学大学院／日本学術振興会特別研究員）

「八重山波照間方言における動詞の屈折と派生をテキストから考察する」

3. 白田理人（京都大学大学院）

「喜界島方言—テキストから見る動詞形態論上の問題」

全体討議 コメンテーター

中山 俊秀（東京外国語大学）

風間伸次郎（東京外国語大学）

木部 暢子（国立国語研究所）

4 共同研究員

本プロジェクトの共同研究員は、以下のとおりである（2012年4月1日現在）。

ウェイン・ローレンス（オークランド大学），上野善道（国立国語研究所客員教授），大西拓一郎（国立国語研究所），金田章宏（千葉大学），狩俣繁久（琉球大学／国立国語研究所客員教授），久保智之（九州大学），窪菌晴夫（国立国語研究所），クリス・デイビス（琉球大学），下地賀代子（沖縄国際大学），下地理則（九州大学／国立国語研究所客員准教授），田窪行則（京都大学／国立国語研究所客員教授），竹田晃子（国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員），ダニエル・ロング（首都大学東京），トマ・ペラール（フランス国立科学研究所），中島由美（一橋大学），仲原穰（琉球大学），西岡敏（沖縄国際大学），新田哲夫（金沢大学），又吉里美（岡山大学），町博光（広島大学），松本泰丈（別府大学），松森晶子（日本女子大学／国立国語研究所客員教授），三井はるみ（国立国語研究所）（五十音順）

2 調査の概要

木部 暢子（国立国語研究所）

1 宮古諸島の概要

宮古諸島は、沖縄本島から南に 300 km のところに位置する島々で、宮古島、池間島、大神島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、水納島らなる（地図 1・2 参照）。2005 年 10 月 1 日に、旧平良市と宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町の 5 市町村が合併して宮古島市となったために、現在では、宮古島、池間島、大神島、伊良部島、下地島、来間島が宮古島市に所属し、多良間島、水納島が宮古郡多良間村に属している。

宮古島市は、面積 204.59 km²（宮古島：159.26 km²，池間島：2.83 km²，大神島：0.24 km²，伊良部島：29.08 km²，来間島：2.84 km²），人口 55,036 人（平良地区：36,138 人，城辺地区：6,780 人，下地地区：3,065 人，上野地区：3,128 人，伊良部地区：5,925 人）で、サトウキビやマンゴーなどの果物類の栽培、観光、酒造などを主な産業としている（数字は、宮古島市ホームページ「23 年度版統計みやこじま」から引用した。人口は 2010 年 12 月現在の人口）。

多良間村は、面積 19.75km² の多良間島と、面積 2.153 km² の水納島からなり、人口は多良間島が 1,273 人、水納島が 6 人である（平成 24 年 6 月現在の多良間村ホームページによる）。



地図 1 宮古島の位置



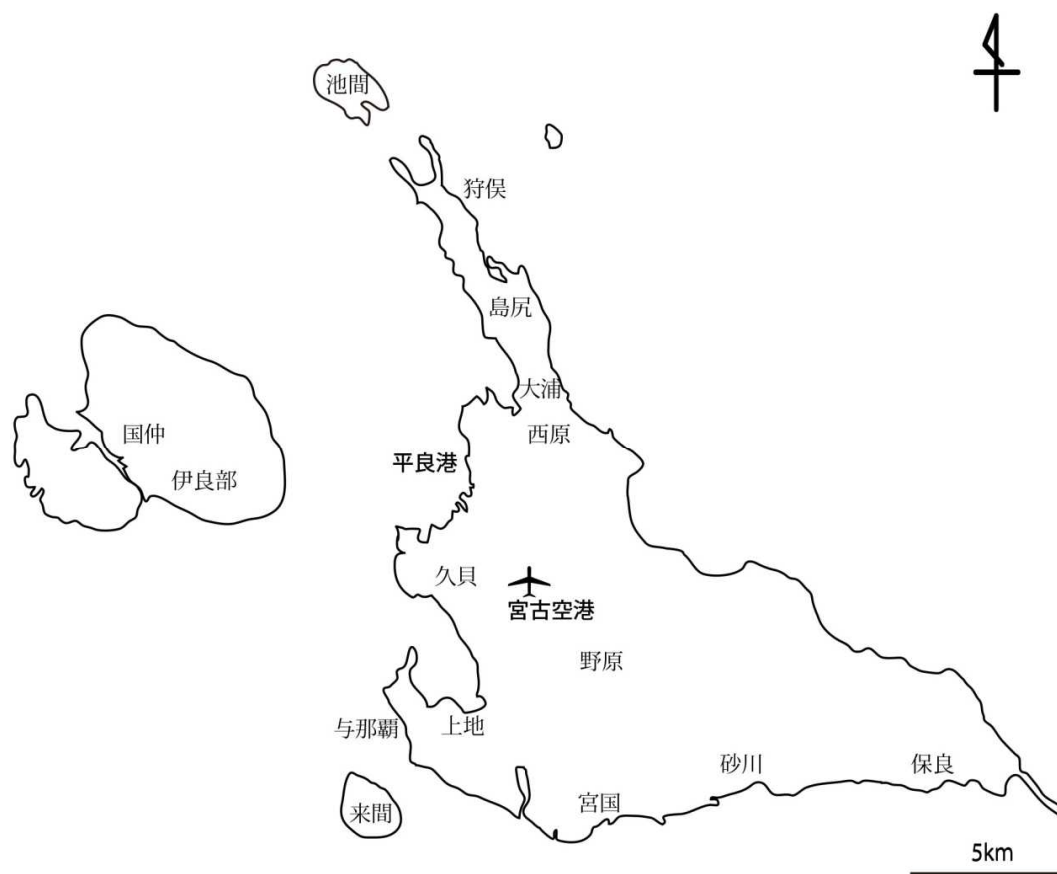
地図 2 宮古諸島

2 調査の概要

2011年9月の調査では、宮古島市に属する宮古島、池間島、伊良部島、下地島、来間島の方言調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

2.1 調査地点

調査地点は、池間、狩俣、島尻、大浦、西原、久貝（平良地区）、与那覇、上地、来間（下地地区）、野原、宮国（上野地区）、砂川、保良（城辺地区）、伊良部、国仲（伊良部地区）の15地点である（地図3参照）。



地図3 宮古方言調査地点

2.2 調査日時，調査項目，担当者

調査は2011年9月4日～9月7日に行った。調査地点・調査項目・調査者・話者を以下にあげる。

宮古方言調査における調査地点・調査項目・調査者・話者

日付	地点	調査項目	調査者	話者
9 月 4 日 13 : 00～	池間	基礎語彙 a	ローレンス，荻野，平子，青井	勝連昭子
		基礎語彙 b	新田，平山，松浦，川瀬	仲原好子
		文法（前）	野原，仲原，デイビス，内海	濱川マサ子
		文法（後）	又吉，山田，白田，當山	濱元照子
9 月 5 日 14 : 00～	狩俣	基礎語彙 a	ローレンス，中澤	根間昌明
		基礎語彙 b	中島，竹田	花城ヒデ
		文法（前）	仲原，松本	上原正行
		文法（中）	仲間(恵)，デイビス，内海	狩俣昌喜
	大浦	基礎語彙 a	林，竹村	下地ハツ子
		基礎語彙 b	平子，久保蘭	大里正行
	上地	基礎語彙 a	新田，井上，川瀬	上地清勝
		アクセント	上野，松浦，青井	上地繁男
		談話	田窪，荻野，山田，白田	仲原トミ 下地文
	野原	基礎語彙 b	野原，徳永，又吉，平山	久貝シゲ
	保良	文法（後）	狩俣，金田，山田，諸岡	下地良子
	西原	アクセント	五十嵐，仲間(博)，田窪	仲原君枝
9 月 6 日 14 : 00～ 19 : 30～	砂川	基礎語彙 a	狩俣，木部，平山，竹村	砂川俊雄
		文法（前）	仲間(恵)，井上，荻野	宮里久男
		文法（中）	西岡，内海，デイビス	砂川渡
	久貝	基礎語彙 a	ローレンス，仲原，川瀬，久保蘭	与那覇金吉
		文法（前）	野原，林，仲間(博)，松本	与那覇義彦
	宮国	文法（前）	金田，竹田	宮国キク
		文法（中）	田窪，中島	松岡秀子
	保良	基礎語彙 a	白田，徳永，ペラール	砂川春美
		基礎語彙 b	新田，平子，中澤	平良盟子
		アクセント	五十嵐，上野，松浦，青井	下地博盛
		文法（前）	狩俣，當山	砂川辰夫
		文法（中）	下地，諸岡	平良恵雄

9月7日 14:00～	来間	基礎語彙 a	ローレンス, 平子	川満キク 玉城千代
		文法 (前)	狩俣, 内海, デイビス	砂川ウメ
		文法 (中)	金田, 井上, 竹田	砂川ハル
	国仲	基礎語彙 a	新田, 中澤	仲宗根玄信
		基礎語彙 b	諸岡, 徳永	仲宗根チヨ子
		文法 (後)	中島	吉浜ヨシ子
	伊良部	基礎語彙 a	ペラール, 竹村	川満恵宏
		基礎語彙 b	木部, 仲間(博), 當山	下地方幸 平良玄輔
	与那覇	基礎語彙 a	白田, 小川	幸地昇良
		アクセント	五十嵐, 上野, 青井, 松浦	池村豊助
		文法 (前)	下地	与那覇重夫
		文法 (中)	林	垣花武一
19:30～	島尻	語彙 a	白田, ペラール	辺士名豊一
		語彙 b	下地, 林	池間貞夫

2.3 調査内容と調査方法

調査項目は、基礎語彙 a、基礎語彙 b、アクセント、文法の 4 種類である。基礎語彙 a と基礎語彙 b は、人体、親族、動物、植物、自然、時間、空間、道具、数詞などの日常よく使用する基礎的な語彙項目からなる。a と b の違いは、a が諸言語・諸方言に共通する基礎的な語彙、b は民俗的な意味合いを持つ語彙であるという点にある。項目数は、基礎語彙 a が 189 項目、基礎語彙 b が 149 項目。調査方法は、調査者が共通語で尋ね、話者が方言で回答するという翻訳式の質問法で、例えば、調査者が「〇〇は方言でどのようにいいますか?」と質問し、話者が方言に直して答えるというものである。

アクセントは、2 モーラ、3 モーラ、4 モーラの名詞 71 語をリストアップし、その単独発話と「X がない / いない」というキャリア文にこれらの名詞を挿入した発話を収録し、分析を行うという調査を行った。なお、本報告書では、一つ一つのアクセント調査データは掲載していない。アクセントの概要については、本書掲載の五十嵐陽介「南琉球宮古与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告」を参照されたい。

文法は、動詞活用を中心とする項目からなり、「飛ぶ」「漕ぐ」などの 38 の動詞について、断定（肯定）、否定、過去、シテ中止、アリ中止などの形を尋ねる項目で構成されている。項目数は全部で 190 項目。ただし、2 時間の調査時間では、190 項目すべてを調査することは不可能なので、190 の項目を 3 つに分け、1 グループが 3 分の 1（約 60 項目）ずつを担当する形で調査を行った。上の表の文法（前）、文法（中）、文法（後）は、文法項目の「前の部分」「中の部分」「後の部分」という意味である。従って、同じ地域で

も、調査票の前半、中、後半で話者と調査者が異なっている。動詞活用のように、体系を問題とする事象を扱う場合、できれば、同一話者にすべての項目を回答してもらうのが望ましいが、調査時間の関係で、やむを得ずこのような方法をとった。調査方法は、基礎語彙に同じく翻訳式である。

この他、上地で談話資料を収録した。談話資料に関しては、分析にはまだ時間がかかるため、本報告書には掲載していない。

2.4 調査参加者

調査参加者は以下の39名である。内訳は、本プロジェクトのリーダーとプロジェクト研究員3名、プロジェクト共同研究員14名、共同研究員以外の大学教員、または研究所教員9名、大学院生9名、学振PD4名である。

木部暢子（国立国語研究所、プロジェクトリーダー）、小川晋史（国立国語研究所、本プロジェクト研究員（PD））、盛思超（国立国語研究所、本プロジェクト奨励研究員）、（以下五十音順。*は調査時のプロジェクト共同研究員）五十嵐洋介（広島大学）、井上文子（国立国語研究所）、*ウエイン・ローレンス（オークランド大学）、内海敦子（明星大学）、*上野善道（国立国語研究所客員教授）、荻野千砂子（大分大学）、*金田章宏（千葉大学）、*狩俣繁久（琉球大学）、*下地賀代子（沖縄国際大学）、*田窪行則（京都大学）、*中島由美（一橋大学）、*仲原穰（琉球大学非常勤講師）、仲間恵子（琉球大学非常勤講師）、仲間博之（加計学園 広報室参与(元宮古高校長)、*西岡敏（沖縄国際大学）、*新田哲夫（金沢大学）、野原優一（琉球大学非常勤講師）、林由華（京都大学非常勤講師）、平山真奈美（立命館大学）、*又吉里美（志学館大学）、松浦年男（北星学院大学）、*松本泰丈（別府大学）、*竹田晃子（国立国語研究所プロジェクト研究員）、竹村亜紀子（国立国語研究所プロジェクト研究員（PD）、青井隼人（東京外大大学院博士後期課程/学振研究員）、川瀬卓（九州大学大学院博士後期課程）、久保菫愛（九州大学大学院博士後期課程/学振研究員）、白田理人（京都大学大学院博士前期課程）、クリス・デイビス（学振PD/京都大学）、當山奈那（琉球大学大学院博士前期課程）、徳永晶子（一橋大学大学院博士前期課程）、中澤光平（東京大学大学院博士前期課程）、平子達也（京都大学大学院博士後期課程/学振研究員）、トマ・ペラル（学振PD/京都大学）、諸岡大悟（一橋大学大学院博士前期課程）、山田真寛（学振PD/京都大学）

2.5 話者

話者は以下の方々である（年齢は調査当時）。

池間	濱元照子さん（86歳），勝連昭子さん（83歳），仲原好子さん 濱川マサ子さん（90歳）
狩俣	狩俣昌喜さん（88歳），根間昌明さん（78歳），花城ヒデさん（84歳） 上原正行さん（68歳）
大浦	下地ハツ子さん（87歳），大里正行さん（80歳）
上地	上地 繁男さん（84歳），仲原トミさん（89歳），下地文さん（90歳） 上地清勝さん（79歳）
野原	久貝シゲさん（86歳）
砂川	砂川俊雄さん（83歳），砂川渡さん（75歳），宮里久男さん（84歳）
久貝	与那覇義彦さん（69歳），与那覇金吉さん（84歳）
宮国	宮国キクさん，松岡秀子さん
保良	下地良子さん（82歳），砂川辰夫さん（55歳），平良恵雄さん（77歳） 下地博盛さん（61歳），平良盟子さん（79歳） （新城）砂川春美さん（59歳）
西原	仲原君枝さん（63歳）
来間	砂川ハルさん（86歳），砂川ウメさん（83歳），川満キクさん（90歳） 玉城千代さん（81歳）
国仲	中曽根チヨ子さん（83歳），吉浜ヨシ子さん（84歳） 仲宗根玄信さん（86歳）
伊良部	川満恵宏さん（87歳），下地方幸さん（69歳），平良玄輔さん（81歳）
与那覇	垣花武一さん（76歳），幸地昇良さん（75歳），与那覇重夫さん（77歳） 池村豊助さん（75歳），
島尻	辺土名豊一さん（72歳），池間貞夫さん（73歳）

※ 上記の方々には，お忙しい中，本調査に協力してくださり，ありがとうございました。
この場を借りて御礼申し上げます。

3 宮古方言の概要

宮古諸方言の音韻

—体系と比較—

トマ ペラール・林 由華

1 はじめに

宮古諸方言は、沖縄県宮古島市および多良間村で話される南琉球諸方言の一種である。集落ごとに方言が異なり、差異の程度の違いはあるが 30～40 の方言があると考えられる。本稿では、このうち、2011 年 9 月に調査を実施した上地、与那覇、久貝、伊良部、保良、国仲、大浦、島尻、来間、池間、狩俣、砂川、野原の 13 地点からのデータを中心として、宮古諸方言の音韻を歴史言語学上の音対応に基づいて整理し、その全体像を示す。従来、音対応というと、日本（古）語との対応の考察が主になっているが、ここでは必ずしも日琉祖語まで遡るわけではなく、主に方言間の比較のための宮古祖語の段階における対応関係を見る¹。（特に指定されていない場合、祖形の標識である*は宮古祖形を示している。）

宮古諸方言の音韻についての先行研究としては、平山・大島・中本(1967)、中本 (1976)、平山(編)(1983)、名嘉真 (1992) などに、各地の音素や音韻の特徴がまとめられている。最近でも、中本 (2000)、仲原 (2002)、下地 (2003)、かりまた (2005)、Shimoji (2008, 2011)、Pellard (2009, 2011)、Hayashi (2011) など、個別の方言の音韻体系の調査・研究も進められており、各地の音韻が明らかにされつつあるが、宮古諸方言の音韻の解釈については研究者ごとに大きく異なっている。宮古諸方言には、子音的噪音が自由変異として現れる母音や、特定の母音の存在を音声・音韻的に認めることが困難な音節が存在し、その音価や音韻的解釈を巡ってさまざまな議論がなされている。この議論の中心にあるのが、中舌母音もしくは舌先（尖）母音と呼ばれたり、[s~z] の音価を持つ成節子音として分析されることもある、子音的要素と母音的要素の両方ををあわせもつ音素である。このほかに、v や r ([ɹ]) が成拍的になりえること、また音声的にも広母音であっても無声化しやすいという性質などがあり、（少なくとも音声上の）音節の中核を子音的要素が占めることが多く、「子音性が強い」（沢木 2000）方言群とされる。これらを含めた音韻解釈に関する問題は、北村 (1960)、かりまた (1986, 1987)、加治工 (1989)、沢木 (2000) などでも考察されているが、未だ多くの課題がある。この問題の多くには、子音と母音のあり方が日本語などと大きく異なるため、どのような分析の枠組みを用いるのかの違いに由来した意見の相違も含まれていると考えられる。本稿で扱えるのはこの問題のごく一部であるが、研究史上で詳細に議論さ

¹ 宮古祖語の再建形については Pellard (2009)、琉球祖語の再建形については Thorpe (1983) を基にしている。

れることの少なかった形態音韻現象について考察を加え、宮古諸方言の音韻特徴の一端を示したい。

上述の問題に対する議論も含めつつ、本稿では、宮古祖語で想定される各音素が各地でどのように現れているのかを見ることにより、宮古諸方言としての共通点と方言間の相違点をまとめる。また、ここでの表記は簡易音声表記であり、表中のデータにはそれぞれの調査者によるものをを用いた²。本稿で扱うのは分節音のみであり、アクセントなどの音調は考慮しないため、データ中に音調上の特徴が記録してあっても、それは本稿中には含めていない³。

2 母音

2. 1 母音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各母音音素ごとに、調査により得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の母音の種類は、/a, e, i, o, u, ɿ/ の6種類である。これらは長短の区別をもつが、/e, o/ については母音連続から変化したものであり、借用語をのぞいて基本的に長母音のみである。また、本稿の対象方言にはないが、これに加えて多良間方言には /ë:, ü:/ が認められる（下地 2003 など）⁴。調査対象となっていた方言のうちでは、/a, i, u, ɿ/ の4つの母音を持つもの、/a, i, o, u, ɿ/ の5つのもの、/a, e, i, o, u, ɿ/ のものがある。また、/ɿ/ は、中国語やバンツー諸語にみられるような **fricative vowel** といえる (Ladefoged and Maddieson 1996) 音素であり、子音的噪音を持ち合わせた母音である。なお、本稿では母音としているが、子音ととらえる解釈も存在する。

2. 1. 1 広母音

/a/ 非円唇広母音[a]～[ɑ] < *a

宮古祖語の *a にあたる音で、各方言で [a]～[ɑ] で現れる⁵。

² 一度の調査で主に一人の話者から得られた発話の音声的表記である性質上、誤記と思われるものも存在する。解釈にあたっては、著者の知識の範囲内で修正したものもあるが、その場合は都度明示している。

³ 音調については、五十嵐ほか (2012) などによって、これまで2型とされてきた池間方言が3型であることが示されるなどの研究の進展がある。

⁴ さらに、大神方言には*ɿを由来としつつも摩擦音を伴わない /ɯ/ も存在し、また母音体系も他方言と異なり /ɑ, ɛ, i, u, ɯ/ となっている (Pellard 2009)。

⁵ 後述するように、方言によってはこれに対応する音が /u/ で現れる場合があるが、体系的な音変化の結果ではない。

表 1 非円唇広母音

	A-187	A-062	A-174	B-060	B-002
	あそこ	蚊	砂	羽	歯
上地	kama	gaɖam	ɱnagu		pa:
与那覇	k ^h ama	gaɖam	nnagu:		
久貝	k ^h ama	gaɖam	m ^h nagu		
伊良部	k ^h ama	gaɖam	mnagu	pani	pa:
保良	k ^h ama	ga ^d zam	nnagu:	p ^h ani	p ^h a:
国仲	kama	kadam	ɱnagu		
大浦	k ^h ama	ga ^d zaŋ	nnagu	pani	pa:
島尻	kama	gaɖaŋ	nnagu	p ^h aŋi	p ^h a:
来間	kama	gaɖam	m:nagu		
池間	kama	kaɖaŋ	nnagu	hani	ha:
狩俣	kama	ga ^d zaŋ	nnagu	pani	pa
砂川	k ^h a _ɕ ma:	gaɖam	ɱnagu		
野原				pani	pa:

2. 1. 2 狭母音

/i/ 非円唇前舌狭母音 [i]~[ɪ] < 宮*i

宮古祖語*i に対応する音で、各地で [i]~[ɪ] で現れる。狩俣では、*i が /ɿ/ に対応している語がある。池間では、宮古祖語*ɿ が /ts/, /z/, /s/ の後を除き /i/ と合流している（/ɿ/ の項目で後述）。また、伊良部においては、宮古祖語で *(C)ja にあたる音が ii に変化している語がある。

表 2 狭母音

	A-170	A-059	A-129	B-093	A-110
	海	女	風	篋	木
上地	iɱ	midum	kaɖɿ		ki:
与那覇	im	midomu	k ^h aɖɿ		ki:
久貝	im	midum	k ^h aɖɿ		ki ^h :
伊良部	im	midum	k ^h aɖɿ	pira	k ^h i:
保良	im	midum	k ^h a ^d ɖɿ	p ^h ira	k ^h i:

国仲	im	midum	kaɖzi		kiː
大浦	iŋ	miduŋ	kʰadzi	pira	kʰiː
島尻	iŋ	miduŋ	kʰaɖzi	pira	kiː
来間	im	midumu	kʰaɖzi		kiː
池間	iŋ	miduŋ	kʰadi	hira	kiː
狩俣	iŋ	miduŋ	kʰaɖzi	pira	kiː
砂川		midum	kaɖzi		kiː ~ kiː
野原				pira	

表 3 i の一部が ɿ に対応：狩俣

	A-016 髭・毛	A-103 にんにく
上地	pʰigi	pʰil
与那覇	pʰɿgi	pʰiʰɿ
久貝	psgi	pʰiz
伊良部	pʰɿgi / fʊʈɿpʰɿgi	pʰiɿ
保良	pʰɿgi	pʰiʰɿ
国仲	pʰigi	pʰil
大浦	pʰɿgi ~ pɿgi	pʰiɿ
島尻	bʰɿgi	pʰiʰɿ
来間	psgi	piz
池間	higi	hiː
狩俣	bzɡw ~ bzɡi ~ biɡi	pʰiː
砂川	psgi ~ pʰɿgi	piz ~ piː
野原		

表 4 *(C)ja > ii : 伊良部

	A-165 昔	A-189 ない	B-029 一人
上地	ɲkjaːŋ		
与那覇	ɲkʰaːŋ		tɕukʰaː
久貝	ɲkjaːŋ	nʰaːŋ	tɕʰkeː

伊良部	mki:ŋ	ni:ŋ	tauki:
保良	ŋkʲa:ŋ	nʲa:ŋ	taukʲa:
国仲	ŋkja:ŋ		taʷkʲa:
大浦	ŋkʲa:ŋ		tavkʲa:
島尻	ŋkja:ŋ		tʰafkja:
来間	ŋkja:ŋ	nʲa:ŋ	
池間	ŋkʲa:ŋ	nʲa:ŋ	tauka:
狩俣	ikja:ŋ	nʲa:ŋ	taɸkʲa:
砂川	ŋkja:ŋ		tavkʲa:
野原			tavkja:

/u/ 円唇後舌狭（緩み）母音[u]～[ʊ] < 宮*u

宮古祖語 *u に対応する音で、各地で[u]～[ʊ]で現れる。また、各地でこれに対応する音が a で現れている語が散見されるが、規則的な対応ではない。

表 5 円唇後舌狭母音

	A-028	A-030	A-060	A-071	B-069
	骨	心臓・肝	人	馬	穂
上地	puni	kɕimu ~ kimu	pɿsu	nu:ma	
与那覇	puni	k ^s ɿmu	p ^s ɿtʰu	no:ma	
久貝	p ^h uni	k ^{sz} imu	pstu	nu:ma	
伊良部	p ^h uni	tsɿmu	pstu	nu:ma	pu:
保良	p ^h uni ~ puni	k ^s ɿmu	pstu	no:ma	p ^h u:
国仲	puni	tsimu	p ^h ɿtu	nɯ:ma	
大浦	p ^h uni	k ^s ɿmu	pstu	numa	p ^h u:
島尻	p ^h uni	k ^s ɿmu	ttu	nu:ma	pu:
来間	p ^h uni	tsimu	pstu	nu:ma	
池間	huni	tsimu	p ^h ɿtu ~ ɕtu ~ ɕto	nu:ma	hu:
狩俣	p ^h uni	k ^s imu	pstu	nu:ma	pu:
砂川	pɯni ~ p ^h uni	ksmu ~ k ^s ɿmu	pstɯ ~ pstɯ̹	nu:ma̹	
野原					pu:

表 6 u : a の不規則的な対応の例

	A-132	A-032	A-079	A-115
	雲	膝	卵	福木
上地	kumu	tsigusi	tunaka	pʊkukugi
与那覇	fom	tsɪgʊsɪ	tʰʊnaka	pʰʊkugi:
久貝	fumu	tsīgusi	tunakʰa	pʰukaɬgi:
伊良部	fumu	tsɪgʊsɪ	(kʰu:ga)	kuputsɪgi
保良	fomu	tsɪgʊsɪ	tʰʊnaka	fʊkʊkɪgi:
国仲	fumu	tsigusi	tunuka	pʊkutsigi·
大浦	kʰumu	sugasɪ	tʰʊnaka	pʰukagi
島尻	fuma	tugʊsɪ ~ tugasɪ	tʰʊnaɬa	kʰʊpagʒgi:
来間	fumu	tsīgusi	tʰʊnuka	pukutsigi:
池間	m̥mu	sīgusi	tunuka	kutsigi
狩俣	fumu	tsīgasi	tunuga	pʰʊkagagi:
砂川	ɸʊmu	tsɪgʊsɪ ~ tugasɪ	tʊnaka	pʊkʊkuki: ~ pʊkukugi
野原				

2. 1. 3 半狭母音と二重母音

宮古諸方言における半狭母音は、主に母音の融合に由来している。/e/ については *ai や *Cja, /u/ については *au や *ua がその由来である。ただし、*au < o: 以外の変化については、必ずしも一方方言内の同一環境内全てで起こっている訳ではない場合がほとんどで、例外も多い。

/e/ 非円唇前舌半狭母音

/e/ については、以下の二つの由来がある：

- *ai : 一部の語彙に見られる
- *Cja : -i で終わる単語の主題形から変化したものの例が中心

この融合の結果生じる /e/ については、現れない方言の方が多い。なお、下記のデータには/i/ [ɪ]の誤記例もある。

表 7 *ai 由来の /e/ : 与那覇, 久貝, 来間の一部の語彙

(*ai > e の変化を受けていない語彙も参考にあげている)

	A-131	A-146	A-157	A-004		
	地震	南	夜	額	も	へ
上地	nai	p ^h ai				
与那覇	nai	pai	junai		mai / me:	ŋkai / ŋke:
久貝	nai	p ^h ai	jun ^j a:ŋ / june:	ftai	mai	ŋkai
伊良部	nai	p ^h ai	ju ^z ŋna ^z ŋ	fɯtai	mai	
保良	nai	p ^h ai	jɔnai	fɯtai	mai	ŋkai
国仲	nai	paɪbara	jɔnai	fɯtai	mai	ŋkai
大浦	nai	p ^h ai		fɯtai ~ ftai		
島尻	nai	p ^h ai				
来間	nai	p ^h ai	june:	fteʔ	me:	ŋke:
池間	nai	haibara		ftai	mai	ŋkai
狩俣	nau	p ^h ai		ftai	mai	ŋgai
砂川	nai	p ^h ai	junai		mai	ŋkai
野原						ŋkai

表 8 *Cja 由来の /e/ : 久貝の一部の語彙のみ

	A-165	A-189	B-029	
	昔	ない	一人	-i + は
上地	ŋkja:ŋ			
与那覇	ŋk ^j a:ŋ		tɔuk ^j a:	ja:
久貝	ŋkja:ŋ	n ^j a:ŋ	tɔfke:	e:
伊良部	mki:ŋ	ni:ŋ	tauki:	
保良	ŋk ^j a:ŋ	n ^j a:ŋ	tauk ^j a:	ja:
国仲	ŋkja:ŋ		ta ^v k ^j a:	ja:
大浦	ŋk ^j a:ŋ		tavk ^j a:	
島尻	ŋkja:ŋ		t ^h afkja:	
来間	ŋkja:ŋ	n ^j a:ŋ		ja:
池間	ŋk ^j a:ŋ	n ^j a:ŋ	tauka:	(j)a:
狩俣	ikja:ŋ	n ^j a:ŋ	taɸk ^j a:	ja:
砂川	ŋkja:ŋ		tavk ^j a:	ja:
野原			taukja:	

/o/ 円唇後舌半狭母音[o]

/o/ には以下の二つの由来がある：

- *au：特に-aで終わる単語の対格形に多く見られる
- *ua：-uで終わる単語の主題形のみに見られると考えられる

*au 由来のものについては安定して /o/ で現れる方言が多いが、他の例と同じように語彙によって異なる方言もある（保良，来間）。なお、下記の例には /u/ [u] の誤記例もある。

表 9 *au 由来の /o/：上地，与那覇，久貝，保良，大浦，来間，狩俣

*ua 由来の /o/：久貝，国仲，来間，狩俣，砂川

	A-027	A-093	A-130	A-136	A-183		
	痒い	食べる	竜巻	青い	門	-a + を	-u + は
上地		fo:	amainoŋ	o:	ɕoʔ		
与那覇		fo:	amaino:	o:nu	ɕo:	o:	a:
久貝	k ^h o:munu	fo:	ama.ino:	o:	ɕo:	o:	o:
伊良部	k ^h o:munu	fo:	amaino:	o:	ɕo:vtsɿ		
保良	k ^h aukau	fau	amaino:	auau	ɕo: (保良) / ɕau (新城)	au	a:
国仲	kaɯmunu	fau	amainau	aũ	daɯ	ao	u: / o:
大浦		fo:	amaino:	o:o:	ɕo:futsɿ		
島尻		fau	amaino:	aukaŋ	dau		
来間	koʔoko:		ama.ino:	au	ɕo:	a: / o: / au	o: / ua
池間	kaumunu		amaunau	aumunu	ɕau	au	u:
狩俣	ko:gaŋ		ino:	o:	ɕo:	au / o:	o:
砂川		fau ~ fau	amainau	au ~ au	ɕau	au	o:
野原							

2. 1. 4 特殊母音 /ɿ/

宮古祖語 *ɿ に対応する音で、前より中舌狭母音[i]～非円唇後舌狭母音[ɯ]の音色に加え、歯茎の摩擦噪音をもつ、いわゆる fricative vowel（摩擦母音）に類する母音である^{6,7}。頭

⁶ *ɿ に対応する音価については、長年その調音特徴を元にこれがどんな母音であるかという議論が続いていた（詳細はかりまた 1986 を参照）。ネフスキーによる宮古調査以来、中舌母音とするのが主流であったが、崎山(1963, 1965) や上村 (1997) かりまた (1996, 2005) などでは、これが調音音声学的に舌尖（尖）母音であると主張している。近年、一部の方言については、それが中舌母音の音色をもち（大野ほか 2000, 青井 2010）かつ s～z に近い位置での調音もなされており（青井 2010），中舌母音と舌尖母音両方の性質を持っていることが、機器分析・実

子音が無声子音の場合はその噪音も無声 [s] となり（例：上地「髭」 $p^{\epsilon}igi$ ），頭子音が有声もしくは頭子音を持たない場合は有声 [z] で現れる（例：与那覇「脚」 p^hag^{η} ）。特に無声子音に挟まれた場合は母音自体が完全に無声化することがほとんどである（例：保良「光」 $pska\eta$ ）。逆に，特に頭子音がない場合や有声の頭子音があっても語末などでは，摩擦噪音が弱く、より接近音ないし母音に近い異音が実現する（例：上地「脚」 $pagi$ ）。狭めの程度については方言ごとの違いが予測されるほか，個人間，また同一個人の同一単語でもゆれがみられる（例：大浦「脚」 $p^hag\eta \sim p^hag^{\eta}$ ）。また，方言によっては，側面音にも聞こえるものがある（例：上地「椀」 $mak^{\chi}al$ ）。

なお，この母音がもてる頭子音はほかの母音より限られており，方言にもよるが最大で /p, b, k, g, ts, s, z, f, m/ である。池間では特に少なく，/ts/, /s/, /z/ の後ろ以外では /i/ に変化している。その他特筆すべきこととして，/m/ の後ろでは [i] のような二重母音に変化している方言が多いこともあげられる。

また，/ɲ/ は [z] ないし [s] で現れる場合もあることから，成節的な子音として解釈されることもある。例えば，「人」[pstu] の音韻表記のバリエーションの例としては， $p\ddot{u}tu \sim p\eta tu \sim p\ddot{z}tu$ などがある⁸。このように音韻解釈はさまざまだが，これを母音と見た場合でも，摩擦噪音をもつという点についてはそれぞれの研究者の観察は一致しており，また子音として見た場合は，母音のように音節主音にもなれる機能を持たせている。どちらにしても，子音的な性質と母音的な性質の両方をもった音素を想定することになる⁹。

表 10 特殊母音

	A-016	A-025	A-100	A-087	A-081	A-033	B-062
	髭・毛	血	椀	(ウニなどの) 肉・身	魚	脚	蠅
上地	$p^{\epsilon}igi$	$a\chi a^{\eta}tsi \sim ak a^{\eta}tsi$	$mak^{\chi}al$	$mi:$	$i^{\eta}zu$	$pagi$	
与那覇	$p^{\eta}gi$	$ak^h a^{\eta}ts\eta$	$mak^h a^{\eta}z\eta$	$m^{\eta}:$	$zzu \sim \eta zu$	$p^h ag^{\eta}z\eta$	
久貝	$psgi$	$akatsi$	$mak^h a^{\eta}zi$	$kadza^{\eta}sanumiz$	zzu	$p^h a^{\eta}d\ddot{z}i$	
伊良部	$p^{\eta}gi$	$ax a^{\eta}ts\eta \sim ahats\eta$	$maxa\eta \sim maha\eta$	$mi\eta$	$z\eta zu$	$p^h a^{\eta}d\ddot{z}\eta$	paz
保良	$p^{\eta}gi$	$ak^h a^{\eta}ts\eta$	$maka^{\eta}z\eta$	$m^{\eta}:$	$zzu \sim \eta zu$	$p^h a^{\eta}d^{\eta}z\eta \sim p^h ag^{\eta}z\eta$	$paz \sim paiz$

験により確認されている。これは，他言語での **fricative vowel** が母音的要素と子音的要素の二重調音的性格を持っているという報告とも並行するものである。

⁷ 脚注 4 でも述べたように，大神方言には摩擦噪音なしの /w/ が存在し (* η 由来)，無声子音を頭子音にとっても無声化しない。（例：大神「字」[kw:]）(Pellard 2009)

⁸ かりまた 2005 では，頭子音となる s や z の異音とする解釈の可能性も考察されている。

⁹ 本稿ではこれを母音としているが，音韻記号として /i/ でなく /ɲ/ を用いる理由として，この音素の大きな特徴である摩擦性を含意して用いられているということがあげられる。

国仲	p ^h iɡi	ak ^ʰ atsi	makaɭ	tsimu(ウニ)	(ⁱ)zzu:	pazi	
大浦	p ^s ɪgi ~ pɪgi	ha:tsɪ	makaɪ	miɪ	ɪzu	p ^h agɪ ~ p ^h ag ^ɪ	pa ^ɪ
島尻	b ^ɪ gi	aχatsɪ	maχaɪ ~ maχa ^ɪ	mi ^ɪ	zzu	p ^h agɪ ~ p ^h ag ^ɪ	paz ~ paɪ
来間	psgi	A: akatsi / B: a ^k xatsi	A: makaɭ / B: makaz	mi:	zzu	p ^h adzɪ	
池間	higi	akatsi	makai	mi:	zzu ~ ɟu	hadzɪ	hai
狩俣	bzɡu ~ bzɡi ~ biɡi	ha:tsi	ma:u	mi:	izu	p ^h agu	pai / pau
砂川	psgi ~ p ^s ɪgi	akatsɪ	makaz	mɜ:	zzu	pagɜ	
野原						pagɪ	pa ^ɪ

この母音に関しては調音特徴上の（音声学的）問題が長く議論されてきたが、これについては本稿では詳しく取り扱わない（脚注 6 を参照）。ここでは、この母音と深く関係した形態音韻論上の問題を取りあげ、宮古諸方言のもつ音韻解釈の問題について述べる。

母音があるのかないのか

宮古諸方言においてしばしば母音の有無が問題になる音節があるが、それは主にこの特殊母音が摩擦音・破擦音を頭子音に持った場合である。例えば、「牛」[usi] の s は母音を伴って usi や usɪ と解釈されたり、成節子音として usɪ と解釈されたりする。音声的には、この第 2 音節目は必ず無声で現れるというわけではないが¹⁰、このように解釈されるのには、主に形態音韻論上の現象に理由があると考えられる。

「音素があるか、ないか、子音なのか母音なのか」という問題は、それぞれの方言ごとに音韻システム全体を考慮して決定されるべき問題である。しかし、関連する音韻現象を包括的に考慮している研究は多くはない。本稿で方言ごとの問題全体を解決する議論をすることはできないが、ここではひとまず、母音の有無についての議論でしばしばとりあげられる形態音韻現象をの一つを取りあげ、問題解決にあたり考慮すべき点について考察する。また、これは未解決の問題であることもあり、本稿がとる表記・解釈は、宮古祖形に近い形をとり、成節子音かどうかははっきりしないものには母音を補った形で書く。

¹⁰ 音声的に母音を挿入するという場合もあるので、このこと自体がただちに音韻的に母音があることを示すわけではない。

名詞形態音韻論

問題となる音節の解釈に最も深く関わっていると考えられるのが、以下に説明する名詞形態音韻論上の現象である。宮古諸方言において、名詞の主題形、対格形は、付加される語の語末音の性質により以下のように異なった形で現れる。表 11 は、狩俣の例である。

表 11 狩俣方言における語末の音節の種類と主題形、対格形¹¹

(-- 部分は未調査)

語末の音節の種類		主題形 (～は)	対格形 (～を)
C	海 im	imma	immu
	犬 in	inna	innu
	蛇 pav	pavva	pavvu
(C)V[+摩擦音]	牛 usɿ	ussa	ussu
	妻 tuzɿ ¹²	tuttsa	tuttsu
	道 ntsɿ	nttsa	nttsu
	豆腐 toofu	tooffa	tooffu
	-pɿ	--	--
	紙 kabɿ	kabzza	kabzzu
	月 tsɿkɿ ¹³	tsɿkssa	tsɿkssu
	脚 pagɿ	pagzza	pagzzu
	米 maɿ	mazza	mazzu
	傘 sana	sanaa	sanau
CV	酒 saki	sakjaa	sakjuu
	蛸 taku	takoo	takuu
(C)VV	木 kii	kiija	kiiju
	声 kui	kuija	kuiju
	字 zɿɿ	zɿɿja	zɿɿju
	屁 pɿɿ	--	--
CC	芋 mm	mma	mmu

表 11 で問題とするのは、語末が C もしくは(C)V[+摩擦音] (ɿ もしくは摩擦化した u) で終る場合に、子音重複がみられることである。ここでは、共時的解釈について検討する前に、まずこのような形が歴史的にどのように発生したかを簡単に見ておきたい。

¹¹ 表 11 のデータは、国語研の調査からのものに、著者個人の持つデータを補ったものである。表記は著者により変えている。

¹² 重子音となれる音の制限のために、無声であらわれていると考えられる。

¹³ 国語研調査では tsksu の形でいるが、この形も存在する。

かりまた (1996, 2007) などでも述べられているように、宮古諸方言においては、特殊母音 ɿ に後続する半母音 w, j や流音 r が摩擦音 s, z になるという歴史変化が起っている¹⁴。

(1) は、かりまた (2007) からの例を表記をかえて用いたものである。

- (1) 「月」 $\text{tsɿkssu} < * \text{tsɿkɿju}$ (「つくよ (月夜)」に由来)
 「魚」 $\text{zzu} < * \text{ɿwu}$ (「いを」に由来)
 「白」 $\text{ssu} < * \text{sɿru}$ (「しろ」に由来)

主題標識、対格標識の宮古祖語における形式はそれぞれ $*ja, *ju$ と考えられ、これらが $*\text{ɿ}$ で終わる語に接続した場合においても、これと同様の変化が起っている。

- (2) 「髪を」 $\text{kabɿ} + \text{ju} > \text{kabɿ} = \text{zu} [\text{kabzzu}]$ (表 11 より)

表 11 にあるように、子音終わりの語においてもその子音が接続した j を同化するという変化が起っている (「海」 im の対格形: $\text{im} = \text{mu}$)。ここでは変化のプロセスについて詳細な議論は行わないが、同様に ɿ 終わりの語においても、この母音の持つ子音的要素が後続する j を同化したという現象だと捉えることができるだろう¹⁵。

ただし、表 11 で語末が (C)V[+摩擦音] としたもののうち、 $\text{sɿ}, \text{zɿ}, \text{tsɿ}, \text{fu}$ ¹⁶ については、大きく分けて 2 種類の解釈がある。それは、これらを $\text{bɿ}, (\text{pɿ}), \text{kɿ}, \text{gɿ}, \text{mɿ}$ 終わりの語と同様に音節核となる ɿ (f の場合は摩擦化した u) をもつとし、母音が j を摩擦音にする規則を想定するか¹⁷、母音が脱落し成節子音となった s, z, ts, f が、 m, n, v と同様に直接 j を同化したとみるかである。

¹⁴ このように摩擦母音が後続する子音に影響を与えることは、バンツー諸語の一部にも見られるものである (Ladefoged and Maddieson 1996)。

¹⁵ かりまた (1996, 2007) では空気力学的観点からこの変化の原因を考察しているほか、青井 (2012) では、この変化のプロセスについて、自律分節音韻論的分析 (autosegmental phonology) により、 $/\text{ɿ}/$ の舌先性が拡張することによって半母音や流音が摩擦化したと説明している。

¹⁶ fu は琉球祖語の $*ku, *pu$ に由来している。これを f と捉えるかりまた (2007) によれば、「 $*u$ から変化した v が先行子音 $*p, *k$ を調音位置 (唇歯)、調音方法 (摩擦音) に変化を生じさせ、逆に、 $*p, *k$ は、後続の v を無声化させるという相互同化によって、 f に融合したとかがえる (p.44)」としている。しかし、 u の異音として v を残し $/\text{fu}/$ $[\text{fv}]$ と解釈することも可能であり、その場合は特殊母音 ɿ と同様に摩擦母音として、その唇歯での摩擦により j が同化したとできる。

また、 fu (あるいは f) が後続する子音を同化して生じた重子音を持つ語例は、他にも多くある。

例) 「黒」 $\text{ffu} < \text{furu}$ (「黒」に由来)
 「枕」 $\text{maffa} < \text{mafura}$ (「枕」に由来)

¹⁷ $C*\text{ɿ}$ (C : 破擦音)に $*ju$ が後続する場合はさらに同化が起り、例えば $*\text{tsɿ}$ に $*ju$ が接続した場合には、 $\text{tsɿ} + \text{ju} > \text{tsɿsu} > \text{ttsu}$ となる。(歴史変化の例.伊良部「月」 $\text{tsɿkɿju} > \text{tsɿtsɿju} > \text{tsɿttsu}$)

これはそのまま共時的な分析の問題にも繋がっている¹⁸。表 11 の主題形、対格形において子音が重複してあらわれる、語末 C および語末(C)V[+摩擦音] の語については、自身とは別に音節核 (ɿ) を必要とする p, b, k, g, m のグループ (グループ A とする) と、単独の成節子音として見ることができる m, n, v (グループ B とする)¹⁹があり、s, z, ts, f を A, B のどちらのグループにいれるのが解釈の上で最も大きな問題となる。その理由は、s, z, ts, f という成節子音を認めるかどうかという、音素配列や音節構造、音素のクラス分けという、一言語の音韻システムにとって極めて大きな問題に繋がっているためである。そして、この s, z, ts, f を成節子音と同じグループにいれるということが、冒頭で述べた「牛」uʃ の 2 音節目には母音がないとする態度をとることである。大まかに言えば、表 11 の音韻現象をできるだけ統一的に解釈するための方法は、以下の 2 通りである²⁰。

1. s, z, ts, f は グループ A の子音と同様、音節核 (ɿ など) を自身以外にもつ (成節子音として認めない)
2. s, z, ts, f は グループ B の子音と同様音節核を必要とせず成節子音となれる

音韻解釈にこの形態音韻論の問題を考慮する・しないにかかわらず、これまでの主流は 1 のように祖形における *ɿ (および u) をそのまま残す解釈である。2 に類する研究には、かりまた (2005), Shimoji (2008, 2011), Pellard (2009, 2011) などがある。どちらが妥当な説明となるかについては、各方言ごとの音韻システム (音素体系、音素配列論、音節構造、形態音韻論) の全体を見なければ決定できないものであるが、以下では 2 をとった場合の利点や、従来説で問題となる点を挙げる。

宮古諸方言の中でも特に特殊な大神方言²¹においては、/m, n, f, s, v/ が成節子音であり、ほかの音節核 (母音) を伴わず独立しているという根拠が、表 11 のような名詞形態論以外にも存在する。例えば、大神においては「下」sta と「舌」suwa という対立があるが、大神には摩擦を伴わない u のほかに他方言にあるような摩擦母音を設定しなければいけない理由はなく、「下」sta の s は母音を伴わない音節とみなせる。鼻音や接近音に加え s, f も成節子音となれるのだが、流音 r は頭子音のみで、音節核としては機能しない。これは、流音は類型論的に摩擦音よりも成節的になりやすいとする理論 (Zec 2007) の例外となるものだが、このことはこの方言の音節を支える主たる性質が「聞こえ度の高さ」よりも「持続

¹⁸ 以下特に明言はしていないが、共時的な分析においては必ずしも対格標識を祖形と同じ ju にする必要はなく u とできると考えられるが、方言によって異なる可能性もある。

¹⁹ 国仲などでは、これにさらに /r/ [ɹ] が音節主音として加わる。

²⁰ 表 11 の現象は歴史的変化であり、共時的には単に名詞のパラダイムとして捉えればよいとする考え方もある。これは、共時的な説明項とみなさないということだが、文法に対する態度によっては十分ありうる解釈である。この場合、この形態音韻論上の現象は考慮せずに音素体系・配列や音節構造の整合性と音声事実に従って /ɿ/ 相当音の解釈を行うことになる。

²¹ 有声・無声の対立および破擦音などは持たない。

性」に類するものであることを示していると考えられる²²。これは宮古諸方言全体にわたる性質である可能性があり、その場合は 2 の解釈をより宮古諸方言の言語特徴を的確に反映したものとして捉えることができる²³。

また、母音がないことを示すというわけではないが、s, z, ts, f が音節核を必要とするグループ A (p, b, k, g, m) と異なっていることを示すデータが、長浜方言を扱った Shimoji (2008) にも見られる。

- (3) a. 長浜「巢」 s̥i²⁴ 対格形 s̥i = u (本稿での解釈・表記の s̥i に対応)
b. 長浜「日」 p̥žž 主題形 p̥žž = ža (本稿での解釈・表記の p̥i に対応)
(Shimoji 2008 より)

このように、(3ab) は従来両者とも特殊母音の長音を持つと解釈されていた語だが、主題形にすると違いが生じてしまう。これは、グループ A の子音と s, z, ts, f を均質には扱えないことを示唆するものではあるが、(3a) のような振る舞いは、長音化が可能であるグループ B の成節子音とも異なったものである。(グループ B の成節子音は長音化でき、例えばそれが主題形になると「芋は」 mm = ma のように子音重複が起こる。) この場合、ほかのさまざまな音韻現象を見て、これらを AB どちらか近い方と同じ扱いにできるとしても、どちらも異なる別の規則が必要になる可能性があるだろう。

以上、宮古の名詞形態論を通して、「牛」 uš の 2 音節目に母音がないとする解釈が生じる形態音韻論上の理由について簡単に述べた。これらの問題は各方言ごとに検討されるべきものであり、例えば池間方言のようにグループ A の p, b, k, g, m の全てが頭子音として特殊母音と組み合わせることがない方言では、事情が大分異なる。

また、ここで見えてきたように、宮古祖語では子音もしくは摩擦化した狭母音が後続する半母音 w, j や流音 r を同化するという歴史的変化が起っており、共時的には、そのために生じた子音連続が多く見られるほか、動詞形態論における語幹末子音の重複という形などでも現れる。

- (4) 「虱」 ssam < s̥ram (< 日琉祖語 sirami)
「作る」語幹 : ts̥f- 「作らない」 ts̥f-fan (< 日琉祖語 tsukur-)

²² 音節核になる音とならない音の違いは持続可能な音か瞬間的な音かの違いであると考えられ、これは Jakobson, Fant & Halle (1952) にみられる *continuant/interrupted* という素性に近い。

²³ 1 節で述べた「(少なくとも音声上の) 音節の中核を子音的要素が占めることが多い」のも、この性質と関係したものといえる可能性がある。

²⁴ Shimoji (2008) においても s, z, ts, f 相当の音は基底で成節子音として扱われており、この i は挿入母音となっている。

このような現象も含め、各方言内でその音韻全体がもっともうまく説明できるシステムの中で、母音の有無も決定されるべきであろう。

以上、特定の音節における母音の有無の問題について、宮古諸方言における名詞形態論をいかに説明するかという観点から簡単に述べた。ここで全ての要素を考察できたわけではなく、詳細はまた稿を改めて議論したい。

2. 2 母音体系

以上、宮古諸方言の母音の各音素を見てきたが、母音体系ごとに、以下のようにまとめることができる。

- 4 母音体系 : /a, i, u, ɿ/

池間
- 5 母音体系 : /a, i, u, o, ɿ/

島尻, 伊良部, 砂川, 保良, 野原
- 6 母音体系 : /a, i, e, u, o, ɿ/

来間, 久貝, 狩俣, 大浦, 与那覇

3 子音

3. 1 子音の種類と特徴

ここでは、宮古諸方言の各子音音素ごとに、調査より得られた各地の語例と音価を示す。また、各地で個別に起こった音変化や例外的音対応については、別途語例を提示する。

本稿で用いる調査結果から得られる宮古諸方言の子音の種類は、/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, χ, β, h, ʔ, m, n, ŋ, r, j, w/ である。このうち、/v, m, n, r/ については、音節主音になることができ、長子音として単独で語を形成することもある²⁵。基本的に有声と無声の対立がある²⁶。

3. 1. 1 破裂音

音声的に、語頭では無声子音が帯気化するという特徴がある。

/p/ 無声両唇破裂音

²⁵分析によっては、これらに加え、無声摩擦音の /s, f/, さらに破擦音の /ts, z/ も成節子音とする場合がある。詳細は 2.1.4 節を参照。

²⁶脚注 21 にもあるように、大神方言のみ、有声無声の対立をもたない。

宮古祖語 *p に対応する音で、一部の方言では以下のような変化がみられる。

- 池間：p > h/ [h ~ ɸ ~ ʔ]
- 狩俣，島尻，大浦：p > b/ # __ɿC[+ voiced]（ただし一部の語彙のみ）

表 12 無声両唇破裂音

	A-146 南	A-139 光	A-016 髭・毛	A-148 左	A-033 脚	B-002 歯	B-007 面
上地	p ^h ai	pɕkal	p ^ɕ igi	pidal ~ pida	pagi	pa:	
与那覇	pai	p ^s ɿkaʔɿ	p ^s ɿgi	p ^s ɿdaʔɿ	p ^h agʔɿ		
久貝	p ^h ai	pskaz	psgi	pzdaz	p ^h aɕi		
伊良部	p ^h ai	p ^s kaɿ	p ^s ɿgi	p ^h idiɿ	p ^h aɕɿ	pa:	mipana ~ miɸana
保良	p ^h ai	pskaɿ	p ^s ɿgi	p ^s ɿdaɿ ~ p ^s ɿdaʔɿ	p ^h a ^d zɿ ~ p ^h agʔɿ	p ^h a:	mip ^h ana
国仲	paɪbara	pɿkaɿ	p ^h igi	p ^s idaɿ	pazi		
大浦	p ^h ai	pskaɿ	p ^s ɿgi ~ pɿgi	bʔɿdaɿ	p ^h agɿ ~ p ^h agʔɿ	pa:	nipana
島尻	p ^h ai	pskaʔɿ	bʔɿgi	bʔɿdaʔɿ	p ^h agɿ ~ p ^h agʔɿ	p ^h a:	mipana
来間	p ^h ai	pskaɿ	psgi	A: p ^h idaɿ / B: psdaz	p ^h aɕi		
池間	haibara	ɕɿkai	higi	ɕidai	haɕi	ha:	mihana
狩俣	p ^h ai	pskaw	bzgu ~ bzgi ~ biği	bida ~ bzda ~	p ^h agu	pa	mipana
砂川	p ^h ai	pɕkaz	psgi ~ p ^s ɿgi	pɕdaʔ ~ pɕdaɿ	pagʔ		
野原					pagɿ	pa:	mipana

/b/ 有声両唇破裂音

宮古祖語 *b に対応する音で、各地で安定して /b/ で現れる。

表 13 有声両唇破裂音

	A-007 唇	A-051 夫	A-055 子供(未成年)	A-091 砂糖黍	A-156 夕方	A-029 お腹
上地	siba	Bikidum ~ bikidum	jarabi	bu:gi	jusarabi	
与那覇	sʔiba	but ^h u		bu:gʔɿ		

久貝	siba	but ^h u	jarabi[新]	bu:g ^z i	jusarabi	bat ^h a
伊良部	sɿba	butu	jarabi	bu:ɕɿ	jusarabi	bata
保良	sɿba	bɯt ^h u	jarabi	bɯ:g ^z ɿ ~ bɯ:ɕɿ	jusarabi	bɯata
国仲	sibaya	bɯtu	jarabi	bɯ:ɕi		bata
大浦	NR	butu	jarabi	bu:gɿ ~ bu:g ^z ɿ		
島尻	ʒɿba	butu		bu:gɿ ~ bu:g ^z ɿ		
来間	siba	bikidumu	jarabi	bu:ɕi	jusarabi	bata
池間	fɯtsi	butu	jarabi	bu:ɕi	jusarabi	bata
狩俣	siba	budu	jarabi	bu:gi	jusarabi	bada
砂川	sɸa ~ spa	but ^h u	jarabi	bu:gɜ		
野原						

/t/ 無声歯茎破裂音

宮古祖語 *t に対応する音で、一部の方言で以下の変化が見られる。

- 島尻・国仲 : t > tɕ / __i
- 狩俣 : t > d / C[+voiced]V__

表 14 無声歯茎破裂音

	A-077	A-154	A-177	A-018	B-029
	鳥	朝	土	力	一人
上地	tou	sitɯmuti	mta ~ mtaɕ	taja	
与那覇	tu ^z ɿ	sɿt ^h ɯmoti	mt ^h a	t ^h aja	tɯk ^j a:
久貝	t ^h uz	stumuti	mta	t ^h aja	tɕfke:
伊良部	t ^h u ^z ɿ ~ t ^h uɿ	stumuti	mta	t ^h aja	tauki:
保良	t ^h ɯɿ	s ^h tɯmoti	mta	t ^h aja	tauk ^j a:
国仲	tɯɿ	sɿtɯmutɕi	nta	taja	ta ^v k ^j a:
大浦	t ^h uɿ	stumuti	nta	t ^h aja	tavk ^j a:
島尻	t ^h u ^z ɿ	stumatɕi	nta	t ^h aja	t ^h afkja:
来間	t ^h uz	stumuti	mta	taja	
池間	tui	ɕitumuti	nta ~ mta	taja	tauka:
狩俣	tuw	stumuti	nta	taja	taɸk ^j a:
砂川	tuɜ	stumuti _i ~ stumuti	mta	taja	tavk ^j a:
野原					taukja:

表 15 狩俣 : t > d / C[+voiced]V__ の例

	A-029	A-051
	お腹	夫
上地		bikidum ~ bikidzum
与那覇		but ^h u
久貝	bat ^h a	but ^h u / bikir ^h a[古]
伊良部	bata	butu
保良	ɓata	ɓot ^h u
国仲	bata	bɔtu
大浦		butu
島尻		butu
来間	bata	bikidumu
池間	bata	butu
狩俣	bada	budu
砂川		but ^h u
野原		

/d/ 有声歯茎破裂音

宮古祖語 *d に対応する。島尻で、d > dʒ / __i という変化がみられる。

表 16 有声歯茎破裂音

	A-005	A-037	A-059	A-111	A-182	A-017
	涙	体	女	枝	戸	腕
上地			midum ~ mi ^d ðum	juda		udi
与那覇			midomu	juda		k ^h aina
久貝	nada / mi:nada	du:	midum	juda	jadu	udi / k ^h aina (肩の痛み)
伊良部	nada	up ^h udu:	midum	ida	jadu	k ^h aina
保良	nada	du:	midom	juda	jadu	udi
国仲	nada	dɔ:	midumɔ	juda		udi
大浦	nada		miduɔ	ida		udi
島尻			miduɔ	juda		udʒi
来間	nada	du:	midumu	ida	jadu	ude

池間	nada	du:	miduŋ	juda	jadu	ti: / 手首 kaina
狩俣	nada	du:	miduŋ	ida	jadu	kaina
砂川			miduŋ	juda		kaina
野原						

/k/ 無声軟口蓋破裂音

宮古祖語 *k に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 狩俣: k > g / C[+voiced]V__²⁷
- 伊良部・国仲・来間・池間: k > ts / __ɿ
- k の弱化:
 - 伊良部: k > h ~ x / a__a
 - 島尻: k > χ / a__a
 - 大浦: #aka > #ha:
 - 狩俣: #aka > #ha:, Caka > Ca:

表 17 無声軟口蓋破裂音

	A-126	A-129	A-139	A-164	A-110
	灰	風	光	去年	木
上地	karap ^h aɬ ~ karap ^h aʒ	kaɖɿ	pɕkal	kuɖɕu	ki:
与那覇	k ^h arapaʒɿ	k ^h adɖɿ	p ^s ɿkaʒɿ	k ^h uɖɕu	ki:
久貝	k ^h arap ^h az	k ^h adɖɿ	pskaz	kuɖɕu	ki·
伊良部	k ^h ara paɿ	k ^h adɖɿ	p ^s kaɿ	k ^h udu	k ^h i:
保良	k ^h arapaɿ ~ k ^h arapaʒɿ	k ^h a ^d ɖɿ	pskaɿ	k ^h uɖɕu	k ^h i:
国仲	karapaɿ	kaɖɿ	pɿkaɿ	kuɖɕu	ki·
大浦	k ^h arapaɿ	k ^h adɖɿ	pskaɿ	k ^h u ^d zu	k ^h i:
島尻	karapaʒɿ	k ^h adɖɿ	pskaʒɿ	k ^h udu	ki:
来間	A: karabaɿ / B: karabaz	k ^h adɖɿ	pskaɿ	k ^h uɖɕu	ki:
池間	karahai	k ^h adi	ɕɿkai	kuɖɕu	ki:
狩俣	karapau	k ^h adɖɿ	pskau	kuɖɕu	ki:
砂川	karapaz	kaɖɿ	pɕkaz	ku ^d ɕu	ki: ~ ki:
野原					

²⁷ 表 18 にある、島尻「卵」t^hunaɸa も、島尻で k > χ / a__a の変化が起る以前に、この変化を受けていたと考えられる。

表 18 狩俣 : k > g / C[+voiced]V__ の例

	A-072	A-079
	雄山羊	卵
上地		tunaka
与那覇		t ^h unaka
久貝	bikip ^h indʌ	tunak ^h a
伊良部	bikipindʌ	k ^h u:ga
保良	ɸikipindʌ	t ^h unaka
国仲	bikipinda	tunuka
大浦		t ^h unaka
島尻		t ^h unaʌa
来間	bikip ^h indʌ	t ^h unuka
池間	bikihindʌ	tunuka
狩俣	bigipindʌ	tunuga
砂川		tɯnaka
野原		

表 19 伊良部・国仲・来間・池間 : k > ts / __ ɿ の例

	A-121	A-163	A-030	A-142
	着物	昨日	心臓・肝	月（天体・暦）
上地	kiŋ	k ^s inu	kɕimu ~ kimu	tsᵚikijuʔ
与那覇	k ^s ɿŋ	k ^s ɿno	k ^s ɿmu	tsɿk ^s ɿ / tsɿk ^s ɿnoju:
久貝	k ^s iŋ	ksinu	k ^{sɰ} imu	tskssu
伊良部	t ^s ɿŋ	tsɿnu:	tsɿmu	tsɰtsu ~ tsɰtsu(?)
保良	k ^s ɿŋ	k ^s ɿno:	k ^s ɿmo	tskɿ
国仲	tsiŋ	tsinu	tsimu	tsᵚittu
大浦	k ^s ɿŋ	k ^s ɿnu	k ^s ɿmu	tskɿ
島尻	k ^s ɿŋ	k ^s ɿnu	k ^s ɿmu	tskɿ ~ tsk ^s ɿ
来間	tsiŋ	tsino	tsimu	A: tsᵚitsᵚi / B: tsᵚitsᵚinuju:
池間	tsiŋ	Nnu	tsimu	tsᵚitsᵚi
狩俣	k ^s iŋ	ksᵚnu	k ^s iimu	tskssu
砂川	kɕn	kɕnu:	kɰmu ~ k ^s ɿmu	tskɕ
野原				

表 20 k の弱化の例

伊良部 : k > h ~ x / a__a

島尻 : k > χ / a__a

大浦 : #aka > #ha:

狩俣 : #aka > #ha:, Caka > Ca:

	A-100	A-025	A-186	A-066	A-178
	椀	血	墓	蟻	庭
上地	mak ^x al	aχ ^ə tsi ~ ak ^ə tsi	p ^ə ka	ak ^x a:l	
与那覇	mak ^h a ^z ɿ	ak ^h ətsɿ	p ^h aka	aka: ^z ɿ	
久貝	mak ^h azi	akatsi	p ^h əka	ak ^ə a:z	minaka
伊良部	maxaɿ ~ mahaɿ	ax ^ə tsɿ ~ ahatsɿ	p ^h a: ~ p ^h ə:	aha:	minaha
保良	maka ^z ɿ	ak ^h ətsɿ	p ^h əka	a ^z ɿgara (保良) / ak ^h a: (新城)	minaka
国仲	makaɿ	ak ^x ətsi	p ^ə ka	aka:	
大浦	makaɿ	ha:tsɿ	p ^h aka	ha:ɿ ~ xa:ɿ	
島尻	maχaɿ ~ maχa ^z ɿ	aχatsɿ	p ^ə χa	aχa ^z ɿ	
来間	A: makaɿ / B: makaz	A: akatsi / B: a ^k xatsi	p ^ə ka	A: akaɿ / B: akaz	minaka
池間	makai	akatsi	haka	Akai	minaka
狩俣	ma:w	ha:tsi	p ^ə ka	ha:w	a:ra / mina:
砂川	maka ^z	ak ^ə tsɿ	p ^ə ka	azgara	
野原					

/g/ 有声軟口蓋破裂音

宮古祖語 *g に対応する音で、各地でさまざまに変化している。

- 伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / __ɿ
- 島尻 : g > ɸ / a__a
- 伊良部 : g > ɸ / a__a

表 21 有声軟口蓋破裂音

	A-016 髭・毛	A-140 蔭	A-174 砂	A-032 膝	A-062 蚊
上地	p ^ɕ igi	kagi	ɱnagu	tsigusi	gaɕam
与那覇	p ^ʒ gi	k ^h agi	nnagu:	tsɪgusɪ	gaɕam
久貝	psgi	k ^h agi	m ^ˈ nagu	tsigusi	gaɕam
伊良部	p ^ɕ igi / fɯtsɪp ^ɕ igi	k ^h a:gi	mnagu	tsɪgusɪ	gaɕam
保良	p ^ɕ igi	k ^h ag	nnagu:	tsɪgusɪ	ga ^d zam
国仲	p ^h igi	ka:gi	ɱnagu	tsigusi	kadam
大浦	p ^ɕ igi ~ pɪgi	k ^h ag	nnagu	sugasɪ	ga ^d zan
島尻	b ^ʒ gi	k ^h agi	nnagu	tugusɪ ~ tugasɪ	gadan
来間	psg	kagi	m ^ˈ nagu	tsigusi	gaɕam
池間	higi	kagi	nnagu	sɪgusi	kaɕan
狩俣	bzgu ~ bzgi ~ biği	kag	nnagu	tsigası	ga ^d zan
砂川	psg ~ p ^ɕ igi	k ^ɕ agi ~ kag	ɱnagu	tsgusɪ ~ tsɪgusɪ	gaɕam
野原					

表 22 その他 *g の変化の例

伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / __ɪ

島尻 : g > ɣ / a__a

伊良部 : g > ʃ / a__a

	A-033 脚	A-091 砂糖黍	A-124 鏡	A-143 東
上地	pagi	bu:gi	kagam	ayal
与那覇	p ^h ag ^ʒ ɪ	bu:g ^ʒ ɪ	k ^h agam	aga ^ʒ ɪ
久貝	p ^h aɕi	bu:g ^ʒ i	k ^h agam	aɣaz
伊良部	p ^h aɕɪ	bu:ɕɪ	k ^h aʃam	aʃaɪ
保良	p ^h a ^d zɪ ~ p ^h ag ^ʒ ɪ	bɯ:g ^ʒ ɪ ~ bɯ:ɕɪ	k ^h agam	agaɪ
国仲	pazi	bɯ:ɕi	kagam	agaɪ
大浦	p ^h agɪ ~ p ^h ag ^ʒ ɪ	bu:gɪ ~ bu:g ^ʒ ɪ	k ^h agan	(agaɪ ~) aɪ
島尻	p ^h agɪ ~ p ^h ag ^ʒ ɪ	bu:gɪ ~ bu:g ^ʒ ɪ	k ^h aɣan	aɣaɪ
来間	p ^h aɕi	bu:ɕi	kagam	A: agaɪ / B: agaz

池間	haɕi	bu:ɕi	kagaŋ	agai
狩俣	p ^h agu	bu:gi	k ^h agaŋ	a:u
砂川	pagz	bu:gz	kagaŋ	agaz
野原	pagɭ			

3. 1. 2 破擦音

/ts/ 無声歯茎破擦音

宮古祖語 *ts に対応する音で、ほとんどが /ɭ/ の前に現れる例である。他の母音の前では、方言によって /t/ で現れる語彙もある（島尻「明日」ata など）。

また、伊良部・国仲・保良・池間では、宮古祖語 *kɭ が /tsɭ/ に変化している。

表 23 無声歯茎破擦音

	A-031 乳	A-025 血	A-142 月（天体・暦）	A-160 明日	A-101 茶碗
上地	tsi	aɕaɕtsi ~ akɕtsi	tsikiju'	aɕa / atɕ	
与那覇	tsɭ:	ak ^h ɕtsɭ	tsɭk ^s ɭ / tsɭk ^s ɭnuju:	atsa	
久貝	tsi'	akatsi	tskssu	attsa	tɕ ^h abaŋ
伊良部	tsɭ:	axɕtsɭ ~ ahatsɭ	ts ^s tsu ~ ts ^s tsu(?)	atsa	tɕabaŋ
保良	tssɭ	ak ^h ɕtsɭ	tskɭ	atsa	tɕabaŋ
国仲	tsi	ak ^ɕ ɕtsi	tsittu	ata	
大浦	tsɭ	ha:tsɭ	tskɭ	atsa	
島尻	tssɭ	aɕaɕtsɭ	tskɭ ~ tsk ^s ɭ	ata	
来間	A: tsi / B: tssi	A: akatsi / B: a ^k xatsi	A: tsitsi / B: tsitsinuju:	atɕa	tɕabaŋ
池間	tsi:	akatsi	tsitsi	atɕa	tɕabaŋ
狩俣	tzi:	ha:tsi	tskssu	atsa	tɕabaŋ
砂川	tsɭ:	akɕtsɭ	tskɕ	atsɕ	
野原					

表 24 伊良部・国仲・保良・池間：tsɭ < *kɭ

	A-030 心臓・肝	A-121 着物	A-009 息
上地	kɕimu ~ kimu	kiŋ	

与那覇	k ^s ɿmu	k ^s ɿŋ	
久貝	k ^{sʰ} ɿmu	k ^s ɿŋ	ik ^s ɿ
伊良部	肝 tsɿmu	t ^s ɿŋ	itsɿ
保良	k ^s ɿmo	k ^s ɿŋ	ik ^s ɿ
国仲	tsɿmu	tsɿŋ	itsɿ
大浦	k ^s ɿmu	k ^s ɿŋ	ikɿ
島尻	k ^s ɿmu	k ^s ɿŋ	
来間	tsɿmu	tsɿŋ	A: i ^t sɿ / B: itsɿ
池間	tsɿmu	tsɿŋ	iki
狩俣	k ^s ɿmu	k ^s ɿŋ	ikw
砂川	k ^s mu ~ k ^s ɿmu	k ^s n	
野原			

3. 1. 3 摩擦音

/s/

[s]無声歯茎摩擦音

[ç]無声歯茎硬口蓋摩擦音/ __ i

宮古祖語 *s に対応する音で, i の前では調音点が口蓋寄りになる。

大浦などでは, 以下のように変化している。

- 大浦・島尻: *sɿ > ɿ \ __ C[+voiced]
- 与那覇・保良・大浦: *s > ts / N __

また, 大浦や島尻などで, *fusV に由来する ssV がある。

表 25 無声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦音

	A-156	A-173	A-032	A-113	A-098	A-007	A-008
	夕方	珊瑚礁	膝	草	味噌	唇	舌
上地	jusarabi	pçɿ ~ pçɿ	tsigusi	fɯsa	ɱsu	sɪba	sɪda
与那覇		çɪ: / p ^h ɿçɪ	tsɿgusɿ	fsa	mtsɯ	s ^z ɿba	s ^z ɿda
久貝	jusarabi	pççɪ	tsɿgusi	fsa	msu	sɪba	sɪda
伊良部	jusarabi	pççɪ	tsɿgusɿ	fɯsa	msu	sɿba	sta
保良	jusarabi	pççɪ ~ pɿçɪ	tsɿgusɿ	fɯsa	mtsɯ	sɿba	sɿda
国仲		pɿçɪ	tsigusi	f ^h sa	ɱsɯ	sɪbaya	sɪta/sta
大浦		pççɪ	sugasɿ	ssa	ntsɯ	NR	ɿda~ ^z ɿda

島尻		piçi	tugusɿ ~ tugasɿ	ssa	nsu	ʔba	ʔda
来間	jusarabi	pçi	tsīgusɿ	fsa	A: m:su / B: m:so	siba	sida
池間	jusarabi	piçi	sīgusɿ	fusa (= [f ^w sa])	nsu	futsi	ɕta
狩俣	jusarabi	pçi	tsīgusɿ	fusa	nsu	siba	sta
砂川		piçi	tsgusɿ ~ tsɿgusɿ	fsa	msu ~ msu	sba ~ spa	sɿda ~ sɿda / sda
野原							

/z/

[z] ~ [dz] 有声歯茎摩擦・破擦音

[ʔ] ~ [dʔ] 有声歯茎硬口蓋摩擦・破擦音 / __ i

宮古祖語 *z に対応する音で、i の前では調音点が口蓋寄りになる。摩擦音もしくは破擦音の自由変異をもつ。

そのほか、方言ごとに以下のような特徴がある。

- 上地・来間：ɿ の前以外では [ʔ] ~ [dʔ] で現れる。
- 池間：dza²⁸ di dzu dzɿ
- 島尻・国仲：i, ɿ の前以外では /d/ となる。
- 伊良部・国仲・来間・池間では、*gɿ が /dzɿ/ に変化している。

表 26 有声歯茎～歯茎硬口蓋摩擦・破擦音

	A-023	A-164	A-062	A-183	A-129
	肘	去年	蚊	門	風
上地	piɕi	kuɕu	gaɕam	ɕoː	kaɕi
与那覇	p ^h iɕɿ	k ^h uɕu	gaɕam	ɕoː	k ^h adzi
久貝	p ^h iɕi	kuɕu	gaɕam	ɕoː	k ^h adzi
伊良部	p ^h iɕɿ	k ^h udu	gaɕam	ɕoːvtsɿ	k ^h adzi
保良	p ^h i ^d ɿ	k ^h uɕu	ga ^d zam	ɕoː (保良) / ɕau (新城)	k ^h a ^d zi
国仲	p ^h iɕi	kɿdu	kadam	daɿ	kaɕi
大浦	p ^h iɕɿ	k ^h u ^d zu	ga ^d zan	ɕoːfutsɿ 「入口」	k ^h adzi
島尻	piɕɿ	k ^h udu	gadan	dau	k ^h adzi

²⁸ 表 26 中のデータでは池間「門」dzau となっているが、筆者の調査では dʔau となっている。

来間	pid̥i	k ^h ud̥u	gaɕam	ɕo:	k ^h aɕi
池間	hiɕi	kud̥u	kaɕaŋ	ɕau	k ^h adi
狩俣	pid̥i	kud̥u	ga ^d zaŋ	ɕo:	k ^h aɕi
砂川	piɕɰ ~ pid̥ɰ	ku ^d ɰu	gaɕam	ɕau	kaɕi
野原					

表 27 伊良部・国仲・来間・池間 : g > dz / __ ɰ

	A-033	A-091	A-118
	脚	砂糖黍	釘
上地	pagi	bu:gi	fugi
与那覇	p ^h ag ^ɰ	bu:g ^ɰ	fug ^ɰ
久貝	p ^h aɕi	bu:g ^ɰ i	k ^h anifugz / fugz
伊良部	p ^h aɕɰ	bu:ɕɰ	fuɕɰ
保良	p ^h a ^d zɰ ~ p ^h ag ^ɰ	bu:g ^ɰ ~ bu:ɕɰ	fug ^ɰ
国仲	pazi	bɰ:ɕi	kanifuɕi
大浦	p ^h agɰ ~ p ^h ag ^ɰ	bu:gɰ ~ bu:g ^ɰ	k ^h anifugɰ
島尻	p ^h agɰ ~ p ^h ag ^ɰ	bu:gɰ ~ bu:g ^ɰ	fug ^ɰ
来間	p ^h aɕi	bu:ɕi	fuɕi / k ^h anfuɕi
池間	haɕi	bu:ɕi	kanifuɕi
狩俣	p ^h agw	bu:gi	fugi ~ fugw
砂川	pagɰ	bu:gɰ	fɰɰ
野原	pagɰ		

/f/ 無声歯唇歯摩擦音

宮古祖語の *f に対応しており、基本的に [f] の音価を持つが、まれに無声両唇摩擦音 [ɸ] で現れることがある。また、下記データ中の「雲」における k は、標準語の影響であると考えられる。

また、大浦などでは、*fusV が ssV に変化している。

表 28 無声歯唇歯摩擦音

	A-094	A-172	A-132	A-004	A-006
	食べ物	船	雲	額	口
上地	fa ^h munu	fun ^h i	kumu		f _ɸ tsi
与那覇	fo:munu	foni	fom		f _ɸ tsɿ
久貝	fo:munu	funi	fumu	ftai	ftsī
伊良部	faɿmunu	funi	fumu	f _ɸ tai	f _ɸ tsɿ
保良	faumunu	f _ɸ ni	f _ɸ mu	f _ɸ tai	f _ɸ tsɿ
国仲	faɿmunu	funi	fumu	f _ɸ taɪ	f _ɸ tsi
大浦	fo:munu	funi	k ^h umu	f _ɸ tai ~ ftai	f _ɸ tsɿ
島尻	faumunu	funi	fuma		ftsɿ
来間	f _ɸ :munu	funi	fumu	ftɛ ^h	ftsī
池間	faimunu	funi	m _ɸ mu	ftai	f _ɸ tsī
狩俣	faumunu	funi	fumu	ftai	f _ɸ tsī
砂川	faumunu	ɸ _ɸ n ^h i	ɸ _ɸ mu		f _ɸ ts ~ f _ɸ tsɿ
野原					

表 29 大浦・島尻：*fusV > ssV

	A-113	A-003
	草	櫛
上地	f _ɸ sa	fu
与那覇	fsa	f ^s ɿu
久貝	fsa	fsī
伊良部	f _ɸ sa	f _ɸ sɿ
保良	f _ɸ sa	f _ɸ sɿ
国仲	f _ɸ sa	fsu
大浦	ssa	s: ~ sɿ:
島尻	ssa	ssɿ
来間	fsa	f _ɸ sī
池間	f _ɸ sa (= [f ^w sa])	f _ɸ ɕi
狩俣	f _ɸ sa	f _ɸ sī = f ^w sī
砂川	f _ɸ sa	f _ɸ s ~ f _ɸ sɿ ~ f _ɸ sɿ
野原		

/v/

[v]有声唇歯摩擦音

[ʋ]有声唇歯接近音

宮古祖語 *v に対応する音で、頭子音だけでなく音節主音となることができる（池間を除く）。どちらの環境でも、摩擦音と接近音のバリエーションがあり、せばめの度合いが高い方言と低い方言がある。u の後ろでは同化し u となる方言もある（下表「粥」を参照）。

また、一部の語彙で方言間で /f/～/v/ の揺れも観察される。

表 30 有声唇歯摩擦音～接近音

	A-035	A-043	A-095	A-096
	脹脛	お前	油	粥
上地		vva		juv
与那覇	k ^h u:va	ʋva		ju:
久貝	kuvva	vva	avva	juv
伊良部	k ^h uvva	ja:	avva	ɬu:ɕa
保良	kuvva	vva ~ ʋva	avva ~ avva	juv ~ juʋ
国仲	kʊʋva	ʋva	avva	juʋ
大浦	NR	ʋva		juʋ
島尻	kuvva ~ kuʋva	vva		juv
来間	kuvva	vva	avva	juv
池間	kuvva	vva	avva	ju:
狩俣	kuʋva	ʋva	avva	N/R
砂川	kʊʋva ~ kʊʋva	vva		juʋ
野原				

表 31 方言間での /f/～/v/ の揺れ（他方言では /v/ だが上地、久貝、島尻のみ /f/ となる例）

	B-029	A-184/A-149
	一人	前・正面
上地		maf ^h kja:
与那覇	tʊk ^h ja:	maf ^h k ^h ja:
久貝	tʌfke:	maf ^h k ^h ja ~ maf ^h k ^h ja
伊良部	tauki:	maf ^h kja:
保良	tauk ^h ja:	maf ^h kja:
国仲	ta ^h k ^h ja:	maf ^h kja:

大浦	tavk ^j a:	
島尻	t ^h afkja:	maf ^j kja:
来間		mo:t ^h u ²⁹
池間	tauka:	mauk ^j a:
狩俣	taϕk ^j a:	maukja: / maf ^j k ^j a
砂川	tavk ^j a:	mavkja: ~ mavkja:
野原	taukja:	

/h/

[h]無声声門摩擦音 /__a

[ç]無声硬口蓋摩擦音 /__i

[ϕ]無声両唇摩擦音 /__u

以下の二つの由来をもつ。

- *p : 池間のみ, /p/ が /h/ に変化している
- *k (a に隣接するもののみ) : 伊良部, 狩俣など

例は表 12 を参照。

/χ/ 無声口蓋垂摩擦音 [χ]

島尻のみでみられる音で, <*aka における *k から変化したもの。例は表 20 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʁ/ 有声口蓋垂摩擦音 [ʁ]

島尻のみでみられる音で, <*aga における *g から変化したもの。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

/ʕ/ 有声咽頭摩擦音 [ʕ]

伊良部のみで見られる音で, <*aga における *g から変化したもの³⁰。例は表 22 を参照。日本列島で唯一の例。

²⁹その他の方言で示されているものとは別の由来をもつ語。

³⁰これまでは声門閉鎖音として記述されていたものに相当する。

3. 1. 4 鼻音

/m/ 有声両唇鼻音

宮古諸方言 *m に対応。音節の頭子音の場合は両親鼻音だが、成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点を失って /n/ に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる方言もある（大浦，島尻，池間，狩俣）。

表 32 有声両唇鼻音

	A-030 心臓・肝	A-071 馬	A-127 水	A-130 竜巻	A-187 あそこ
上地	kçimu ~ kimu	nu:ma	miɕi	amainoŭ	kama
与那覇	k ^s ɿmu	no:ma	mi ^d zɿ	amaino:	k ^h ama
久貝	k ^{sz} i'mu	nu:ma	miɕi	ama.ino:	k ^h ama
伊良部	tsɿmu	nu:ma	mi ^d zɿ	amaino:	k ^h ama ~ k ^h ama:
保良	k ^s ɿmo	no:ma	mi ^d zɿ	amaino:	k ^h ama
国仲	tsimu	nɯ:ma	miɕi	amainau	kama
大浦	k ^s ɿmu	numa	miɕɿ	amaino:	k ^h ama
島尻	k ^s ɿmu	nu:ma	miɕɿ	amaino:	kama
来間	tsimu	nu:ma	miɕi	ama.ino:	kama
池間	tsimu	nu:ma	miɕi	amaunau	kama
狩俣	k ^s i'mu	nu:ma	mi ^(d) zi	ino:	kama
砂川	ksmu ~ k ^s ɿmu	nu:ma _ɕ	miɕɿ	amainau	k ^h a _ɕ ma:
野原					

表 33 成拍的な場合（音節の中核と末尾）

	A-170 海	A-062 蚊	A-059 女	A-098 味噌	A-177 土
上地	im	gaɕam	midum ~mi ^d ðum	msu	m̥ta ~ m̥ta _ɕ
与那覇	im	gaɕam	midomu	mtsu	mt ^h a
久貝	im	gaɕam	midum	msu	m̥ta
伊良部	im	gaɕam	midum	msu	mta
保良	im	ga ^d zam	midom	mtsu	mta
国仲	im	kadam	midum	n̥sɯ	n̥ta
大浦	iŋ	ga ^d zaŋ	miduŋ	ntsu	nta

島尻	iŋ	gadaŋ	miduŋ	nsu	nta
来間	im	gaɖam	midumu	A: m:su / B: m:so	mta
池間	iŋ	kaɖaŋ	miduŋ	nsu	nta ~ mta
狩俣	iŋ	ga ^d zaŋ	miduŋ	nsu	nta
砂川	iɱ	gaɖaɱ	miduɱ	ɱsu ~ ɱsɯ	ɱta
野原					

/n/

[n]有声歯茎鼻音

[ŋ]有声軟口蓋鼻音 /__#

宮古諸方言 *n に対応する音。音節の頭子音の場合は有声歯茎鼻音。成拍的な場合（音節の中核もしくは末子音）となる場合は、調音点が後節する音素に同化する、日本語の「撥音」にあたる音になる。

表 34 有声歯茎鼻音

	A-172	B-054	A-131	A-079	A-028
	船	花	地震	卵	骨
上地	fun ^j i		nai	tunaka	puni
与那覇	funi		nai	t ^h unaka	puni
久貝	funi		nai	tunak ^h a	p ^h uni
伊良部	funi	pana	nai	k ^h u:ga	p ^h uni
保良	funi	p ^h ana	nai	t ^h unaka	p ^h uni ~ poni
国仲	funi		nai	tunuka	puni
大浦	funi	pana	nai	t ^h unaka	p ^h uni
島尻	funi	p ^h ana	nai	t ^h unaka	p ^h uni
来間	funi		nai	t ^h unuka	p ^h uni
池間	funi	hana	nai	tunuka	huni
狩俣	funi	pana	naw	tunuga	p ^h uni
砂川	ɸun ^j i		nai	tɯnaka	pɯni ~ p ^h uni
野原		pana			

表 35 有声軟口蓋鼻音（語末）

	A-101	A-121
	茶碗	着物
上地		kiŋ
与那覇		k ^s ŋ / k ^s ŋmɔnɔ
久貝	tɕ ^h abaŋ	k ^s iŋ
伊良部	tɕabaŋ	t ^s ŋ
保良	tɕabaŋ	k ^s ŋ
国仲		tsiŋ
大浦		k ^s ŋ
島尻		k ^s ŋ
来間	tɕabaŋ	tsiŋ
池間	tɕabaŋ	tsiŋ
狩俣	tɕabaŋ	k ^s iŋ
砂川		kʂn
野原		

/ŋ/

[ŋ]無声齒茎鼻音

[m̥]無声両唇鼻音 / __C[+labial]

池間のみに見られる音。それぞれ, *tsɿNV > ŋNV*fum > m̥mV という出自である。
日本で唯一の例。（下記池間「角」「昨日」 nnu は共に ŋnu の誤りかと思われる。）

表 36 無声齒茎～両唇鼻音

	A-132	A-073	A-163
	雲	角	昨日
上地	kumu	tsinu	k ^s inu
与那覇	fom	tsɿnɔ	k ^s ɿnɔ
久貝	fumu	tsinu	ksinu
伊良部	fumu	tsɿnu ~ tsɿno	tsɿnu:
保良	fomɔ	tsɿnɔ	k ^s ɿnɔ:
国仲	fumu	tsinu	tsinu
大浦	k ^h umu	tsɿnu	k ^s ɿnu

島尻	fuma	tsɿnu	k ^s ɿnu
来間	fumu	tsĩnu	tsĩno
池間	ɱmu	nnu	nnu
狩俣	fumu	tsɰu	ksɰu
砂川	ɸɰmu	tsnu ~ tsɿnu	kɰnu:
野原			

3. 1. 5 流音

/r/ 有声歯茎弾き音

宮古祖語の *r に対応する。頭子音の場合は、各地で安定して [r] で現れる。このほか、成拍的音となることができ、その場合は歯茎側面接近音 [ɭ] で現れる方言もある（国仲）³¹。

表 37 有声歯茎弾き音

	A-055	A-092	A-156
	子供（未成年）	鎌	夕方
上地	jarabi	ⁱ zzara	jusarabi
与那覇		zzara	
久貝	jarabi[新]	zzara	jusarabi
伊良部	jarabi	ɿzara	jusarabi
保良	jarabi	zzara	jusarabi
国仲	jarabi	ⁱ zzara	
大浦	jarabi	^z ɿzara	
島尻		zzara	
来間	jarabi	zzara	jusarabi
池間	jarabi	zzara ~ ^d zara	jusarabi
狩俣	jarabi	izara	jusarabi
砂川	jarabi	zzara	
野原			

³¹ 成拍的な /r/ は、*rɿ を由来とする。表 10 では上地や来間でも側面音が表われているが、それらは音韻論的に /ɿ/ にあたるものである。

表 38 国仲：成拍的 /r/

	A-077 鳥	A-155 昼間	A-126 灰	A-139 光	A-143 東
上地	tou	p ^s ima	karap ^h aɿ ~ karap ^h a ^z	pɕkal	aɣal
与那覇	tu ^z ɿ	p ^s ɿma	k ^h arapa ^z ɿ	p ^s ɿka ^z ɿ	aga ^z ɿ
久貝	t ^h uz	psima	k ^h arap ^h az / p ^h az(i)	pskaz	aḡaz
伊良部	t ^h u ^z ɿ ~ t ^h uɿ	p ^s ɿ:ma	k ^h ara paɿ	p ^s kaɿ	aɬaɿ
保良	t ^h uɿ	p ^s ɿ:ma	k ^h arapaɿ ~ k ^h arapa ^z ɿ	pskaɿ	agaɿ
国仲	tɯɿ	p ^h iɿ:ma	karapaɿ	pɿkaɿ	agaɿ
大浦	t ^h uɿ	p ^s ɿma	k ^h arapaɿ	pskaɿ	(agaɿ ~) a:ɿ
島尻	t ^h u ^z ɿ	p ^s ɿnaɣa / p ^s ɿma	karapa ^z ɿ	pska ^z ɿ	aɬaɿ
来間	t ^h uz	pssima	A: karabaɿ / B: karabaz	pskaɿ	A: agaɿ / B: agaz
池間	tui	hi:ma	karahai	ɕɿkai	agai
狩俣	tuw	psm _ɕ a	karapaw	pskaw	a:w
砂川	tuz	p ^s ɿ:ma	karapaz	pɕkaz _ɕ	agaz
野原					

3. 1. 6 接近音

/j/ 有声硬口蓋接近音

宮古祖語の *j に対応する。

表 39 有声硬口蓋接近音

	A-055 子供（未成年）	A-111 枝	A-165 昔	A-179 家	A-182 戸
上地	jarabi	juda	ɲkja:ɲ		
与那覇		juda	ɲk ⁱ a:ɲ		
久貝	jarabi[新]	juda	ɲkja:ɲ	ja:	jadu
伊良部	jarabi	ida	mki:ɲ	ja:	jadu
保良	jarabi	juda	ɲk ⁱ a:ɲ	ja:	jadu
国仲	jarabi	juda	ɲkja:ɲ		
大浦	jarabi	ida	ɲk ⁱ a:ɲ	ja:	
島尻		juda	ɲkja:ɲ		

来間	jarabi	ida	ŋkja:ŋ	ja:	jadu
池間	jarabi	juda	ŋk ^h a:ŋ	ja:	jadu
狩俣	jarabi	ida	ikja:ŋ	ja:	jadu
砂川	jarabi	juda	ŋkja:ŋ		
野原					

/w/ 有声両唇軟口蓋接近音

日琉祖語から宮古祖語への変化の過程で **w** は **b** に変化しているため、例はごくわずかで、母音 /a/ のみが後続する。「豚」などの限られた語彙のみに出現し、**v** と相補分布しているため、**v** の異音である可能性がある。実際に、多くの方言では[**w**]ではなく[**v**]に近い接近音[**ʋ**]が現れる（与那覇、久貝、保良、島尻、砂川）。その他の方言では重子音、末子音（末子音）、音節核の場合は **v** になり、単子音頭子音の場合は **w** となっていると考えられる³²。

表 40 有声両唇軟口蓋接近音

A-075	
豚	
上地	wa:
与那覇	ʋa:
久貝	va:
伊良部	wa:
保良	ʋa: ~ wa:
国仲	wa:
大浦	wa:
島尻	ʋa:
来間	wa:
池間	wa:
狩俣	wa:
砂川	ʋa:
野原	

³² この理由によって Pellard (2009: 336) では***v** と再建している。

3. 1. 7 喉頭化音の有無について

平山(編)1983 などでは一部の方言に /tʰ, tsʰ, kʰ/ の喉頭化音があるとしている。確かに音声的に北琉球に広く存在する喉頭化音に近いものが観察されるが、語頭のみであり、母音を伴って 2 モーラ分の長さを持つ（島尻「人」 ttu³³）。このため弁別的な要素は長さにあり、喉頭の緊張はそれが閉鎖音であるために音声的に表われるもので、音韻的には重子音として解釈すべきと考えられる³⁴。また、北琉球の喉頭化音と異なり、母音の喪失のみに由来している（例：島尻「人」 ttu < 宮**pɿtu*）。これに対応する音は以下のように表われる。

[tʰ]~[tt]：池間「煙管」，島尻「人」

[kʰ]~[kk]：池間「九つ」（報告データ上で kukunutsi とあるが，kkunutsi というバリエーションも存在する）

[tsʰ]~[tts]：池間「ソテツ」，伊良部「煙管」

表 41 音声的に喉頭化音に近い音が現れるもの

	A-060	B-113	B-027	B-076
	人	煙管	九つ	ソテツ
上地	pɿsu			
与那覇	pʰɿtʰu			
久貝	pstu			
伊良部	pstu	ttɕ(ɿ)z	kukunutsɿ	sditsɿ
保良	pstu	kʰiɕi:ɿʰz	kukunutsi	ɕukʰatsɿ
国仲	pʰɿtu		kɔkɔnɔtsi	sɔtetsi
大浦	pstu	kiɕiʰɿ	kukunutsɿ	
島尻	ttu	kiɕiɿ	kɿkukunutsɿ	
来間	pstu			
池間	pʰɿtu ~ ɕtu ~ ɕto	tʰi: tti:か	kɿkukunutsɿ	ttɕu:tsɿ
狩俣	pstu	kʰisiu	kɿkukunutsu	stɿtsu/sɿsudzɿ/ssudzɿ
砂川	pstɿ ~ pstɿ			
野原		kiɕiʰɿ	kɿkukunutsɿ	sotetsɿ

³³ 宮古諸方言では語は最小で 2 モーラである。

³⁴ 名嘉真 1984 にもこの見解が示されている。また、与那国などの喉頭化音と異なり、規則的ではなく語彙的な変化で数が少なく、一部の方言の一部の語彙に現れるのみである。

3. 2 子音体系

以上、宮古諸方言の子音を音素ごとに見てきたが、子音体系という点からは、以下のよう
にまとめることができる。

- 全ての方言がもっている音素

/p, b, t, d, k, g, ts, s, z, f, v, h, m, n, r, j, w/

- 一部の方言だけが持っている音素

- /χ/ : 島尻
- /ʁ/ : 島尻
- /ʕ/ : 伊良部
- /ŋ/ : 池間

4 音節

現在のところ、宮古諸方言において音節を主要な音調規則の単位としてとりあげている報告はない。ここでの音節は、主に形態音韻論や音素配列上の記述の単位として用いるものである³⁵。

音節構造は2.1.4節で議論した成節子音をどの程度認めるか、また前節に述べた喉頭化音を認めるかどうかとも連動しており、さまざまな解釈がある。ここでは、成節子音は/v, m, n, r/のみとし3.1節にあるように語頭の重子音をみとめる立場をとるので、音節構造は(5)のようになる。

(5) i) (C₁)(C₂)(j)V(V)(C₃)

ii) (C₄)C₅(C₆)

このうち、i) が母音が音節核となるもの、ii) が子音が音節核となるものを示している。

- C₁C₂ 双方が埋まる場合は、摩擦音もしくは共鳴音 /s, z, f, v, m, n, r/ の重子音³⁶もしくはC₁を /v, m/ とする部分重子音となる。また、池間や島尻、伊良部

³⁵ 従って、例えば CCV の一つ目の C が1モーラの長さを持つなど、一般的な音節の理論には当てはまらない性質もある。

³⁶ 「虱」 ssam や「子」 ffa などの重子音は狭母音の摩擦化->後続流音、半母音の同化によって生じたものと2.1.4節で述べた。同じ音変化を経た名詞形態音韻論の解釈においてはこの摩擦化する母音をそのまま残している半面、前者のような場合は母音のない重子音としている。これは、前者がすでに終わった変化であり、名詞形態論と同様の共時的分析をする必要がないこと、また島尻「人」 ttu のような語頭の閉鎖音の重子音のために CCV という音節が必要であり、「虱」 ssam などにもそれを適応することができるためである。

などでは、**t**, **k**, **ts** などの破裂音・破擦音も重子音として **C₁C₂** を埋めることができる。

例) 「虱」 **ssan**, 「子」 **ffa**, 「土」 **nta**, 「人」 **ttu**

- **C₃** には **/v, m, n, r/** がはいる (**r** は国仲のみ。また、池間のみ、**v** はここに入らない。) 。
- **VV** には長母音，異なる母音の連続両方が入りうる。しかし，方言によってどのような母音連続が存在するのか（しないのか）などは，本稿では扱えていない。
- **C₆** には **C₅** と同じ子音が入る（＝長子音）。**C₅** にたつことのできる子音は，**/v, m, n, r/** である（池間のみ，**v** はここに入らない）。また，**C₄** をもてるのは **/r/** のみ（国仲）で，**C₄** には唇音 (**p, b, m**) のみが入る。

例) 「売る」 **vv**, 「芋」 **mm**, 「蕐」 **mrrna** (**[m]:na~mi[:na]**)

参考文献

- 青井隼人 (2010) 「南琉球方言における「舌先の母音」の調音的特徴：宮古多良間方言を対象としたパロットグラフィー調査の初期報告」『音声研究』14(2): 16–24.
- 青井隼人 (2012) 「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8 : 99-113.
- Hayashi, Yuka (2011) Ikema (Ikema Ryukyuan). In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan language*, 167–188. Tokyo, ILCAA: 167–188.
- 平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』56: 61-73.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 平山輝男 (編) (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京: 桜楓社.
- 五十嵐陽介, 田窪行則, 林由華, ペラルル・トマ, 久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16-1: 134-148.
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1952) *Preliminaries to Speech Analysis*. Cambridge MA: MIT Press.
- 加治工真市 (1989) 「宮古方言音韻論の問題点」『沖縄文化：沖縄文化協会創設40周年記念誌』421–439.
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』22(2) : 54–64.
- かりまたしげひさ (1987) 「宮古方言の成節的な子音をめぐって」琉球方言研究クラブ 30周年記念会編『琉球方言論叢』419-429.
- かりまたしげひさ (1996) 「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき-空気力学的な観点か

- らみて-」『言語学林』96-97: 709-722.
- かりまたしげひさ(2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』11: 67-113.
- かりまたしげひさ(2007)「琉球語音韻変化の研究」京都大学特別講義資料.
- 北村＝サムエルH.(1960)「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41: 94-105.
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The sounds of the world's languages*.
Oxford: Blackwell.
- 仲原穰(2001)「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26: 105-123.
- 名嘉真三成(1984)「宮古のことば」『新沖縄文学』61:121-127. 沖縄タイムス社.
- 名嘉真三成(1992)『琉球方言の古層』東京: 第一書房.
- 大野真男・久野眞・杉村孝夫・久野マリ子(2000)「南琉球方言の中舌母音の音声実質」
『音声研究』4(1): 28-35.
- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*.
Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2011) *Ōgami (Miyako Ryukyuan)*. In Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) *An Introduction to Ryukyuan languages*, 113-166. Tokyo, ILCAA.
- 崎山理(1963)「琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『音声学会会報』112(2):18-19.
- 崎山理(1965)「平山輝男氏論批判琉球宮古方言の舌尖母音をめぐって」『国語学』60.
- 沢木幹栄(2000)「宮古方言の問題点」『音声研究』4(1): 36-41.
- 下地賀代子(2003)「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28: 93-113.
- Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language*.
Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2011) *Irabu Ryukyuan*. In Yamakoshi, Yasuhiro (ed.) *Grammatical sketches from the field Tokyo*, 77-131. Tokyo: ILCAA.
- Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas (eds.) (2011) *An Introduction to Ryukyuan language*.
Tokyo: ILCAA.
- Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan Language History*. Ph.D. dissertation, University of Southern California.
- 上村幸雄1997「音声研究と琉球方言学」『ことばの科学』8: 17-47.
- Zec, Draga (2007) *The Syllable*. In Paul de Lacy (ed.) *The Cambridge handbook of phonology*, 161-194. Cambridge: New York, Cambridge University Press.

南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告

五十嵐 陽介

1 はじめに

琉球諸語は5つの下位言語、すなわち奄美語、沖縄語（以上、北琉球グループ）および宮古語、八重山語、与那国語（以上、南琉球グループ）から構成される（Pellard 2009, 2011; Shimoji 2010）。本論文が分析対象とする与那覇方言は、南琉球グループに属する宮古語の方言のひとつであり、沖縄県宮古島市下地字与那覇で話されている。

本論文は、母語話者1名を対象に行った1時間のアクセント調査で得られたデータを分析することによって、与那覇方言の名詞アクセント体系を、特にアクセント型の表層の実現形と所属語彙に焦点を当てて、記述することを目的とする。

2 先行研究の記述

2.1 概略

与那覇方言のアクセント体系に関する記述は平山他（1967）に見つけることができる。平山輝男らは、「アクセントも一般に平板調であって、一型アクセントのように誤って観察するおそれがあるが、事実は低平型と高平型との対立がある」（平山他 1967: 27）と述べているが、この記述は、第1に与那覇方言は二型アクセント体系（上野 1984 参照）を有することを、第2にこの方言の発話には著しいピッチ変化が観察されないことを示している。

平山輝男らによると、与那覇方言のアクセント体系は二型であるが、青少年層ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（いわゆる「曖昧アクセント化」）が観察されるという。特に、動詞・形容詞のアクセントの対立は部分的に合流するか、完全に合流しているという。平山輝男らが調査を行った1960年代の「青少年」は、仮に「青少年層」を10歳から25歳と定義するならば、筆者らが調査を行った2011年には、60歳前半から70歳後半になっているはずである。後述するように本論文の分析は75歳の話者の発話に基づいている。したがって、もし平山輝男らの記述が正しければ、本論文が分析対象とした与那覇方言のアクセント型の区別は不明瞭になっている可能性がある。

2.2 所属語彙

平山他（1967）に従えば、与那覇方言では、類別語彙（金田一 1974 参照）の2モーラ名詞は、第1類から第3類が一方のアクセント型に所属し、第4類と第5類が他方の型に所属する（II-1・2・3/4・5）。一方3モーラ名詞は、第1類から第4類の大部分と5類の一部が一方の型に所属し、第5類の大部分と第6類から第7類のほとんどが他方の型に属する（III-1・2・3・4・(5)/5・6・7）。しかしながら、琉球諸語におけるアクセント型の所属語彙は、類別語彙の合流のみでは説明で

きないことが、すでに十分に論じられている（服部 1958, 1979; 松森 1998, 2000a, 2000b, 2008, 2010, 2011）。琉球諸語のアクセント型の所属語彙を論じるためには、松森晶子の提案する「系列」「系列別語彙」という概念を導入するのが有効である。

「系列」とは、現代の琉球語諸方言の比較から再建される琉球祖語のアクセント型によって区別される語類のことである（松森 2000b）。松森晶子は、琉球祖語には 1 モーラ語に少なくとも 2 種類、2 モーラ以上の語には少なくとも 3 種類のアクセント型による区別があると仮定し、それぞれのアクセント型で区別される語類を A 系列、B 系列、C 系列と呼ぶ。また、それぞれの語類に所属する語の総体を「系列別語彙」と呼ぶ。各系列名に冠せられたアルファベット A, B, C の順序は、系列別語彙と類別語彙との対応に基づいて決められている。具体的には、類別語彙 2 モーラ名詞の第 1 類と第 2 類の語彙のほとんどが所属する語類を A 系列、第 3 類の大部分および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を B 系列、第 3 類の少数および第 4 類・第 5 類の一部が所属する語彙を C 系列と定めている。

系列別語彙を導入した上で与那覇方言におけるアクセント型の所属語彙に関する平山輝男らの記述を再検討すると、松森（2011）が指摘しているように、A 系列と B 系列が合流し一方の型に所属し、C 系列が他方の型に所属している（A・B/C）とすることができるようになる。

以降本論文では、与那覇方言において A 系列と B 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を AB 型、C 系列の語彙の大部分が所属するアクセント型を C 型と呼ぶことにする。また本論文は、三型アクセント体系を有する琉球語諸方言のアクセント型について言及することがあるが、その際、A 系列、B 系列、C 系列の語彙の大部分がそれぞれ所属するアクセント型を、それぞれ A 型、B 型、C 型と呼ぶことにする。

2. 3 表層の実現形

平山他（1967）によれば与那覇方言のアクセント型の表層の実現形は表 1 の通りである。以後慣習にしたがって、ピッチの上がり目を [で、下がり目を] で表す。平山輝男らは一方の型を「低平型」、他方の型を「高平型」と呼んでいるが、その実現形と所属語彙から判断して、前者は本論文の AB 型に、後者は本論文の C 型に相当する。平山輝男らは、2 モーラ名詞については、単独発話だけでなく、助詞 *nudu* 「が」（主格＋焦点標識）と述語が後続する場合の実現形も報告しているが、3 モーラ名詞については単独発話における実現形しか報告していない。

表 1：平山他（1967）による各アクセント型の実現形の記述。表記は平山他（1967）に従う。

モーラ数	アクセント型	単独発話	助詞 <i>nudu</i> 「が」（主格＋焦点標識）の付いた発話
2 モーラ	高平型（AB 型）	<i>jama</i> 「山」	<i>jama nudu</i> [ʔai. 「山がある。」
	低平型（C 型）	[<i>usi</i> 「臼」	[<i>usi nudu</i> ʔai. 「臼がある。」
3 モーラ	高平型（AB 型）	<i>fɯkuru</i> 「袋」	
	低平型（C 型）	[<i>fɯsui</i> 「薬」	

表 1 から明らかなように、AB 型は語全体が低く実現されるのに対して、C 型は語全体が高く実現される。2 モーラ名詞に助詞 **nudu** が後続した場合、助詞の高さは先行する名詞の高さをそのまま引き継ぐ。すなわち AB 型では低く、C 型では高く実現される。

3 分析

3. 1 方法

3. 1. 1 調査日・場所

データ収集は 2011 年 9 月 7 日沖縄県宮古島市下地にておこなった。

3. 1. 2 被験者

被験者は 1936 年生まれの男性（調査当時 76 歳）1 名であった。与那覇以外の居住歴はない。また両親、配偶者ともに与那覇出身である。

3. 1. 3 調査語

調査語リストは、与那覇方言と同じく宮古語の方言である多良間方言（松森 2010）および池間方言（五十嵐他 2012）の同源語の語形を参考にして、2 モーラ名詞と 3 モーラ名詞がほぼ同数含まれるように作成した。語彙の選定は、系列別語彙と類別語彙との対応を検討することを念頭においておこなった。

系列別語彙の各系列がどのような語によって構成されているかに関する定説はない。そこで、調査語リストの語彙の選定の際には、系列別語彙の代用として、多良間方言のデータ（松森 2010）を用いた。この方言は、三型アクセント体系を有しかつ他の琉球諸語とアクセント型における規則的な対応を示す方言のひとつである。調査語リストには、多良間方言における 3 種類のアクセント型（A 型、B 型、C 型）にそれぞれ属する語彙がほぼ同数含まれるようにした。

類別語彙については、上野善道作成の私家版『アクセント調査語彙(B)』（収録語彙は上野（1985）参照）を使用し、各類別の語が調査語リストに少なくともひとつ含まれるように語彙を選別した。

調査語リストには 71 語が記載されていたが、実際に現地で収集され、かつ分析の結果アクセント型が特定できた語は表 3-4 に示す 66 語（2 モーラ名詞 36 語、3 モーラ名詞 25 語、4 モーラ名詞 5 語）であった。以後、与那覇方言の語の表記には簡略音声表記を用いる。[ɲ] は舌尖母音を表す。長母音は母音字を重ねることで表記する。

調査では、調査語の単独発話に加えて、表 2 に示すキャリア文に調査語を挿入した発話を録音した。キャリア文は、調査語に助詞 **nudu** 「が」（主格＋焦点標識）を付与し、かつ述語を後続させたものと、調査語に助詞 **mee** 「も」（並列）を付与し、かつ述語を後続させたものであった¹。述語は表 2 に示したとおり様々であった。

¹ このほかに、指示詞 **kunu** 「この」を調査語の前に置き、調査語に助詞 **ja** 「は」（主題標識）を調

表2 キャリア文. Xは調査語を示す.

単独発話	X.	「X。」
調査語＋助詞 <i>nudu</i> ＋述語	X <i>nudu n'aan/ uran</i> .	「X がない/ いない。」
	X <i>nudu aa/ uu</i> .	「X がある/ いる。」
調査語＋助詞 <i>mee</i> ＋述語	X <i>mee n'aan/ uran</i> .	「X もない/ いない。」
	X <i>mee aa</i> .	「X もある。」
	X <i>mee aa dussɿ</i> .	「X もある。」
	X <i>mee arii duu</i> .	「X もある。」

3. 1. 4 分析手順

分析は、収集した発話の聴覚印象および発話から抽出した基本周波数（F0）曲線の視認に基づいておこなった。今回の分析は予備的な性格を持つものであること、およびデータが質・量ともに限定されていることから、定量分析はおこなわなかった。F0 曲線の分析は Praat (Boersma and Weenink 2011) を用いておこなった。

3. 2 結果

3. 2. 1 概要

先行研究の記述の妥当性をおおむね確認した。与那覇方言のピッチの変化幅は概して小さいようで、際立った高低変化がない印象を与える。このことは、「アクセントも一般に平板調」とする平山他（1967）の記述と一致すると思われる。また、この方言におけるアクセント型には少なくとも2種類の区別があり、平山他（1967）の記述と一致する。3種類以上の区別があることを示す決定的な証拠は見つけられなかった（ただし 3.2.4 参照）。所属語彙に関しては、概して A 系列と B 系列が合流し一方のアクセント型に所属し、C 系列が他方の型に所属しており（A・B/C）、先行研究の記述（松森 2011）と一致する。

一方で、先行研究の記述とは異なる事実も見つかった。平山他（1967）は、被験者の世代ではアクセント型の区別が不明瞭になる現象（曖昧アクセント化）が進んでいると述べているが、本分析の結果は、アクセント型の区別が明瞭に保たれていることを示した。また、分析の結果明らかになったアクセント型の表層の実現形は、表1に示した平山他（1967）の記述とは、必ずしも一致しなかった。

査語の後に置いたキャリア文も用いたが、このキャリア文で発話された調査語の数が少なかったため、分析対象から除外した。

3. 2. 2 所属語彙

分析の結果明らかになった調査語のアクセント型を表 3-4 に示す。類別語彙に対応語（同源語）がある場合に限り、与那覇方言の語形の左に類別を記す。

表から明らかなように、多良間方言で A 型の語彙は、1 語（munuɿ「言葉」）を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応している。同様に、多良間方言で B 型の語彙も 1 語（puɿɿ「星」）を除いてすべてが与那覇方言の AB 型に対応しており、多良間方言で C 型の語彙のすべてが与那覇方言の C 型に対応している。この結果は、与那覇方言において A 系列と B 系列が合流した（A・B/C）とする松森（2011）の見解を支持する。

表 3 与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（前半）。

		与那覇方言におけるアクセント型		
		AB 型		C 型
多良間方言におけるアクセント型	A 型	1 拍 1 類	puu 帆	-
		1 拍 2 類	naa 名	munuɿ 言葉
		2 拍 1 類	ika/ ik'a 烏賊	
		2 拍 1 類	usɿ 牛	
		2 拍 1 類	zzu 魚	
		2 拍 1 類	futsɿ 口	
		2 拍 1 類	kusɿ 腰	
		2 拍 1 類	juda 枝	
		2 拍 1 類	musɿ 虫	
		2 拍 2 類	kabɿ 紙	
		2 拍 2 類	pɿtu 人	
		2 拍 2 類	isɿ 石	
		2 拍 2 類	kaa 井戸	
		2 拍 x 類	kami 亀	
		2 拍 x 類	tuɿ 鳥	
		3 拍 1 類	butu 夫	
		3 拍 1 類	kataa 形	
		3 拍 1 類	buduɿ 踊り	
		3 拍 1 類	judaɿ 涎	
		3 拍 1 類	panatsɿɿ 鼻血	
		3 拍 4 類	kagam 鏡	
		3 拍 4 類	fukuru 袋	
		3 拍 4 類	kujum 暦	
		-	ffa 子供	
		-	tuzɿ 妻	
		-	bikidumu 男/夫	

表4 与那覇方言のアクセント型と多良間方言のアクセント型の対応（後半）.

与那覇方言におけるアクセント型			
		AB 型	C 型
多良間方言におけるアクセント型	B 型	1 拍 3 類 tii 手	2 拍 1 類 puʃɿ 星
		2 拍 3 類 mm 芋	
		2 拍 3 類 pana 花	
		2 拍 4 類 jadu 戸	
		2 拍 4 類 dʒiŋ お金	
		2 拍 5 類 ami 雨	
		3 拍 1 類 kuruma 車	
		3 拍 4 類 uza 鶉	
		3 拍 5 類 maffa 枕	
		3 拍 5 類 avva 油	
		- ɲki 鱗	
		- kaina 腕	
		- kamatsɿ 頬	
		- midumu 女	
		- sajafu 大工	
	C 型		2 拍 3 類 puni 骨
			2 拍 3 類 uja 祖父
			2 拍 3 類 maaɿ 鞠
			2 拍 4 類 usɿ 臼
			2 拍 4 類 im 海
			2 拍 4 類 funi 舟
			2 拍 5 類 madu 暇
			2 拍 5 類 nabi 鍋
			3 拍 4 類 oogɿ 扇
			3 拍 4 類 paʃam 鋏
			3 拍 5 類 pookɿ 箒
			3 拍 6 類 ssam 虱
			3 拍 7 類 fuʃuɿ 葉
		- saʃa 砂糖	
		- tida 太陽	
		- waa 豚	
		- aagu 歌	
		- gazam 蚊	
		- mmaga 孫	
		- jarabi 子	
		- miipana 顔	
	-		- nuʒzuu 糸
			- ɕiibuni 背骨

以下、系列別語彙あるいは類別語彙との対応が不規則である語について簡潔に述べる。その際多良間方言との対応だけでなく、奄美語沖永良部方言（松森 2000b）、沖縄語金武方言（松森 2008）との対応も検討する。これらの方言は多良間方言と同様に三型アクセント体系を有する。

pʊsɿ「星」は類別語彙の 2 拍 1 類であるため、類別語彙と琉球諸語のアクセント型の対応に関するこれまでの研究の知見（服部 1958, 1979; 松森 1998 et seq.）に基づけば A 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では B 型、与那覇方言では C 型であり、対応が不規則である。一方、沖縄語金武方言（松森 2008）では A 型であり、規則的な対応がある。

fʊkuru「袋」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待されるが、宮古語多良間方言では A 型であり、対応が不規則である。一方、与那覇方言では B 型であるため、規則的な対応があるように思われる。ただしこの語は沖縄語金武方言では C 型であり、いずれにせよ方言間の対応は不規則である。

同様に、pasam「鉄」は類別語彙の 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。この語は宮古語多良間方言でも与那覇方言でも C 型であるが、沖縄語金武方言では B 型であり、方言間の対応が不規則である。

また、kagam「鏡」と kujum「暦」も 3 拍 4 類であるため、B 系列あるいは C 系列であることが期待される。これらの語は沖縄語金武方言では B 型であり、規則的な対応があるように思われるが、宮古語多良間方言では A 型であり対応が不規則である。一方、与那覇方言では AB 型であるため、対応が規則的であるかどうか判断できない。

最後に munuɿ「言葉」であるが、この語は類別語彙に同源語が存在しないが、宮古語多良間方言で B 型、奄美語沖永良部方言で B 型である。しかし与那覇方言では C 型であり対応が不規則である。

3. 2. 3 「名詞＋nudu＋述語」における実現形

まず、名詞に助詞 nudu が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。2 モーラ名詞の実現形の一例を図 1 に示す。図の上段は音声波形であり、中段は F0 曲線、下段はモーラと語の転記である。音声波形と F0 曲線上の縦線はモーラ境界を表す。

AB 型では、助詞 nudu の第 2 モーラで F0 が高くなり、それ以前は低い F0 が続く。一方 C 型では、名詞の第 2 モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 nudu の終端まで継続する。C 型名詞の第 1 モーラの高さは安定しないようである。このモーラの高さは、第 2 モーラと同水準の（すなわち高い）ように知覚されることもある一方で、第 2 モーラより低く知覚されることもある。後述の「語頭の急下降」と関係しているのかもしれない。

平山他（1967）には 2 モーラ名詞に助詞 nudu が後続した場合の実現形に関する記述（表 1）がある。本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB 型では助詞 nudu も含めすべてのモーラが低く実現されるとしている点で、本分析結果と異なる。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。一方、C 型については、平山輝男らは助詞 nudu も含めすべてのモーラが高く実現されると記述しており、本分析結果

とほぼ一致する（ただし、第1モーラが第2モーラとほぼ同水準のF0を有する場合の実現形に限られる）。

図1（左）から明らかなように、2モーラAB型には、語頭に短時間で急激に下降するF0が観察される。（2モーラC型にも観察されるかは不明である）。当該の下降が語頭（韻律的な語の冒頭）に生じる特徴なのか、それとも階層的により上位の韻律的単位の冒頭に生じる特徴なのかは現時点では不明である。以後、この下降を「語頭急下降」と呼ぶ。

この語頭急下降は知覚可能であるが、少なくとも2モーラ・3モーラ名詞においては、例えば東京方言における頭高型の名詞が与えるような聴覚印象を与えることはない。この語頭急下降は、語中で声の高さが凹曲線（concave curve）を描くような聴覚印象を与える。また、この語頭急下降は、少なくとも2モーラ・3モーラ名詞に関する限り、あるトークンでは顕著に知覚されるが、別のトークンではほとんど知覚されない。語頭の急下降が言語学的に重要な特徴であるかどうかは現時点では不明である。この問題は4モーラ名詞を検討する際に再び論じることとする。

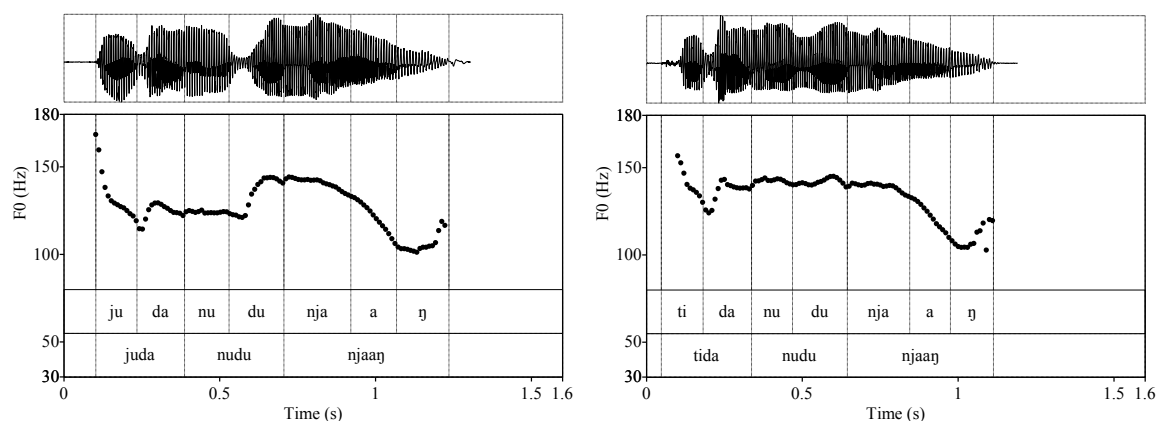


図1 2モーラ名詞+nudu+述語. AB型juda「枝」(左)、C型tida「太陽」(右).

3モーラ名詞の実現形の一例を図2に示す。AB型では、助詞nuduの第2モーラでF0が高くなる。これは2モーラAB型と同様である。また語頭急下降が観察される点も2モーラAB型の場合と同様である。

C型では、名詞の第3モーラからF0が高くなり、その高さは助詞nuduの終端まで継続する。名詞の第3モーラ以前は低いF0が続く。語頭には語頭急下降が観察される。

なお図1とは異なり図2では、助詞nuduから述語にかけてF0下降が観察されるが、これは名詞のアクセント型によるものではなく、述語（n'jaan vs. uran）のアクセント型によるものである。

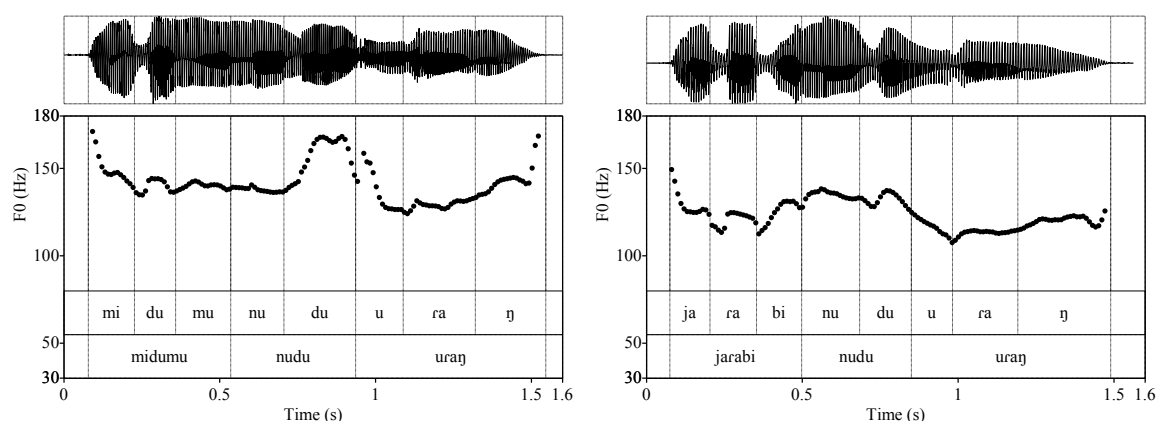


図2 3モーラ名詞+nudu+述語. AB型midumu「女」(左)、C型jarabi「子供」(右).

図3は4モーラ名詞の実現形の一例である。AB型では、2モーラ・3モーラAB型の場合と同様に、助詞 **nudu** の最終モーラで F0 が高くなる。一方C型では、3モーラC型の場合と同様に、名詞の第3モーラから F0 が高くなり、その高さは助詞 **nudu** の終端まで継続する。

AB型とC型の双方において、名詞の第1モーラから第2モーラにかけての F0 下降が観察される。この下降は、2モーラ名詞および3モーラ名詞に観察された語頭急下降とは、音響的にも聴覚印象の上でも異なる。2モーラ・3モーラ名詞では、F0 下降は極めて短時間で終了するため、第1モーラの大半は低い F0 値を持つ。それに対して4モーラ名詞では、高い F0 値が第1モーラの大半を占め、F0 下降は第1モーラ終端付近から第2モーラにかけて生じる。その結果、4モーラ名詞の語頭は東京方言の頭高型に似た聴覚印象を与える。すなわち第1モーラが高く、第2モーラが低いという印象である。4モーラ名詞に観察されるこの現象を「語頭卓立」と呼ぶことにする。これが語頭の特徴か階層的に上位の韻律単位の特徴かは不明である。

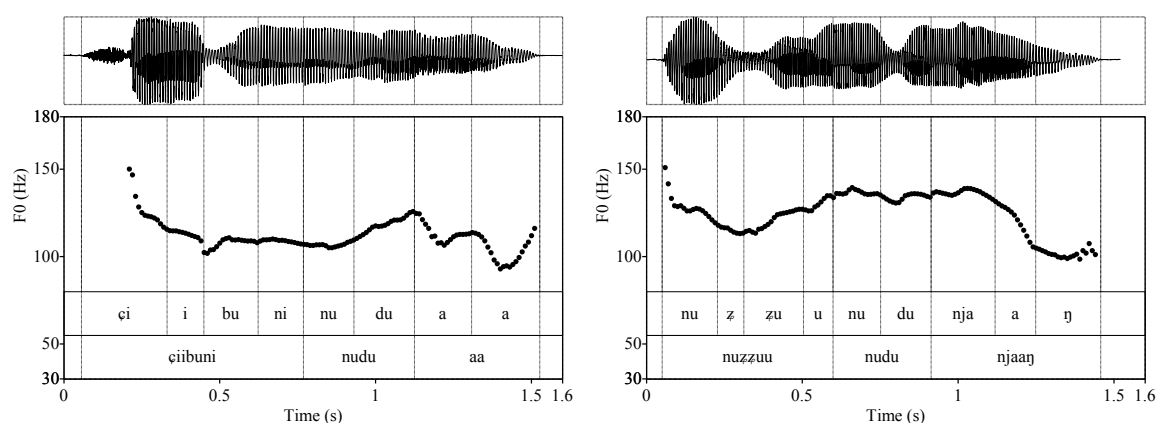


図3 4モーラ名詞+nudu+述語. AB型ciibuni「背骨」(左)、C型nuzzuu「糸」(右).

この語頭卓立に加えて、AB型では助詞 **nudu** の第2モーラに、C型では名詞の第3モーラに F0 の高まりが生じることで、「4モーラ名詞+助詞 **nudu**+述語」という環境には、高く知覚さ

れるモーラが、低く知覚されるモーラを挟んで、2 か所存在することになる。すなわち伝統的に「重起伏調」と呼ばれてきた実現形が観察されこととなる²。

この4モーラ語の語頭卓立と、2モーラ名詞・3モーラ名詞の語頭急下降とが関連する現象であるのかあるいは独立した現象であるのかは、将来検討すべき課題である³。

3. 2. 4 「名詞+mee+述語」における実現形

次に、名詞に助詞 *mee* が後続し、さらに述語が後続する場合の実現形を検討しよう。後に明らかになるように、この条件における実現形は、助詞 *nudu* が後続する条件における実現形とは異なっている。2条件の間に著しい差異が観察されることがあるため、この方言には隣接する要素にしたがってアクセント型が交替する現象が存在するとみなすこともできそうである⁴。

図4は2モーラ名詞の実現形の一例である。この条件下ではAB型とC型の違いが中和するようである。双方のアクセント型において、第1モーラのF0は低く、第2モーラでF0が高くなり、高いF0が助詞の終端まで継続する。また、語頭には語頭急下降が観察される。

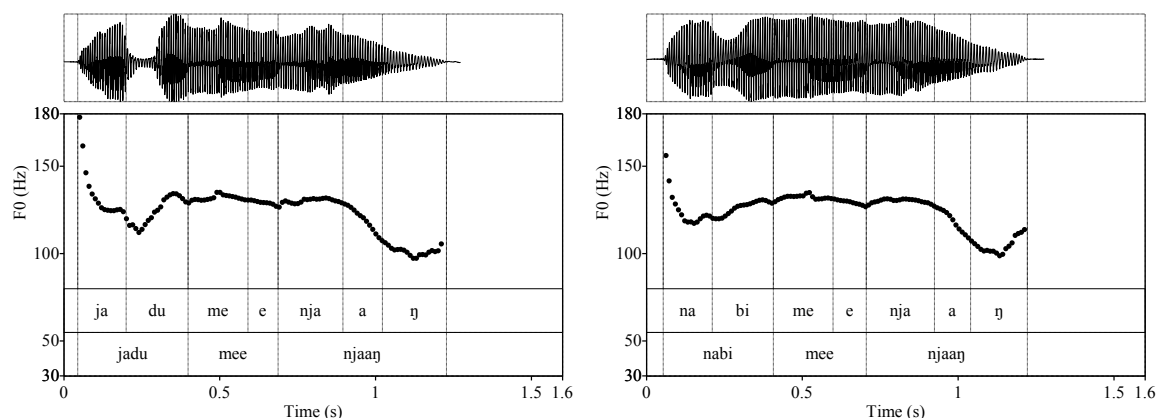


図4 2モーラ名詞+mee+述語. AB型 *jadu* 「戸」(左)、C型 *nabi* 「鍋」(右).

図5は3モーラ名詞の実現形の一例である。AB型では、名詞の第3モーラでF0が高くなり、高いF0は助詞の終端まで継続する。語頭には語頭急下降が観察される。一方C型では、名詞全体が高いF0を伴って実現される。その後、名詞の終端から助詞の始端にかけてF0は下降し、助詞の第2モーラで高くなる。この条件でも語頭急下降が観察される。

² モーラ数の多い名詞に重起伏調が観察されることは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。

³ 筆者の主観的な観察では、与那覇方言と同様に、語頭が低く始まり、語中に上昇を伴うアクセント型を有する日本語方言の一部、例えば鹿児島方言や青森県五所川原方言にも、語頭急下降が生じることがある。これらの方言が話されている地域の近隣に、いわゆる重起伏調を有する方言が見つかることは興味深い(例えば岩手県山田町方言(大西 1989)や鹿児島県甑島方言(上村 1941))。

⁴ このようなアクセント型の交替が観察されることは、調査前に松森晶子氏から教示を受けていた。

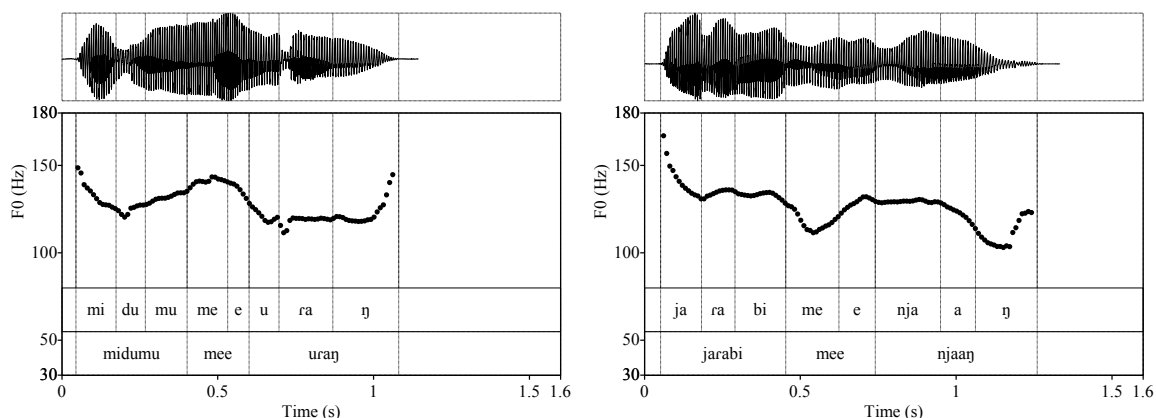


図5 3モーラ名詞+mee+述語. AB型 midumu「女」(左)、C型 jarabi「子供」(右).

図6は4モーラ名詞の実現形の一例である。AB型では語頭卓立が観察される。すなわち第1モーラが高く、第2モーラが低い。その後第3モーラでF0が高くなり、高いF0は助詞の終端まで継続する。一方C型では、およそ名詞全体が高いF0を伴って実現される。その後、名詞終端から助詞始端にかけてのF0下降が観察され、助詞の第2モーラでF0が高くなる。

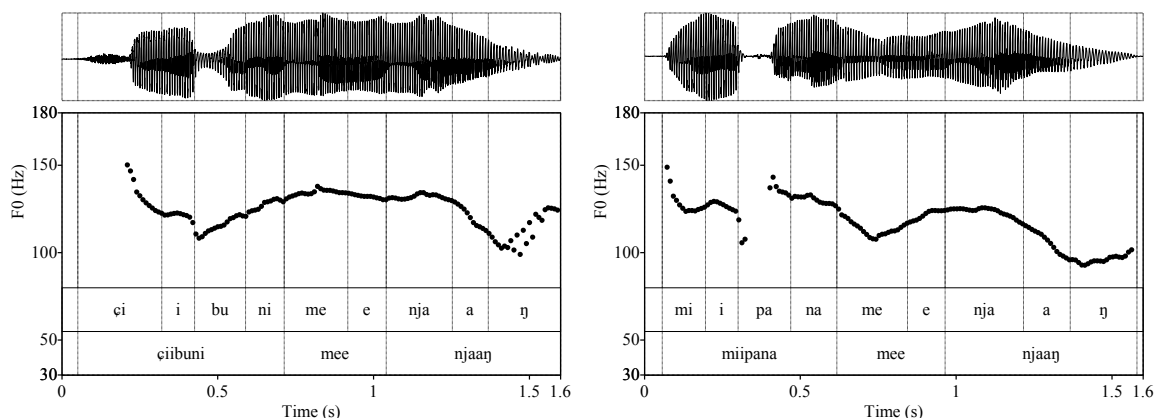


図6 4モーラ名詞+mee+述語. AB型 ciibuni「背骨」(左)、C型 miipana「顔」(右).

3. 2. 5 単独発話における実現形

最後に、名詞の単独発話における実現形を検討しよう。2モーラ名詞が単独で発話された場合の実現形は、AB型もC型も「下降パターン」と「上昇パターン」の間でゆれる。ここで下降パターンとは第1モーラが高く、第2モーラが低い実現形のことであり、上昇パターンとは第1モーラが低く、第2モーラが高い実現形のことである。したがってこの条件下ではAB型とC型を常に区別することはできない。しかしながら以下に述べるとおり、2種類のパタンの生起確率には偏りが観察される。

C型の語は上昇パターンで実現されることが多い。C型の2モーラ名詞は11語であったが、このうち少なくとも一回下降パターンで発音された語は uja「親」、waa「豚」、pusɿ「星」の3

語のみであった。単独発話において、ある語が下降パターンで実現されたトークン数をその語の全トークン数で割った値に 100 を掛けた値を「下降パターン率」(%) と呼ぶとすると、C 型の語の平均下降パターン率は 21.2% (N = 11, SD = 40.2) であった。したがって C 型の単独発話の典型的な実現形は上昇パターンであるとみなしてよいであろう。

一方 AB 型の語は、下降パターンでの実現回数と上昇パターンでの実現回数の間に顕著な差は認められない。AB 型の 2 モーラ名詞は 25 語であったが、このうち 16 語が少なくとも 1 回下降パターンで実現された。平均下降パターン率は 50.3% (N = 25, SD = 44.9) であった。したがって AB 型の典型的な実現形が下降パターンなのか上昇パターンなのかを判断することは難しい。

図 7 はアクセント型で対立するミニマルペア (AB 型 *usɿ* 「牛」、C 型 *usɿ* 「臼」) の単独発話の一例である。少なくとも今回のデータでは、AB 型 *usɿ* 「牛」は必ず下降パターンで、C 型 *usɿ* 「臼」は必ず上昇パターンで実現された。AB 型の同じ語が下降パターンでも上昇パターンでも実現される事実は図 8 に示されている。ここでは、AB 型 *ika* 「イカ」が双方のパターンで実現されている。

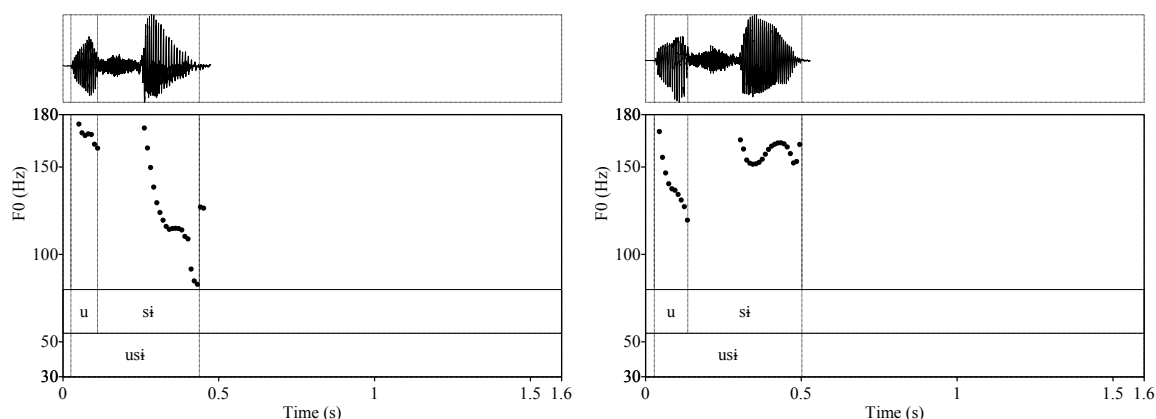


図 7 2 モーラ名詞単独発話の一例。AB 型 *usɿ* 「牛」(左)、C 型 *usɿ* 「臼」(右)。

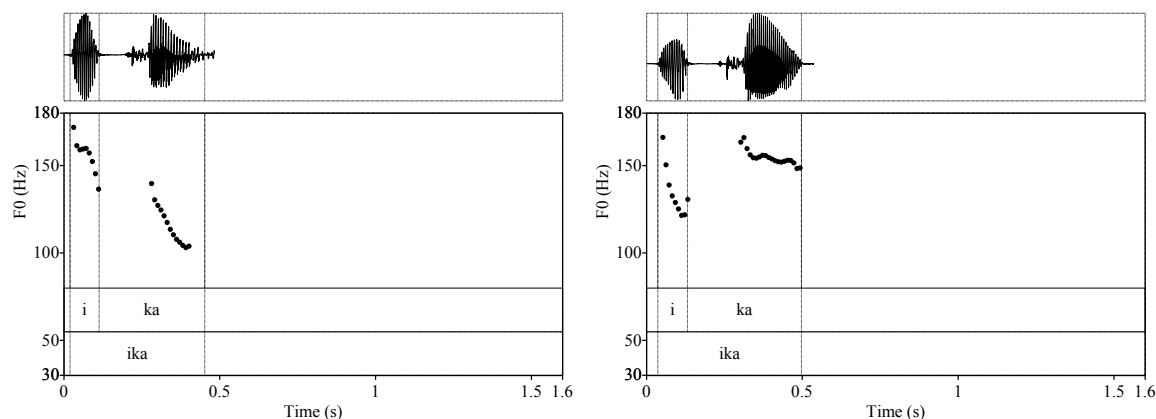


図 8 2 モーラ名詞 AB 型の単独発話におけるゆれ。AB 型 *ika* 「イカ」が下降パターンで実現された場合(左)と上昇パターンで実現された場合(右)。

平山他（1967）には2モーラ名詞の単独発話における実現形に関する記述（表1）があるので、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。C型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

今回のデータは質・量ともに限定されているため、偶然の可能性が極めて高いことを十分に認識したうえで、2モーラ名詞の単独発話におけるAB型の実現形のゆれに認められた以下の興味深い傾向を指摘しよう。

上昇パターンで実現された2モーラAB型の名詞に、系列の偏りが認められた。2モーラAB型の名詞のうちB系列と思われる7語が、1語を除いて必ず上昇パターンで実現された(ami「雨」、mm「芋」、pana「花」、tii「手」、jadu「戸」dziŋ「お金」、uza「鶉」のうち、最後の1語を除いたすべての語)。B系列の語の平均下降パターン率は14.2% (N=7, SD=37.8) であった。B系列の語の典型的な実現形が上昇パターンであることを示唆する結果である。一方、A系列と思われる18語のうち必ず上昇パターンで実現された語は3語にすぎなかった(butu「夫」、ffa「子供」、fucɿ「口」、ika「イカ」、isɿ「石」、kaa「川」、kami「亀」、musɿ「虫」、naa「名前」、pɿtu「人」、puu「帆」、tuɿ「鳥」、tuzɿ「妻」、usɿ「牛」、zzu「魚」、kabɿ「紙」、kɿsɿ「腰」、juda「枝」のうち最後の3語のみ)。A系列の語の平均下降パターン率は64.4% (N=18, SD=40.0) であった。A系列の語の典型的な実現形が下降パターンであることを示唆する結果である。

もしこの結果が偶然でないのであれば、与那覇方言の2モーラ名詞は、単独発話においてA系列とB・C系列がアクセント型によって区別されていることになる(A/B・C)。3.2.2から3.2.4で示したとおり、その他の環境において2モーラ名詞は、A・B系列とC系列がアクセント型によって区別されている(A・B/C)。このことはすなわち（今回の結果が偶然でないのであれば）与那覇方言のアクセント体系は二型ではなく三型であることを意味する。今後のさらなる調査が必要である。

次に、3モーラ名詞の単独発話を検討しよう。図9は3モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB型では、第1・第2モーラのF0が低く、第3モーラでF0が高くなる。語頭には語頭急下降が観察される。一方C型では第1・第2モーラのF0が高く、第3モーラでF0が低くなる。語頭には語頭急下降が観察される。

3モーラ名詞の単独発話の実現形に関する記述を平山他（1967）に見つけることができるので（表1）、本分析結果と比較してみよう。平山輝男らの記述は、AB型ではすべてのモーラが低く実現されるとしており、本分析結果とは一致しない。一方、C型ではすべてのモーラが高く実現されるとしているが、これも本分析結果とは一致しない。この差が世代差や個人差に起因するものか、あるいはその他の要因によるものかは不明である。

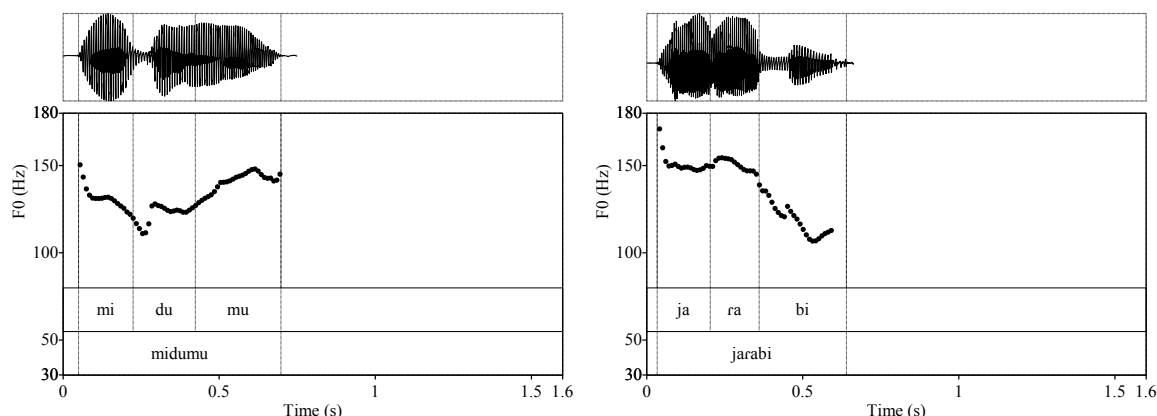


図 9 3 モーラ名詞単独発話. AB 型 **midumu** 「女」(左)、C 型 **jarabi** 「子供」(右).

4 モーラ名詞の単独発話の検討に移ろう。図 10 は 4 モーラ名詞の単独発話の実現形の一例である。AB 型では、第 1～第 3 モーラの F0 が低く、第 4 モーラで F0 が高くなる。語頭卓立は観察されないようであるが、語頭急下降は観察される。一方 C 型では、第 1～第 3 モーラの F0 が高く、第 3 モーラで F0 が低くなる。

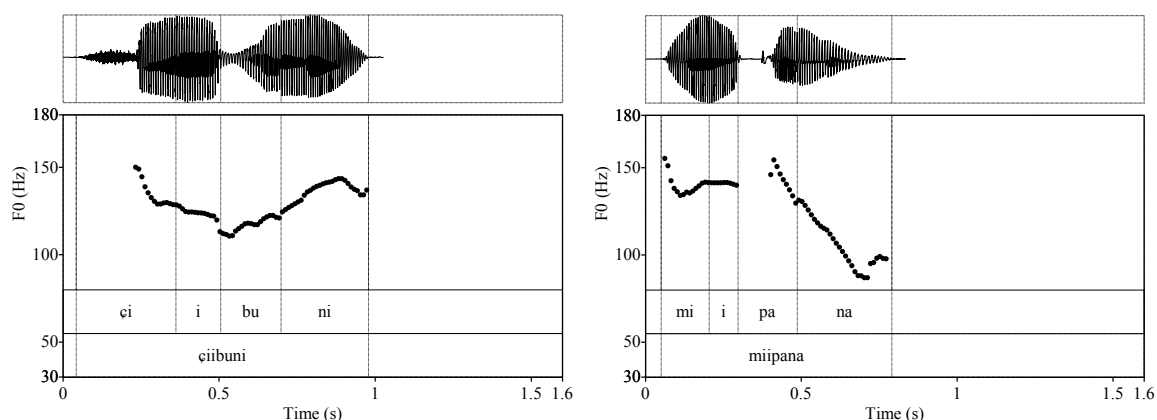


図 10 4 モーラ名詞単独発話. AB 型 **midumu** 「女」(左)、C 型 **jarabi** 「子供」(右).

3. 2. 6 アクセント型の実現形の要約

以上、3 種類の条件下におけるアクセント型の実現形を名詞のモーラ数ごとに検討してきた。これまでの議論から明らかなように、与那覇方言はアクセント型の実現について複雑な様相を呈する。特に興味深いことは、アクセント型の実現形が隣接する要素の有無、種類によって著しい変化をみせる事実である。3.2.4 でふれたように、この現象はアクセント型の交替とみなすことができるかもしれない。

与那覇方言におけるアクセント型の実現の様相は表 5 のように要約することができる。ここでは語頭卓立は表記しているが、語頭急下降の表記は省略している。

表5 与那覇方言のアクセント型の実現形。Xは調査語、ピリオドはモーラ境界を表す。

モーラ数		X nudu		X mee		X (単独発話)
2	AB 型	ju.da nu.[du 「枝」	AB 型	ju.[da me.e 「枝」	AB 型	[i.]ka 「イカ」～ i.[ka
	C 型	ti.[da nu.du 「太陽」～ [ti.da nu.du	C 型	na.[bi me.e 「鍋」	C 型	u.[sɿ 「臼」
3	AB 型	mi.du.mu nu.[du 「女」	AB 型	mi.du.[mu me.e 「女」	AB 型	mu.du.[mu 「女」
	C 型	ja.ra.[bi nu.du 「子供」	C 型	[ja.ra.bi] me.[e 「子供」	C 型	[ja.ra.]bi 「子供」
4	AB 型	[ɕi].i.bu.ni nu.[du 「背骨」	AB 型	[ɕi].i.[bu.ni me.e 「背骨」	AB 型	ɕi.i.bu.[ni 「背骨」
	C 型	nu.]ʒ.[ʒu.u nu.du 「糸」	C 型	[mi.i.pa.na] me.[e 「顔」	C 型	[mi.i.pa.]na 「顔」

4 結語

宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系を母語話者1名の発話に基づいて分析した。その結果、この方言は二型アクセント体系を持つとする平山他（1967）の記述の妥当性を確認した。また、アクセント型の所属語彙に関して、この方言は系列別語彙のA系列とB系列を合流させている（A・B/C）とする松森（2011）の記述の妥当性を確認した。一方、アクセント型の表層の実現形は平山他（1967）の記述とは必ずしも一致しないことを明らかにした。さらにこの方言には、隣接する要素の有無および種類によって、名詞のアクセント型の実現形が大きく変化するアクセント型交替とも言うべき現象が観察されることを明らかにした。この事実も先行研究には報告されていない（ただし注4参照）。

アクセント型の交替も含め、与那覇方言のアクセント型の実現規則を明らかにするためには、さらなる調査が必要である。今回の分析結果は、この方言のアクセント型の実現規則が複雑であることを示唆する。しかしながら今後の調査の結果によって、この方言のアクセント型の実現について単純な規則が提案できるようになる可能性もある。一方、与那覇方言と同じく宮古語の方言のひとつである池間方言のアクセント型の実現規則も極めて複雑であることが筆者らの最近の研究から示唆されている（五十嵐他 2012）。複雑な実現規則が宮古語のアクセント体系の特徴である可能性も今後探求する価値があるだろう。

本論文の分析結果は、母語話者1名を対象とした1時間の調査から得られた質・量ともに限定されたデータに基づいている。今度はより多くの母語話者の発話データに立脚して、より多様な文脈におけるアクセント型の実現を分析する必要がある。

参考文献

- 五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之(2012)「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』(近日公刊)。
- 上野善道(1984)「N 型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究篇』東京、明治書院：167-209.
- 上野善道(1985)「村上方言の名詞のアクセント資料－1～3 モーラ語」『東京大学言語学論集』：25-60.
- 大西拓一郎(1989)「岩手県山田町方言のアクセント」『国語学研究』(29): 84-75.
- 上村孝二(1941)「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66, 12-15.
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究：原理と方法』塙書房.
- 服部四郎(1958)「奄美群島の諸方言について—沖縄、先島方言との比較」『人類科学』XI.
- 服部四郎(1979)「日本祖語について 21-22」『言語』8:11, 97-107; 8:12, 504-516.
- 平山輝男、大島一郎、中本正智 (1967)『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社.
- 松森晶子(1998)「琉球アクセントの歴史的形成過程—類別語彙 2 拍語の特異な合流の仕方を手がかりに—」『言語研究』114：85-114.
- 松森晶子(2000a)「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』51:1：93-108.
- 松森晶子(2000b)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』4:1, 61-71.
- 松森晶子(2008)「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列—「琉球調査用系列別語彙」の開発にむけて」『日本女子大学紀要・文学部』58：97-122.
- 松森晶子(2010)「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監)『日本語研究の 12 章』東京、明治書院：490-503.
- 松森晶子(2011)「喜界島祖語における 3 型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」『日本女子大学紀要：文学部』60：87-106.
- Boersma, P., Weenink, D. (2011) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 5.2.16, from <http://www.praat.org/>.
- Pellard, Thomas (2009) Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. PhD dissertation. École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2011) "The historical position of the Ryukyuan Languages", ICHL20 Symposium Historical Linguistics in the Asia-Pacific Region and the Position of Japanese. (pp. 55-64). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Shimoji, Michinori (2010) "Ryukyuan languages: An introduction." In M. Shimoji and T. Pellard (eds.) An Introduction to Ryukyuan Languages. (pp. 1-13). Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

宮古語の動詞活用

－代表形、否定形、過去形、中止形－

かりまた しげひさ

1 調査の概要

2011年9月4日から9日までの5日間、国立国語研究所の合同調査で宮古島の9地点の文法調査を実施した。調査地点は保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、狩俣、池間、国仲である。調査項目は、沖縄言語研究センターが1982年に作成した『琉球列島の言語の研究 全集落調査票』（以下、「全集落」）に収録された37の動詞語彙である。そこに収録された動詞語彙目は、琉球諸語の下位方言の動詞の活用のタイプのおおよそを知ることができるよう選定されたもので、強変化動詞（以下、強変化）と弱変化動詞（以下、弱変化）の語幹末子音に*b、*m、*k、*g、*s、*t、*n、*r、*w等をふくむ規則変化動詞と、「有る」「居る」「来る」「する」「ない」の不規則変化動詞がふくまれる。それぞれの動詞の活用のタイプを特定できるように代表形（スル）、否定形（シナイ）、過去形（シタ）、中止形（シテ）のよっつの文法的な形を下位項目としてあげている。

代表形は、当該方言の完成相の動詞を知るために設定された項目である。否定形は、基本語幹を確認するための項目である。基本語幹は、命令形や勧誘形からもえられるが、無意志動詞からは命令形をえられないので、否定形を選定している。過去形は、音便語幹を確認するためのものである。北琉球諸語のばあい、中止形でも過去形と同じく音便語幹を確認することができる。「全集落」に中止形が設定されたのは、南琉球諸語の音便現象の有無を確認するうえで、過去形のほかに音便語幹の有無を確認するための項目を追加したからである。

今回の宮古島合同調査では「全集落」を例文つきの調査票に改訂したものを使用した。改訂した調査票は、西岡敏（沖縄国際大学）を研究代表者とする「琉球宮古方言の言語地理学的研究」基盤研究（B）で「全集落」の動詞活用形の語形を得やすくするために、例文を付したものである。そこに示された例文を当該方言に翻訳してもらうという調査方法をとった。

なお、調査項目の量がすくなくないことと調査日数を考慮して、調査項目を三分割し、3班で分担して調査する計画であった。話者の都合、調査員の人数の都合などで3班つくれず、全部の項目を調査できなかった地点がある。また、調査はできたが目的とする当該語形が得られていないばあいもあった。本報告では宮古島合同調査でえられた資料のほかに、かりまたが調査した島尻¹（2011年12月10日）、久貝²（2012年3月3日）、狩俣³（2011年8月15日、16日）の資料も使用する。島尻の文法調査はまったく新たに追加されたものである。

¹ 話者は島尻生抜きのI.S氏。男性。昭和12年5月6日生。

² 話者は久貝生抜きのY.K氏。男性。大正15年12月23日生。

³ 話者は狩俣生抜きのN.Y氏。女性。大正15年12月15日生。

本報告で検討する地点は 10 地点である。

日本語シテ中止形に対応する宮古語諸方言(以下宮古語)の中止形はふたつの形式がある。ひとつは、**numi:** (ノンデ)、**kaki:** (カITE) のように基本語幹に語尾 **i**、**i** を後接させたものである。もうひとつは、**numitti** (ノンデ)、**kakitti** (カITE) のように語尾に **ti** をふくむものである。改定調査票では前者を「アリ中止形」、後者を「シテ中止形」としているので、本報告ではアリ中止形、シテ中止形の名称を使用する。

アリ中止形は、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。シテ中止形は、並べあわせ文、ふたまた述語文の非終止の述語のあらわれ、非従属的な動作をあらわすことがおおい。アリ中止形は、あわせ述語の前要素にもなる。調査票作成にさいしては、ふたつの中止形が収集できるようにふたつずつ例文を作成している。

2 語幹と語尾

動詞の活用形は、その形つくりにおいて、語幹、語尾、助辞などの要素からなる^{注4)}。語尾と助辞は、文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である。北琉球諸語の動詞は、語幹は、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみ一つの語幹が存在する。基本語幹、音便語幹、連用語幹のみ一つの語幹のうち、基本語幹と音便語幹とよばれるものは、日本語にもあるのだが、連用語幹は、北琉球諸語に特徴的にみられるものであろう。語幹と語尾の境界には **kak-e:** のように「-」を、語幹と助辞の境界には **nudi=kara** のように「=」を挿入する。

基本語幹	音便語幹	連用語幹
kak-aN (書かない)	kate-aN (書いた)	kate-uN (書く)
tur-aN (取らない)	tut-aN (取った)	tu-iN (取る)
jum-aN (読まない)	jud-aN (読んだ)	jun-uN (読む)

表 1 沖縄島那覇市首里方言

基本語幹	音便語幹	連用語幹
hak'-aN (書かない)	hatt3-aN (書いた)	hat3-uN (書く)
tur-aN (取らない)	tutt-aN (取った)	tu-N (取る)
jum-aN (読まない)	jud-aN (読んだ)	jum-iN (読む)

表 2 今帰仁村謝名方言

表 3 にみるように、あるいは本永守靖 1977 などがのべるように、宮古語の動詞の語幹には現代日本語(以下、日本語)の音便語幹、北琉球諸語の連用語幹などを設定する必要はなく、

⁴ 語幹、語尾の定義は、鈴木重幸(1972)にしたがう。

基本語幹だけをみとめればよい⁵⁾。音便語幹を設定しなくてもいいことは宮古語の動詞活用のおおきな特徴である。宮古語の動詞には基本語幹の語幹末子音をかさねる変種をもつものがある。今回の調査項目の **kav** (被る)、**niv** (眠る)、**az** (言う) が変種をもつ。代表形は **kav**、**niv**、**az** のように子音語幹でおわり、語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は **kavv-i** (被れ)、**kavv-a** (被ろう)、**kavv-an** (被らない)、**nivv-i** (眠れ)、**nivv-a** (眠ろう)、**nivv-an** (眠らない)、**azz-i** (言え)、**azz-a** (言おう)、**azz-an** (言わない) のように語幹末子音がかさなってあらわれる。**v:** (売る) も代表形は長子音単独で語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は **vv-i** (売れ)、**vv-a** (売ろう)、**vv-an** (売らない) のように短い子音をかさねた子音だけの語幹をもつ。これらとはことなる語幹の変種をもつタイプもあるが、それらにふくめ宮古諸語の活用形と活用のタイプの全体については稿をあらためて述べたい。

基本語幹		
kak-an (書かない)	kak-ŋtaŋ (書いた)	kak-ŋ (書く)
jum-an (読まない)	jum-taŋ (読んだ)	jum (読む)
tur-an (取らない)	tu-ŋtaŋ (取った)	tu-ŋ (取る)
kavv-an (被らない)	kav-taz (被った)	kav (被る)

表 3 平良下里方言

強変化としては「飛ぶ、遊ぶ、漕ぐ、行く、落とす、出す、持つ、切る、縛る、掘る、降る、被る、閉じる、寝る、買う、売る、飲む、食べる、酔う、洗う、言う」があがっている。弱変化としては「捨てる、降りる、落ちる、呉れる、貰う、起きる、着る、坐る、見る、蹴る」があがっている。不規則変化としては「来る、する、有る、居る、死ぬ、無い」があがっている。

「ない」は日本語では形容詞に分類されるが、琉球諸語では不規則変化として分類される。宮古語の形容詞が **ku** 連用形にものの存在をあらわす動詞 **az** がくみあわさって文法化した活用形をもったり、語幹をかさねる重複型の語形をもったりするのに対して、宮古語の「ない」はそのような活用形をもたないことから動詞に分類される。もちろん、動詞に分類されるとはいつでも、アスペクト、ヴォイスなどの形態論的なカテゴリーをもたず、命令形、勧誘形などのムード形式をもたないなど、形容詞とおなじ文法的な特徴をもっている。

「縛る」に対応して「^く括る」のあらわれるのが期待され、「寝る」には「眠る」、「食べる」には「食らう」、「閉じる」には「くる」、「貰う」には「得る」、「坐る」には「^お坐る」、「居る」には「^ゑ居る」のあらわれることが期待されている。

日本語の弱変化のうち、語幹が 1 音節で語幹末が母音 **i** になる **mi-ru** (見る)、**ki-ru** (着る)、**ni-ru** (煮る) などの動詞は、古代中央日本語 (以下、古代語) でも弱変化だが、語幹

⁵⁾ 基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの語幹の変種の名称は、上村幸雄 (1963) 「首里方言の文法」 (『沖縄語辞典』) による。なお、上村 (1963) は上記みつつの語幹のほかに「融合語幹」「短縮形語幹」も設定している。

が2音節で語幹末が母音 i、あるいは e になるタイプの動詞（“上二段”“下二段”とよばれる）は、否定形 *oki-zu*（起きない）や命令形 *oki-jo*（起きろ）などの弱変化型の活用形と、代表形 *ok-u*（起きる）、連体形非過去形 *ok-uru*（起きる）などの強変化型の活用形とが並存している。このタイプの動詞は、強変化と弱変化の混合変化活用動詞（以下、混合変化）とよぶことができる。日本語強変化の「死ぬ」は、古代語では *sin-azu*（死なず）、*sin-itari*（死にたり）のような強変化型の語幹と語尾をもつ活用形と *sin-uru*（死ぬ・第二終止形）と *sin-ure*（死ぬ・第三終止形）のような混合変化と同じ語幹と語尾をもつ活用形⁶⁾とが混在した混合変化の変種とみることができる。

			否定形	命令形	過去形	非過去	連体
現代 日本語	強変化	行く	<i>ik-anai</i>	<i>ik-e</i>	<i>iQ-ta</i>	<i>ik-u</i>	<i>ik-u</i>
		死ぬ	<i>cin-anai</i>	<i>cin-e</i>	<i>ciN-da</i>	<i>cin-u</i>	<i>cin-u</i>
	弱変化	起きる	<i>oki-nai</i>	<i>oki-ro</i>	<i>oki-ta</i>	<i>ok-iru</i>	<i>ok-iru</i>
		見る	<i>mi-nai</i>	<i>mi-ro</i>	<i>mi-ta</i>	<i>mi-ru</i>	<i>mi-ru</i>
古代 日本語	強変化	書く	<i>ik-adzu</i>	<i>ik-e</i>	<i>ik-itari</i>	<i>ik-u</i>	<i>ik-u</i>
	混合 a	死ぬ	<i>cin-adzu</i>	<i>cin-e</i>	<i>cini-tari</i>	<i>cin-u</i>	<i>cin-uru</i>
	混合 b	起きる	<i>oki-dzu</i>	<i>oki-jo</i>	<i>oki-tari</i>	<i>ok-u</i>	<i>ok-uru</i>
	弱変化	見る	<i>mi-dzu</i>	<i>mi-jo</i>	<i>mi-tari</i>	<i>mi-ru</i>	<i>mi-ru</i>

表4 日本語の動詞活用タイプ

島尻方言、狩俣方言、久貝方言では古代語の弱変化の否定形だけでなく、古代語の混合変化の否定形も、語幹末が母音 i になる基本語幹に否定語尾・n を後接させる。すなわち、古代語混合変化が弱変化化している。島尻方言、狩俣方言は「死ぬ」も弱変化化しているが、久貝方言では強変化化している。

- 1) *kirju jurugacca:mai n:ta: utin.*（木を揺らしても実は落ちない。）狩俣
- 2) *baja: umanna urin.*（私はここでは降りない。）久貝

いっぽう、保良方言、宮国方言、来間方言などでは、古代語の弱変化、混合変化に対応する動詞の代表形や命令形は、語幹末が母音 i、あるいは i: でおわる基本語幹に語尾 ru を後接させる弱変化型の活用形だが、否定形は、語幹末が子音で語尾が母音 -u、-u: ではじまる強変化型の活用形である。これらの方言では、弱変化が混合変化化している。

⁶ 第二終止形は、強調文の述語になる活用形で焦点化助詞「ぞ」「なん」「や」「か」と呼応し、連体形とホモニムである。第三終止形も強調文の述語になる活用形で「こそ」と呼応し、条件形とホモニムである。

- 3) vvaga tuzzuba smari fi:ru. (おまえが鶏を縛ってくれ。) 保良
 4) utu^hta sudan^hkaija ka:ssuba fu:n. (弟は兄には菓子はくれない。) 保良
 5) kunu fsuzza azumaka^hja numi mi:ru. (この菓は甘いから飲んでみろ。) 保良
 6) uja: ja:kju:juba: mju:n. (いつも私は弟に菓子をくれる。) 保良
- 7) gumiu uma^hkai si:tiru. (ゴミをそこに捨てろ。) 宮国
 8) mma: fz:fznu kinnumai si:tun. (祖母は古い着物も捨てない。) 宮国
 9) unu ma:zzu kuma^hkai kiri fi:ru. (その毬をここに蹴ってくれ。) 宮国
 10) o^hutoo a^han koosuba u:n. (弟は兄に菓子をくれない。) 宮国
- 11) vva^hga tuzzuba: smari/s^hma^hri fi:ro. (おまえが鶏を縛ってくれ。) 来間
 12) utu^htoa azanna/suzanna ko:suba: fu:n. (弟は兄には菓子を呉れない。) 来間

古代語の混合変化に対応する動詞が混合変化であられる宮古語下位方言がある。なお、同じ混合変化とはいっても、後述するように古代語混合変化は、終止形非過去と連体形非過去に強変化型の活用形があらわれるが、宮古語混合変化は、否定形と勧誘形に強変化型の活用形があらわれる。否定形の語尾に u^h、u:n を有する動詞は混合変化で、i^h、i:n を有する動詞が弱変化で、a^h、a:n を有する動詞は強変化である。

			否定形	命令形	過去形	非過去	連体形
保良方言	強変化	書く	ik-a ^h	ik-i	ik-sta:	ik-s	ik-s
		死ぬ	sn-a ^h	sn-i	sn-ta	sn	sn
	混合	起きる	uk-u ^h	uki-ru	uki-ta:	uki	uki-z
		見る	mj-u:n	mi:ru	mi:-ta:	mi:	mi:-z
島尻方言	強変化	書く	ik-a ^h	ik-i	ik-staz	ik-s	ik-s
	弱変化	死ぬ	sni-n	sni-ru	sn-ta	sni-z	sni-z
		起きる	uki-n	uki-ru	uki-taz	uki-z	uki-z
		見る	mi:-n	mi:-ru	mi:-taz	mi:-z	mi:-z

表5 保良方言、島尻方言の動詞活用タイプ

本報告では、古代語、ときには現代日本語と対比させながら宮古語の活用形、および活用のタイプをみる。

3 否定形

宮古語の動詞は、否定形をみることで当該の動詞が強変化であるか弱変化であるか混合変化であるかをみわけることができる。

否定形の語末には、an、in、un があらわれる。否定形の語末の n を dza:n、dia:n にとりかえた形式もあらわれる。語末に an、in、un をもつ形式は、さまざまなあらわれ方をし、多義的であるのに。-adza:n、i-dza:n、-udza:n をもつ形式は、話し手の意志や判断をあらわす。-adza:n、i-dza:n、-udza:n も基本語幹からつくられる形式なので、本報告では-an とともに提示する。

13) uja: tɪŋkzga bazkaiba imkaija ikazan.

(父は天気が悪いから、海へは行かない。) 宮国

14) ameno tʰokja:nna pukankai nimottsu idasatʰa:n.

(雨のときには外には荷物を出さない。) 宮国

15) karja: unaga du:nu wa:ɟuba: vvaN/vvadja:N. (彼は自分の豚は売らない。) 与那覇

an は、古代語の強変化に対応する動詞にあらわれる。語幹末が子音の基本語幹に後接する。in は、古代語の弱変化に対応する動詞にあらわれる。他の活用形とならべると、否定形は、uki-n のように分析され、弱変化の母音語幹に語尾 n が後接しているとみることのできる。un は、混合変化に対応する動詞にあらわれる。命令形が母音語幹に語尾 ru を後接させる形式であり、否定形は、強変化型の子音語幹に語尾 -un の後接した uk-un と分析できる。活用形全体をみると、否定形の語尾に -un のあらわれる動詞は混合変化である。

参考として調査でえられた命令形もあげる。強変化型の命令形は、子音でおわる基本語幹に語尾 i を後接させ、弱変化型の命令形は、母音 i、あるいは i:でおわる基本語幹に語尾 ru を後接させている。

保良方言

古代語混合変化の否定形は、保良方言では語尾に -uŋ、-u:ŋ をもつ混合変化型であらわれる。いっぽう、古代語弱変化の「蹴らない」「着ない」「坐ない」、混合変化「死なない」は強変化型であらわれ、古代語弱変化の「見ない」は混合変化型であらわれる。不規則変化の「する」は混合変化型の活用形で、「居ない」は強変化型の活用形であらわれる。

強変化／tuban (飛ばない)、asɪpan (遊ばない)、numan (飲まない)、kugan (漕がない)、ikan (行かない)、utusan (落とさない)、idasan (出さない)、mutan (持たない)、puran (掘らない)、ffan (降らない)、kssan (切らない)、uran (いない)、vvan (売らない)、kavvan (被らない)、nivvan (眠らない)、azzan (言わない)、ka:n (買わない)、fa:n (食わない)、ara:n (洗わない)、mura:n (貰わない)、bja:n (酔わない)、／kiran (蹴らない)、kssan (着ない)、bzzan (坐ない)、snaŋ (死なない)、混合変化／urun (降りない)、utuŋ (落ちない)、ukuŋ (起きない)、stuŋ (捨てない)、

fu:ŋ (呉れない)、／mju:ŋ (見ない)、ju:ŋ (得ない)、
不規則変化／ku:ŋ (来ない)、su:ŋ (しない)、uraŋ (いない)、nja:ŋ (ない)、
命令形／pirijo (行けよ)、kai (買え)、fai (食らえ)、jukui (休め)、n'ivvi (眠れ)、／
mi:ru (見ろ)、fi:ru (呉れろ)、zziru/iziru (入れろ)、／ku: (来い)、fi:ru／afiru (し
ろ)、

砂川方言

古代語混合変化は、砂川方言では ukiŋ (起きない) だけが弱変化型であられる以外、
語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。古代語弱変化の「見ない」は弱変化型の
mi:ŋ であるが、それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、砂川方
言の詳細は不明である。

強変化／tubaŋ (飛ばない)、asɪpaŋ (遊ばない)、numaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、
ffaŋ (降らない)、utusaŋ (落とさない)、idasan (出さない)、puraŋ (掘らない)、vvaŋ
(売らない)、kɪsaŋ (切らない)、ka:ŋ (買わない)、fa:ŋ (食わない)、ara:ŋ (洗わな
い)、mura:ŋ (貰わない)、bjo:ŋ (酔わない)

混合変化／urudjaŋ (降りない)、utuŋ (落ちない)、stuŋ (捨てない)、ffudzaŋ (呉れな
い)

弱変化／ukiŋ (起きない)、／mi:ŋ (見ない)、

不規則変化／ku:ŋ (来ない)、

命令形／iki jo: (行けよ)、piri (行け)、kai (買え)、fai (喰らえ) jukui (休め)、nivvi (眠
れ)、／mi:ru (見ろ)、kaʔkiru (かけろ)、ffiru/fi:ru (呉れろ)、izirujo: / iʔirujo: (入
れろよ)、／ku: (来い)、

宮国方言

古代語混合変化は、宮国方言では ukiŋ (起きない) だけが弱変化型であられる以外、
語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。「蹴らない」は強変化型の kiraŋ である。
古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化／asɪpaŋ (遊ばない)、nomaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、ikazaŋ (行かな
い)、ffaŋ (降らない)、utusaŋ (落とさない)、idasadza:ŋ (出さない)、motadza:ŋ (持
たない)、poraŋ (掘らない)、kɪsaŋ (切らない)、vvaŋ (売らない)、ʔa:ŋ (食わない)、
ka:ŋ (買わない)、bjo:ŋ (酔わない)、ara:ŋ (洗わない)、mora:ŋ (貰わない)、／kiraŋ
(蹴らない)、

混合変化／uruza:ŋ (降りない)、utuŋ (落ちない)、sutuŋ (捨てない)、fuzzaŋ (縛らな
い)、ʔu:ŋ (呉れない)、ituŋ (出ない)

弱変化／*ukin* (起きない)、

不規則変化／*ku:n* (来ない)、

命令形／*p^hiri* (行け)、*kai* (買え)、*φai* (喰らえ)、*jukui* (休め)、*nivvi* (眠れ)、／*miru* (見ろ)、*fi:ru* (呉れろ)、*sɪtiru* (捨てろ)、*ku:* (来い)、

与那覇方言

古代語混合変化は、与那覇方言では語尾に *-un* をもつ混合変化と語尾に *-in* をもつ弱変化があらわれる。古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、与那覇方言の詳細は不明である。

強変化／*tuban* (飛ばない)、*kugan* (漕がない)、*ikan* (行かない)、*ffan* (降らない)、*utusan* (落とさない)、*kiran* (蹴らない)、*kiran* (切らない)、*idasan* (出さない)、*mutan* (持たない)、*vvan*～*vvadia:n* (売らない)、*ka:n* (買わない)、

混合変化／*urudjan* (降りない)、*utun* (落ちない)、*stun* (捨てない)、*fudja:n* (呉れない)

弱変化／*ukin* (起きない)、

不規則変化／*ku:n*

命令形／*iki* (行け)、*kai* (買え)、*fe:* (喰らえ)、*jukui* (休め)、*nivvi* (眠れ)、／*mi:ru* (見ろ)、*kakiru* (かけろ)、*ffiru/ firu* (呉れろ)、／*ku:* (来い)、

来間方言

古代語混合変化は、来間方言では語尾に *-un* をもつ混合変化がみられる。「蹴らない」は強変化型の *kiran* である。それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化／*tuban* (飛ばない)、*aspan* (遊ばない)、*numan* (飲まない)、*kugan* (漕がない)、*ikan* (行かない)、*utusan* (落とさない)、*idasan* (出さない)、*mutcan* (持たない)、*pran* (掘らない)、*sɪmaran* (縛らない)、*ffan* (降らない)、*tssan* (切らない)、*muran* (貰わない)、*vvan* (売らない)、*fa:n* (食わない)、*ka:n* (買わない)、*ara:n* (洗わない)、*bio:n* (酔わない)、／*kiran* (蹴らない)、

混合変化／*urun* (降りない)、*utun* (落ちない)、*ukun* (起きない)、*stun* (捨てない)、*fu:n* (呉れない)、

不規則変化／*ku:n* (来ない)、

命令形／*iki* (行け)、*pire* (行け)、*smare* (縛れ)、*idace:* (出せ)、*jarace* (遣らせ)、*ɬice* (切れ)、*ke:* (買え)、*fe:* (喰らえ)、*jukui/ jukɛ:* (休め)、*nivvi* (眠れ)、／*mi:ru* (見ろ)、*fi:ru* (呉れろ)、*stiro* (捨てろ)、*zziro* (入れろ)、／*ku:* (来い)、

久貝方言

古代語の弱変化と混合変化は、久貝方言では語尾に・iŋ、-i:ŋをもつ弱変化である。古代語不規則「しない」も弱変化型の ʃi:ŋ である。「蹴らない」「死なない」は強変化である。他の方言で強変化であられる「着ない」「坐らない」も弱変化型の kiʃiŋ、biʒiŋ である。

強変化／tubaŋ (飛ばない)、aspaŋ (遊ばない)、numaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、ikaŋ (行かない)、utasaŋ (落とさない)、idasan (出さない)、mutaŋ (持たない)、puraŋ (掘らない)、furaŋ (降らない)、k^sisaŋ (切らない)、sɪmaŋ (縛らない)、vvaŋ (売らない)、kavvaŋ (被らない)、ffaŋ (閉じない)、nivvaŋ (眠らない)、ka:ŋ (買わない)、fa:ŋ (食わない)、bja:ŋ (酔わない)、ara:ŋ (洗わない)、andzaŋ (言わない)、／kiran (蹴らない)、snaŋ (死なない)、

弱変化／uriŋ (降りない)、utiŋ (落ちない)、ukiŋ (起きない)、stiŋ (捨てない)、fi:ŋ (呉れない)、／zɜiŋ (得ない)、kiʃiŋ (着ない)、biʒiŋ (坐ない)、mi:ŋ (見ない、いない)、

不規則変化／ku:ŋ (来ない)、ʃi:ŋ (しない)、nja:ŋ (ない)、

命令形／iki (行け)、jukui (休め)、kai (買え)、idaʃi (出せ)、uri (居れ)、kavvi (被れ)、ffijo: (閉じろ)、／mi:ru (見ろ)、fi:ru (呉れろ)、kaʃiru (かけろ)、kiʃiru (着ろ)、／ku: (来い)、ʃi:ru (しろ)、

島尻方言

古代語の弱変化と混合変化は、島尻方言では語尾に・iŋ、-i:ŋをもつ弱変化であられる。弱変化の「蹴らない」「坐ない」は強変化型であられる。不規則変化の「する」は弱変化型であられる。ʃiro > sru > ssu。

強変化／tubaŋ (飛ばない)、appaŋ (遊ばない)、numaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、ikaŋ (行かない)、utusaŋ (落とさない)、idasan (出さない)、mutaŋ (持たない)、puraŋ (掘らない)、ffaŋ (降らない)、kssaŋ (切らない)、fgzzaŋ (縛らない)、kavvaŋ (被らない)、vva:ŋ (売らない)、ffaŋ (閉じない)、nivvaŋ (眠らない)、azzaŋ (言わない)、ka:ŋ (買わない)、fa:ŋ (食わない)、ara:ŋ (洗わない)、bja:ŋ (酔わない)、／kiran (蹴らない)、bzɜzaŋ (坐ない)、

弱変化／uriŋ (降りない)、utʃiŋ (落ちない)、stʃiŋ (捨てない)、fi:ŋ (呉れない)、ukiŋ (起きない)、sniŋ (死なない)、／mi:ŋ (見ない、いない)、zɜiŋ (得ない)、ʃʃiŋ (着ない)、

不規則変化／ku:ŋ (来ない)、ʃiŋ (しない)、nja:ŋ (ない)、

命令形／iki (行け)、uki (置け)、piri (行け)、kai (買え)、fai (喰え)、jukai (休め)、nivvi (眠れ)、／mi:u (見ろ)、fi:ru (呉れろ)、ʃʃiru (着ろ)、ku: (来い)、ssu (しろ)、

狩俣方言

古代語の弱変化と混合変化は、狩俣方言では語尾に*-in*、*-i:n*をもつ弱変化であられる。「着ない」「坐ない」「死なない」も弱変化型であられる。不規則変化の「する」は弱変化型で、「居ない」は強変化型の活用形であられる。

強変化／*tuban* (飛ばない)、*asban* (遊ばない)、*numan* (飲まない)、*kugan* (漕がない)、*ikan* (行かない)、*utasan* (落とさない)、*idasan* (出さない)、*mutan* (持たない)、*puran* (掘らない)、*smaran* (縛らない)、*ffan* (降らない)、*kssan* (切らない)、*kavvan* (被らない)、*ffan* (閉じない)、*vvvan* (売らない)、*niivvan* (眠らない)、*azza:n* (言わない)、*ka:n* (買わない)、*ara:n* (洗わない)、*fa:n* (食わない)、／*kiran* (蹴らない)、
弱変化／*urin* (降りない)、*utin* (落ちない)、*ukin* (起きない)、*ſitin* (捨てない)、*fi:n* (呉れない)、*ſimin* (閉めない)、*kadzın* (かじらない、掘らない)、*snin* (死なない)、*biu:n* (酔わない⁷)、／*izi:n* (得ない)、*kiſin* (着ない)、*biſin* (坐ない)、*mi:n* (見ない、いない)、
不規則変化／*ku:n* (来ない)、*aſin* (しない)、*uran* (居ない)、*nja:n* (ない)、
命令形／*iki* (行け)、*uki* (置け)、*idaſi* (出せ)、*kai* (買え)、*ɸai/fai* (喰え)、*jukui* (休め)、*nivi* (眠れ)、／*mi:ru* (見ろ)、*fi:ru/ffiru* (呉れろ)、*uriru* (降りろ)、*kaſiru* (かけろ)、*ɕimiru* (閉めろ)、*ŋgiru* (帰れ)、*iziru* (入れろ)、／*ku:* (来い)、*aſiru* (しろ)、

池間方言

古代語の弱変化と混合変化は、池間方言では語尾に*-in*、*-i:n*をもつ弱変化であられる。「蹴らない」「着ない」「坐ない」「死なない」は強変化型であられる。不規則変化の「する」は混合変化型であられる。

強変化／*tuban* (飛ばない)、*aɕiban* (遊ばない)、*numan* (飲まない)、*kugan* (漕がない)、*ikan* (行かない)、*utuhan* (落とさない)、*idanan* (出さない)、*mutɕan* (持たない)、*furadza:n* (掘らない)、*kiran* (切らない)、*ɕimarɕan* (縛らない)、*ffan* (降らない)、*vvvan* (売らない)、*kavvan* (被らない)、*ttadza:n* (閉じない)、*niivvan* (眠らない)、*azzaN* (言わない)、*ka:n* (買わない)、*ara:n* (洗わない)、*fa:n* (食べない)、／*kiran* (蹴らない)、*ttean* (着ない)、*bidzan* (坐ない)、*ɕinaN* (死なない)、
弱変化／*ukiN* (起きない)、*uriɕa:n* (降りない)、*utiN* (落ちない)、*sitin* (捨てない)、*fi:N* (呉れない)、／*zziN/dɕiN* (得ない)、*biu:iN*⁸ (酔わない)、*mi:N* (見ない、いない)、

⁷ *biu:n* は、可能動詞の否定形「酔えない」か。

⁸ *biu:n* は、可能動詞の否定形「酔えない」か。確認が必要。

不規則変化／**ku:N** (来ない)、**ɸuN** (しない)、**nja:N** (ない)、
命令形／**iki** (行け)、**jukui** (休め)、**kai** (買え)、**nʲivvi/nʲivvi** (眠れ)、／**mi:ru** (見ろ)、
fi:ru (呉れろ)、**sitiru** (捨てろ)、／**ku:** (来い)、**assu** (しろ)、

国仲方言

古代語の弱変化の「見る」は弱変化型の **mi:N** だが、「着ない」は **ʔtaN**、「坐ない」**bɪzan** であらわれ、強変化型である。古代語混合変化「起きる」は、弱変化であられる。得られた語形がすくなく、きわめて概括的な記述にとどめざるをえない。

強変化／**kavvan** (被らない)、**nivvan** (眠らない)、**azzaN/alʒaN** (言わない)、／**sɪnan** (死
なない)、**ʔtaN** (着ない)、**bɪzan** (坐ない)、
弱変化／**okiNni:**⁹ (起きない)、／**mi:N** (見ない、いない)、
不規則変化／**ahoN/asoN** (しない)、**nja:N** (ない)、
命令形／**mi:ru** (見ろ)、**ɸi:ru** (呉れろ)、**cimiru** (閉めろ)、**ko:** (来い)、**asso** (しろ)、

3. 2 否定形のまとめ

動詞活用を調査したすべての地点で調査項目の調査が終了しているわけではなく、えられた語形に制限はあるが、北琉球諸語（とくに沖縄島諸方言）、古代語、宮古語の活用のタイプと比較して、次のことが指摘できよう。

- 1) 宮古語の動詞の活用のタイプには強変化と弱変化と混合変化と不規則変化とがみられる。
- 2) 古代語強変化は、宮古語で安定して強変化であられる。
- 3) 古代語弱変化「蹴る」は宮古語では強変化であられる。
- 4) 古代語の弱変化「見る」は、弱変化であられる下位方言と混合変化であられる下位方言がある。
- 5) 古代語の混合変化は、久貝、狩俣、池間、国仲では弱変化であられ、保良、砂川、宮国、与那覇、来間では混合変化であられる。
- 6) 古代語混合変化「死ぬ」が狩俣、島尻では弱変化であられ、保良、久貝、池間では強変化であられる¹⁰⁾。

⁹ **okiNni:**の **ni:**は、終助詞か。

¹⁰ 本永守靖(1973)によると、宮古語西里方言の **snan** (死なない) などは強変化型の活用形だが、**sniru** (死ね) や **sniriba** (死ねば) など弱変化型の活用形である。また、狩俣が2011年11月に行なった旧上野村野原方言の調査(話者: N.Y氏。男性。昭和18年生)で動作・変化が限界達成直前であることをあらわす形式に **snatti: u:** (死のうとしている) と、**snitti: u:** (死のうとしている) の強変化型と弱変化型のふたつの活用形が得られた。前者は、主体の意志的な動作の開始限界達成直前であることをあらわし、後者は、無意志的な変化の終了限界達成直前である

- 7) 古代語弱変化の強変化動詞化が沖縄島諸方言にみられるが、古代語弱変化の「蹴らない」が宮古語全体で強変化化し、同じく古代語「着ない」が保良、島尻、池間で、「座ない」が保良、島尻、池間で強変化化している。その他の地点の方言は語形がえられておらず不明である。
- 8) 古代語混合変化の強変化化 (r 語幹動詞化) が沖縄島諸方言にみられるが、宮古語では強変化化はみられない。
- 9) 久貝、島尻、狩俣では「着ない」「座ない」「得ない」も弱変化であられる。
- 10) 古代語不規則変化「しない」が久貝、狩俣、島尻で弱変化であられ、保良、池間で混合変化であられる。

否定動詞の語彙的な意味で興味ぶかいのが、uz (居る) の否定動詞の現在形には uraŋ (居ない) のほかに、語形上は miz (見る) の否定動詞があらわれる地点が複数あったことである。

16) tunaznna imma mi:ŋ (隣には 犬は いない)。島尻方言

17) tunaznu ja:nna inna mi:ŋ (隣の 家には 犬は いない)。久貝方言

4 過去形

動詞過去形の語尾には強変化、弱変化、混合変化、不規則変化の如何をとわず、ta:, ta, tai, taɿ があらわれる。日本語や北琉球諸語にみられる強変化の語尾にふくまれる t の有声音化がみられないのである。宮古語には tuɿ (鳥)、paɿ (針) などの単語にみられる ri>i の音韻変化と、piru>piɿ (大蒜)、saru>saɿ (申) にみられる ru>z の音韻変化があるので、taɿ, tai, ta:, ta は、tari あるいは taru に由来する。

保良方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は末尾の z の弱化した-ta:あるいは-ta である。ataɿ (有った) だけ-taɿ がみられる。

強変化／tubzta: (飛んだ)、asɿpɿta (遊んだ)、kugzta: (漕いだ)、iksta: (行った)、utusta: (落とした)、idasuta: (出した)、mutsɿta (持った)、numta (飲んだ)、fɯmta: (履いた)、puzɿta: (掘った)、fuzta: (降った)、pizta: (行った)、smazta: (縛った)、kssta: (切った)、kavta: (買った)、arɯta (洗った)、fɯta (食べた)、bjɯta: (酔った)、kavta: (被った)、niɯta: (眠った)、fɯta: (閉じた)、azta: (言った)、vvita: (売った)、

ことをあらわす。sn (死ぬ) がどの活用のタイプに属すのか、どの活用形が弱変化型なのかはいろいろな活用形を調査しなければならない。下位方言によって混合変化のタイプに変種があることは興味ぶかい。何故このようなことがおきたのかのかの解明とあわせて、今後の課題である。

kssta: (着た)、kizta: (蹴った)、fttsta: (縛った)、bzta: (坐た)、snta: (死んだ)、
混合変化／urita: (降りた)、utēita: (落ちた)、steita: (捨てた)、ffita: (呉れた)、bakita: (分けた)、pingita (逃げた)、ukita: (起きた)、／mirita: (見た)、i:ta: (得た)、
不規則変化／ksta: (来た)、sɪ:ta: (した)、ataɪ (有った)、uta: (居た)、

砂川方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta^ɿである。一部の語形に-ta:が並存している。

強変化／tuv^ɿta^ɿ～tub^ɿta^ɿ (飛んだ)、asɪp^ɿta^ɿ (遊んだ)、iksɪta^ɿ～iksta: (行った)、
kug^ɿta^ɿ (漕いだ)、utuşta^ɿ～utuşta: (落とした)、idasɪta^ɿ (出した)、mutsɪta^ɿ (持った)、numta^ɿ (飲んだ)、funta^ɿ (履いた)、pu^ɿta^ɿ (掘った)、muduri pi^ɿta^ɿ (戻って行った)、f^ɿta^ɿ～f^ɿta: (降った)、kauta^ɿ (被った)、kauta^ɿ (買った)、fo:ta^ɿ～fauta^ɿ～fouta^ɿ (食べた)、murauta^ɿ (貰った)、biu:ta^ɿ (酔った)、ara^ɿta^ɿ (洗った)、v:ta^ɿ (売った)、ksta^ɿ～ksɪ:ta^ɿ (切った)、sɪma^ɿta^ɿ (縛った)、k^ɪta^ɿ (蹴った)、
混合変化／urita:～urita^ɿ (降りた)、utita^ɿ～utita: (落ちた)、pingita: (逃げた)、stita^ɿ～stita: (捨てた)、ffita^ɿ (呉れた) bakita^ɿ (分けた)、pingita^ɿ (逃げた)、
不規則変化／sɪta^ɿ (した)、ksɪta^ɿ～ksɪta:～k^ɪ:ta^ɿ (来た)、kugikstaɪ～kug^ɿikstaɪ (漕いで来た)、

宮国方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化／asɪp^hta: (遊んだ)、u:gɜ:ta: (泳いだ)、iksta:/ikɪta: (行った)、utuşta: (落とした)、idacita/idasɪta (出した)、pirasɪta: (行かせた)、moçita: (持った)、numta: (飲んだ)、fuzta: (降った)、pozta (掘った)、muduɪta: (戻った)、kɪ:ta: (切った)、naka^ɿta: (分けた)、fuzta: / fɪzta: (縛った)、kizta: (蹴った)、kauta: (買った)、øoota: (食べた)、morauta: / moroota: (貰った)、b^jo:ta: (酔った)、ara^ɿta: (洗った)、u:ta: / uvta:/uuta: (売った)、
混合変化／urita: (降りた)、ucita: (落ちた)、sɪtita: (捨てた) øiita: (呉れた)、p^hingita:/øingita: (逃げた)、
不規則変化／kɪ:ta:/kɪta: (来た)、kugiksta: (漕いで来た)、kugiuta (漕いでいた)、

与那覇方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化／*tubɪtaː/tubɪtan* (飛んだ)、*appɪtaː* (遊んだ)、*ikʰɪtaː* (行った)、*kugɪtaː* (漕いだ)、*utusɪtaː* (落とした)、*idasɪtaː* (出した)、*mutɪtaː* (持った)、*numtaː* (飲んだ)、*ffɪttaː* (降った)、*puztaː* (掘った)、*piːtaː* (行った)、*kɪsɪtaː* (切った)、*koːtaː* (買った)、*aroːtaː* (洗った)、*foːtaː* (食べた)、*bjuːtaː* (酔った)、*ɸitaː/uːtaː* (売った)、*kizɪtaː* (蹴った)、*sɪmaʔtaː* (縛った)、

混合変化／*uritaː* (降りた)、*utitaː* (落ちた)、*suɪtaː* (捨てた)、*fiːtaː* (呉れた)、*bakitaː* (分けた)、

弱変化／*zzitaː* (得た)、

不規則変化／*kstaː/kɪsɪtaː* (来た)、*kugɪdu sɪtaː* (漕ぎゾした)、*ɸɪdu sɪtaː* (売りゾした)、*bjuːi utaː* (酔っていた)、*tubɪdu sɪtaː* (飛びゾした)、

来間方言

強変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は *-taɪ* である。古代語弱変化に対応する動詞の語形が得られていない。強変化の語尾は *-ztaɪ*、*-ɪtaɪ*、*-taɪ* であり、混合変化の語尾は *-taɪ* である。

強変化／*tubztaɪ/tubztaɪ* (飛んだ)、*aspɪtaɪ* (遊んだ)、*numutaɪ*¹¹ (飲んだ)、*kudztaɪ* (漕いだ)、*istaɪ* (行った)、*piɪtaɪ/piɪtaɪ* (行った)、*utɪstaz/utɪstaz* (落とした)、*idastaɪ* (出した)、*puztaɪ* (掘った)、*sɪmaɪtaɪ/smaɪtaɪ* (縛った)、*fftaɪ* (降った)、*tsɪtaɪ/tsɪstaz* (切った)、*muroːtaɪ* (貰った)、*uːtaɪ* (売った)、*foːtaɪ* (食った)、*koːtaɪ* (買った)、*aroːtaɪ* (洗った)、*bjuːtaɪ* (酔った)、*/kizɪtaɪ/kizɪtaɪ* (蹴った)、

混合変化／*uritaɪ/uritaɪ* (降りた)、*utɪtaɪ* (落ちた)、*stɪtaɪ/stɪtaɪ* (捨てた)、*fiːtaɪ* (呉れた)、*bakɪtaɪ* (分けた)、*pingitaɪ* (逃げた)、

不規則変化／*tsɪtaɪ/tsɪtaɪ* (来た)、*kugɪstɪtaɪ* (漕いできた)、*urɪstɪtaɪ/tsɪtaɪ* (降りてきた)、*muraitɪstɪtaɪ* (貰ってきた)、*ikʰuːtaɪ/ikʰuːtaɪ* (行っていた)、*mmʰaɪtaɪ* (いらっしやった)、*uːgi tsɪtaɪ* (泳いできた)

久貝方言

強変化、弱変化、不規則変化を問わず、語末は *-taː* である。強変化の語尾は *-staː*、*-ɪtaː*、*-taː*、弱変化の語尾は *-taː* である。

強変化／*aspstaː* (遊んだ)、*kugɪtaː* (漕いだ)、*ikʰɪtaː* (行った)、*utastaː* (落とした)、*idastaː* (出した)、*mutstaː* (持った)、*numtaː* (飲んだ)、*fumtaː* (履いた)、*fuɪtaː* (降

¹¹ 他の下位方言の強変化 *m* 語幹動詞のばあい、語尾に母音があらわれないが、ここでは *u* があらわれている。確認が必要か。

った)、puzta: (掘った)、pi:ta: (行った)、k^sɿta: (切った)、ki^ɿta:/ki^ɿta: (蹴った)、
sɪmaɪta: (縛った)、naka:zta: (分けた)、ko:ta: (買った)、aro:ta: (洗った)、fo:ta:
(食べた)、mo:ro:ta: (貰った)、bju:ta: (酔った)、v:ta: (売った)、ni:va: (眠った)、
kavta: (被った)、ffa:ta: (閉じた)、anta: (言った)、snta: (死んだ)、
弱変化/urita: (降りた)、utita: (落ちた)、ukita: (起きた)、sɿtita: (捨てた)、kicita:
(着た)、fi:ta: (呉れた)、smita: (洗った)、piŋgipɿta: (逃げた)、/mi:ta: (見た)、
zzita: (得た)、bizita: (坐った)、
不規則変化/k^sɿta: (来た)、kugik^sɿta: (漕いで来た)、sta: (した)、uta: (居た)、ata:
(有った)、ariuta:~ariu:ta: (有った)、bju:riuta: 酔っていた、tatɕi:uta: (立っていた)、
niviuta: (眠っていた)、

島尻方言

島尻方言の過去形の語末は、ta:がおおく、ta、taz もあらわれている。強変化の語尾は
-sta:、-zta:、-uta:、-ta:、弱変化の語尾は-taz である。

強変化/tubzta: (飛んだ)、appsta: (遊んだ)、kugzta: (漕いだ)、iksta: (行った)、utusta:/
utusta (落とした)、idasta: (出した)、mutsta (持った)、nunta: (飲んだ)、funta:/fnta:
(履いた)、puzta: (掘った)、ffa:ta:/ffuta: (降った)、pizta: (行った)、kssta: (切った)、
kavta: (買った)、aravta: (洗った)、favta: (食べた)、bju:taz (酔った)、kavta: (被
った)、ni:va: (眠った)、ffa:ta:/ffuta: (閉じた)、azta: (言った)、v:ta:/v:ta: (売った)、
fgzta: (縛った)、kizta: (蹴った)、bzta: (坐た)、snta: (死んだ)、
弱変化/urita: (降りた)、utɕita: (落ちた)、stɕita: (捨てた)、fi:ta: (呉れた)、bakitaz
(分けた)、ukitaz/ukita: (起きた)、/mi:ta: (見た)、zzitaz (得た)、ʃfitaz (着た)、
不規則変化/sssta: (来た)、sssta: (した)、ata: (有った)、u:ta:/uta: (居た)、

狩俣方言

狩俣方言の過去形の語尾には、-taz のほかに-daz があらわれている。nundaz (飲んだ)
の daz は音便化したようにもみえるが、-daz が強変化 asvdaz (遊んだ) と弱変化 uridaz (降
った)、utidaz (落ちた) の別なくあらわれていること、sntaz/sndaz (死んだ)、ɕimitaz/ɕimidaz
(閉めた) のように同じ動詞で-taz と-daz の変種がみられることから、この有声音化の減
少は音便ではなく、音声的な変種であるとかんがえる。したがって、狩俣方言の強変化の語
尾は-itaz と-taz、弱変化の語尾は-taz である。

強変化/tubitaz/tuvtaz (飛んだ)、asvdaz (遊んだ)、kugitaz/kuvtaz (漕いだ)、iftaz/ikitaz
(行った)、utastaz (落とした)、idastaz (出した)、mutstaz (持った)、nundaz (飲
んだ)、puztaz (掘った)、ffutaz (降った)、ksstaz (切った)、kaztaz/ko:ta:/ko:taz (買
んだ)、

った)、aro:daz (洗った)、fo: taz (食べた)、bju:ztaz (酔った)、kautaz (被った)、nʲiutaz (眠った)、ffitaz (閉じた)、aztaz (言った)、vʲitaz (売った)、ks:daz (蹴った)、smaztaz (縛った)、sntaz/sndaz¹² (死んだ)、
弱変化／uridaz (降りた)、utidaz (落ちた)、eʲitidaz (捨てた)、fi: taz (呉れた)、ŋgidaz (帰った)、taskaritzaz (助かった)、ukitaz (起きた)、eʲimitaz/eʲimidaz (閉めた)、／mi: daz (見た)、zzitaz (得た)、kiitaz (着た)、bizitaz (坐た)、
不規則変化／ksstaz (来た)、kugiftaz (漕いできた)、astaz (した)、ataz (有った)、utaz (居た)、

池間方言

池間方言の過去形の語尾は、強変化、弱変化、不規則変化のいずれも-tai である。

強変化／aʲeibitai~aʲeuitai (遊んだ)、kugitai (漕いだ)、ifutai~ikitai (行った)、utaʲeibitai (落とした)、idaʲeibitai (出した)、muttai (持った)、nuntai (飲んだ)、mmitai (履いた)、fuitai (降った)、fuitai (掘った)、muduitai (戻った)、hatai (行った)、kiritai (切った)、eʲamaritai (縛った)、kautai~kautai~kaitai (買った)、vvitai (売った)、faitai~fautai~fautai (食べた)、bju:ritai (酔った)、araitai (洗った)、aitai (言った)、kavvitai (被った)、ffitai (閉じた)、nʲu:ritai (眠った)、taskaitai (助かった)、ki:ritai (蹴った)、tteaddaN (切れなかった¹³)、
弱変化／ukitai (起きた)、uritai (降りた)、uteita: (落ちた)、bakitai (分けた)、uʲaʲmitai (埋めた)、piŋgita (逃げた)、fi:ritai (呉れた)、／mi:ritai (見た)、tsʲitai~ttitai (着た)、biritai (坐た)、ddzritai (得た)、
不規則変化／ku: N (来ない)、φuN (しない)、nia: N (ない)、
不規則変化／ttai (来た)、asʲitai/aʲeibitai (した)、aru:ritai (有った)、uru:ritai (居た)、

国仲方言

得られた語形はすくないが、強変化、混合変化、弱変化、不規則変化のいずれも語末に-tal が主としてみられ、一部に ta:がある。

強変化／Ngital (行った)、pʲaʲltal (行った)、kautal (被った)、φumtal (履いた)、nivtal (眠った)、sʲiNtal (死んだ)、
混合変化／eʲimeʲtal (閉じた)、okitai (起きた)、

¹² 過去形の sntaz/sndaz (死んだ) は、強変化型の活用形だが、否定形 sniŋ (死なない) は弱変化の活用形である。混合変化であるが、古代語とはことなる混合のしかたをしている。

¹³ 日本語訳は「切れなかった」となっているが、活用は強変化型のようなのである。「切らなかった」か。

弱変化／*mi:taɭ* (見た)、*tsɪ:ta:* (着た)、*bɪ:taɪ/bɪzta:* (坐た)、
不規則変化／*asta:ɭ* (した)、*ataɭ* (有った)、*otaɭ* (居た)、*taɕii otaɭ* (立っていた)、

4. 1 過去形の考察(1) 一音便の有無

日本語において平安時代の動詞語幹に発生した音便とよばれる音韻変化が『おもろさうし』および北琉球諸語にもみられる。音便とは、強変化の語幹末子音と語尾が音韻変化して再編されて替わり語幹をもつことをいう。替わり語幹をもつ活用形は、過去形、シテ中止形であり、シテ中止形を要素にもつ派生形式にもみられる。

宮古語の強変化の *k* 語幹動詞、*g* 語幹動詞のイ音便も、*b* 語幹動詞の撥音便も、*t* 語幹動詞、*r* 語幹動詞の促音便もみられない。北琉球諸語にみられる *s* 語幹動詞のイ音便もみられない。*m* 語幹動詞のばあい、語尾頭母音 *i* の音消失はみられるが、撥音便はみられない。そして、北琉球諸語の強変化の脱落音便もみられない。宮古語のばあい、音便語幹を設定する必要はないことがわかる。

おもろさうしの *b* 語幹動詞、*m* 語幹動詞のばあい、語幹末子音とシテ中止形の語尾 *ite* の頭母音 *i* が脱落し、語尾 *t* が有声音化した *de* に変化している。*tsu-de* つで < *tsuNde* つんで < *tsum-ite* つみて (積んで)。 *era-de* えらで < *eraNde* えらんで < *erab-ite* えらびて (選んで)。語幹と語尾の境界の音節 *mi*、*bi* が融合して撥音 *N* に変化し語尾の *t* を有声音化させたのち脱落したものと推定される。*mi* > *N*、*bi* > *N* の変化は口蓋音化が発生するまえにおきている。

r 語幹動詞のばあい、語幹末子音と語尾頭母音が脱落している。語幹末子音 *r* とシテ中止形の語尾 *ite* の頭母音 *i* が脱落しているが、語尾 *t* の有声音化はみられない。*ino-te* いのて < *inoQte* いのって < *inor-ite* いのりて (祈って)。口蓋音化が発生するまえに語尾頭母音 *i* の脱落して促音が発生した、のちに促音も脱落したとみられる。

語幹末子音が *w* のばあい語幹末子音と語尾頭母音が融合して *u* 音便化して、さらに脱落している。古代語ハ行子音の *p* の語中での摩擦音化、有声音化、唇音退化 (ハ行転呼音) とウ音便化がおきたものとかんがえる。*wara-te* わらて < *waraute* わらうて < *waraw-ite* わらひて (笑って)。*ri* > *Q* の変化も *wi* > *u* の変化も口蓋音化が発生するまえにおきている。

k 語幹動詞、*s* 語幹動詞、*g* 語幹動詞のばあい、語幹末子音の消失と語尾頭母音 *i* 脱落し語尾頭子音 *t* が口蓋化した *tɕ* に変化している。*da-tɕe* だちえ < *da-itɕe* だいちえ < *dak-ite* だきて (抱いて)。*wata-tɕe* わたちえ < *wata-itɕe* わたいちえ < *wataɕ-ite* わたして (渡して)。*ko-dze* こじえ < *ko-idze* こいじえ < *kog-ite* こぎて (漕いで)。語幹末子音の脱落した脱落音便がみられる。なお、*g* のばあい語尾頭子音が有声音化してジェ *dze* に変化しているのは、イ音便化のまえに有声音化していたためである。

t 語幹動詞のばあい、語尾の *t* が口蓋音化している。*motɕ-itɕe* もちちえ < *motɕ-ite* もちて (持つて)。語尾頭子音 *i* の影響による口蓋音化と破擦音化はみられるが、いかなる音便もみられない。

語幹末が母音になる弱変化は、いかなる音便もおきていない。**ore-te** おれて（降りて）。**ake-te** あけて（開けて）。なお、語幹末母音が *i* になる動詞は、*i* の影響をうけて語尾にふくまれる *t* の口蓋化がおきている。**mi-t̚ce** みちえ < **mi-te** みて（見て）。**mit̚ci-t̚ce** みちちえ < **mit̚cite** みちて（満ちて）。

『おもろさうし』においてみられる音便現象は、北琉球諸語にひきつがれている。

tudi（飛んで）、**iradi**（選んで）、**nudi**（飲んで）、
huti（降って）、**huti**（掘って）、**ʔarati**（洗って）、**warati**（笑って）
dat̚fi（抱いて）、**kat̚fi**（書いて）、**kud̚gi**（漕いで）、**tud̚gi**（砥いで）
ukut̚fi（起こして）、**watat̚fi**（渡して）、
nit̚fi（煮て）、**n̚t̚fi**（見て）

なぜ宮古語が音便語幹を有しないのか、それは宮古語のふるさを意味するのか、まだ断定はできない。しかし少なくとも、南琉球諸語では音便現象がみられないので、琉球祖語から南琉球諸語が分岐したときにはまだ音便はおきておらず、「おもろさうし」が編纂された 1500 年代にすでに音便が発生していたことを考慮すると、『おもろさうし』の書かれる以前には北琉球諸語と南琉球諸語が分岐し、分岐後に北琉球諸語で音便がおきたとみることができる。

4. 2 過去形の考察（2）－語幹にあらわれるシ中止形

過去形の注目すべきもうひとつの点は、過去形が外形的にはシ中止形に **ta**、**taɪ**、**tai**、**taʔ** が接続していることである。これは、音便現象が発生する以前の古代語のシタリ（した）、ノミタリ（飲んだ）、ウケタリ（受けた）とおなじである。もちろん、宮古語においてはさまざまな音韻変化がおきており、古代語のシ中止形がそのまま保存されているわけではない。

シ中止形が本来の連用形の用法ではほとんどあられわれず、形つくりや単語つくりの要素としてしかみられないので、宮古語の過去形の語幹部分をみることで、宮古語のシ中止形の形式がどのような音声形式であられるかを知ることができる。

かりまたしげひさ（1999）でものべたが、宮古語の平良方言や保良方言など宮古島の中央部から南部地域の下位方言の強変化の **b** 語幹動詞、**k** 語幹動詞、**g** 語幹動詞の代表形は、シ中止形に由来する形式が表われる。このことから宮古語の代表形は、シ中止形に由来する形式の可能性がある」と論じた。しかし、後述するように狩俣方言や池間方言にはスル終止形あるいはスル連体形に由来する形式もあらわれる。シ中止形の形式を確認することのできる過去形は、宮古語の動詞代表形の起源を検討するうえでも重要である。

古代日本語の強変化の終止形叙述法断定非過去形（以下、ス終止形）と連体形非過去（以下、スル連体形）はホモニムなので、保良方言の **kau**（買う）、**arau**（洗う）、島尻方言の **ko:**（買う）、**aro:**（洗う）、などの ***w** 語幹動詞がス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定出来ない。宮古語強変化の **m** 語幹動詞、**s** 語幹動詞、**t** 語幹動詞、**r** 語幹動詞は、古代

語のシ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか特定することができない。

古代語の弱変化も宮古語の弱変化も、シ中止形とス終止形は形式がことなるが、ス終止形とスル連体形は古代語でも宮古語でもホモニムであり、ス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定できない。いっぽう、古代語の混合変化は、シ中止形とス終止形とスル連体形の形式がことなり、宮古語でもそのあらわれ方がことなるので、古代語混合変化に対応する宮古語の動詞について検討することは重要である。

以下、強変化と弱変化と混合変化にわけて過去形を検討するが、強変化は、b 語幹動詞、k 語幹動詞、g 語幹動詞、*w 語幹動詞のあらわれかたをみる。

4. 2. 1 b 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形、「飛んだ」が調査票にあがっているが、宮国、久貝、池間では「遊んだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*tobi、*asubi に由来する形式がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*tobu、*asubu に由来する tuv と acu:があらわれている。

tubzta: (保良)、tuvʔɪtaʔɪ ~ tubʔɪtaʔɪ (砂川)、tubɪta:/tubɪtan (与那覇)、tubʔtaz/tubʔtaɪ (来間)、tubzta: (島尻)、tubitaz/tuvtaz (狩俣)、asɪpʰɪta: (宮国)、aspsta: (久貝)、acibitai ~ acu:tai (池間)

4. 2. 2 g 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形は、「漕いだ」が調査票にあがっているが、宮国では「泳いだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*kogi、*ojogi に由来する形式がみられるが、狩俣では、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*kogu に由来する kuv もあらわれている。

kugzta: (保良)、kugʔɪtaʔɪ (砂川)、kugɪta: (与那覇)、kudztaɪ (来間)、kugʔɪta: (久貝)、kugzta: (島尻)、kugitaz/kuvtaz (狩俣)、kugitai (池間)、u:gʒ:ta: (宮国)、

4. 2. 3 k 語幹動詞

k 語幹動詞の過去形は、「行った」が調査票にあがっている。どの地点にもシ中止形*iki がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*iku に由来する if があらわれている。

iksta: (保良)、iksɪtaʔɪ ~ iksta: (砂川)、iksta:/ikɪta: (宮国)、ikʰɪta: (与那覇)、iɪstaɪ (来間)、ikʰɪta: (久貝)、iksta: (島尻)、iftaz/ikitaz (狩俣)、ifutai ~ ikitai (池間)、

4. 2. 4 *w 語幹動詞

*w 語幹動詞の過去形は、「買った」「食らった」「洗った」「酔った」「言った」が調査票にあがっている。「買った」の語形をみる。どの地点にもス終止形あるいはスル連体形の *kawu に由来する kau、あるいは ko: がみられる。狩俣、池間は、ス終止形あるいはスル連体形由来形式のほかに、シ中止形 *kawi に由来する kai があらわれている。

kauta: (保良)、kauta^z (砂川)、kauta: (宮国)、korta: (与那覇)、korta¹ (来間)、korta: (久貝)、kauta: (島尻)、kaztaz/korta:/ kōtaz (狩俣)、kautai~kautai~kaitai (池間)、

4. 2. 5 弱変化

弱変化の過去形は、「見た」「着た」「蹴った」「得た」「坐た」が調査票にあがっている。すべての地点で「蹴る」は強変化であらわれ、「着た」も強変化であらわれる地点がすくなくない。ここでは「見た」をあげるが、与那覇は「得た」をあげる。砂川、宮国、来間は弱変化がえられていない。「見た」「得た」にかぎらず得られた弱変化の過去形ではシ中止形に由来する形式があらわれている。

mita: (保良)、mita: (久貝)、mita: (島尻)、mi:daz (狩俣)、mitai (池間)、mital (国仲)、zzita: (与那覇)、

4. 2. 6 混合変化

混合変化の過去形は、「降りた」「落ちた」「捨てた」「呉れた」「起きた」「が調査票にあがっている。ここでは「起きた」を検討するが、砂川、宮国、与那覇、来間では「起きた」がえられていないので、「落ちた」をあげる。どの地点もシ中止形 *oke、*ote に由来する形式がみられる。「起きた」「落ちた」にかぎらず、混合変化はシ中止形に由来する形式があらわれている。

古代語の混合変化は、シ中止形の語幹末の母音が i があらわれるタイプ（「上二段」）と e があらわれるタイプ（「下二段」）があるが、琉球諸語の混合変化は、母音 e のあらわれるタイプしかみられない。

ukita: (保良)、utita^z~utita: (砂川)、ucita: (宮国)、utita: (与那覇)、uti^ztaz (来間)、ukita: (久貝)、ukitaz/ukita: (島尻)、ukitaz (狩俣)、ukitai (池間)、okital (国仲)、

狩俣方言、池間方言以外の下位方言では b 語幹動詞、g 語幹動詞、k 語幹動詞にシ中止形があらわれるのに対して、狩俣方言、池間方言では、シ中止形とス終止形（あるいはスル連体形）に由来する 2 形式が並存している。*w 語幹動詞ではス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれている。また、混合変化と弱変化は、いずれの地点もシ中止形に

由来する形式があらわれている。

なぜ狩俣方言、池間方言の g 語幹動詞、k 語幹動詞にはシ中止形に由来する形式の期待されるところにス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、なぜ *w 語幹動詞は、シ中止形に由来する形式の期待されるところにス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、代表形の形式とあわせて検討が必要であろう。

5 代表形

古代語の強変化と弱変化は、シ中止形とス終止形の形式はことなるが、ス終止形とスル連体形はホモニムになる。古代語の「有る」「居る」はス終止形とスル連体形はことなるが、シ中止形とス終止形はホモニムになる。シ中止形、ス終止形、スル連体形の 3 者がことなるのは、混合変化と「死ぬ」「来る」「する」である。

宮古語のばあい、語幹末が k、g、b、*w になる強変化の代表形は、シ中止形由来形式なのか、ス終止形あるいはスル連体形に由来する形式なのかを判別できるが、ス終止形あるいはスル連体形のいずれに由来するのか判別できない。mi > m、mu > m、si > s、su > s、tsi > ts、tsu > ts、ri > z、ru > z などの音韻変化がおきているので、語幹末が m、s、ts、r になる強変化、および、不規則変化の「する」「居る」「有る」は、代表形の形式がシ中止形、ス終止形、スル連体形のどれに由来するかを判別できない。強変化化した sn（死ぬ）も ni > n、nu > n の音韻変化があるので、その由来形式の判別がむづかしい。弱変化と不規則変化の「来る」は、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか判別できるが、ス終止形由来なのかスル連体形由来なのかを判別できない。混合変化だけが、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか、スル連体形由来なのかを判別できる。

沖縄島方言の焦点化助辞をふくむ強調文は、文末に連体形とホモニムの強調形があらわれて、du 無しの文の代表形とことなる形式があらわれるが、宮古語のばあい、焦点化助辞=du の有無にかかわらず、文末の述語形式はおなじ形があらわれる¹⁴。したがって、本報告では=du の有無を無視して代表形の語形をあげる。

18) paʔume: taʔame: tubz (鳩も鷹も飛ぶ)。(来間)

19) taʔanudu tubz (鷹が飛ぶ)。(来間)

20) sarumai ki:kara utei. (猿も木から落ちる)。(保良)

21) m:na umandu uri. (みんなそこに降りる)。(保良)

22) maznudu ama:tta ari uz¹⁵. (米がたくさん有っている)。(島尻)

23) ssuznu arittei taskari: uz. (薬があつて助かっている)。(島尻)

¹⁴ かりまたしげひさ (2011) でも焦点化助辞の有無が終止形の活用形を支配していないことをのべている。

¹⁵ az (有る) のアリ中止形に存在動詞 uz を組み合わせた形式の ari uz (有っている) は、物の一時的なアクチュアルな存在をあらわす。今後の詳細な確認と検討が必要である。

保良方言

保良方言の代表形は、強変化 (**tubz** (飛ぶ) など) も混合変化 (**uki** (起きる) など) も弱変化 (**ks₁**: (着る) など) も不規則変化 **ks₁**: (来る) もシ中止形由来形式があらわれている。強変化の *w 語幹動詞 (**k^hav** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。s₁ŋ₁~s₁ŋ₁ (死ぬ) は強変化のシ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化 / **tubz** (飛ぶ)、**as₁p^s₁~as₁b₁** (遊ぶ)、**kugz** (漕ぐ)、**iks** (行く)、**piz** (行く)、**utus~utus₁** (落とす)、**idas₁** (出す)、**muts₁** (持つ)、**num** (飲む)、**puz₁** (掘る)、**fuz** (降る)、**ks₁**: (切る)、**ftts** (縛って)、**smaz** (縛る)、**k^hav** (買う)、**fɔv** (食べる)、**arɔv** (洗う)、**bju:** (酔う)、**kav~kaf** (被る)、**fu:** (閉じる)、**niv** (眠る)、**az** (言う)、**vv₁** (売る)、**s₁ŋ₁~s₁ŋ₁** (死ぬ)、**/kiz** (蹴る)、**ks₁**: (着る)、**b^z₁**: (坐る)、
混合変化 / **stei** (捨てる)、**uri** (降りる)、**utɔi** (落ちる)、**ffi:** (呉れる)、**uki** (起きる)、
/mi: (見る)、**i:** (得る)、
不規則 / **ks₁**: (来る)、**s₁**: (する)、**uz~u:** (居る)、**a₁** (有る)、**n^ja:ŋ** (無い)、

砂川方言

砂川方言の強変化 (**asip^si** (遊ぶ) など) と不規則変化 **ks₁:/ks^z₁**: (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、**sti** (捨てる) はシ中止形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の *w 語幹動詞 (**kau** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化 / **asip^si** (遊ぶ)、**kugu^s₁/kugu^z₁**¹⁶ (漕ぐ)、**ik^s₁/ik^z₁** (行く)、**fu^z₁** (降る)、**utus₁** (落とす)、**idas₁** (出す)、**muts₁** (持つ)、**ks^z₁** (切る)、**s₁mari¹⁷** (縛る)、**pu^zi** (掘る)、**num** (飲む)、**kau** (買う)、**fou/fau** (食べる)、**arau** (洗う)、**murau** (貰う)、**bju:** (酔う)、**kav** (被る)、**v:/vvu** (売る)、**ki^z₁** (蹴る)、
混合変化 / **sti** (捨てる)、**uritɕa:** (降りるって・伝聞か)、**utidu s₁:/s^z₁** (落ちゾする)、
弱変化 / 語例なし
不規則 / **ks₁:/ks^z₁**: (来る)、**s₁:/s^z₁** (する)、**u^z₁** (居る)、

宮国方言

宮国方言の強変化 (**ik^si** (行く) など) と不規則変化 **k₁:** (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、**uci** (落ちる) はシ中止形由来形式のようである。弱変

¹⁶ 得られた語形からは *kogoru、あるいは *kogori が推定される。

¹⁷ s₁mari は「縛れ」か。

化は語例がえられていない。強変化の*w語幹動詞(kau(買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／butuki_i (飛ぶ)、kugi (漕ぐ)、ik^si (行く)、fu_i (降る)、utu_{su} (落とす)、idaci (出す)、k_isi (切る)、mo_{ts}_i (持つ)、kau (買う)、arau (洗う)、_oau/_ooo (食べる)、
b^lu: du_s_i (酔いづする)、u:/uv (売る)、kiz (蹴る)、
混合変化／s_iciu¹⁸ (捨てる)、uriru¹⁹ (降りる)、uci (落ちる)、_oi: (呉れる)
弱変化／語例なし
不規則／k_i: (来る)、u: (居る)、

与那覇方言

与那覇方言の強変化(kug_i (漕ぐ)など)と不規則変化 k_is_i (来る)は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、uti: (落ちる)はシ中止形由来形式で、suti_i (捨てる)は、スル連体形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の*w語幹動詞(ko: (買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tub_idu s_i (飛びづする)、kug_i (漕ぐ)、ik^s_i (行く)、utu_s_i (落とす)、idas_i (出す)、mut_s_i (持つ)、num (飲む)、pu_s_i (掘る)、ff_i (降る)、k_is_i (切る)、s_ima_i (縛る)、ko: (買う)、fo: (食べる)、aro: (洗う)、bj_u: (酔う)、k_i:dusu/kiz_i (蹴る)、
混合変化／suti_i (捨てる)、uriru (降りろ)、uti: (落ちる)
弱変化／語例なし
不規則／k_is_i (来る)、s_i (する)、u_i (居る)、

来間方言

来間方言の強変化(tubz_i (飛ぶ)など)と不規則変化 ts_i (来る)は、シ中止形由来形式である。混合変化(uriru (降りろ)など)はスル連体形由来形式である。強変化の*w語幹動詞(ko: (買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tubz_i (飛ぶ)、aspi²⁰ (遊ぶ)、kudz_i (漕ぐ)、it_s/it_s_i (行く)、utu_s_i (落とす)、idace_i:²¹ (出す)、mut_su/mut_s_i (持つ)、num (飲む)、pu_i (掘る)、ff_u (降る)、sama_i²² (縛る)、ts/ts_i (切る)、v: (売る)、ko: (買う)、fo: (食べる)、muroa (貰う)、aroa

¹⁸ s_iciu は「捨てている」か。

¹⁹ uriru は「降りろ」か。

²⁰ aspi は「遊べ」か。

²¹ idace_i: は「出せ(命令形)」か。

²² sma_i か。

(洗う)、b^ju: (酔う)、／kiz/ki₁ (蹴る)、／
混合変化／sti₁/stiz₁ (捨てる)、uri₁ (降りる)、utidus/utidus₁ (落ちゾする)、uti₁mo: (落ちるぞ)、fi: (呉れる)、
不規則／ts₁ (来る)、n^ja:ŋ (無い)、

久貝方言

久貝方言の強変化 (tub₁ (飛ぶ) など) と不規則変化 k^s₁s₁/ks: (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化 (ukiz (起きる) など) と弱変化 (mi:z (見る) など) は、スル連体形由来である。強変化の *w 語幹動詞 (ko: (買う) など) は、ス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。sn₁ (死ぬ) は、強変化のス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化／tub₁ (飛ぶ)、asps (遊ぶ)、kug₁ (漕ぐ)、ik^s₁ (行く)、utas₁ (落とす)、idas (出す)、muts (持つ)、num (飲む)、s₁ma₁ (縛る)、puz (掘る)、fu₁ (降る)、ki₁ci (切る)、ki₁ (蹴る)、ko: (買う)、moro: (貰う)、fo: (食べる)、b^ju: (酔う)、aro: (洗う)、kav (被る)、ffv₁ (閉じる)、niv₁ (眠る)、v: (売る)、andz₁ (言う)、sn₁ (死ぬ)、
弱変化／ukiz (起きる)、sti₁ (捨てる)、uri₁ (降りる)、uti₁ (落ちる)、
fi:z (呉れる)、ukiz (起きる)、／mi:z (見る)、biziz (坐る)、ki₁ci (着る)、
不規則／k^s₁s₁/ks: (来る)、ss (する)、u: (居る)、az (有る)、n^ja:ŋ (無い)、

島尻方言

島尻方言の強変化 (tubz (飛ぶ)、kugz (漕ぐ) など) と不規則変化 ss (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化はスル連体形由来である。ただし uriz/uri (降りる) はスル連体形由来とシ中止形由来が並存しているようである。弱変化は、mi:z がスル連体形由来で、bz: がシ中止形由来である。語例がすくなく確定できない。強変化の *w 語幹動詞はス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。sniz (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来である。

強変化／tubz (飛ぶ)、kugz (漕ぐ)、iks (行く)、ffv/ff (降る)、utus (落とす)、kizdus (蹴りゾする)、kss (切る)、fgz (縛る)、puz (掘る)、muts (持つ)、kau (買う)、
v: (売る)、nun (飲む)、fau/fao/fo: (食べる)、apps (遊ぶ)、b^ju: (酔う)、arau (洗う)、kav (被る)、ff/ffv₁ (閉じる)、niv₁ (眠る)、az₁ (言う)、bz: (坐る)、
弱変化／steiz (捨てる)、uriz/uri (降りる)、uteiz (落ちる)、ffi:z (呉れる)、zziz (得る)、ukiz (起きる)、sniz (死ぬ)、／mi:z (見る)、ss (着る)、
不規則／ss (来る)、ss (する)、az (有る)、uz₁ (居る)、n^ja:ŋ (無い)、

狩俣方言

狩俣方言の強変化 (**tubi** (飛ぶ) など) は、シ中止形由来形式であり、(**tuu** (飛ぶ) など) はス終止形、あるいはスル連体形由来形式であって、ふたつの形式が並存している。混合変化 (**utci/utɿz** (落ちる) など) もシ中止形由来とスル連体形由来が並存している。弱変化は、**mi:** がシ中止形由来で、**bzɿz** がスル連体形由来である。**kss:** (着る) はどちらなのか確定できない。強変化の ***w** 語幹動詞 (**ko:** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。**snɿz** (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来である。不規則変化 **ffu/ff** (来る) はス終止形なのかスル連体形なのか両方の可能性があって確定できない。

強変化／**tubi/tuu** (飛ぶ)、**asuvi/asu** (遊ぶ)、**kugi/kuu** (漕ぐ)、**ifu/if** (行く)、**utasɿ:/utas** (落とす)、**idas** (出す)、**mutɿ/muts** (持つ)、**num~nuɿ** (飲む)、**ffu/fu:** (降る)、**ʔɸɿ/ʔɸ:** /**puz** (掘る)、**kiri/kss** (切る)、**sɿmari/smaz** (縛る)、**ko:** (買う)、**aro:** (洗う)、**fo:/ɸo:** (食う)、**bʰu:/bʰu:z** (酔う)、**kavvi/kau** (被る)、**ffi** (閉じる)、**niɿ** (眠る)、**az** (言う)、**ɸ:** (売る)、**ki:/ksɿdus** (蹴る)、
弱変化／**uriz** (降りる)、**utci/utɿz** (落ちる)、**ukɿ~ukɿz** (起きる)、**fɿ/fɿ:/fɿ:** (呉れる)、**sɿti/sitidu/sɿtɿ** (捨てる)、**kadzɿz** (掘る・かじる)、**snɿz** (死ぬ)、／**mi:** (見る)、**kss:** (着る)、**bzzɿz** (坐る)、**izitaɿ/zzidaz** (得る)、
不規則／**ffu/ff** (来る)、**as** (する)、**uz** (居る)、**az** (有る)、**nʰa:ɿ** (無い)、

池間方言

池間方言の強変化 (**tubi** (飛ぶ) など) は、シ中止形由来形式である。強変化の ***w** 語幹動詞 (**kau** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。語例がすくなく確定できないが、混合変化 (**uki:** (起きる) など) はシ中止形由来であろうか。しかし、スル連体形由来形式の可能性を現段階では否定できない。

弱変化 **bizi** (坐る) などシ中止形由来であろう。これも現段階ではス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式の可能性を否定できない。混合変化、弱変化の用例をふやしながら、池間方言でおきた音韻変化を検討しなければならない。**cinʰi** (死ぬ) は混合変化のシ中止形由来であろう。

強変化／**tubi** (飛ぶ)、**kugi** (漕ぐ)、**ifu** (行く)、**idaci** (出す)、**kiri** (切る)、**numi/nuN** (飲む)、**sɿmai** (縛る)、**fu:** (降る)、**kau** (買う)、**fau/fau** (食べる)、**arau** (洗う)、**bʰu:** (酔う)、**kavvi/kavvi** (被る)、**ffi** (閉じる)、**nʰivvi** (眠る)、**adɸi** (言う)、
弱変化／**fi:** (呉れる)、**uki:** (起きる)、**cinʰi** (死ぬ)、**uriru**²³ (降りる)、／**bizi** (坐る)、**tsɿ/tsɿ** (着る)、

²³ **uriru** は「降りろ」か。

不規則／*fu:* (来る)、*assɿ/aɕɕi* (する)、*urijui/uri:ui*²⁴ (居る)、*ari:jui* (有る)、*n^ja:N* (無い)、

国仲方言

国仲方言の強変化は、えられた語形がすくなくいうえに、シ中止形由来形式なのかス終止形由来形式なのか確定しにくい動詞の例しかえられていない。混合変化の得られた1例の *okil/* (起きる) はスル連体形であろう。

強変化／*kau* (被る)、*al* (言う)、*sɿN* (死ぬ)、*ɕɿ:/ɕɿ:i* (着る)、*bɿ:/bizi/bɿ:zɿ* (坐る)、
弱変化／*okil/okilli* (起きる)、*ɕimiɕi* (閉める)、／*mi:ɕi* (見る)、
不規則／*asɿ* (する)、*ol* (居る)、*al* (有る)、*n^ja:N* (無い)、

5. 1 代表形のまとめ

宮古語の代表形の起源をめぐっては、旧平良市市街地(西里、下里、東仲宗根、西仲宗根)の方言(以下、平良方言)の当該の形式が日本語のシ中止形と同音であることから、シ中止形由来形式が代表形も連体形も担っていたとする考えがあった。かりまた 1990 もそのように論じた。しかし、これまでの議論は、強変化に対象を限定してなされたものであり、しかも、平良方言を中心にした宮古島方言の旧城辺町、旧上野村、旧下地町など南西部の方言を対象にした議論であった。今回は、狩俣方言、池間方言をくわえ、数に限定があるとはいえ、弱変化、混合変化の資料もあわせて検討し、宮古語の動詞断定形がどのような形式に由来するかをみた。

- 1) 狩俣方言、池間方言以外の下位方言の *k* 語幹動詞、*g* 語幹動詞、*b* 語幹動詞は、代表形がシ中止形に由来する形式である。
- 2) 狩俣方言、池間方言の強変化にはシ中止形由来形式とス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式が並存している。
- 3) **w* 語幹動詞は、ス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式があらわれている。
- 4) 池間方言の *ɕin^ji* (死ぬ) は混合変化のシ中止形由来形式、狩俣方言の *snɿz* (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来形式である。
- 5) 保良、来間、池間の弱変化はシ中止形由来形式、久貝の弱変化は、ス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式である。
- 6) 保良、宮国、池間の混合変化はシ中止形由来形式、来間、島尻の混合変化はスル連体形由来形式である。狩俣の混合変化はシ中止形由来形式とスル連体形由来形式が並存している。
- 7) 保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、島尻の不規則変化「来る」は、シ中止形由

²⁴ *tubiui* (飛んでいる) のような継続相形式の補助動詞として /ui/ がみられる。

来形式である。狩俣、池間の不規則変化「来る」はス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式であろう。

- 8) 語幹末が **m**、**s**、**ts**、**r** になる強変化は、シ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか判別できない。

今回報告した地点については動詞の語例をふやしつつ、それぞれの方言でどのような音韻変化がおきたのかを確認しなければならないし、さらに調査地点をふやしたうえで、検討しなければならない。そのような制約のなかでのまとめとなるが、全体をとおして、シ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式であることを特定できるが、ス終止形由来形式であることを特定できる方言、あるいは動詞はみあたらない²⁵。

6 アリ中止形

宮古語の中止形のうち、日本語のシテ中止形に類似のはたらきをするのは、アリ中止形である。アリ中止形は、単独で文の部分になり、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの動作の従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。アリ中止形は、複合的な述語をつくることもできる。その点は日本語のシテ中止形に相当する。

24) ki:nu va:gun nu:ri n:to: utaci fi:ru. (木の上に登って実を落としてくれ。) 狩俣

25) tuzzu smari kagoŋkai iziru. (鶏を縛って籠に入れろ。) 狩俣

26) taŋkia:aidu fŋju: kuqi ksta: (一人で舟を漕いできた。) 保良

27) ki:n nu:ri: nazzu utuqi fi:ru. (木に登って実を落としてくれ。) 保良

28) karia: biu:itti cununu kuŋto: bassii uŋ. (彼は酔って昨日のことは忘れている。) 来間

宮古語のアリ中止形は、形式的には、シテ中止形には対応していない。一見すると、古代語のシ中止形に対応するように見える。もし、宮古語のアリ中止形が日本語のシ中止形に対応するのであれば、おおくの宮古語の下位方言で **ki > ks**、**gi > gz**、**bi > bz**、**mi > m**、**si > s**、**tei > ts**、**ri > z** などの音韻変化がおきているので、強変化のアリ中止形は、前述の過去形にふくまれるシ中止形とおなじ、**kaks** (書いて)、**kugz** (漕いで)、**tubz** (飛んで)、**num** (飲んで)、**utus** (落として)、**mutz** (持って)、**puz** (掘って) などのような形になるはずである。しかし、アリ中止形は、形のうえで日本語や北琉球諸語のシ中止形に対応しない。単語づくり、形づくりの要素としてあらわれる宮古語のシ中止形の形式とアリ中止形は異なっているのである。アリ中止形がどのような形式であられるかをみてみよう。

²⁵ 八重山語石垣方言の混合変化 **ukiN** (起きる)、弱変化 **mi:N** (見る) はシ中止形由来形式に **N** を後接させたものであり、**ukiruN** (起きる)、**mi:ruN** (見る) はスル連体形由来形式に **N** を後接させたものであろう。

保良方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*asɪpi*～*asɪbi* (遊んで)、*kugi*/*kugʷi* (漕いで)、*iki* (行って)、*ffi* (降って)、*idaci* (出して)、*utuɕi* (落として)、*puri* (掘って)、*kiri* (蹴って)、*kiɕi* (切って)、*mutɕi* (持って)、*numi* (飲んで)、*kai* (買って)、*fai* (食べて)、*arai* (洗って)、*bju:i* (酔って)、*vvi* (売って)、*kavvi* (被って)、*ffi* (閉じて)、*nivvi* (眠って)、*ftteɕi* (縛って)、*azzi* (言って)、／*sɪnɕi* (死んで)、*kiɕi* (着て)、*bizi* (坐て)、
混合変化／*fi* (呉れて)、*utɕi* (落ちて)、*sumi* (洗って)、*uki* (起きて)、*steɕi* (捨てて)、*uri* (降りて)、／*mi* (見て)、*i* (得て)、
不規則変化／*kiɕi* (来て)、*ɕi* (して)、*ari* (有って)、*uri* (居て)、

砂川方言

強変化／*tuvi* (飛んで)、*asɪpi* (遊んで)、*kugi* (漕いで)、*iki* (行って)、*utuɕi* (落として)、*idaɕi* (出して)、*muɕi* (持って)、*numi* (飲んで)、*puri* (掘って)、*sɪmari* (縛って)、*kiɕi*/*kiei* (切って)、*kai* (買って)、*arai* (洗って)、*fai* (食べて)、*murai* (貰って)、*bju:i* (酔って)、*ffi* (降って)、*vvi* (売って)、*kavvi* (被って)、／*kiri* (蹴って)、
混合変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*sɪti* (捨てて)、*ffi* (呉れて)、
不規則変化／*kiɕi*/*kiei* (来て)、

宮国方言

強変化／*tuɕi* (飛んで)、*kugi* (漕いで)、*iki* (行って)、*ffi* (降って)、*utuɕi* (落として)、*kiɕi* (切って)、*sɪmari* (縛って)、*poɕi* (掘って)、*idaciɕi*²⁶ (出して)、*motɕi* (持って)、*kɸai* (買って)、*uvi* (売って)、*morai* (貰って)、*noɕmi* (飲んで)、*ɸai* (食べて)、*asɪpi* (遊んで)、*arai* (洗って)、／*kiri* (蹴って)、
混合変化／*ɸii* (呉れて)、*sɪtɕi* (捨てて)、*uci* (落ちて)、*uri* (降りて)、
不規則変化／*kiɕi* (来て)、

与那覇方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*appi* (遊んで)、*iki* (行って)、*numi* (飲んで)、*utuɕi* (落として)、*mutɕi* (持って)、*sɪmari* (縛って)、*puri* (掘って)、*kɸei* (切って)、*vvi* (売って)、*ffi* (降って)、*ke* (買って)、*bju:i* (酔って)、*are* (洗って)、／*kiri* (蹴って)、
混合変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*suɕti* (捨てて)、*ɣzi* (入れて)、*piŋgi* (逃げて)、*fi* (呉れて)、／*zzi* (得て)、
不規則変化／*kɸei* (来て)、

²⁶ 他の語形との比較検討すると、シテ中止形か。

来間方言

強変化／tubi (飛んで)、kugi (漕いで)、iki (行って)、idas_i (出して)、utu_{ei} (落として)、mut_{ei} (持って)、te_iei (切って)、smari (縛って)、puri (掘って)、ffi (降って)、nu:ri: (登って)、kai (買って)、vvi (売って)、murai (貰って)、numi (飲んで)、fai (食べて)、／kiri (蹴って)、
混合変化／uri (降りて)、uti (落ちて)、sti (捨てて)、fi: (呉れて)、piŋgi (逃げて)、
不規則変化／te_iei (来て)、

久貝方言

強変化／tubi (飛んで)、aspi/aspi: (遊んで)、numi (飲んで)、kugi (漕いで)、u:gi (泳いで)、iki (行って)、ka:raki (乾いて)、utaci (落として)、idaci (出して)、mut_{ei} (持って)、s₁mari (縛って)、puri (掘って)、javvi: (破れて)、furi: (降って)、nu:ri (上って)、vvi: (売って)、kici (切って)、kai (買って)、fai (食べて)、b₁uri (酔って)、tskai (使って)、arai (洗って)、kavvi (被って)、ffi (閉じて)、nivvi (眠って)、tat_{ei}: (立って)、andzi (言って)、／kiri (蹴って)、／sn_i (死んで)、
弱変化／uri (降りて)、uti (落ちて)、fa:sari (轆かれて)、uki: (起きて)、z₁zi (入れて)、piŋgi (逃げて)、fi: (呉れて)、s₁ti (捨てて)、／mi: (見て)、bizi (坐て)、zzi (得て)、kici (着て)、
不規則変化／kici (来て)、ei: (して)、ari: (有って)、uri: (居て)、

島尻方言

強変化／tubi (飛んで)、appi (遊んで)、kugi (漕いで)、ujagi (泳いで)、iki (行って)、utu_{ei} (落として)、idaci (出して)、mut_{ei} (持って)、numi (飲んで)、piri (行って)、ffi (降って)、kici (切って)、vvi (売って)、fgzzi (縛って)、puri (掘って)、kavvi (被って)、ffi (閉じて)、kai (買って)、fai (食べて)、b₁uri (酔って)、arai (洗って)、nivvi (眠って)、azzi (言って)、／kiri (蹴って)、
弱変化 uki (起きて)、uri (降りて)、stei (捨てて)、utei (落ちて)、izi: (入れて)、sskai (轆かれて)、ba_{ee}i (忘れて)、fi: (呉れて)、piŋgi (逃げて)、／sn_i (死んで)、／mi: (見て)、bizi (坐て)、e_{ee}i (着て)、zzi (得て)、／
不規則変化／e_{ee}i (来て)、ei: (して)、uri (居て)、

狩俣方言

強変化／asbi (遊んで)、tubi (飛んで)、numi (飲んで)、kugi (漕いで)、uigi (泳いで)、iki (行って)、idaci (出して)、utaci (落として)、mut_{ei} (持って)、ffi (降って)、kici (切って)、smari (縛って)、puri (掘って)、kadzi (掘って)、vvvi (売って)、kavvi (被って)、nivvi (眠って)、ffi (閉じて)、kai (買って)、fai (食べて)、b₁uri (酔って)、

arai (洗って)、azzi (言って)、／kiri (蹴って)、
弱変化／uri (降りて)、uti (落ちて)、uki (起きて)、ɛiti (捨てて)、fi: (呉れて)、pingi
(逃げて)、bacei (忘れて)、ɛikari (轢かれて)、／mi: (見て)、izi (得て)、bizi (坐
て)、kici (着て)、／snji (死んで)、
不規則変化／kici (来て)、aei (して)、ari (有って)、uri (居て)

池間方言

強変化／tubi (飛んで)、aeibi: (遊んで)、numi: (飲んで)、kugi (漕いで)、u:gi (泳い
で)、iki:/iki: (行って)、ka:ki (乾いて)、utaçi/utaçi: (落として)、idaçi: (出して)、
muti: (持って)、nu:ri: (登って)、ffi: (降って)、kiri: (切って)、sĩmari: (縛って)、
furi: (掘って)、vvi: (売って)、kavvi/ kavvi: (被って)、ffi: (閉じて)、sadari: (先
だって)、nivvi/ nivvi: (眠って)、hari: (行って)、kai (買って)、arai (洗って)、fai
(食べて)、bi:ri (酔って)、addzi: (言って)、kiri: (蹴って)、
弱変化／uki: (起きて)、uri/ uri: (降りて)、uti: (落ちて)、sĩti: (捨てて)、bacei (忘
れて)、hikai: (轢かれて)、çingi (逃げて)、sĩmi:/sũmi: (洗って)、fi: (呉れて)、dđzi
(得て)、／mi: (見て)、tti: (着て)、bizi: (坐て)、ɛinji (死んで)、
不規則変化／tti (来て)、çi: (して)、ari: (有って)、uri (居て)、

国仲

強変化／kavvi: (被って)、nivvi: (眠って)、a²zi: (言って)、／sĩni: (死んで)、／tei:
(着て)、bizi: (坐て)、
弱変化／okii (起きて)、p⁹kaii (轢かれて)、ɛimii/ɛimi (閉じて)、taskari (助かって)、
／mi: (見て)、
不規則変化／ei: (して)、arii (有って)、ore: (居て)、

宮古語の、強変化のアリ中止形は、子音でおわる語幹に i をつけてつくられ、弱変化の
アリ中止形は、母音でおわる基本語幹と同形である。強変化のばあい、語尾は e にさかのぼり、
弱変化の末尾の母音も e にさかのぼる。

後述するように、アリ中止形は、シ中止形に後接した存在動詞 az (有る) のシ中止形が文
法化して融合したものだとかんがえるが、確定できているとはまだいえない²⁷。宮古語、お
よび八重山語諸方言の当該形式の調査、研究を継続して行なう必要があろう。

7. 1 アリ中止形の性格

形式と由来はことなるが、宮古語のアリ中止形の文法的なふるまいは、北琉球諸語のシテ

²⁷ 名嘉真三成 (1982) は、宮古諸語の当該形式をシテ中止形とみている。

中止形とおなじである。あわせ文やふたまた述語文の中止的な述語になるだけでなく、継続相や *numi mi:ru* (飲んでみろ)、*tubi mi:ru* (飛んでみろ) などのもくろみ動詞や、*sti fi:ro* (捨ててくれ)、*teiei fi:ru* (切ってくれ) などのやりもらい動詞をつくる要素となるなどの用法もおなじである。

継続相の形式は、存在動詞 *uz*、*u:* がアリ中止形にくみあわさった *acibi ui* (遊んでいる)、*ffi u₁* (降っている) の分析的な形のほかに、*acib^ju:ri* (遊んでいる)、*f^ju:z₁* (降っている) などの融合した総合的な形式が並存している。29)～32) の用例の主体動作動詞の継続相は、主体動作が継続していることをあらわし、33)～40) の用例の主体変化動詞の継続相は、変化した主体の結果的な状態が継続していることをあらわす。継続相のあらわすアスペクト的な意味の実現のしかたも北琉球諸語のシテ中止形に似ている²⁸。

主体の動作継続

- 29) *ffaf naik^jata:çi: araN acibi ui / acib^ju:ri* (暗くなるまで外で遊んでいる)。池間
30) *mainitçi tereb^ju: mi: jui* (毎日テレビを見ている)。池間
31) *nama: aminudu ffi u₁ / f^ju:z₁*. (今、雨が降っている)。砂川
32) *nnama: aminudu fju: / ffju:.* (今は雨が降っている)。狩俣

主体の変化結果の継続

- 33) *upuaminu ffitçidu p^ja: rinu ts¹ðnk^ju:.*
(大雨が降って、日照りが続いている)。保良
34) *kar^ja: b^ju:ittidu k^s₁nu:nu kutu:ba bæçidu u₁.*
(彼は酔って昨日のことは忘れている。) 砂川
35) *gaba:aminu ffi: ntanu ka:ki jui.*
(彼は昨日のことは忘れている。) 狩俣
36) *kar^ja: ksnunu kutu:ba: bæçei u₁.*
(大雨が降って土が乾いている) 池間
37) *bo:çu: utuçitidu tuzga ik^ju:ta:.*
(帽子を落として取りに行っていた。) 保良
38) *bututuzza jamakasa numi:du b^ju:ri uta:.*
(おとといはたくさん飲んで酔っていた。) 久貝
39) *cinei:ja bizicitidu, ffanukja:ja tatei: uta:.*

²⁸ 存在動詞 *az* (有る) のアリ中止形に *uz* を組み合わせた継続相の形式があり、話の瞬間に存在した一時的な状態を表わす。

maznu ama:tta ari uz. (米がたくさん有る。) 島尻

kumanna ka:nu arju:ta:. (ここには井戸が有った。) 久貝

(先生は坐て、子どもたちは立っていた)、久貝

40) ku:mujamai sni:du jumunumai sni u:.

(ゴキブリも死んで、ネズミも死んでいる。) 久貝

宮古語の動詞のアスペクト・テンス対立のしかたは、音声形式こそちがえど 2 項対立型の東日本諸語（現代日本語）のそれに似る。

	非過去	過去
完成相	asps (遊ぶ) sn (死ぬ)	aspsta: (遊んだ) snta: (死んだ)
継続相	aspju: (遊んでいる) snju: (死んでいる)	aspju:ta: (遊んでいた) snju:ta: (死んでいた)

表 6 保良方言のアスペクト・テンス

宮古語のアリ中止形がそのまま文末の述語の位置にあらわれて、過去のできごとをあらわすことができるが、それも北琉球諸語のシテ中止形に似ている。沖縄島方言のばあい、完成相の肯否質問の過去形にシテ中止形があらわれ、奄美大島方言ではシテ中止形が直説法の過去形としてあらわれる。詳細は稿をあらためて論じたい。

41) kju:ja tubansuga ksno: tubi (今日は飛ばないが、昨日は飛んだ)。狩俣

42) ksnumaidu ingaija iki (昨日も海へは行った)。狩俣

43) ksno aminudu ffi/fftaz (昨日は雨が降った)。狩俣

7. 2 アリ中止形の由来

ところで、沖縄島の諸方言にもアリ中止形がみられる。沖縄島中南部諸方言のアリ中止形は、あわせ文の中止的な述語として機能し、宮古語のようなさまざまな文法形式を構成しない。首里方言のアリ中止形は、numa:ni、あるいは numa:i であらわれ、『沖縄語辞典』（国立国語研究所 1963）によると、numa:i の方がより古い形式である。

宮古語のアリ中止形にもっとも似ているのは、伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形であろう。伊平屋方言、伊是名島方言のアリ中止形はあわせ文の述語になるだけでなく、宮古語のアリ中止形と同様に継続相、結果相などの単語づくり、形づくりの要素になることができ、生産性がある。

	書いて	遊んで	起きて	降りて	洗って	似て
首里方言	katʃa:i	ʔaʃiba:i	ʔukija:i	ʔurija:i	ʔaraja:i	nija:i
伊平屋方言	katʃe:	ʔaʃine:	ʔukije:	ʔurije:	ʔaraje:	nije:

平良方言	kaki:	aspi:	uki:	uri:	arai:	ni:
石垣方言	kaki:	asɿbi:	uke:	ure:	araja:	nija:

表7 沖縄諸方言、宮古語、八重山語のアリ中止形

- 44) ?amaNdʒi ?afine: hwa:. (向こうで遊んで来い。) 伊平屋村我喜屋
45) ?utuhe: hu:. (落として来い。) 伊是名村勢理客
46) ?widʒe: watataN. (泳いで渡った。) 伊是名村諸見
47) bo:ʃi hauje: ?attʃuN. (帽子をかぶって歩く。) 我喜屋

48) ?naNma ?aminu hujo:N. (今雨が降っている。) 諸見
49) ?nama ?ami hujoN. (今雨が降っている。) 島尻
50) hunu ?iʃi kije: Nri. (この石を蹴ってみろ。) 我喜屋

伊平屋村我喜屋、野甫、島尻の方言には、過去形に?afinaN (遊んだ)、sukunaN (死んだ・我喜屋・島尻、参考: ʃikudaN 諸見)、nunaN (飲んだ)、junaN (呼んだ) などの語形があるが、アリ中止形に?aN (有る) が接続してできた過去形だと考えられる。ただし、この系列の過去形はシテ中止形に由来する過去形?afidaN (遊んだ) などに使用の場をうばわれ、使われなくなっている。

沖縄島諸語のアリ中止形は、シ中止形 (numi 飲み) に?ai (有り) が組み合わさってできたもので、主として先行後続の関係をあらわす。1531年に第一巻が編纂された古歌謡集『おもろさうし』には「～やり」の形でみられる。『おもろさうし』に出てくる「～やり」の形を高橋俊三 (1982) は「「連用形+やり」の形で完了の意味を表わす。用例は中止法のみである。」と指摘している。

- 51) (通巻 176 巻) 「とよむ 大きみや もゝしま そろへやり みおやせ。」(訳: 名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。)
52) (通巻 632 巻) 「いと ぬきやり、 なわ ぬきやり、」(訳: 糸を貫いて、縄を貫いて)

宮古語の強変化のアリ中止形は、基本語幹に i あるいは i: を後接させた形式である。いっぽう、弱変化、混合変化のアリ中止形は、シ中止形 (基本語幹と同音) と同音である。強変化のシ中止形とアリ中止形は形式がにているが、過去形の語幹部分にあらわれるシ中止形をみると、強変化のシ中止形の語尾は *i にさかのぼり、アリ中止形の語尾は *e にさかのぼる。宮古語のアリ中止形は、伊平屋方言のアリ中止形のような形式から変化したものではないかとかんがえる。

補注) 沖縄島諸方言のアスペクト・テンス体系は、3 項対立型の西日本諸語の変化した形式

のようにもみえる。継続相の形式もシテ中止形に人の存在を表わす動詞が組み合わさって融合した形であり、形の上からは西日本諸語のパーフェクト相の *ɛitoru* に対応する。しかし、アスペク的な意味は、西日本諸語の *ɛitoru* とちがって、主体動作動詞が主体の動作継続をあらわし、主体変化動詞が主体の変化結果の継続をあらわしていて、東日本諸語の継続相および宮古語の継続相と同じである。

八重山方言もアリ中止形に *uN*(居る)が組み合わさっていて、たとえば石垣方言では *numi: uN > numiN* (飲んでいる)、*uke: uN > uke:N* (起きている)、*kaNgaja: uN > kaNgaja:N* (考えている) のような音声的に融合した形が表われる。

53) *utudo: guɕi numiN* (弟は酒を飲んでいる)。動作継続

54) *aQpa:ja me: uke:N* (母はもう起きている)。変化結果の継続

アスペクト・テンス体系のあり方をみると、沖縄島南部語は *suru*、*ɛijoru*、*ɛitoru* の 3 項対立である点が西日本諸語のそれに似るが、継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ていて、独自の体系をなしている。宮古語は、2 項対立という点と継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ているが、継続相の形のつくり方が東日本諸語のそれとはことなっていて、独自に体系をもっている。沖縄島南部語、宮古語は、西日本諸語、東日本諸語のそれぞれ類似点と相違点をもちながらも、それぞれに独自の体系をなしているといっていよう。

	非過去	過去
完成相	<i>ʔafibuN</i> (遊ぶ) / <i>ʃinuN</i> (死ぬ)	<i>ʔafidaN</i> (遊んだ) / <i>ʃidʒaN</i> (死んだ)
		<i>ʔafibutaN</i> (遊んだ) <i>ʃinutaN</i> (死んだ)
継続相	<i>ʔafido:N</i> (遊ぶ) <i>ʃidʒo:N</i> (死ぬ)	<i>ʔafido:taN</i> (遊んでいた) / <i>ʃidʒo:taN</i> (死んでいたぬ)

表 7 沖縄島うるま市安慶名方言のアスペクト・テンス

8 シテ中止形

宮古語のシテ中止形は、ならべあわせ文のつづける文の述語になり、日本語のシテ中止形と類似のはたらきをし、形式上もシテ中止形に似る。しかし、非従属的な用法をもたず、継続相、もくろみ動詞、やりもらい動詞などの形式をつくる要素にならない。その点で日本語や北琉球諸語のシテ中止形とことなる。

55) *oto:ja sakju: mutɕittɕi, mma: faumunu: muts.*

(父は酒を持って、母は食物を持つ。) 狩俣

56) mmaɖuɾnu tubittɛi, fa:ɖuɾmai tubinʝa:n.

(親鳥が飛んで、子鳥も飛んでしまった。) 狩俣

57) fnju: kugitti unu atu jukui.

(船を漕いで、そのあと休め。) 来間

58) fun^hu: kugittikara jukui (船を漕いでから休め)。砂川

59) fuʃizɕu numitti pja:pja:ti nivvi (薬を飲んで早く寝ろ)。砂川

保良方言

保良方言のシテ中止形は、アリ中止形に ttei のついた形である。保良方言では tɛi: (手)、teida (太陽) などのように他の下位方言で ti となるところが破擦音化して tɛi になるので、ttei も tti の変化したものであろう。

強変化／tubittɛi (飛んで)、kugittɛi (漕いで)、ikittɛi (行つて)、ffitɛi (降つて)、utucittɛi (落として)、kicittɛi (切つて)、fttɛittɛi (縛つて)、purittɛi (掘つて)、idaɕittɛi (出して)、mutɛittɛi (持つて)、kaitɛi (買つて)、vvittɛi (売つて)、numittɛi (飲んで)、faitɛi (食つて)、asɿpittɛi～asɿbittɛi (遊んで)、numittɛi (飲んで)、araitɛi (洗つて)、kavvittɛi (被つて)、ffitɛi (閉じて)、nivvtɛi (眠つて)、azzittɛi (言つて)、kirittɛi (蹴つて)、kicittɛi (着て)、bizzittɛi (坐て)、sɿnɿittɛi (死んで)、
混合変化／ukittɛi (起きて)、urittɛi (降りて)、utɛittɛi (落ちて)、stɛittɛi (捨てて)、fittɛi (呉れて)、mittɛi (見て)、ittɛi (得て)、
不規則変化／kicittɛi (来て)、ɕittɛi (して)、arittɛi (有つて)、urittɛi (居て)、

砂川方言

砂川方言のシテ中止形は、アリ中止形に tti のついた形である。

強変化／tuvitti (飛んで)、asɿpitti (遊んで)、numitti (飲んで)、kugittikara (漕いでから)、ikitti (行つて)、idaɕitti (出して)、muɸitti (持つて)、utucitti (落として)、ffitti (降つて)、puritti (掘つて)、kiɕciti/kicɕiti (切つて)、ɕimaritti (縛つて)、kavvitti (被つて)、araitti (洗つて)、kaitti (買つて)、vitti (売つて)、muraitti (貰つて)、faitti (食つて)、bjuritti (酔つて)、／kiritti (蹴つて)、
混合変化／uritte (降りて)、utittii (落ちて)、ffitti (呉れて)、stitti (捨てて)、
不規則変化／kicɕitti (来て)、

宮国方言

宮国方言のシテ中止形は、アリ中止形に cci のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／*kugicci* (漕いで)、*ikiccie* (行って)、*ficci* (降って)、*utuſitt·i* (落として)、*kisitte* (切って)、*porittai* (掘って)、*idacitai* (出して)、*uvittai* (売って)、*nomittai* (飲んで)、*ŋaittai* (食って)、*asipittai* (遊んで)、*araittai* (洗って)、*nu·ricci* (登って)、*moraittai* (貰って)、*b·oitai* (酔って)、
混合変化／*ucicci* (落ちて)、*si·cicci* (捨てて)、*ŋiittai* (呉れて)、
不規則変化／*kisicci* (来て)、

与那覇方言

与那覇方言のシテ中止形は、アリ中止形に *tai* のついた形である。

強変化／*tubittai* (飛んで)、*kugittai* (漕いで)、*u : gittai* (泳いで)、*ikittai* (行って)、*ffittai* (降って)、*utucittai* (落として)、*kɿcittai* (切って)、*sɿmaittai* (縛って)、*idasittai* (出して)、*mutcittai* (持って)、*kaittai* (買って)、*vvittai* (売って)、*numittai* (飲んで)、*fe : taitai* (食って)、*appittai* (遊んで)、*bju : ittai* (酔って)、*are : taitai* (洗って)、*kirittai* (蹴って)、
混合変化／*urittai* (降りて)、*utcittai* (落ちて)、*sutittai* (捨てて)、*fittai* (呉れて)、*zzittai* (得て)、
不規則変化／*kɿcittai* (来て)、

来間方言

来間方言のシテ中止形は、アリ中止形に *tai* のついた形である。

強変化／*tubittai* (飛んで)、*kugittai* (漕いで)、*ikittai* (行って)、*utu·cittai* (落として)、*ffa·cittai* (切って)、*ɿcittai* (切って)、*smarittai* (縛って)、*ffa·cittai* (降って)、*idasittai* (出して)、*vvittai* (売って)、*numittai* (飲んで)、*faittai* (食って)、*aspi·cittai*²⁹ (遊んで)、*b·u : ittai* (酔って) *araittai* (洗って)、*kirittai* (蹴って)、
混合変化／*urittai* (降りて)、*utittai* (落ちて)、*stittai* (捨てて)、*fi : taitai* (呉れて)、
不規則変化／*ɿcittai* (来て)、

久貝方言

久貝方言のシテ中止形は、*asps·cittai* (遊んで)、*ukicittai* (起きて) のようにアリ中止形に *cittai* がついた形と、*kugittai* (漕いで)、*urittai* (降りて) のように *tai* のついた形が混在している³⁰。

²⁹ 他のシテ中止形と異なりシ中止形に *tai* がついた形になっている。確認が必要か。

³⁰ *puricittai* (掘って)、*cicittai* (して) などの *cittai* を語末に持つ語形の話者は、狩俣が 2011 年 12 月の調査で得たものである。

話者の違いによるのか、周辺方言の影響なのか、確認が必要である。

強変化／*aspsciṭi* (遊んで)、*kugitti* (漕いで)、*numiciṭi* (飲んで)、*idaciṭi* (出して)、
utaciṭi (落として)、*muteciṭi* (持って)、*puriciṭi* (掘って)、*kiṭiṭi* (切って)、*samaritti*
(縛って)、*vviciṭi* (売って)、*kavviciṭi* (被って)、*fficiṭi* (閉じて)、*nivviciṭi* (眠っ
て)、*kaiciṭi* (買って)、*faiciṭi* (食って)、*bju:iciṭi* (酔って)、*araiciṭi* (洗って)、*andziciṭi*
言って)、*kiriti* (蹴って)、*sniciṭi* (死んで)、
弱変化／*ukiciṭi* (起きて)、*uritti* (降りて)、*utiṭti* (落ちて)、*sṛitti* (捨てて)、*fi:ciṭi*
(呉れて)、／*mi:ciṭi* (見て)、*zziciṭi* (得て)、*biziciṭi* (坐て)、*ki:ciṭi* (着て)、
不規則変化／*k^sṛiciṭtikara/kiṭiṭtikara* (来てから)、*ci:ciṭi* (して)、*ariciṭi* (有って)、*uriciṭi*
(居て)、

島尻方言

島尻方言のシテ中止形も、アリ中止形に *cci* のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／*tubittei* (飛んで)、*appittei* (遊んで)、*numittei* (飲んで)、*kugittei* (漕いで)、
idacittei (出して)、*utucittei* (落として)、*mutecittei* (持って)、*ki:icittei* (切って)、
purittei (掘って)、*ffittei* (降って)、*vvittei* (売って)、*kavvittei* (被って)、*ffittei* (閉
じて)、*nivvttei* (眠って)、*kaittei* (買って)、*araittei* (洗って)、*faittei* (食って)、
bju:ittei (酔って)、*azzittei* (言って)、／*kirittei* (蹴って)、／*bizittei* (坐て)、
弱変化／*ukittei* (起きて)、*urittei* (降りて)、*utecittei* (落ちて)、*stecittei* (捨てて)、*fi:ttei*
(呉れて)、*snittei* (死んで)、／*mi:ttei* (見て)、*ccittei* (着て)、*zzittei* (得て)、
不規則変化／*ccittei* (来て)、*acittei* (して)、*arittei* (有って)、*urittei* (居て)、

狩俣方言

狩俣方言のシテ中止形も久貝方言のようにアリ中止形に *ciṭi* がついた形である。

強変化／*tubiciṭi* (飛んで)、*asbiciṭi* (遊んで)、*kugiciṭi* (漕いで)、*numiciṭi* (飲んで)、
ikiciṭi (行って)、*utaciṭi* (落として)、*idaciciṭi* (出して)、*muteciṭi* (持って)、*fficei*
(降って)、*puriciṭi* (掘って)、*ki:iciṭi* (切って)、*vviciṭi* (売って)、*kavviciṭi* (被っ
て)、*fficiṭi* (閉じて)、*nivviciṭi* (眠って)、*kaiciṭi* (買って)、*araiciṭi* (洗って)、*faiciṭi*
(食って)、*azziciṭi* (言って)、*sniciṭi* (死んで)、
弱変化／*ukicci* (起きて)、*uriciṭi* (降りて)、*uticiṭi* (落ちて)、*ciṭiciṭi* (捨てて)、*fi:ciṭi*
(呉れて)、*ciṭiciṭi* (閉めて)、／*mi:ciṭi* (見て)、*iziciṭi* (得て)、*ki:ciṭi* (着て)、*biziciṭi*
(坐て)、

不規則変化／**kiciciti**（来て）、**aciciti**（して）、**ariciti**（有って）、**uriciti**（居て）、

池間方言

以下の3単語にシテ中止形がみられるが、シテ中止形が期待されるところにはほとんどアリ中止形があらわれている。不規則変化の **tti**（来て）もアリ中止形とホモニムである。池間方言がシテ中止形を使用しないのか、調査の仕方を変えればシテ中止形がえられるのか、いずれにせよ、確認はひつようであろう。

強変化／**kugitti**（漕いで）、

弱変化／**sanɕari : ti**（落ちて）、

不規則変化／**tti**（来て）、

国仲方言

国仲方言は、調査でえられた語例がすくなく、シテ中止形について言えることもすくないが、確実にシテ中止形といえる語例がみられない。シテ中止形を調査する例文のところに **alzii**（言って）、**niɣvii**（眠って）、**sɔnii**（死んで）の語形があり、アリ中止形を調査する例文のところに、**a^zzi :**（言って）、**niɣvi :**（眠って）、**sɔni :**（死んで）の語例があつて、両者がことなる語形であるが、これが有意味な違いであるのか不明であり、再調査が必要である。

強変化／**kavvi :**（被って）、**niɣvii**（眠って）、**alzii**（言って）、／**sɔnii**（死んで）、／**tei :**（着て）、**bizi :**（坐て）、

弱変化／**okii**（起きて）、**p^ɤakaii**（轆かれて）、**ɕimii**（閉じて）、**taskari**（助かつて）、／**mi :**（見て）、

不規則変化／**ɕi :**（して）、**arii**（有って）、**ore :**（居て）、

宮古語諸方言のシテ中止形は、砂川方言の **uritti**（降りて）、**utittii**（落ちて）なども、保良方言の **tubittei**（飛んで）、**kugittei**（漕いで）などの破擦音化したものも促音便がおきたようにもみえる。しかし、動詞のタイプをとわず強変化にも弱変化にも混合変化にも不規則変化にも同じ形式があらわれていて、音便とは関係のないものであろう。

強変化のシテ中止形は、子音語幹に語尾 **itti** や **ittei** が後接し、弱変化のシテ中止形は母音語幹に **tti** や **ttei** が後接している。いずれもアリ中止形に **tti** や **ttei** がついた形である。

狩俣方言の **tubiciti**（飛んで）、**kugiciti**（漕いで）や久貝方言の **kaiciti**（買って）、**fi:ɕiti**（呉れて）などから、アリ中止形に **ɕiti**（シテ、あるいは捨て）のような形式が後接したもののようにみえる。今後の調査と検討が必要である。

八重山語石垣方言にも **kakiQte**（書いて）、**uke:Qte**（起きて）、**mija:Qte**（見て）、**ɕi:Qte**

(して) のように、アリ中止形に **Qte** がつづくシテ中止形がある。

9 おわりに

かぎられた調査期間だったので、得られた資料にも制限があるし、調査項目が動詞の活用形のうち代表形(スル)、否定形(シナイ)、過去形(シタ)、アリ中止形、シテ中止形の五つであったという制限もある。しかし、保良、砂川、宮国、与那覇、来間島、久貝、島尻、狩俣、池間島、伊良部島国仲の宮古島の東西南北の地点がバランスよく調査されている。そのおかげで、宮古語の活用のタイプについての概観、宮古語の五つの活用形についての概観ができたのではないかと考える。

今後は、個々の地点の動詞の数をふやすと同時に、活用形の数もふやして調査をすすめることが必要だろう。また、今回は調査できなかった大神島方言、伊良部島佐和田・長浜方言、おなじく伊良部島伊良部・仲地方言、多良間島方言などの宮古語のなかでも個性的な特徴をもつことでしられる下位方言を検討していくことも必要である。

参考文献

- 伊是名島方言辞典編集委員会 (2004) 『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会
かりまたしげひさ (2011) 「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』第7巻4号、日本語学会、pp69～81
かりまたしげひさ (2009a) 「宮古島市城辺字保良方言の動詞の終止形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16～19年度度基盤研究(B) 成果報告書、pp1～28
かりまたしげひさ (2009b) 「宮古島市城辺字保良方言の動詞の連用形、連体形、条件形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16～19年度度基盤研究(B) 成果報告書、pp29～60
かりまたしげひさ (2009c) 「宮古島市城辺字保良方言の動詞の形づくり」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16～19年度度基盤研究(B) 成果報告書、pp61～84
かりまたしげひさ (1999) 「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『日本東洋文化論集』第5号、pp27～51
かりまたしげひさ (1989) 「琉球方言における「第三中止形」について」『沖縄言語研究センター資料No81』
高橋俊三 (1991b) 『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院
名嘉真三成 (1982) 「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58号
本永守靖 (1973) 「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』第17集第1部、pp27～41

4 宮古方言の特徴

宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討

松浦 年男

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

宮古諸方言では、(1a)に示すような語中での重子音の他に、(1b)のような語頭での重子音や(1c)のような異なる子音の連続が見られる((1)に関しては方言を【】で示す)。

- (1) a. [avva] (油) 【伊良部・久貝】, [mizza] (菰) 【久貝】
b. [ffa] (子供) 【久貝】, [ssĩ] (巢) 【久貝】
c. [sta] (舌) 【伊良部】, [mta] (土) 【伊良部・久貝】

ペラール(2007)や Shimoji (2008)では、(1b)のような重子音について、宮古方言が持つ2モーラの最小性制約 (Minimality Constraint) に違反しないよう(2a)のように2つのモーラに分節化され则认为している。(1c)についても最小性制約を守るには(2b)のように分節化され则认为するのが妥当だろう。

(2) 最小語制約に反しない分節化

- a. [f.fa], [s.sĩ]
- b. [s.ta], [m.ta]

それではこれらの音響的な実現についてはどうだろう。

まず、(1b)のような語頭重子音について、たしかに音韻論的な分節としては(2)が妥当であろう。それでは、語頭重子音は語頭単子音と比べたとき、音声的な違いはないのだろうか。[ffa]における[ff]の持続時間は、単独で音節初頭に出てくる[f] (例: [fau]) より長いことが期待できる。もちろん音声表記にも現れているとおり、重子音は単子音に比べ長く発音されるし、聴覚印象でもそのとおりである。また、標準日本語(東京方言)でも単子音と重子音の比率はおおよそ1:2~3程度だと報告されている(Han 1962 など)ことから、系統的に近い関係を持つ宮古方言でも同様であることは想像に難くない¹。だが、たとえそうだとした場合、確認することに意義はあるだろう。

¹ ただし、秋田方言や鹿児島方言といったシラビーム方言では単子音と重子音の比率は標準語ほど長くないという指摘がある。

次に、[m.ta]の[m]のような語頭の子音連続については、無声化母音を含む場合を除いて日本語にはなく、またその音響音声学的な実現についての報告もない。Shimoji (2008)などはいった子音も単独で1モーラを持っていると考えている。そうすると、単独で音節初頭に出てくる[m]と音響的な違いがあるということは十分に考えられる。Sato (1993)によれば、音節末尾(=撥音)の[n]や[m]と音節初頭の[n]や[m]を比べたとき、日本語では音節末尾の[n]や[m]の方が持続時間が長くなるが、英語や朝鮮語では違いがほとんど見られないという。Sato (1993)はこの違いを言語間のリズム構造の違い(日本語=モーラリズム、英語=強勢リズム、朝鮮語=音節リズム)に帰しているが、これを宮古方言に当てはめたとき、宮古方言がモーラリズム言語であるならば日本語と同様の結果が期待される。

最後に、(1a)のような有声阻害音が重子音になっているパターンについて、標準日本語ではベッドやキッズのような外来語においてのみ見られる²。また、2.2節で紹介するが、音響音声学的な実現を見ると、標準日本語においてこのタイプの重子音は単子音の単なる延長ではない。宮古方言の有声阻害重子音は日本語のそれと同じような音声実現をするのだろうか。

本稿ではこのような時間制御や声帯振動といった問題に関して、合同調査での録音資料に基づき検討を行う。使用するデータは伊良部方言³と久貝方言であるが、必要に応じて他方言にも言及する。

1.2 分析の方法

国立国語研究所の合同調査において収集した録音資料を用いる。録音資料は *praat* (Boersma and Weenink 2009) によってスペクトログラムを表示させ、視認によってラベル付けを行い、筆者の作成したスクリプトで各分節音の持続時間を測定した。分節音の同定は基本的にフォルマント、ボイスパー、雑音成分などに基づいて行った。ただし、発話末の母音など同定が難しいものもあった。その場合はスペクトログラムのダイナミックレンジを 30dB に設定し、2000 から 3000Hz に明確なエネルギー成分が見られる部分を母音とした。

両方言の話者情報を(3)と(4)に示す。

(3) 話者情報

- a. 伊良部方言：1924 年生，男性
- b. 久貝方言：1926 年生，男性

子音の持続時間を計測するとき、特に重子音と単子音の比較を行うならば、後続母音の持続

² 日本語の方言まで広げると、八丈方言(馬瀬 1961)、安島方言(新田 2011)や、九州地方の広い範囲(鹿児島方言(上村 1957)、佐賀方言(藤田 2003)、長崎県口之津方言(南 1959))などでは、漢語や固有語にも見られる。

³ 厳密には、伊良部島の字伊良部の方言であるが、本稿では伊良部方言と称する。

時間やそれらとの比率（正規化時間）を計測することが望ましいが、今回のデータでは後続母音が発話末になっていて、正確な長さを規定するのが難しい場合があった。そのため、本稿では子音の絶対的な持続時間についてのみ考察する。また、本来ならばこのような分析を行うには、複数の話者による多くの発話によるデータを平均化するのが望ましい。だが、本稿では各方言 1 名の話者で、多くは 1 回の録音資料に基づいている。この点において本稿はまだ予備的な検討であり、再現性を含め今後検討し直す必要がある。

2 重子音

本節では宮古方言の重子音について、語中と語頭に、さらに語中については無声と有声に分け、それぞれの持続時間を中心に考察を行う。以下ではまず、[t]と[tt]、[ts]と[tts]の持続時間を分析する。続いて、有声阻害重子音として[vv]や[zz]について、持続時間と雑音成分、ボイスバーに注目して分析を行う。なお、[vv]については伊良部、久貝以外の方言についても考察の対象に含める。

2.1 無声の語中重子音

2.1.1 [t]と[tt]

伊良部方言では、[t]と[tt]の最小対として、[bata]（お腹）と[batta]（脇の下）がある。図 1 にこれらの音声波形とスペクトログラムを示す。

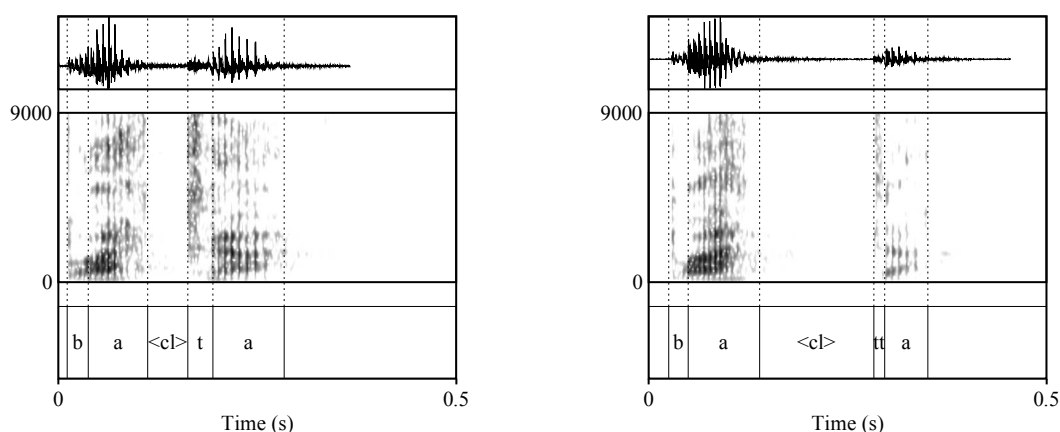


図 1 : [bata]と[batta]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり、[t]と[tt]の大きな違いは子音部分の持続時間である。閉鎖部分（図 1 で<cl>としている部分）の持続時間は、[t]が 50 ミリ秒、[tt]が 143 ミリ秒（比率 1:2.86）だった。図 1 では後続母音についても長さの違いが出ている（[bata]では 89 ミリ秒、[batta]では 54 ミリ秒）が、他の単語では見られない。最小対ではないが、[budzati]（叔父さんたち）と[asatti]

(明後日) という対で検討してみよう。これらの単語の音声波形とスペクトログラムを図 2 に示す。

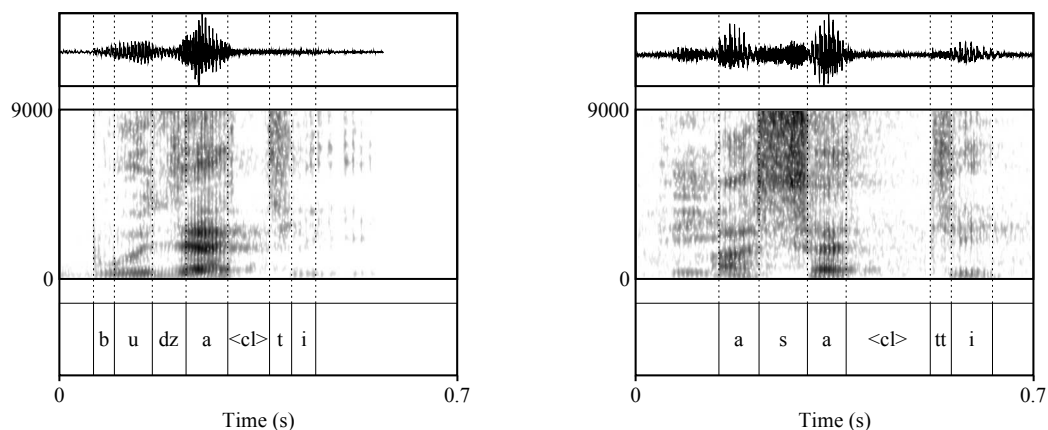


図 2 : [budzati]と[asatti]の音声波形とスペクトログラム (伊良部)

この図を見ると、[t]と[tt]の違いとして際立っているのは、やはり子音部分の持続時間 ([t]が 73 ミリ秒, [tt]が 148 ミリ秒, 比率 1:2.02) である。後続母音の持続時間は、[budzati]では 42 ミリ秒, [asatti]では 72 ミリ秒となっており、[bata]と[batta]の場合と逆になっている。したがって、ここでは重子音における後続母音の短縮は例外的、偶発的なものと考えておいた方がよいだろう。

2.1.2 [ts]と[tts]

久貝方言には[itsa] (板) と[attsa] (明日) という対がある。図 3 にこれらの音声波形とスペクトログラムを示す。

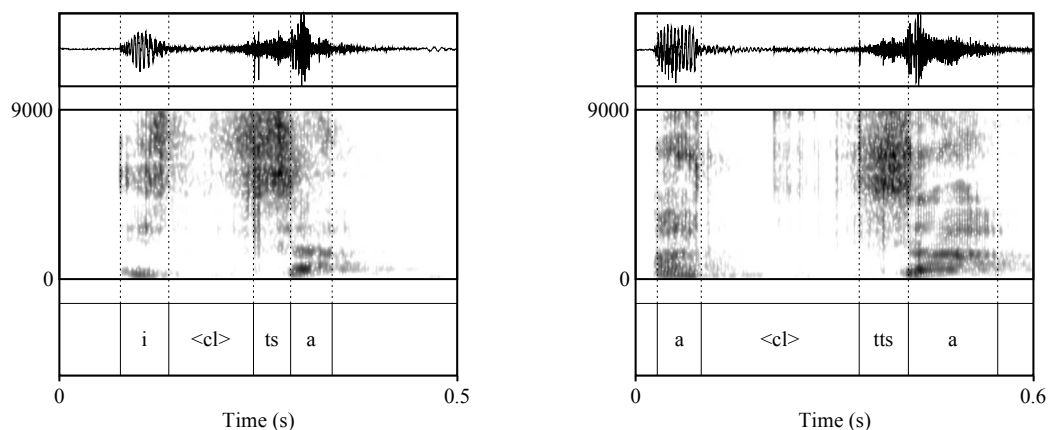


図 3 : [itsa]と[attsa]の音声波形とスペクトログラム (久貝)

この図からも明らかなとおり，[ts]と[tts]の違いとして際立っているのは閉鎖の持続時間である。閉鎖部分の持続時間は，[ts]では 96 ミリ秒 ($SD=9$, $n=2$) だったのに対し，[tts]では 238 ミリ秒 (比率 1:2.47) であった。

2.2 有声の語中重子音

宮古方言では，固有語と思われる語彙でも[zz]や[vv]といった有声阻害重子音が見られる。日本語でも外来語で有声阻害重子音は見られる。しかし，日本語における有声阻害重子音は必ずしも単子音がそのまま長くなったものとは限らず，(4)の 2 つの特徴を持っている。

- (4) a. 有声摩擦音の重子音はない。単子音において摩擦音で現れるものであっても，重子音においては破擦音 ([dz]) または破裂音 ([b, g]) になる。
b. 声帯振動は閉鎖の前半部分にのみ見られる。

まず，(4a)について，例えば日本語東京方言においてズの/z/は「傷」のように単子音ならば摩擦音で実現することが多いのに対し⁴，「キッズ」のように重子音になると長い閉鎖を含む破擦音になる。これらの音声波形とスペクトログラムを図 4 に示す（録音は 30 代男性，東京方言話者によるもの）。

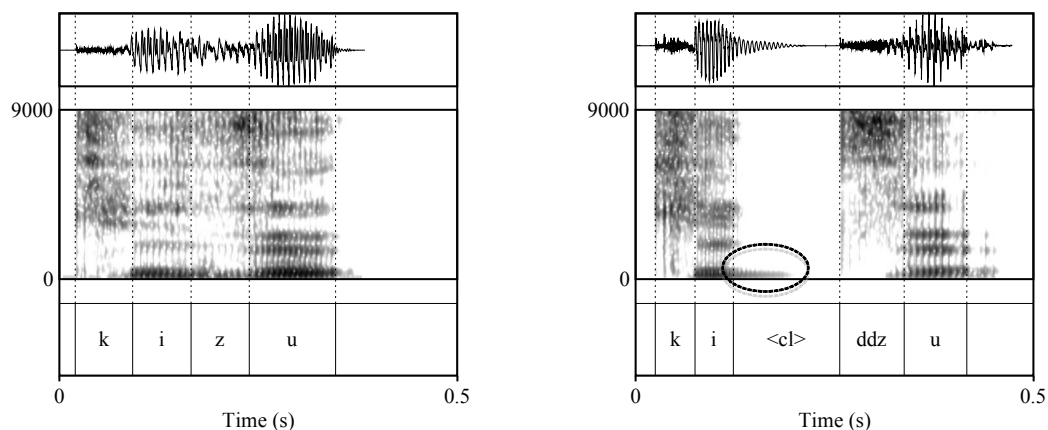


図 4：「傷」（左）と「キッズ」（右）の音声波形とスペクトログラム

次に，(4b)に関して，東京方言では有声阻害重子音の声帯振動は子音部分全体ではなく，前半部分のみに見られることが多い（Kawahara 2006 など）。図 4 右においても，閉鎖部分でのボ

⁴ この記述は厳密には正しいとは言えないが，分かりやすさを優先してこのように記した。日本語の有声阻害音の音声実現の詳細に関しては Maekawa (2010)や前川(2010)を参照のこと。

イスバー（低周波域のエネルギー，丸で囲んで示している）は前半でしか見られない。

以下では[zz]と[vv]について，持続時間の他に，(4)に挙げた特徴が見られるかを検討する。

2.2.1 [z]と[zz]

語中において [z]と[zz]の対立する例として，久貝方言の[a:za]（父）と[mizza]（葦）がある。図5に音声波形とスペクトログラムを示す。

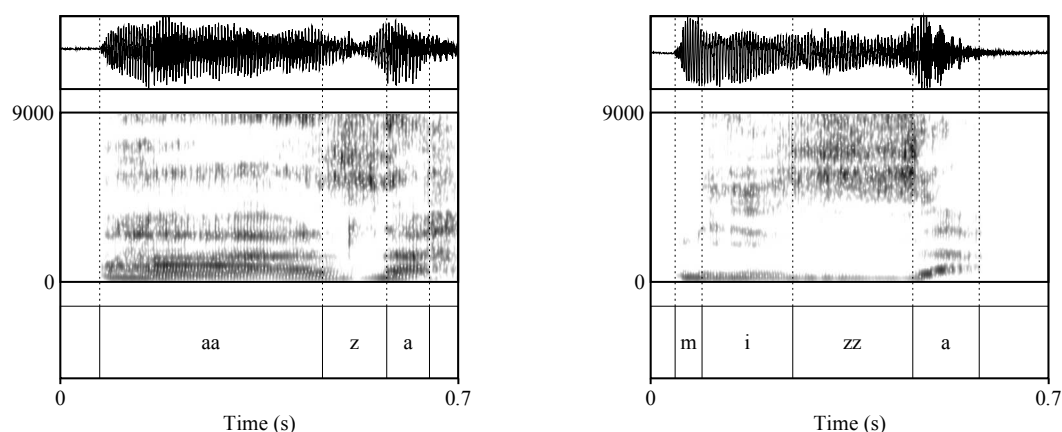


図5：[a:za]と[mizza]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

図5から明らかなおとおり，[z]と[zz]の違いとして際立っているのは，子音部分の持続時間である。持続時間を計測したところ，[z]は74ミリ秒だったのに対し，[zz]は173ミリ秒（ $SD=29$ ， $n=3$ ），比率にすると1:2.33であった。

次に，雑音成分とボイスバーを見てみると，[zz]であっても高い周波数の雑音成分が見られる。ここから，重子音であっても摩擦が持続していることが分かる。また，重子音中のボイスバーも観察される。ここから，日本語のように重子音の前半のみ声帯が振動するのではなく，重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

2.2.2 [vv]

宮古方言には標準日本語にはない[vv]という音がある。その例として，[avva]（油）と[kuvva]（ふくらはぎ）がある。以下では伊良部方言，久貝方言だけでなく，池間方言，保良方言も対象にして検討していく。なお，[vv]に対応する[v]が調査データにないため，ここでは持続時間に関する検討は行わない。

まず，伊良部方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図6に示す。

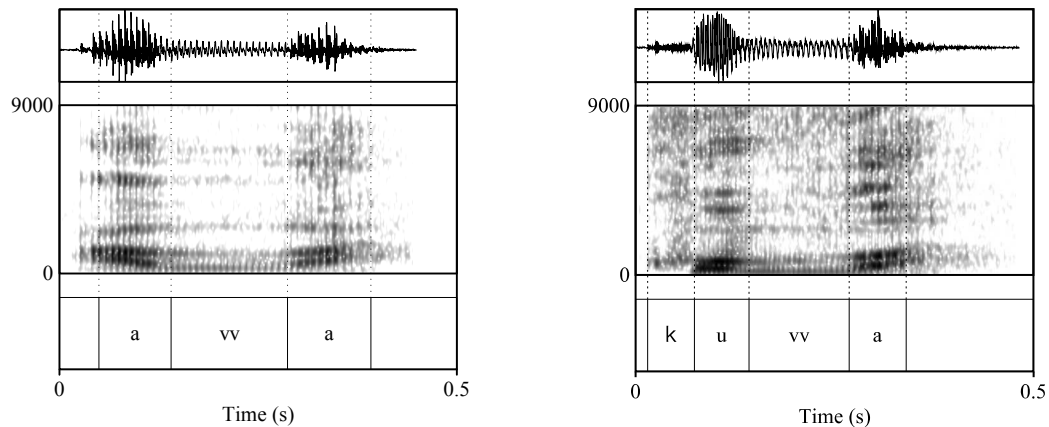


図6：伊良部方言における[avva]（左）と[kuvva]（右）の音声波形とスペクトログラム

図6における摩擦の雑音成分を観察すると、[avva]では弱くなっているが、[kuvva]ではそれよりは強く出ており、摩擦が持続していることが分かる。また、どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られることから、重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

久貝方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図7に示す。

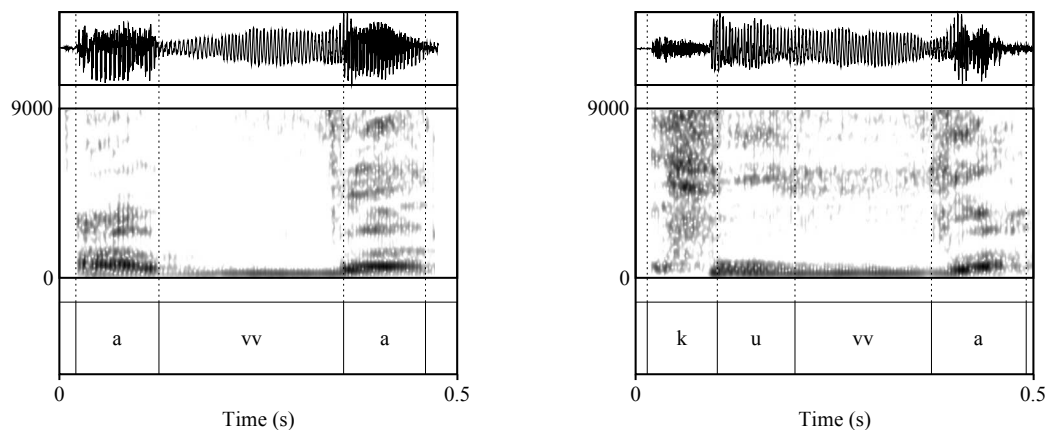


図7：久貝方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図7における摩擦の雑音成分を観察すると、[avva]では弱くなっているが、[kuvva]ではそれよりは強く出ており、摩擦が持続していることが分かる。また、どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られることから、重子音の発音中も声帯は振動していることが分かる。

池間方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図8に示す。

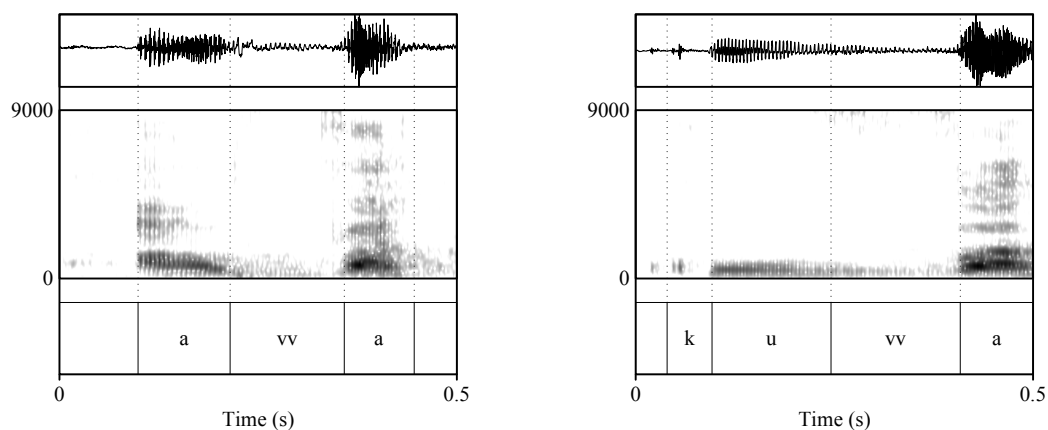


図 8：池間方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図 8 における摩擦の雑音成分を観察すると，[avva]，[kuvva]ともかなり弱い。一方，どちらの語もボイスバーが全体にわたって見られる。

保良方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラムを図 9 に示す。

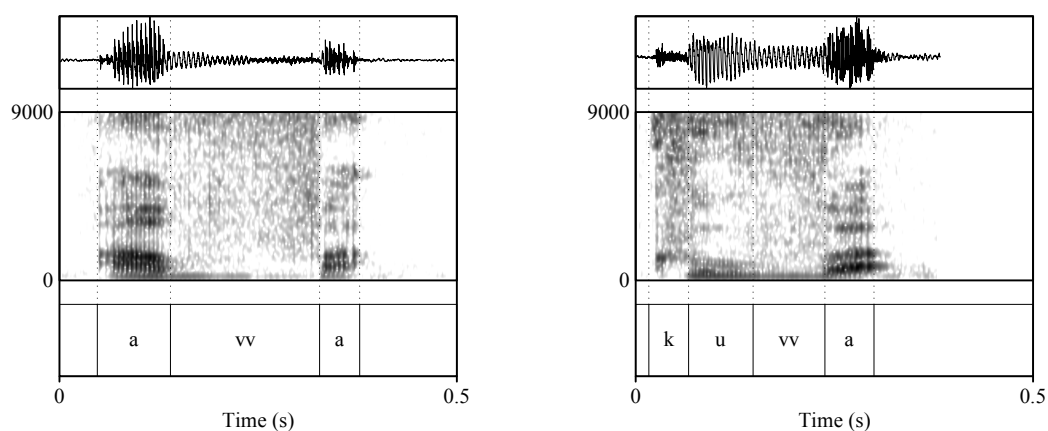


図 9 保良方言における[avva]と[kuvva]の音声波形とスペクトログラム

図 9 における摩擦の雑音成分を観察すると，どちらの語でも強く出ている。一方，ボイスバーに関して，[kuvva]では全体にわたって出ているが，[avva]では後半部分が弱くなっている。これは[avvamtsu]（油味噌）の発話においてより顕著に見られた。図 10 に[avvamtsu]の音声波形とスペクトログラムを示す。なお，この単語は 3 回の発話があったので全てについて示す。

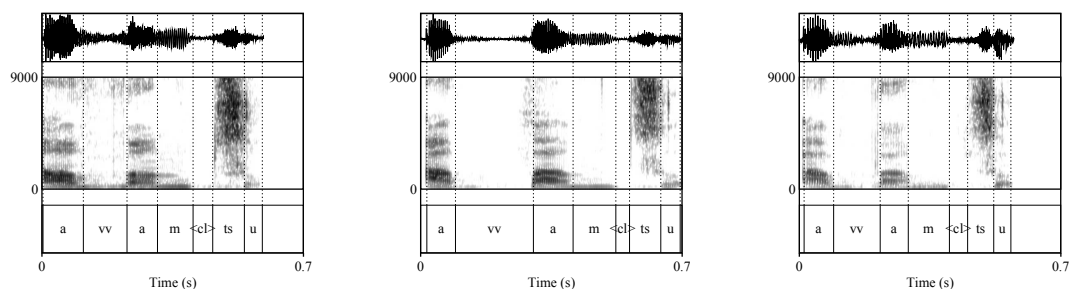


図 10：保良方言における[avvamt su]の音声波形とスペクトログラム

(左：1回目，中：2回目，右：3回目)

まず摩擦の雑音成分について観察すると、どの発話でも摩擦はかなり弱く出ている。次にボイスバーについて観察すると、1回目では子音部分全体に見られるが、2回目、3回目では後半部分がなくなっている。聴覚印象でも2回目は[vf]のように聞こえる。持続時間を見ると、1回目は116ミリ秒、2回目は208ミリ秒、3回目は124ミリ秒と2回目が長くなっている。ボイスバーもこのことが関係しているのかもしれない。しかし、これが話者固有の傾向なのか、それとも地域の特徴として持っているものなのか、今後の検討を要する。

以上の観察結果を(5)にまとめる。

- (5) a. どの方言でも摩擦は持続しており、破擦音や破裂音には変化しない。
b. 伊良部、久貝、池間方言では全体にわたって声帯振動がある。
c. 保良方言では後半部分の声帯振動がなくなることがある。

このように、雑音成分はほぼ一貫して見られる一方、声帯振動（ボイスバー）は保良方言において後半部分で無くなることがある。

2.3 語頭の重子音

宮古方言には[ffa]や[vva]といった重子音を語頭に持つ単語がある。このとき、重子音と単子音は長さがどの程度異なっているのだろうか。この問題は、音節ないしはモーラの等時性、つまりリズムの問題を考える上でも重要であろう。以下では[nn], [ff], [ss], [vv]について考察する。

2.3.1 [n]と[nn]

[n]と[nn]が語頭で対立する例として伊良部方言の[nada]（涙）と[nnami]（今）を挙げる。図11に音声波形とスペクトログラムを示す。

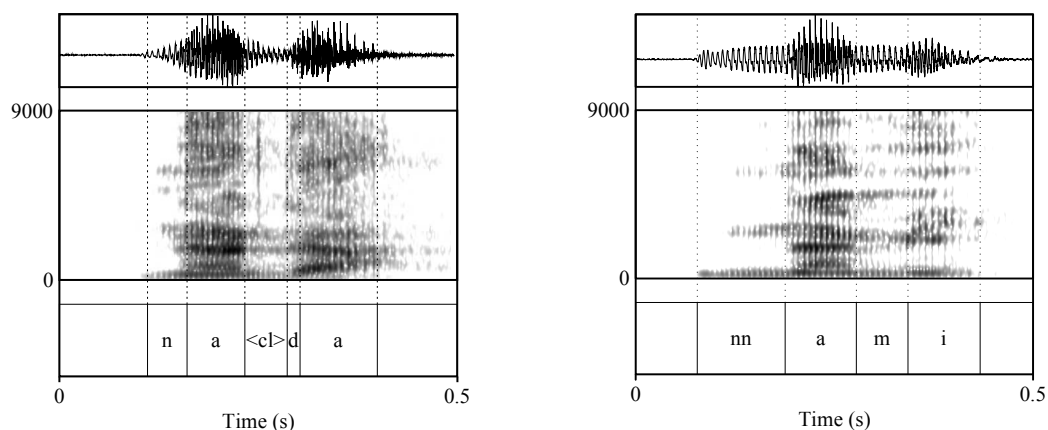


図 11 : [nada]と[nnami]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり，[nn]が[n]より長く実現している。持続時間は，[n]が 49 ミリ秒，[nn]が 110 ミリ秒（比率 1:2.24）だった。

2.3.2 [f]と[ff]

語頭において[f]と[ff]の対立する例として，[funi]（船）と[ffa]（子供）を挙げる。図 12 に音声波形とスペクトログラムを示す。

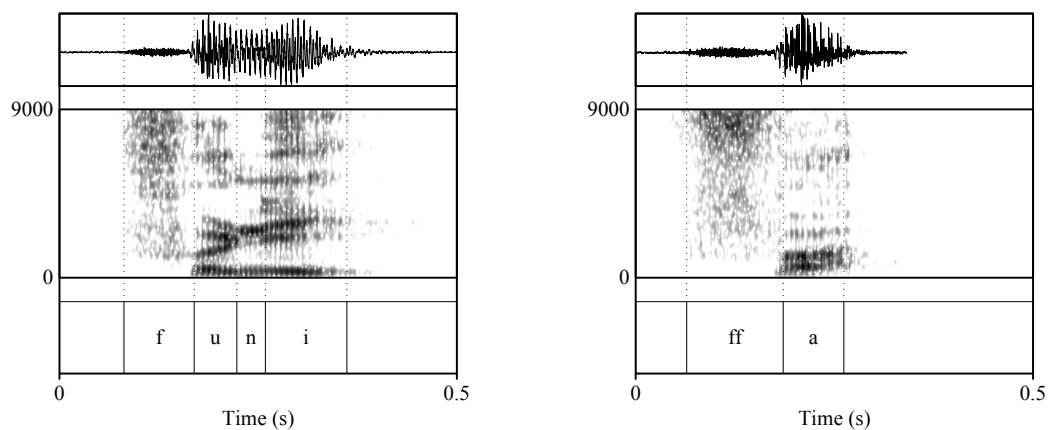


図 12 : [funi]と[ffa]の音声波形とスペクトログラム（伊良部）

この図からも明らかなとおり，[ff]の方が[f]より長く実現している。持続時間は，[f]が 92 ミリ秒（ $SD=4.5$, $n=2$, 伊良部），108 ミリ秒（久貝），[ff]が 135 ミリ秒（伊良部），143 ミリ秒（久貝）で，単子音と重子音の比率は 1:1.45（伊良部），1:1.32（久貝）となった。[n]と[nn]や語中と比べると単子音と重子音の比率が小さい点は注意を要する。

2.3.3 [s]と[ss]

語頭において [s]と[ss]の対立する例として、久貝方言の[siba]（唇）と[ssi]（巢）を挙げる。図 13 に音声波形とスペクトログラムを示す。

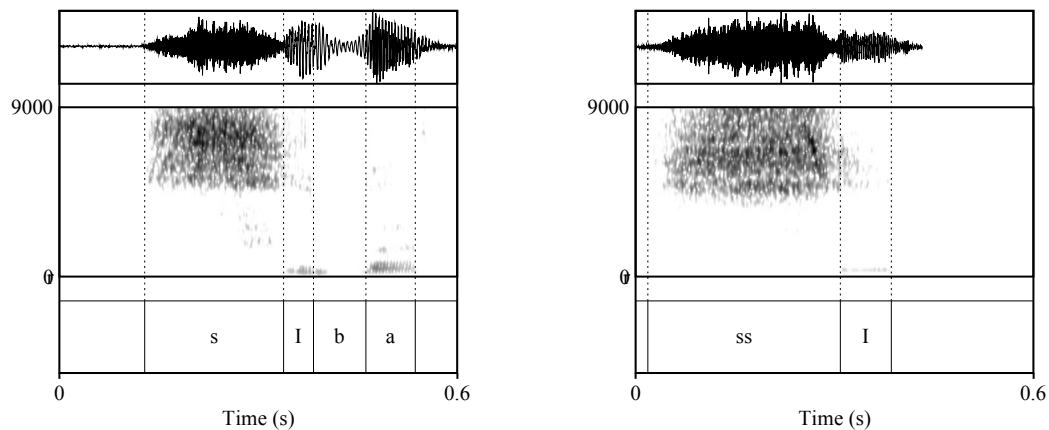


図 13 : [siba]と[ssi]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

この図から分かるとおり，[ss]の方が[s]より長く実現している。持続時間は，[s]が 190.3 ミリ秒（ $SD=16.93$ ， $n=3$ ）だったのに対し，[ss]は 289 ミリ秒（比率 1:1.51）であった。

2.3.4 [v]と[vv]

語頭において [v]と[vv]の対立する例として、久貝方言の[vaa]（豚）と[vva]（お前）を挙げる。図 14 に音声波形とスペクトログラムを示す。

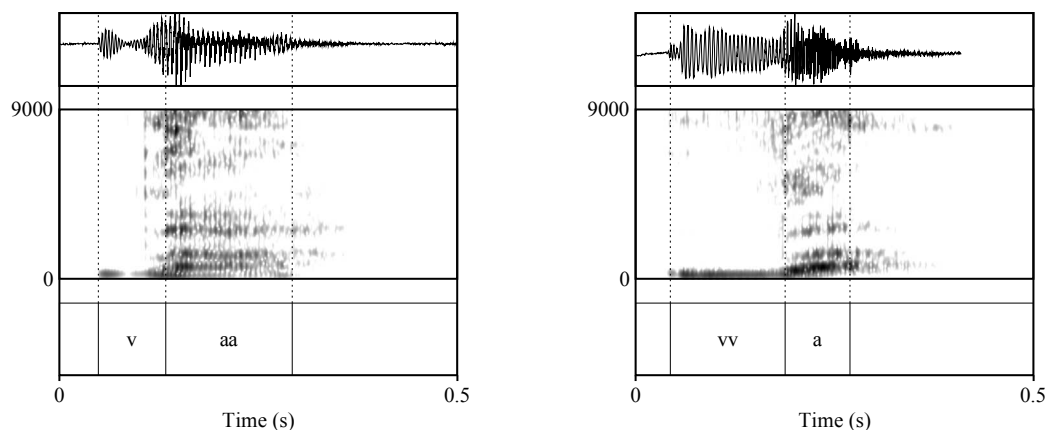


図 14 : [vaa]と[vva]の音声波形とスペクトログラム（久貝）

この図から分かるとおり，[vv]の方が[v]より長く実現している。持続時間は，[v]が 84 ミリ秒

($SD=0.00$, $n=2$) だったのに対し, [vv]は 143 ミリ秒 (比率 1:1.70) であった。

以上の結果を見ると, いずれにおいても重子音は単子音より長い持続時間でもって実現していたが, 比率は[n]と[nn]において 1:2.24 だったのに対して, [ff], [ss], [vv]では 1:1.3-1.7 と小さくなっていた。単子音と重子音の比率が小さい場合, 知覚において混同を避けるためには他の要素, 例えば後続母音の長さを変えるなどの調整が必要になってくる。そういったことが起こっているのか, 検討が必要だろう。

3 子音連続

宮古方言では[mta]のように語頭で子音連続を含む単語がある。このとき, [m]は音節内でのような位置を占めるのだろうか。[t]と同じように初頭子音 (onset) なのか, それとも末尾子音 (coda) ないしは音節主音 (nucleus) なのだろうか。これを決定するためには (形態) 音韻論的な交替を見る必要である。しかし, 一方で音響音声学的な手がかりもあることは十分に考えられる。そこで, このときの[m]を単独で音節初頭や音節末尾に出てきた場合と比較することからこの問題について考える。

今回の調査データより, [m]が語頭にあり, かつ子音が後続する単語を(6)に挙げる。

(6) 語頭における[m]+子音の連続 (伊良部)

a. 無声阻害音が後続する語⁵

mkiiN, mta, msu

b. [n]が後続する語

mmna, mmni, mnii, mni, mnapskaï

[m]の部分の持続時間を計測するのに同じ鼻音である[n]が後続する単語だと, 同時調音的になっていることもあり, [m]そのものの時間を同定することが難しい。そのため, この節では[m]に無声阻害音が後続する場合のみに限定して分析と考察を行う。

伊良部方言における [mau^hka:] (正面) と[mta] (土) の音声波形とスペクトログラムを図 15 に示す。

⁵ [m]が重子音になってさらに[ts]に後続した[mmtsI]という語もあるが, ここでは分析の対象から外す。

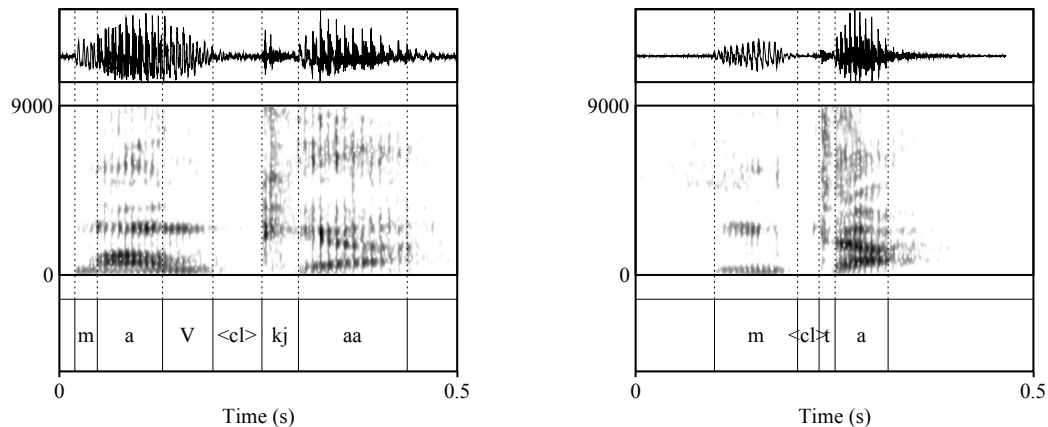


図 15 : [mauk'a:]と[mta]の音声波形とスペクトログラム (伊良部)

この図から明らかなように、子音連続の[m]は単子音の[m]に比べ長く実現している。この差が一般的なものかを確認するべく、今回ラベル付けを行ったデータから、[m]を含むものを抜き出し、それらを音節内の位置によって分類して比較する。対象とした単語を(7)に挙げる。

(7) 調査語群

- a. 子音連続 : [msu], [mta], [mkiiN]
- b. 音節初頭 : [amambuni], [maxai], [umatsi], [nnami], [nufumunu], [ççanamunu], [mizza], [midzi], [mauk'a:]
- c. 音節末尾 : [amambuni], [avvamtsu], [umku]

これらの単語に現れる[m]について持続時間を計測した結果を(8)に示す⁶。

(8) [m]の持続時間

位置	平均 (SD)	最大値	最小値	サンプル数
子音連続	77.8 (4.3)	100.3	73.5	3
音節初頭	51.4 (15.9)	81.6	28.2	12
音節末尾	86.7 (18.7)	114.4	57.7	6

この表から持続時間は音節初頭<子音連続<音節末尾の順で長くなっている。差を比べると、子音連続と音節末尾は 8.9 ミリ秒、子音連続と音節初頭は 26.4 ミリ秒と音節末尾の方が小さく出ている。サンプルも少なく、標準偏差も大きいため、決定的なことは言えないが、この結果

⁶ [mizza]の発話のうち 1 回は 177 ミリ秒だったが、平均+2SD を超えたためデータから除外した。

から考えると、今の段階では子音連続に現れる[m]は後続子音と異なる音節に属すると解釈するのが妥当だろう。

4 おわりに

本稿では、宮古方言の時間制御について検討した。その結果、重子音は単子音に比べ持続時間が長いことが明らかになった。重子音と単子音の持続時間の比率を(9)にまとめる。

(9) 単子音と重子音の持続時間の比率

a. 語中

子音	比率
[t]と[tt]	1:2.02-2.86 (伊良部)
[ts]と[tts]	1.2.47 (久貝)
[z]と[zz]	1.2.33 (久貝)

b. 語頭

子音	比率
[n]と[nn]	1.2.24 (伊良部)
[f]と[ff]	1.1.45 (伊良部) 1.1.32 (久貝)
[s]と[ss]	1.1.51 (久貝)
[v]と[vv]	1:1.70 (久貝)

この結果から、語中に比べて語頭では単子音と重子音の持続時間の比率が小さくなる傾向が見て取れる。この違いがどの程度安定したものか検討する必要があるだろう。

また、[zz]や[vv]といった有声阻害重子音が語中にある場合、摩擦のまま持続し、声帯振動も全体にわたって保たれるという点で標準日本語と異なることも明らかになった。

さらに、子音連続における子音が単子音と比べて持続時間が長く実現した。持続時間の比率を(10)にまとめる。

(10) 子音連続と単子音の持続時間

子音	比率
[m]	1:1.42 (伊良部)

今後はより多くのデータに基づいて今回得られた知見を検証する必要がある。特に、1節でも述べたとおり、本稿で扱ったデータの録音はほとんどが1回の発話で、また、単語単独の発話で文に埋め込んだものではない。したがって、持続時間だけでなく調音動態についてより詳

細を明らかにするには、これらの点を改めた上での分析が必要である。さらに、本稿では単音単位での持続時間に関する分析を主としたが、単語全体の持続時間を検討するなどして、宮古方言のリズム単位がモーラなのか否かについて検討する必要がある。

謝辞

本稿を作成する過程で下地理則氏より貴重な助言をいただきました。記して感謝申し上げますとともに必ずしも全ての助言を反映できていない点があることをお断りしておきます。もちろんのことながら、本稿における一切の誤りや誤解は全て筆者の責任によるものです。なお、本研究は科学研究費補助金・若手研究(B)「九州地方の二型音調方言における共通語音声の受容に関する実証的研究」（課題番号 22720164）による成果の一部です。

参考文献

- 青井 隼人 (2012)「南琉球宮古方言の音韻構造」峰岸 真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口 裕司 (編)『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8: 99-112.
- Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: doing phonetics by computer (Version 5.1.11) [Computer program].
- 藤田 勝良 (2003)『佐賀県のことば』明治書院.
- 上村 孝二 (1957)「南九州方言音の分布を中心に: 内破音・鼻音化その他」『文研報告』6
- Han, Mieko S. (1962) The feature of duration in Japanese. *The study of sounds* 10: 65-79.
- Kawahara, Shigeto (2012/forthcoming) The phonetics of obstruent geminates, *sokuon*. Draft to appear in *The Mouton handbook of Japanese language and linguistics*.
- Kubozono, Haruo and Francis Michinao Matsui (2003) Phonetic vs. phonological control of speech: Closed syllable vowel shortening in Japanese dialects. *Proceedings of International Conference on Phonetic Sciences*, Barcelona.
- 前川 喜久雄 (1984)「秋田方言促音の持続時間: 「寸づまり」の実態と成因」広島方言研究所『方言研究年報』27: 231-247.
- Maekawa, Kikuo (2010) Coarticulatory reinterpretation of allophonic variation: Corpus-based analysis of /z/ in spontaneous Japanese. *Journal of Phonetics* 38(3): 360-374.
- 前川 喜久雄 (2010)「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」『音声研究』14(2): 1-15.
- 馬瀬 良雄 (1961)「八丈島方言の音韻分析」『国語学』43
- 南 不二男 (1959)「長崎県口之津方言の音韻体系」『国語学』36
- 新田 哲夫 (2011)「福井県三国町安島方言における maffa<枕>等の重子音について」『音声研究』15(1): 6-15.
- ペラール, トマ (2007)「宮古諸方言の音韻の問題点」第2回琉球語ワークショップ配付資料 (2007年9月9日)

Sato, Yumiko (1993) The durations of syllable-final nasals and the mora hypothesis in Japanese.
Phonetica 50: 44-67.

Shimoji, Michinori (2008) *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Doctoral dissertation,
ANU.

宮古群島若年層による方言音声認識の実態

ウイブストゥ バカムヌ
—老人と若者の間—

中島 由美・徳永 晶子・諸岡 大悟

1. はじめに

宮古群島域に多く聞かれる特徴的な音声については、これまでにさまざまな報告、分析が行われてきた。なかでも注目されてきたのは、本土方言の *i に対応するものとして、舌端部が歯茎に接近することにより著しい摩擦雑音を伴う母音が聞かれることであろう。これを音声学的にどう定義すべきか、あるいは音韻論的にどう記述すべきかなどの問題提起や、さらに実験音声学的分析を活用した取り組みなども行われている。そうした中で、本プロジェクトによる今回の調査（以下「本調査」とする）によって、統一的調査票によりある程度まとまった音声データが新たに得られ、宮古方言の全容を視野に入れた分析が容易になったことから、これまで我々が実施してきた若年層の言語行動調査に本データを活用することを計画した。いまだ実験的な試みに過ぎず、方法等検討すべきことは多いが、消滅危機方言の保存・継承に向けて若年層の方言音声認識の実態が少しでも捉えられればと考えている。

一橋大学社会学部中島ゼミナールでは、2008年より宮古島・伊良部島を対象として継続的に言語生活実態調査を行ってきた。比較対象のため一部老年層も含めているが、主として高校生を中心とする若年層を対象としている。アンケート調査や聞き取り調査を組み合わせる工夫を重ねてきたが、若年層が、本土は勿論のこと沖縄本島とも異なる音声特徴をどのように認識しているのかについては、常に関心を持ちながらもなかなか取り組む方法が定まらなかった。

そこで、本調査のデータを活用した実験的試みとして、まず手始めに2011年11月に、小規模ながら聞き取り用の項目をアンケート調査の中に含め、方向性を探ることにした。さらにその結果を受けて、音声聞き取りに特化して規模を少し拡大した調査を2012年3月に実施した。ここでは現時点までに得られた結果について報告し、今後の方向を検討するための材料としたい。

2. 調査の概要

- A. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 1
- B. 若年層による宮古島方言音声聞き取りの実態調査 2

2.1 調査1は2011年11月に、宮古島市における県立高校2校の協力を得て行った、高校生の言語生活実態調査の一部である。調査はアンケート調査と面接調査を組み合わせたものであるが、このうちのアンケート調査の中に本調査で得られた音声データから特徴的な音声を含むものを5個選んで高校生に音声を聞いてもらい、1) どのような音として聞こえるか（カナ

で筆記するよう指定、片仮名 / 平仮名は自由)、2) 意味を知っているか、について筆記してもらった。また比較のため、2012 年 3 月に沖縄本島中部の高校の協力を得て、同じ調査項目についてアンケート調査を実施した。各高校をここでは A 高校、B 高校 (以上宮古島市)、C 高校 (浦添市) とする¹。3 校併せて 130 名 (男子 79 名、女子 51 名) の回答が得られた。

調査 2 は、調査 1 の結果を踏まえ、規模を少し拡大して音声聞き取りに特化したもので、同じく本調査のデータより 50 項目を選び、2012 年 3 月に同じく宮古島市の高校で実施した。50 個の書き取りは通常のアンケート調査と違って生徒にもかなりの負担を強いるものであるため、協力者は希望者を募る形で学校側に依頼したところ、17 名 (男子 2、女子 15) の協力を得ることができた。以上 2 つの調査の概要について次項で示す。

2.2 調査項目について

調査 1 では表 1 に示すような 4 個の語と 1 個の文データを用意した。選択のポイントは標準語音声との相違が目立つ特徴的音声、即ち、1) 摩擦音を伴う中舌母音、2) 子音 ([ɱ], [ɰ] など、以下簡略に成節的 m、同 l とする)、3) その他特徴的な子音 ([f], [v] など)、とした。音声データは本調査における音韻調査から、録音状態の良いもの、発音の明確なものなどを選んだ。1 個の文データも音韻項目調査の中で例文として得られたものである。なお、この段階では

表 1 調査 1 の聞き取り項目

	項目	音源の地点名
1	頭	伊良部
2	肝	久貝
3	ミミズ	保良
4	握り飯	伊良部
5	子供が生まれる	与那覇

音声の地域差については特に考慮していない。

調査 2 では項目数を 50 に増やした。選択のポイントは調査 1 と基本的に同じであるが、本調査の結果から地域差が明らかであったものについては、音源の条件がよければなるべく特徴ごとのサンプルを選択するようにした。例えば *_{ri} に対応するものについて見ると、本調査の実施地点からだけでもほぼ 3 種類の変種が得られている。即ち、摩擦音の著しい久貝など宮古島南西部、母音的な狩俣や池間、成節的 l が聞かれる伊良部島・国仲などである。そこで、こうした地域差が高校生の聞き取りにどのように反映されるのかを見るため、*_{ri} の含まれる項目「頭」については、久貝、国仲、伊良部 3 地点から音源を選んだ。地点によっては該当項目の回答が得られなかったものや、録音状態のため適当でないものもあり、まんべんなく音源を選ぶことはできなかった。このほか特徴的と思われる音声や、意味理解を確認するための語など、42 個の語項目を選択し、同じ意味の語、同じ地域等が続かないよう配列を工夫した。またこれらのほかに、本調査の文法項目調査で得られたデータから短文を 8 個追加した。これは語と文の間で方言の認識がどう変わるのかを知るためであるが、選択に際しては上記語項目選択のポイントと同じ音声特徴にも注目した。

1 調査にご協力いただいたのは、沖縄県立宮古高等学校、同伊良部高等学校の 2 校 (以上宮古島市) と、同浦添工業高等学校 (浦添市) の 3 校である。ご協力に対し心より感謝申し上げます。なお、調査 1 は一橋大学社会学部中島ゼミナールに所属する学部生 14 名、及び大学院生 1 名、鹿児島志学館大学学部生 3 名が分担して行った。調査 2 は、中島と本稿筆者 2 名の大学院生が分担して行った。

調査では音源を一斉に3回ずつ聞いてもらい、書き取ってもらうようにした。表記は仮名（調査1と同じく平仮名、片仮名どちらでも可）とした。右の表2はことなり語ごとの語項目と選択した地点、表3は文項目と音源の地点を示したものである。なお、地域的異なりについて確認するために作成した分布図（図1～8）を参考に示す。

2.3 各音声特徴の扱いについて

このように調査2で地域による変種に注目したのは、それらの違いが高校生にとって聴覚印象上決して小さくないのではないかと考えたからである。似たような単語に出現する異なった音声に対して、彼らはどのように反応するのか、変種ごとの処理を比較すれば、若年層の音声認識がより具体的に把握できるのではないかと期待したのである。変種の分類はあくまでもこのような目的に即したもので、宮古島地域の地理的分布全体に関する把握に基づいたものではない。元より本調査は分布調査を目的としたものではなく、調査者の記録も一定の方式で統一されてはいない。そこで分類に際しては調査者の記録を参考にしながら録音音声によって判断することにした。録音状態などによっては判定が難しい場合もあったが、最終的には我々の判断基準で統一したことをお断りしておく。²

2.4 調査対象者について

調査1

次ページの表4は、3校それぞれで調査した生徒の男女別内訳である。学年は1年と2年であるが、調査結果に目立った違いはなかったため、とくに分けていない。3校のうちA高

表2 調査2の語項目

	宮古島				伊良部島		地点数
	久貝	保良	宮国	来間	伊良部	国仲	
頭	○	—	—	—	○	○	3
肝	○	—	—	—	○	○	3
サトウキビ	○	○	—	—	○	—	3
息	○	—	—	○	—	—	2
稲光	○	○	—	—	—	—	2
お前	○	—	—	—	—	○	2
鎌	○	—	—	—	○	—	2
霧	○	○	—	—	—	—	2
こぶし	—	○	—	—	○	—	2
魚	○	—	—	—	○	—	2
人	○	—	—	—	○	—	2
みんな	○	—	—	—	○	—	2
姪	—	○	—	—	—	○	2
油味噌	—	○	—	—	—	—	1
蟻	—	—	—	—	—	○	1
海	—	○	—	—	—	—	1
鏡	—	—	—	—	○	—	1
口	—	—	—	—	—	○	1
クワズイモ	—	○	—	—	—	—	1
子	○	—	—	—	—	—	1
誰も	—	—	○	—	—	—	1
月	○	—	—	—	—	—	1
東	○	—	—	—	—	—	1
昼間	○	—	—	—	—	—	1
みんなで	—	—	○	—	—	—	1
老人	○	—	—	—	—	—	1
語項目数	16	8	2	1	9	6	42

表3 調査2の文項目

	文	音源
1	子供が生まれる	伊良部
2	海に行った	来間
3	ゴキブリはなかなか死なない	保良
4	高校生は制服を着る	保良
5	昨日は校長先生が座った	保良
6	茶はさっき飲んだ	砂川
7	昨日はいとこと遊んだ	砂川
8	昨日も海に行った	保良

² インフォーマントが最初は摩擦音を強く発音しながら、調査者が聞き直した際に改めてゆっくり言おうとして母音になっているような場合もあった。インフォーマントの音認識とどうつながるか興味深い問題ではあるが、このような場合には併用とした。母音についても、前より、奥より等さまざまであるが、ここではひとくくりになっている。

校は男女にあまり差がないが、B高校、C高校では女子比率が低くなっている。表5、表6は宮古島市2校の生徒の出身地と現居住地の内訳である。県外出身者が宮古4、伊良部5、計9名に上っているが、集計からは除外していない。C高校については別途表7、表8に示した。

調査2

調査に協力してくれた高校生は上述の通り計17名（1年生3名、2年生14名）、男女内訳は女子15名、男子2名である。出身地は宮古島島内14名（伊良部島出身者はなし）、沖縄県外が3名（鹿児島、愛知、東京）である。現在の居住地は全員が宮古島島内で、うち平良地区（下里、西里、東仲宗根などを含む）が12名を占め、残りは久貝2名、砂川1名、城辺1名、不明1名である。島外居住経験者のうち12名が宮古島居住年数16年以上だが、残りの5名の中には5年以下という者も2名いた。通常のクラスを対象とした調査でも、このように生え抜きと見なせる生徒のみでない状況は同じであることから、敢えて調査対象を区別しないことにした。両親についてはともに宮古島島内出身であるものが11名、どちらか一方が宮古島出身が4名、両親ともに宮古島以外の出身であるのは2名であった。

表4 調査対象の高校生・男女別内訳

男女	A高校	B高校	C高校	計
男子	20	21	38	79
女子	27	9	15	51
計	47	30	53	130

表5 出身地（A高校・B高校）

	A高校	B高校	計
宮古群島内	41	23	64
沖縄県内	2	2	4
県外	4	5	9
計	47	30	77

表6 現在の居住地（A高校・B高校）

	A高校	B高校	計
平良	36	1	37
城辺	4	0	4
上野	3	0	3
下地	2	0	2
佐良浜	0	13	13
伊良部	0	10	10
不明	2	6	8
計	47	30	77

表7 出身地（C高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	35
他の本島中北部	6
本島南部	7
本島外県内	1
沖縄県外	3
不明	1
計	53

表8 現在の居住地（C高校）

地域区分	
浦添・宜野湾	38
他の本島中北部	5
本島南部	9
計	53

3. 調査結果

3.1 調査1の音声聞き取りと意味理解

3.1.1 「頭」

「頭」の音源は伊良部島・伊良部のもの（本調査記録では $k^h\text{anamaŋ}$ ）である。同じ伊良部島のもう一カ所の調査地点国仲では語末の成節的 l が明確であるが、それに比べて母音的であり、しかし宮古島・狩俣などと比べると側音に近いようでもあり、中間的発音に聞こえる。

回答のあった121名のうち、語頭に「カ」³以外を選んだのは12名のみで（表9）、残りは全員「カ」で始めており、さらにその半数以上が「カナマ」まで音源に一致する。そこでまずこの「カナマ」まで一致する回答について、その次にどのような表記が選ばれているかを見てみた（表10）。最も多いのは母音で、成節的lを反映したかと思われる「ル」は全体でも5名に過ぎない。母音の中では「イ」が最も多く、次いで「ウ」となっている⁴。興味深いことに、老年層では国仲のように明確な成節的lも聞かれる伊良部島に居住するB高校の生徒が、ひとりも「ル」を選んでいない。可能性としては方言音声として耳慣れているためにかえってわざわざ表記しなかったのかもしれないが、勿論推測の域を出ない。

表9 語頭がカ以外のもの

	タ	ハ	
A高校	1	1	
B高校	1	4	
C高校	5	—	
計	7	5	12

表10 「カナマ」の後に何を書いたか

カナマ+	イ	ウ	エ	ズ	ル	ア/ー	ヌ	ン	なし	
A高校	6	5	1	3	3	—	2	3	2	
B高校	22	3	—	—	—	2	—	—	—	
C高校	—	—	1	—	2	1	—	2	1	
計	29	8	2	3	5	3	2	5	3	59

次に「カナ」までが元の音形に一致する回答を見ると、ここでは「ン」が最も多くなっている（表11）。全体的に「カナマ」まで聞き取れている生徒に比べると、語末の認識が不安定である。またA高校で「かなむん」（5名）、C高校で「かなわん」（6名）がそれぞれ複数回答されているところを見ると、「カナ」の後の判断に困った生徒はわかりやすい形に理由づける心理が働いたのかもしれない。

表11 「カナX」の後に何を書いたか
(Xは任意の1、もしくは2文字)

カナX+	ン	イ	エ	リ	ア	
A高校	6	3	2	2	1	
B高校	—	1	—	—	—	
C高校	15	—	1	—	1	
計	21	4	3	2	2	32

表12 「カナ」まで音源に一致した回答例

カナムアイ	カナウマン
カナムイ	かなむあん
かなもい	カナムアン
かなんまい	カナムウン
カナゴエ	カナムン
カナゴエ	かなむん
カナモエ	カナモエン
かなんまり	カナワン
かなうあん	かなわん

以上方言形に近い回答から見てみたが、これら以外にも多くの形が得られ、「カラマル」や「ツナマヨ」といったものまである。ちなみに全体的に意味理解が低い中で、「頭」は5項目中最も高い意味理解度を示しているが（次ページの表13）、実際の形と意味が連動しているとは言えないようである（同表14）。

3 上に述べたように回答は平仮名、片仮名どちらも使われているが、ひとつの項目について両者を混せて表記したものはなかったので、ここでは片仮名に統一して示す。

4 老年層でも一度成節的lもしくは摩擦雑音を伴う発音をした後に、ゆっくり言い直す際にイが選ばれるのを体験することがあるが、それとの関係は不明である。

表 13 「頭」の意味

	「頭」との回答
A 高校	5
B 高校	9
C 高校	—
計	14

表 14 意味理解と形の関係（正解者の表記）

「頭」	カナマイ	カナムアイ	カナマウ / ウ	カナマル	カナム
A 高校	2	—	1	1	1
B 高校	5	1	3	—	—

3.1.2 「肝」

「肝」には摩擦噪音の強い宮古島・久貝の音源を用いた（調査記録では k^{sɯ}imu）。このようなはっきりした摩擦噪音はどのように聞き取られたのだろうか。無回答であったものを除くと、語頭にはすべて「ク」が選択されている。そこでこの「ク」の後に「ス、ツ」などが書かれていれば、摩擦噪音を反映した可能性が高いと判定した。そのように見た場合、沖縄本島の生徒のほうがよりその部分に反応していることになる。宮古島地域の生徒は先の「頭」の場合と同様、意味のわかる単語としての地位は危ういが方言音声としての認識は持っていて、「地域的な音」、もしくは「自然な音」と受け取っているのかもしれない。なお、摩擦噪音を反映すると思われる表記は、表 16 のように「ス」が圧倒的に多かった。

表 15 「肝」：語頭のクの後にス、ツなどがあるか

	あり	なし	計
A 高校	9	38	47
B 高校	—	29	29
C 高校	20	25	45
計	29	92	121

表 16 「肝」：クの後の摩擦噪音の反映と見られる表記

	ス	セ	ツ	計
A 高校	9	—	—	9
B 高校	—	—	—	0
C 高校	18	1	1	20
計	29	1	1	31

次に、摩擦噪音の反映と思われる要素のあるもの / ないものそれぞれについて、全体がどのような構造になっているかを見てみる。最も多いのが「ク」の後に「ヌ、ン、ム」を書いた 2 文字型の回答（75 名）であるが、そのうち語末の鼻音が「ム」など M^s のものはわずか 6 名で、3 校ともに「ヌ」や「ン」が多く選ばれている。即ち、語末の -m についての認識が

表 18 摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの

		3 文字型	その他				計
	末鼻音	計	KSN ^c	KSN ^v *	KSN ⁿ	NKSN	
A 高校	N	6	—	—	—	1	7
	M	—	—	—	—	—	0
B 高校	N	—	1	—	—	—	1
	M	0	—	—	—	—	0
C 高校	N	10	—	—	—	—	10
	M	8	1	1	1	—	11
	計	24	1	1	1	0	27
	例	クスム くすん クセム クスミ	くすむつ	クスモア	クスムン	ンクスヌ	

表 17 摩擦噪音の反映とみられる要素のないもの

		2 文字型	その他			計
	末鼻音	計	KNC	KNN	KvN	
A 高校	N	28	5	3	2	38
	M	2	—	—	—	2
B 高校	N	24	3	—	0	27
	M	0	—	—	—	0
C 高校	N	17	3	—	—	20
	M	4	1	—	—	5
	計	75	12	3	2	92
	例	くぬ くん クム クム	くぬっ くんっ クモッ クム	クヌン	くうぬ	

(*^v は母音として、大まかにまとめたものである。子音と区別するため小文字で示す)

5 語末の鼻音について細かい違いをまとめ、ヌ、ンなどを N、ムや小さく書かれたムなどを M のように大文字で大まかに示す。

低いか、もしくは方言音声として知ってはいても表記にはN系を選んでいるのかもしれない。一方摩擦噪音の反映とみられる要素のあるもの27回答のうち最も多いのは3文字型の24名であるが、こちらは語末の鼻音がNのもの16、Mのもの8と、Mを表記したものの割合が2文字型よりわずかだが高くなる。サンプルとしては非常に少ないが、摩擦噪音を特異な音として聞き取った者のほうが、語末の-mにより反応した可能性もある。「頭」の場合と同じくC高校でより多く得られているので、共通の傾向があると言えるかもしれない。

ちなみに、「肝」はさまざまなフレーズにも登場し、比較的若年層にも馴染みのある語ではないかと予測していたが、意味についての言及は2回答のみで、「このふたり」「きのう」という結果であった。

3.1.3 「ミミズ」

使用した音源は保良で得られたものである（記録では **mimdz**）。宮古方言には m:（イモ）のように成節的 m が活発に表れるので、これがどのように知覚されているのかを見たいと考えた。方言音声としては比較的単純な構造で聞きやすいのではないかと予測に反して、回答はなかなかヴァリエティに富んでいる。無回答のもの（A高校1、C高校5）を除く総回答のうち96名が語頭に「ミ」を選んでいるが、「ニ」も27名あった。ただしこれら以外のものも、「びんず」1例を除いて「みゅんず」「ネンムズ」のように鼻音を用いている。また語末には「ツ」の2例を除きすべてで「ズ」が使われている。このように「ミ/ニ__ズ」という構造が大勢を占めるので、この中で元の成節的 m の位置にどのような文字が挿入されているかを見てみる。「ミ」で始まるもの、「ニ」で始まるものそれぞれ別にまとめたものが表19、表20である。いずれも「ン」が圧倒的に多く、成節的 m を反映したとみられる「ム」はわずかである。しかもここでも敢えて選んだのは沖縄本島の高校生のほうが多い。摩擦噪音を伴う中舌母音に比べて成節的子音 m, l などは、それ自体は外国語の音にも慣れている現

表19 語頭が「ニ」で始まるもの

語中はどんな形をしているか					
	ン	ンツ	ンム	ム	計
A高校	8	1	1	1	11
B高校	—	—	—	—	0
C高校	9	—	5	2	16
計	17	1	6	3	27
例	ニンズ	にんっず	ニンムズ	ニムズ	

表20 語頭が「ミ」で始まるもの

語中はどんな形をしているか										
	ン	ンツ	ンム	ウン	ム	ミ	ニ	ンムン	なし	計
A高校	32	—	2	1	—	1	—	—	—	36
B高校	28	1	—	—	—	—	—	—	—	29
C高校	18	—	1	—	3	4	1	1	2	30
計	78	1	3	1	3	5	1	1	2	95
例	ミンズ	ミンツズ	ミンムズ	みうんず	ミムズ	ミミズ	ミニズ	ミエンムンズ		

代の若年層にさほど違和感がないのではないかとと思われるのだが、方言音声と連動して認識されているわけではないようだ。地域方言の特徴的な音声と言っても、既に標準語の音体系が基準になっている若年層にとっては、変わっているかもしれないが特別意識するようなものではないのかもしれない。

3.1.4 「握り飯」

「握り飯」は本調査語彙項目の米／飯のところで関連語彙としていくつかの地点で得られている。ここでは与那覇の音源を使用した（記録では ma^hnu^h）。このような特異な音声に対して、高校生はどのように反応するのだろうか。結果は音声実態と大きくかけ離れた形や、無理に意味のあるものに関連付けようとしたらしいものなどが殆どで、表 21～23 が示すように「マジムン」（宮古地方で「化けもの」などの意）は 25 名あり、ほかにも「マイブーム」、「マヨネーズ」というようなものまであり、判断に困って理由づけをしたもののようである。いずれにしても、理解度が低かったというほかに細かい分析は難しい。

表 21 「握り飯」 対応に困った結果の対処？

	マジムン	マヨネーズ	マイブーム	マンガフ	ワームン	ワンヌ
A 高校	3	—	1	1	—	—
B 高校	21	—	—	—	—	—
C 高校	1	1	—	—	1	1
計	25	1	1	1	1	1

表 22 「握り飯」の意味は？

	おばけ	ゆうれい	ごはん	美味しい	私の趣味
A 高校	—	1	—	—	—
B 高校	11	3	1	1	1
C 高校	—	—	—	—	—

表 23 「握り飯」表記例

マイグン	まいむ
マイブウ	まうぐー
まいぶ	マイヌ
マイブーム	マイヴン
マイフン	マジムン
マンガ	まぐ
まんぐ	まんず
まうぐー	まいみ
マイム	マイヌー
マンガフ	らいぐ
マグン	まじむん
マグーウ	マイムン
マイム	まる

3.1.5 「子供が生まれる」

使用した音源は上と同じく音韻調査項目の中の例文として得られた与那覇のものである（[ffanudu mmari:] の助詞 nu の部分が ɾ- に近く聞こえる）。文を項目として加えてみたのは、文と単語とで音声聞き取りに差はあるのか、また意味理解度は異なるのか等について見るためである。

回答は語頭を「ファ」としたものの 44 名と「パ」としたものの 47 名に大きく分かれる。対応はともかく、宮古島地域の生徒にとっては「ファ」も「パ」も方言音声として馴染みのある音と思われ、近い音が聞こえたときに自然にどちらかが選ばれたものと推測される。これら「ファ」「パ」で始めたグループのそれぞれについて、元の音源で「子供が」に対応すると思われる前半部分を見ると、半分以上を FARD, PARD が占めている（表 24, 25）。最後の D に当たる部分は「ド」「ドン」「ドウ」などで、一定はしていないが元の音源の助詞部分を聞き取った結果と見られる。だとすれば両方のグループ併せて 52 名、全体の 4 割ほどの生徒は前半部分をおおよそ把握していることになる。この結果から、少なくとも音形上の問題として、

文が語より聞き取りにくいとは限らないと言えそうである。ただし、沖縄本島の生徒の場合は、「はなづまり」「たなのまわり」「バリどまり」、さらには「ファイトマネー」などといった回答が多くなり、彼らには「文が語より聞き取りにくいとは言えない」という傾向はどうやら当たらないようである。先の音声の聞き取りと逆の結果となっており、語の認識と文の認識の違いを示唆するものかもしれない。

表 24 「子供が生まれる」：前半部分が「ファ」で始まるもの

	FARD	FARN	FARNT	FAID	FAIB	FAIT	FAIND	FANG	FARG/K	FANZ	計
A 高校	11	1	1	—	1	—	—	—	4	1	19
B 高校	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9
C 高校	4	—	—	2	—	7	2	1	—	—	16
計	24	1	1	2	1	7	2	1	4	1	44

表 25 「子供が生まれる」：前半部分が「パ」で始まるもの

	PARD	PANG	PAND	PARG	PARK	PART	PAFUN	BARD	HAND	HARB	HANZ	
A 高校	18	—	—	2	2	—	1	—	—	—	—	23
B 高校	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	3
C 高校	9	3	5	—	—	1	—	1	1	—	1	21
計	28	3	5	2	2	1	1	1	1	2	1	47

(それぞれの表記をだまかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す)

3.1.6 調査 1 のまとめ

以上の結果についてまとめてみる。

- 1) わずか 5 個の調査であり簡単に結論づけることはできないが、琉球諸島の中で方言が比較的保持されているとされる宮古群島においても、若年層の方言音声理解力は決して高いとは言えない。使用頻度が高いと思われる語彙でも、形と意味とが関連付けられていないようである。
- 2) 宮古島市の高校生より沖縄本島の高校生のほうが、摩擦噪音などを表記しようと工夫した割合が高い。ひとつの可能性として、意味が全くわからないためかえって客観的に「音」として捉えようとしたのではないかと考えられる。違和感の強い音であるほど、積極的に書き分ける必要を感じるのではないだろうか。宮古島市の高校生の場合、中～老年層の方言活用がまだ比較的活発であるため、方言音声に耳慣れてはおり、意味はよくわからず自分では音形を再現できないが、「変わった発音」という認識は持っていて、そのためかえって特別な発音とは認識せず、彼らなりに標準語的に再解釈してしまっているのかもしれない。
- 3) 宮古群島では特異な音声を表記するのに「宮古仮名」と言われる独特の表記が知られており、地元で編纂される辞典類や民謡の歌詞、方言によるキャンペーンなどで広く一般に活用されている。しかし宮古仮名方式の応用かと思われるものはわずかに「ゴ」が 2 例だけで、若年層に流布していると言い難いことがわかった。その一方で、彼らは自分なりにさまざまな工夫を凝らしている。母音や促音だけでなく、「ス」や「ン」などを小さく書くなどは、音の印象を再現しようと工夫したものであろう。

- 4) 単語よりも文のほうが聞き取りが難しいのではないかという予測に反して、単語を切り取って示すよりも、まとまったメッセージを文で示す方が反応が得やすいようだ。文のほうが、「何を言っているか」がわかりやすい、判断材料が多い、と捉えられている可能性がある。ただしこのことは宮古島市の高校生にのみ言えることで、単語で「変わった音声」に反応した沖縄本島の高校生が、文では対処に困ったのと対照的である。宮古島市の高校生が老年層の方言発話に耳慣れていることが背景にあると思われるが、語と文の認識の違いを示唆する可能性もある。

3.2 調査2の音声聞き取りと意味理解

調査2はサンプル数が17と少なく、計量的に分析することはできないが、生徒ひとりひとりがどのような対処を行っているかについてより細かく見ることができる。以下ではそうした視点から、いくつかの事例を取り上げる。

3.2.1 「頭」「東」「稲光」など：*riに対応する部分への反応

表27 「頭」：3地点・17名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	k ^h anamaz̥i	kanamaɭ	k ^h anamaɳ
1	カナマズ	カナアマル	無回答
2	カナマツ	カナマル	タナモエ
3	カナマズ	カナマル	カナマル
4	カナマズ	カナマル	カナマル
5	カナマズ	カナーマル	タナマス
6	カナマス	カナマル	カナムル
7	カナマズル	カナアマル	カナンマ
8	カナマズ	カナマル	カナモエ
9	カナマツ	カナーマル	カナモア
10	カナマズ	カナーマル	カナム
11	カナマズ	カナマズ	タナグエ
12	カナンマズイリ	カナアマル	カナナムウ
13	カナマズ	カナマル	カナム
14	カナマズ	カナマズ	カナマズ
15	カナマツ	カナマズ	無回答
16	カナマズ	カナマル	カナムウ
17	カナマアズ	カナーマル	タナム

まず、*riに対応する部分を含む語について見てみる。表27は「頭」（対応からは*kanamariが推定される）について得られた全データである。久貝、国仲については全員元の音形にかなり近く表記しており、「カナマ」まではほぼ一致している。それに対して伊良部については全体的にかなり回答がばらばらであり、無回答も2名ある。語末に注目してみると、3つの変種によってはっきりとわかれている様子がわかる。久貝ではズとスの摩擦音に「ツ、ヅ」の破擦音も加えれば、摩擦性がなんらかの形で認識されていると見ることができよう。国仲については「ル」と、これを小さく書いたもの併せて14名に達してい

る一方で、「ズ」は3名で、子音を意識した結果が明らかである。「久貝：カナマズル / 国仲：カナマル」のような書き分けも、そのひとつと見られる。これを3地点の相関関係で見ると、久貝と国仲の対比を明確に捉えている生徒が多数を占めていることがわかる（次ページの表28）。同じ語が連続することのないように配列しているので、両者を比較しながら聞いたわけではない。調査1でも用いた伊良部の音源と比べて、久貝、国仲のタイプは高校生にとっても比較的把握しやすいと言えるようで、両者の区別もほぼなされている。その一方で、やはり伊良部については表記に迷っている様子が見える。上述のように無回答が2例あるほか、「カナマ」のように3音節で終わっているものもあり、語末をどう書くべきか判断

表 28 「頭」：語末に何が書かれているか

地点	久貝	国仲	伊良部
音形	k ^h anamaz̥i	kanamaɭ	k ^h anamaɳ
ズ	10	3	1
ス	1	—	—
ツ	1	—	—
ッ	2	—	—
ス	—	—	1
ズル、ズイリ	2	—	—
ル	—	13	2
ル	—	1	1
エ、エ	—	—	3
ウ	—	—	2
ア	—	—	1
なし	—	—	4
計	17	17	17

表 29 「頭」：3 地点間の相関関係

久貝	国仲	伊良部		
-Z	-L	-I	4	12
-Z	-L	-L	3	
-Z	-L	-Z	1	
-Z	-L	-なし	3	
-Z	-L	無回答	1	2
-ZL	-L	-I	2	
-ZL	-L	-なし	1	3
-Z	-Z	-Z	1	
-Z	-Z	無回答	1	
-Z	-Z	-I	1	

(それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す。
Zは摩擦噪音、Lは成節的l、Iは母音)

がつかないまま終わった可能性が高い。

これを再び3地点の相関関係から観察してみる。久貝—国仲をZ/Lで区別した12名のうち、4名は伊良部に対して母音を、3名は「ル」を選んでいるが、残りの5名は1名がズのほかは回答が書かれていない。上述のように狩俣などに較べれば(記録によれば [kanamaɯ ~ k^hanamaɳ] とされる。別に aha も併用される)、伊良部の発音は舌が歯茎にかなり近づいているようにも聞こえる。高校生の場合意味がわからないだけに、書き取るにも苦労したものと推測される。なお、意味についての回答はわずか2名からしか得られず、うち1名は国仲の回答のみ正解で、あとの2地点については意味を正しく答えることができなかった。

表 30 は、「稲光」の全表記である。語末部分に注目すると、久貝では1例の「ヅ」を除いて、すべて「ズ」となっている。それに対して保良ではズを選んだのは1名だけで、ルが11、「ズ・ヅ」

表 30 「稲光」：17名の全表記

	久貝	保良
音形	m:napskaz	nnapaskaɳ
1	ンナプカズ	ンナピカル
2	ンナツカズ	ンナツカル
3	ンナプスカズ	ンナピカル
4	ンナプスカズ	ンナプスカドウ
5	ンナプスカズ	ンナピカル
6	ンナプスカズ	ナプスカ
7	ンナプスカズ	ンナプカル
8	ンナピカズ	ンナピカ
9	ンナプツカズ	ンナピカウ
10	ンナプスカズ	ンナプスカ
11	ンナプツカズ	ンナプカズ
12	ンナプスカズ	ンナピカル
13	ンナプスカズ	ンナプスカウ
14	ンナツカズ	ンナツカル
15	ンナピカズ	ンナピカ
16	ンナプスカズ	ナプスカ
17	ンナツカズ	ンナツカル

が2、「ウ」が2などのように、選択が分かれている。音声データによれば、久貝も保良もともに摩擦噪音の著しいタイプであるが、調査者の記録の違いにも表れているように、保良は摩擦の部分の弱く、久貝に較べて歯茎への接近が距離的にも時間的にも短いと推測される。高校生たちも久貝の明瞭な摩擦音には一様に「ズ」を選択しながら保良で判断が分かれるのは、こうした微妙な違いに反応した結果と見てよいのではないだろうか。そこでこのことに注目して語末部分をまとめてみる(表 31)。大まかな分類を施して見ると、摩擦噪音の弱い保良に対しては母音を選んだのはわずかに2名で、子音と同じ選択をしているものが大勢を占めている。

表 31 「稲光」：語末部分 2 地点相関

久貝		保良	
Z	17	L	11
		Z	2
		D	1
		U	2
		なし	1

表 32 「稲光」「東」「頭」：久貝の *ki への反応

稲光	東	頭	
Z	Z	Z	10
Z	ZN	Z	2
Z	Z	ZL	2
Z	Z	C	2
Z	SN	Z	1

(それぞれの表記を大まかに分類してアルファベット大文字でタイプとして示す)

久貝の音源はこのほかに「東」も含まれているので、各生徒が同じ久貝の音声に対してどのように反応しているかまとめてみた(表 32)。「ズ・ヅ」などをまとめれば、3 地点に対して摩擦音を選んだ回答が 10 にのぼっており、どれにも摩擦音を選ばなかった回答は 1 例もない。久貝の摩擦噪音はかなり安定して聞き取られ、しかも調査者の記録と合致して独立した子音 [ɟ] を含むものとして把握されていると推測できるのではないだろうか。

なおここでは宮古仮名の「ス[◦]」が 2 例、宮古仮名を模したと思しき「ク[◦]」が 1 例で使われている。後者は通常「クス」と書かれるので、調査 1 のまとめでも述べたように、宮古仮名は若年層に認知されている訳ではないことを示していると見なすべきであろう。

3.2.2 「肝」「霧」「月」「息」：*ki に対応する部分への反応

表 33 「肝」：3 地点・17 名の全表記

地点	久貝	国仲	伊良部
回答者	k ^{sz} imu	tsimu	tsjmu
1	クスム	ツム	セム
2	ツヌ	ツム	スム
3	ブスム	ツム	スム
4	ブスム	ツン	セム
5	ゲズ	ツム	セム
6	ックニ	ツン	セム
7	クウシニ	ツウム	スイム
8	ティニ	ツムウ	シム
9	クスリ	ツェム	セム
10	クスヌツ	ツム	セム
11	クスヌ	ツム	シム
12	クンミ	ツム	スイム
13	クスムツ	ツム	ツイム
14	ツニ	ツム	セム
15	クム	ツム	シム
16	クスミ	ツム	セヌ
17	クム	ツム	セム

無声子音の後に中舌母音が続く場合として、*ki が含まれるもの 4 語について見てみる。そのうち、3 地点から音源を選択した「肝」では、一見して久貝には「ク」の後に「ス、ス」などを書いた回答が多く、語頭にプを選んだものも含めれば、10 名は語頭の子音の後に何らかの摩擦噪音が続くことを意識したものと見られる(表 33)。本調査の記録では、久貝については中舌母音の前に無声と有声の摩擦噪音を重ねており、摩擦音の強さ、長さを表記しようとの意図かと思われるが、高校生も同様に強い摩擦音に反応したものだろう。伊良部も国仲もともに、調査者の記

録では破擦音の後に中舌母音が表記されている。両者は記録者が別で表記も異なっているが、音声データによると国仲のはっきりした破擦音に比べ、伊良部は破裂部分が少し弱い。加えて、[国仲では [tsi]mu と頭高になっているのに対し、伊良部では [tsj]mu] のように尾高型となっている。高校生の回答では伊良部に対して、「サ、セ、シ」などのサ行子音が圧倒的で、破擦音は 1 例しか得られておらず、閉鎖部分の弱さだけでなく、アクセントの影響で第一音節が捉えにくかった可能性が高い。表 34 はこれらの相関関係をまとめたものである。

表 34 「肝」：3 地点相関

地点	久貝	国仲	伊良部	計
a	KS	C	S	7
b	KS	C	C	1
c	K	C	S	3
d	C	C	S	2
e	PS	C	S	2
f	CK	C	S	1
g	T	C	S	1
				17

(^gズ、ク^uシもクスと同じく
KS タイプとして分類した)

表 35 「霧」：17 名の全表記全表記

地点	久貝	保良
音形	ks̺i	k̺̥i:
1	クス	クス
2	クス	クス
3	プス	クス
4	プス	クフ
5	プス	クスウ
6	プス	クス
7	クス	クウス
8	クウス	クズツ
9	クス	クス
10	クス	クスウ
11	クス	ク ^u ス
12	クスウ	クスウ
13	クス	クス
14	クス	クスウ
15	クス	クウ
16	プス	クス
17	プス	クス

表 36 「霧」 2 地点相関

地点	久貝	保良	計
a	KS	KS	7
b	KS	Ki	1
c	KS	KiS	1
d	PS	KS	4
e	PS	KZ	2
f	PS	KF	1
g	KiS	KZ	1
			17

(小文字の i は任意の母音)

「肝」と同じく語頭に *ki を含む「霧」は⁶、久貝と保良の2地点の音源を使用した。両地点ともに摩擦噪音が耳立つ発音であるが、本調査の記録者は久貝について子音 [s] を独立的に認める表記、一方の保良は摩擦噪音を伴う母音という形である。興味深いことに高校生も、久貝についてはほぼ全員が「クス」もしくはそれに準ずる選択をしており、語頭が「プ」のものも含めれば全員が同じタイプとなる。カナ表記に統一したので、彼らが s の後の母音をどう認識したのかは不明であるが、保良の場合と比較すると摩擦音の強さに専ら注意が向いた可能性が高い。久貝では語末にわざわざ「ウ」を小さく表記したのが1例のみであるのに対し、保良では小さな「ウ」や「ツ」が増え、「ズウ」のような表記もある⁷。摩擦噪音を聞きながらも簡単に子音だけで終わっていないという印象を持ったのかもしれない。調査記録との関係から行っても、興味深い。

次に *ki が第二音節となる「月」「息」を見てみる。「息」については久貝と来間の2地点から音源を選択したが、「月」については久貝のみである。

「息」は、来間では2名のインフォーマントの音形が記録されているが、より閉鎖音の弱いほうを採用した（次ページ表 37）。この発音は高校生には閉鎖部分は聞き取られず、全ての回答で「ス」が選ばれている。

今回の調査で久貝の音源が多く含まれているのは、とくに摩擦噪音の聞き取られ方が関心の中心であったためである。そこで、これら4語の表記をまとめてみた（表 39）。久貝の強い摩擦噪音は「ス」や「ツ」などに反映されていると思われるが、「霧」「月」ではとくにそ

⁶ 本調査でも伊良部で k^hiri、上地で k̺i̺̥uri という音形が報告されているが、久貝、保良を含めたその他の地点では *kiri の後半部分を欠いたような対応であると見なした。

⁷ 小さいウによる表記は、宮古では中舌母音に対して円唇母音とわかるように表記するためによく使われているのを見ることができる（例：がんずう、など）。中舌母音を伴う場合にはス、ズのようにウは表記されないようだ。

表 37 「息」：17 名の全表記

地点	久貝	来間
音形	ik'i	i'si
1	イクズ	イス
2	イツ	イス
3	イップウ	イス
4	イフ	イス
5	イク	イス
6	イプク	イス
7	イク	イス
8	イクウ	イス
9	イク	イス
10	イクウ	イス
11	イク	イス
12	イユク	インス
13	イクズ	イス
14	イク	イス
15	ユツウ	リス
16	イプウ	イス
17	イクウン	イス

表 38 「月」：全表記

地点	久貝
音形	tskssu
1	ツンクス
2	ツクス
3	ツクス
4	ツクスウ
5	ツチャスウ
6	ツクス
7	ツウクス
8	ツウクスウ
9	ツクス
10	ツクツクスウ
11	—
12	ツクスウ
13	ツクスオ
14	ツクス
15	ツウクスウ
16	ツツス
17	ツクス

表 39 久貝の *ki をどう表記したか（17 名の全表記）

	語頭		語末	
	肝	霧	月	息
1	クス	クス	クス	クズ
2	ツ	クス	クス	ツ
3	プス	プス	クス	ップウ
4	プス	プス	クスウ	フ
5	ク	プス	スウ	ク
6	ツク	プス	クス	プク
7	クウ	クス	クス	ク
8	ティ	クウス	クスウ	クウ
9	クス	クス	クス	ク
10	クス	クス	クスウ	クウ
11	クス	クス	—	ク
12	ク	クスウ	クスウ	ユク
13	クス	クス	クスオ	クズ
14	ツ	クス	クス	ク
15	ク	クス	クスウ	ツウ
16	クス	プス	ツス	プウ
17	ク	プス	クス	クウン

表 40 久貝の *ki 摩擦噪音の有無

	肝	霧	月	息
あり	13	17	16	6
なし	4	0	1	11

（ここでは破擦音も摩擦性を含むものと見なした）

れがはっきりしている。聞こえ方は語の中の位置やアクセントの位置などにも左右されているようで、これだけのサンプルから結論付けることはできないが、高校生の耳には独立した子音として聞こえている可能性が高い。調査者の記録との関係からも、もう少しこの点を追求できればと思う。

3.2.3 「人」「昼間」「稲光」：*hi に対応する部分への反応

次に、*hi に対応する部分について見てみる。「人」「昼間」については久貝、伊良部の 2 地点の音源を用いた（表 41）。本調査の記録では伊良部も久貝と同じ表記になっているが、音声データを比べると、久貝の摩擦噪音ははるかに鋭く聞こえる。聞き取りの結果は、久貝については「ピ、プ」併せれば p- の後に摩擦噪音が続く発音がよく反映されており、それ以外のものは「ツ」が 1 例だけである。また後半部分は「トゥ」「ト」が大勢を占めている。それに対し伊良部については語頭を「ツ」としたものが 7 名、「ピ、プ」等を選んだものが 8 名、「ト」が 1 名と選択が分かれ、しかも後半部分についても「ト、トゥ」併せて 10 名のほかに、「テ、タ」などもあって一定していない。ちなみに、この後半部分の表記を見ると、久貝については 17 人中 12 名、表記がばらけた伊良部でも 8 名が小さい「ウ」を最後に付しており、円唇母音

表 41 「人」：17 名の全表記

	久貝	伊良部
音形	pstu	pstu
1	プストウ	プスト
2	ピツ	ピツ
3	ピストウ	プスタ
4	プストウ	プストウ
5	ピストウ	ピトウ
6	プスト	ツトウ
7	プストウ	トゥク
8	ピストウ	ツトウ
9	プストウ	ツテ
10	ピストウ	ピストウ
11	ピトウ	—
12	プストウ	ピュストウ
13	プスト	プスト
14	プストウ	ツトウ
15	ピトウ	—
16	ピウス	ツタ
17	ツウトツ	ツトウ

表 42 「人」：語頭の対比

人	ピス	プス	ピツ	ツ	無回答
久貝	5	8	1	1	0
伊良部	2	4	1	6	2

表 43 久貝の *hi をどう表記したか (17名の全表記)

	語頭		語中	
	人	昼間	老人	稲光
音形	pstu	psima	uipstu	m:napskaz
1	プストゥ	プスマ	ウミプトゥス	ンナプカズ
2	ピツ	プスマ	ウイピトゥ	ンーナツカズ
3	ピストゥ	プスマ	ウリピスト	ンナプスカズ
4	プストゥ	プスマ	ウィッピストゥ	ンーナプスカズ
5	ピストゥ	プスマ	ウイプストゥ	ンーナブカズ
6	プスト	プスマ	ウィプスト	ンーナプスカズ
7	プストゥ	プスマ	ウミプストゥ	ンナプスカズ
8	ピストゥ	ピシマ	ウイピストゥ	ンナピカズ
9	プストゥ	プスマ	ウィプスト	ンナブツカズ
10	ピストゥ	プスマ	ウイピストゥ	ンーナブカアズ
11	ピトゥ	プスマ	ウミピトゥ	ンーナブツカアズ
12	プストゥ	プスマ	ウイピストゥ	ンーナブカズ
13	プスト	プスマ	ウミプスト	ンーナプスカズ
14	プストゥ	プスマ	ウイプツ	ウンナツカズ
15	ピトゥ	プスマ	ウイピトゥ	ンナピカツ
16	ピウス	プスマ	ウグイクス	ンナブクスカズ
17	ツウトツ	ピスマ	ウウィップスト	ンナッピカズ

表 44 久貝の *hi：摩擦噪音に対応した部分の有無

	人	昼間	老人	稲光	回答数
a	○	○	○	○	7
b	○	○	○	×	5
c	×	○	×	○	2
d	○	○	×	×	1
e	×	○	○	×	1
f	×	○	×	×	1

表 45 「みんな」(17名の全表記)

地点	久貝	伊良部	宮国
	みんな	みんな	みんな
音形	m:na	m:na	m'naçi
1	ウムナ	ンナ	プンナシ
2	ンナ	ンナ	ピーンナシ
3	ンナ	ンナ	ピッナシ
4	ンナ	ンナ	インナシ
5	ンナ	ンナ	ンナシ
6	ンナ	ンナ	ンナシ
7	ンナ	ンナ	ピンナシ
8	ンナ	ンナ	ンナシ
9	ンナ	ンナ	ンナシ
10	ンナツ	ンナ	ンナシ
11	ンナ	ンナ	ンナシ
12	ンナツ	ンナ	ンナシ
13	ンナ	ンナ	ンナシ
14	ンナ	ンナ	ンナシ
15	ンナ	ンナ	ンナシ
16	ンナ	ンナ	インナシ
17	ンナ	ンナ	ンナシ

の u を強く意識した結果と推測される。

ほかに *hi に対応する部分を含むものとしては、「昼間」「老人」「稲光」がある。摩擦噪音がはっきりしている久貝の音源に対する表記をまとめると表 43 のようになる。4 地点のすべてについて摩擦噪音に対応したと思われる部分のある表記（表 44 の a、7 名）が半数近くを占めている。c 以下のケースは個人差によるものと推測されるが、b の「稲光」だけに摩擦噪音対応分を欠くタイプが 5 例になっているのは、何らかの音声環境の違いによるものかもしれない。

3.2.4 子音の聞き取り

前項の「稲光」では、調査記録にある語頭の成節的 m がすべて「ン」で表記されている。表 45 は、「みんな」（一部「みんな」）について選択した 3 地点についてまとめたものである。あえて「ム」を選んだのは久貝の「みんな」についての 1 回答だけのようで、伊良部・久貝の 2 地点についてはすべて「ン」となっている。宮国は間に声門閉鎖による区切りの聞こえるケースである。それ自体に反応したと見ることは難しいが、伊良部・久貝に較べると前半部分にいろいろな工夫が見られる。語頭が p- のものが 4 回答あるのも、声門閉鎖による区切りが次に来るために唇音 m の調音の際に力が加わり、それが無声の閉鎖音のように聞こえたのかもしれない。「ピッナシ」などはその予測を裏付ける回答のように見えなくもない。宮古島地域の若年層は仮にこれらの m を聞き分けていたとしても、表記の方法としては標準語と同じに「ン」しか書きようがないと考えているかもしれない、音の実態をどう捉えているかはわ

表 46 「海」：全表記

	保良
音形	im
1	イン
2	イン
3	イン
4	イヌ
5	イム
6	イン
7	イン
8	イン
9	イン
10	イツ
11	イン
12	ンユ
13	イム
14	イン
15	ビュ
16	イン
17	イン

表 47 「サトウキビ」 3 地点 17 名の全表記

	久貝	保良	伊良部
音形	bu:gʷi	bu:gʷi ~ bu:ɕi	bu:ɕi
1	ウーズ	ブーグ	ブーズ
2	ウーヅ	ブーク	ブーズ
3	ウォーイズン	ドゥーク	ブーグ
4	ウージン	ドゥーグ	ブーブ
5	ウーズ	ウークヌ	ヴーズ
6	ウィズン	ドゥーク	ブーグ
7	ウーイズ	ドゥーグ	ブーグ
8	ヴーズ	ドゥーグ	ブーズ
9	ウーイズ	ドゥーク	ブーグ
10	ボーイズ	ブーク	ブーグ
11	ウーイズ	ドゥーグ	ブーク
12	ウーズ	ブーグ	ブーグ
13	ウーズ	ブーグ	ブーグ
14	ウーズ	ドゥーグ	ブーズ
15	—	ドゥムク	ドゥーフ
16	ウグイズ	ドゥーグ	ウーズ
17	ウーズ	ブーグ	ブーグ

からない。この問題については「海」（保良の音源のみ使用）でもほぼ同じ結果となった。

本報告では以上、*ri, *ki, *hi に対応すると思われる音声を含むもの、及び成節的 m についての結果を紹介した。語の聞き取りはこのほか有声音 g- に中舌母音が続く場合や、*i に対応すると思われるものなどいくつかのデータが得られているが、ここで報告した *ki, *hi の場合に比べると回答がかなりばらばらで、高校生にとって聞き取りがより難しいと思われる結果となった。そもそも語頭の子音がばらばらで語の全体像がかなり離れてしまったり、また久貝のように摩擦雑音がはっきりしている発音でも子音の前に「イ」が挿入されるなど、無声子音の場合には見られなかった傾向が顕著となっている。

なお、語項目の意味理解度は総体的に非常に低く、意味についての言及があったのは「頭」（正解 2 名）「サトウキビ」（同 2 名）「お前」（同 4 名）「人（老人も含め）」（同 5 名）「みんな、みんな」（同 4 名）のみで、このうち複数地点からの音源がある場合にすべてで正解だったのは「頭」についての 1 名だけであった。

3.2.5 文項目の聞き取り結果

調査 1 の報告で、聞き取って書くのが困難と思われる文項目の回答が、少なくとも宮古島の高校生については予想外に健闘していることについて述べたが、調査 2 でも文項目の聞き取りは予想より原音に近く書かれていた。とくに、正解であったかどうかは別にして、意味に関する言及が語項目より多いことが目をひく。文項目を選ぶ際には「高校生」「制服」「校長先生」「茶」など、若年層でもすぐに理解できそうな単語の入っているものを意図的に取り上げ、馴染みのある単語が出てくることで意味記述が増えれば、逆に述語部分の理解度がどの程度であるかを見ることができるのではないかと考えた。ここでは意味について言及の多かった項目のうちから 2 項目について紹介する。

表 48 「高校生は制服を着る」(保良) 17 名の全表記

音形	ko:ko:ɕeija ɕeifku:du kʰ:	意味は？	「着る」部分
1	コーコセイヤー セイフクヲド プスー	高校生は 制服を 着けている	プスー
2	コウコウセイヤ セイフクヲトオ ツー	高校生は 制服を 着ている	ツー
3	コウコウセイヤ セイフクトゥ プスー	—	プスー
4	コウコウセイヤ セイフクオトゥ クスー	—	クスー
5	コウコウセイヤ セイフクヲドウ キヌウ	高校生は 制服を 着ている	キヌウ
6	コーコーセイヤ シェイフクウナ ツー	高校生は 制服を 着れ	ツー
7	コーコーセイ ヤ セーフクヲトゥー ツヅ	高校生は 制服を 着ける	ツヅ
8	コーコーセイヤー セイフクヲトゥー ツユー	高校生は 制服を 着る	ツユー
9	コーコーセーヤ セイフクドゥプスー	—	プスー
10	—	—	—
11	コウコウセイヤー セイフクヲドゥー、クスー	高校生は 制服を 着る—	クスー
12	ホウホウセイヤー シェイフクウトゥ クスー	高校生は 制服を きる	クスー
13	コウコウセイヤ セイフクヲドウ クスー	—	クスー
14	コウコウセイヤ セイフクヲトゥ ピスー	高校生が 制服を 着る	ピスー
15	コウコウセイヤセイフクヲトクスー	高校生は 制服を 着る	クスー
16	コーコーセイヤー セイフク トゥオ スー	—	スー
17	コーコーセイヤセイフクトゥプスウ	—	プスウ

表 49 「茶はさっき飲んだ」(砂川) (保良) 17 名の全表記

音形	tʃa:ja nnamadu numtaʰi	意味は？	「飲んだ」部分
1	チャーヤ ンナマズヌンタン	—	ヌンタン
2	チャーヤ、ンナマド ノンター	あの人は今まで飲んでた	ノンター
3	チャーヤ ナマズヌンタル	—	ヌンタル
4	チャーヤンナマドゥ ヌンタ	—	ヌンタ
5	チャーヤ イツフトゥ アスピタァ*	—	アスピタァ*
6	キヤーヤ ナマデ ヌンタル	茶がなまでぬるいよ	ヌンタル
7	チャーヤ ンナマドゥ ヌンタウ	—	ヌンタウ
8	チャー ヤンナマドゥ ヌンタウ	お茶を今まで飲んでた	ヌンタウ
9	チャーヤ ンナマドゥ ヌントウン	—	ヌントウン
10	—	あんたなんか今まで酒飲んでたな？	—
11	チャーヤ、ンナマドゥ ヌンタウ	今	ヌンタウ
12	チャーアアヤ ナマド ヌウンタウン	—	ヌウンタウン
13	チャーヤ ンナマドゥ ヌンタヴ	お茶を 今まで のんでた	ヌンタヴ
14	チャーヤ ンナマドゥー ヌーター	茶を今まで飲んでた	ヌーター
15	チャーヤンナマドゥヌンタ	お茶は今まで飲んでた	ヌンタ
16	チャーヤ ナマズ ヌンタン	—	ヌンタン
17	チャーヤナマドゥヌンタウ	—	ヌンタウ

*他の項目と混同した可能性があるがこのまま示す

上のように、述語部分の音形の再現となるとかなりばらばらではあるものの、「制服—着る」「茶—飲む」というような連想によって、音形はともかく意味内容を理解しようという意欲が強く働くのではないかと想像される。そして同様の行動は、少なくとも宮古島地域の若年層の場合、まだ方言を活発に活用している老年層との接触の中で自然に行われていることなのではないだろうか。仮に「着る」「飲んだ」の部分の語として提示された場合には、他の語項目同様、意味の理解度が低くなったかもしれない。述語部分だけでなく、助詞や「今」のような副詞も含めて文意の大凡が把握されているが、こうした要素も老年層との接触で出現頻度の高いものであると推測される。

4. おわりに

宮古島地域は南西諸島の中でも方言がよく保存されているとされる。沖縄県の中で特異な方言というイメージも定着しているようだ。宮古島の若年層自身も、地域の方言が独特であるという認識を持っていることは、これまでのわれわれの調査からも明らかになっている。しかし今回の結果から見る限り、方言音声の継承には多くの課題がありそうである。その一方で、個々の音声に対する認識が不十分でも、文として発信されれば何らかのヒントがその中にあり、状況などと併せてなんとなく意味がわかるという感覚は、恐らく高校生たちが日常祖父母などとの接触の際の体験によるものであろう。

このように、方言の継承を考える上で若年層と老年層の密接な接触は重要なポイントと思われる。表 50 は 2011 年の高校調査から、祖父母との同居についてきいた結果である。宮古島と伊良部島の間の地域的な差は大きいが、平均すれば 3 割の同居率となり、まだまだ接触の機会は少なくないと思われる。高校生によれば、祖父母の世代はまだ方言をかなり活用しているが、父母の世代になると標準語もしくは中間方言的な形の活用が増える。それでも父母らは祖父母らの方言を理解し、使うこともできるが、子供たちと話すときには殆ど方言を使用しないという。宮古群島でも核家族化が進行し、とくに平良のような市街地ではマンション等の共同住宅も増えて家族形態が急激に変化している。「なんとなくわかる」感覚のあるうちに方言音声に対する関心が育てば、方言の継承に期待が持てるのではないだろうか。そのためにも、一般的な使用に耐える表記方法の確立が待たれる。

今回の調査では本調査の成果により老年層の生の音声データの活用を試みた。従って録音状態がベストではないが、逆に言えば若年層が日常接する環境に近い。そうした中で、音声によっては地域的な変種もおおよそは聞き分けられており、また彼らなりの工夫も見えたことから、方言への関心そのものは衰えておらず、方策によっては継承の可能性もまだまだ小さくないと考える。

表 50 祖父母との同居について（2011 年 11 月調査より、計 130 名、父方 / 母方は区別せず）

高校	同居していない	近くに住んでいる	同居している	過去に同居していた	無回答など
A（宮古）高校	71.43%	1.79%	16.07%	3.57%	7.14%
B（伊良部）高校	46.67%	3.33%	46.67%	3.33%	0.00%
平均	59.05%	2.56%	31.37%	3.45%	4.65%

参考文献

- 青井隼人 (2012) 「南琉球宮古方言の音韻構造」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』
No.8, 99-113
- 小川晋史 (2011) 「これからの琉球語に必要な表記法はどのようなものか」『日本語の研究』
第 7 巻 4 号, 99-111

参考：分布図（本調査「音韻A」の結果より）細かい音声的特徴をまとめ、アルファベットの大文字で代表して示す

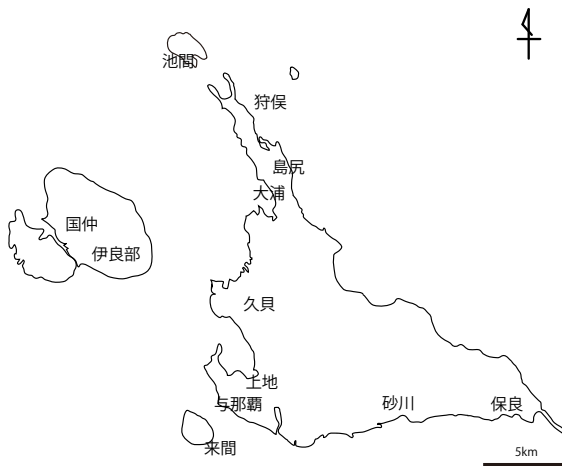


図1 音韻調査地点

池間	上地	国仲
狩俣	与那覇	伊良部
島尻	来間	
大浦	砂川	
久貝	保良	

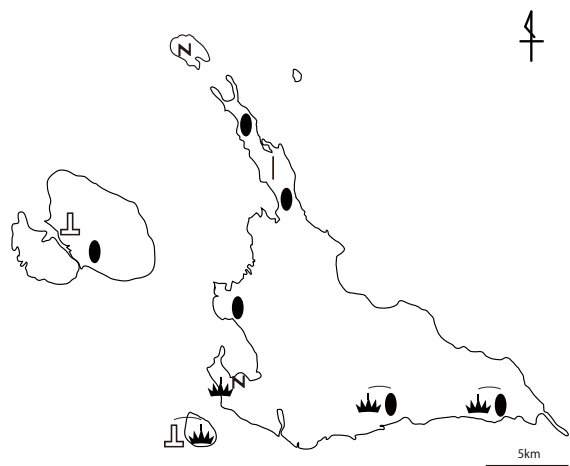


図2 「頭」

👑	摩擦噪音あり	KANAMAZ
●	摩擦噪音なし	KANAMAI
┆	成節的子音	KANAMAL
┆	別語形	
N	データなし	

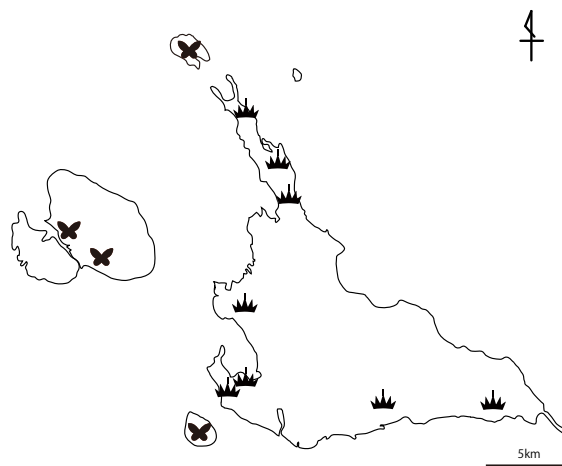


図3 「心臓」

👑	摩擦噪音	KSIMU
🦋	破擦音	CIMU

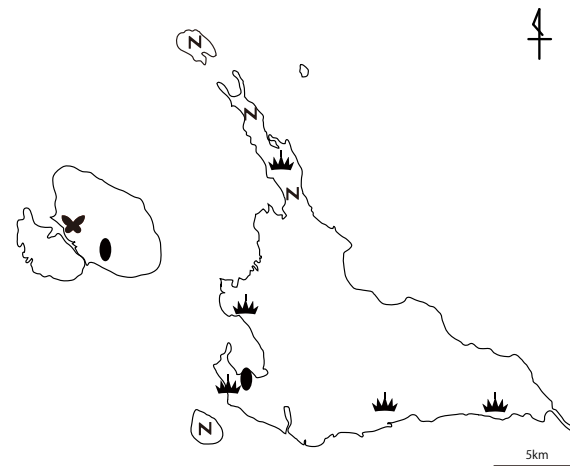


図4 「霧」

👑	摩擦噪音あり	KSI:
🦋	摩擦噪音なし	KIRI
●	破擦音	CI:
N	データなし	

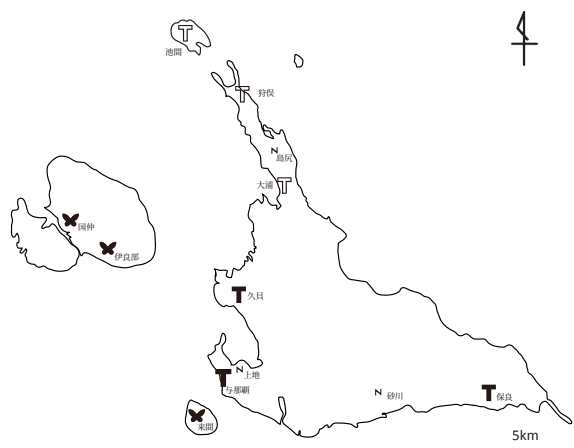


図5 「息」

T	摩擦噪音あり	IKSI
T	摩擦噪音なし	IKI
🦋	破擦音	ICI
N	データなし	

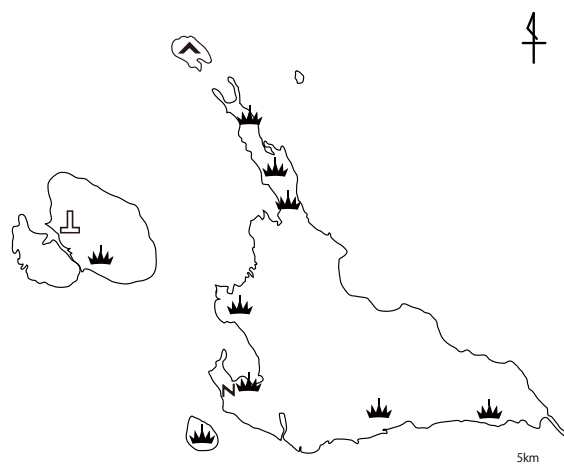


図6 「昼間」

👑	摩擦噪音あり	PSIMA
●	摩擦噪音なし	PI:MA
└	成節の子音	PII:MA
^	HI:MA	
N	データなし	

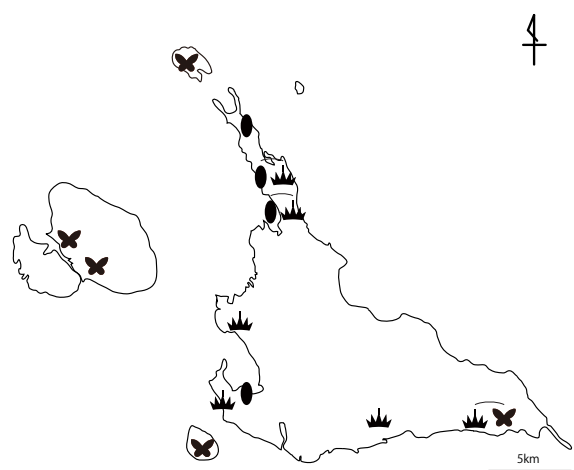


図7 「サトウキビ」

👑	摩擦噪音あり	BU:GZI
●	摩擦噪音なし	BU:GI
🦋	破擦音	BU:DZI

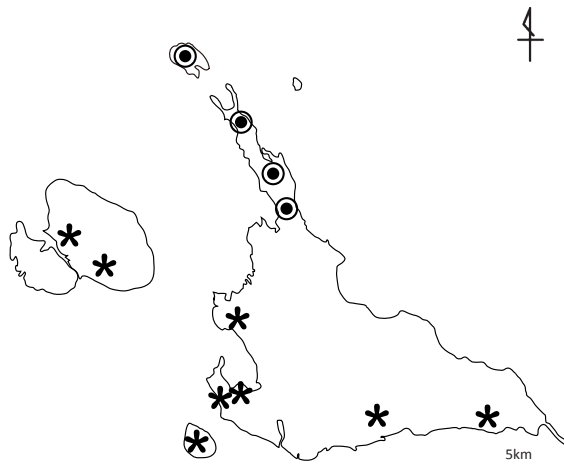


図8 「海」

*	IM
⊙	IN

5 宮古方言データ集

凡例および表記について

木部 暢子

1 表記の基本方針

2011年の宮古方言調査のうち、基礎語彙a, 基礎語彙b, 文法の調査データを以下に掲載する。それぞれの調査項目の内容と調査方法については、「2 調査の概要」を参照していただきたい。ここでは、調査データの表記法について述べておく。表記は以下のような方針で行っている。

- (1) 語形は国際音声記号で表記する。ただし、宮古方言の音の解釈をめぐることは、研究者の間で、さまざまな意見がある。それと並行して、表記法もさまざまである。本報告書では、それらを統一することはせず、各地点の調査担当者（グループ）が報告したそのままの表記を掲載している。
- (2) アクセントは表記しない。ただし、「基礎語彙b」の狩俣地区のデータのみ、調査者の報告に従って、アクセント符号を付けている。アクセント符号は、次のものを使用する。[ː]：音調の上がり目を表す。[ˑ]：音調の下がり目を表す。
- (3) 同一話者が複数の語形を回答した場合は、2つ（またはそれ以上）の語形を「/」で区切って併記する。同一話者の発音が揺れている場合は、2つ（またはそれ以上）の発音を「～」でつないで表記する。話者により語形が異なる場合は、2つ（またはそれ以上）の語形を「//」で区切り、それぞれの語形の発話者の氏名を[]に入れて示す。例えば、来間の[A], [B]は川満さん、玉城さんの発話であることを表す。また、地域により違いがあると回答された場合には、地域名を[]に入れて示す。例えば、保良の[保良], [新城]がそれに当たる。
- (4) 文法項目では、発音の揺れや複数語形の回答の範囲を{ }でくくって表す。例えば、「N-155B-2：池間：kju:ja {teŋkinu / suranu} baikariba tubimunumai tuban（今日は天気が悪いから飛行機は飛ばない）」は、「天気が」に対してteŋkinuとsuranuの2つの語形が回答されたことを表す。文単位で複数回答を示す場合は、2つ（またはそれ以上の）文を||で区切って表す。例えば、「N-155B-2：来間：k'ju:ja tintsɯnu baɰkariba ɕiko:k'a: tuban || k'ju:ja va:tstsɯnu janakariba ɕiko:k'a: tuban」は「今日は天気が悪いから飛行機は飛ばない」に対して2つの文が回答されたことを表す。
- (5) 語形に関するその他の情報は、()の中に入れて示す。また、関連する情報は<cf.>として示す。
- (6) [新], [古]は語形の新旧を, [誘導]は語形を誘導して得られた回答であることを表す。

2 調査者による表記の違い

上記(1)に述べたように、宮古方言の音の解釈と表記法については、さまざまな意見がある。本報告書では、それらを統一することはせず、各地点の調査担当者（グループ）が報告したそのままの表記を掲載している。いわゆる「中舌性母音」の表記についても、担当者（グループ）が報告した形をそのまま載せている。従って、調査地域により「中舌性母音」の表記が違っている場合、その違いは、必ずしも地域による発音の違いを表しているとは限らない。発音は同じでも、調査者（グループ）の音韻論的解釈が違っている可能性があるからである。文法項目の場合、「2 調査の概要」で述べたように、調査項目の前半、中半、後半で話者と調査者（グループ）が異なっている。それに伴い、「中舌性母音」の表記も前半、中半、後半で異なる場合がある。この場合も、表記の違いが必ずしも話者による発音の違いを表しているとは限らず、調査者（グループ）の音韻論的解釈の違いを表している可能性がある。本書を利用する際には、この点に十分、注意していただきたい。表1に調査担当者（グループ）ごとの「中舌性母音」の表記の特徴をあげておく。

表1 いわゆる「中舌性母音」の表記の違い

＜項目＞	＜地域＞	＜調査者＞	＜表記＞
基礎語彙 a	池間	ローレンス，荻野，平子，青井	: i̥
	狩俣	ローレンス，中澤	: i̥
	島尻	白田，ペラール	: ɿ
	大浦	林，竹村	: ɿ
	久貝	ローレンス，仲原，川瀬，久保蘭	: i̥
	与那覇	白田，小川	: ɿ
	上地	新田，井上，川瀬	: i̥
	来間	ローレンス，平子	: i̥
	砂川	狩俣，木部，平山，竹村	: ɿ
	保良	白田，徳永，ペラール	: ɿ
	伊良部	ペラール，竹村	: ɿ
	国仲	新田，中澤	: i̥
基礎語彙 b	池間	新田，平山，松浦，川瀬	: ɿ
	狩俣	中島，竹田	: i̥
	島尻	下地，林	: ɿ
	大浦	平子，久保蘭	: ɿ
	野原	野原，徳永，又吉，平山	: ɿ
	保良	新田，平子，中澤	: ɿ
	伊良部	木部，仲間(博)，當山	: ɿ

国 仲	： 諸岡，徳永	： i
文法（前）	： 池 間（野原，仲原，デイビス，内海）	： i
文法（後）	： 池 間：又吉，山田，白田，當山	： ɿ
文法（前）	： 狩 俣：仲原，松本	： i
（中）	： 狩 俣：仲間(恵)，デイビス，内海	： ɿ
文法（前）	： 久 貝：野原，林，仲間(博)，松本	： ɿ
文法（前）	： 与那覇：下地	： ɿ
（中）	： 与那覇：林	： ɿ
文法（前）	： 来 間：狩俣，内海，デイビス	： ɿ
（中）	： 来 間：金田，井上，竹田	： ɿ
文法（前）	： 宮 国：金田，竹田	： i・ɿ・i
（中）	： 宮 国：田窪，中島	： i
文法（前）	： 砂 川：仲間(恵)，井上，荻野	： ɿ
（中）	： 砂 川：西岡，内海，デイビス	： i
文法（前）	： 保 良：狩俣，當山	： ɿ
（中）	： 保 良：下地，諸岡	： ɿ
（後）	： 保 良：狩俣，金田，山田，諸岡	： ɿ
文法（後）	： 国 仲：中島	： ɿ

上の具体例を，基礎語彙 a，基礎語彙 b の中から抜き出して，表 2 にあげておく。文法項目については，「文法項目 データ」の右端の欄に調査者の頭文字を掲載しておいた。調査者の具体的な氏名については，表 1 を参照されたい。

表2 いわゆる「中舌性母音」を含む語

基礎語彙 a

子音	p	p,b	p,b	m	m
番号	a155	a169	a016	a087	a104
地域	昼間	冷たい	髭・毛	ウニなどの 肉・身	韭（にら）
池間	hi:ma	higurumunu	higi	mi:	mi:na
狩俣	psm̥a	bzguu	bzgu ~ bzgi ~ bi̯gi	mi:	mizza
島尻	p ^s naχa / p ^s ma	b ^z guru	b ^z gi	mi ^z l	mi ^z na
大浦	p ^s ma	b ^z gurukaŋ	p ^s gi ~ p ^l gi	mi ^l	mi ^l na
久貝	psima	psigurumunu	psgi	kaɕa ^t sanumiz	mizza
与那覇	p ^s ma	p ^s guru:nu	p ^z gi	m ^z :	m ^z :na
上地	p ^s ima	p ^s isa ~ p ^e isa	p ^e gi	mi:	miɕla ~ milna
来間	pssima	pzguro:	psgi	mī:	mī:na
砂川	p ^s l:ma	pšguru:pšguru	psgi ~ p ^s gi	mz:	n ^l ira / mi ^z na ~ mi ^l na
保良	p ^s l:ma	p ^s guru:nu	p ^s gi	m ^z :	s ^l una ~ s ^l una
伊良部	p ^s l:ma	p ^s gurumunu	p ^s gi / f ^ʊ ts ^l p ^s gi	mi ^l	nubi ^l
国仲	p ^h il:ma	p ^h igurumunu	p ^h gi	mi:	mi ^l na

子音	s	s	s	s	ts,s
番号	a003	a007	a008	a014	a032
地域	櫛	唇	舌	齒茎	膝
池間	f ^ʊ ɕi	f ^ʊ tsi	ɕta	haɕisi	s ^ʰ gusi
狩俣	f ^ʊ si = f ^w si	siba	ɕta	p ^h abasī	tsigasi / p ^h iɕa
島尻	ss ^l	^z lba	^z lɕa	p ^h abas(ɕ)	tugus ^l ~ tugas ^l
大浦	s: ~ s ^l :	NR	ɕda ~ ^z lɕa	p ^h a:nuni:	sugas ^l
久貝	fsi	siba	sida	p ^h asi ~ p ^h asi	tsigusi
与那覇	f ^s u	s ^z lba	s ^z lɕa	paz ^l s ^l	ts ^l gus ^l
上地	fu (ff か ?)	siba	sida	pasi:si	tsigusi
来間	f ^ʊ si	siba	sida	p ^h asi:sī	tsigusi
砂川	fɕ ~ f ^s ɕ ~ f ^ʊ s ^l	s ^h a ~ spa	s ^l da ~ s ^l da	pabas ^l ~ pabas	ts ^l gus ^l ~ ts ^l gus ^l
保良	f ^ʊ s ^l	s ^l ba	s ^l da	p ^h apas ^l ~ p ^h aɕas ^l	ts ^l gus ^l
伊良部	f ^ʊ s ^l	s ^l ba	sta	p ^h asi:s ^l	ts ^l gus ^l
国仲	fsu	sibaya	s ^ʰ iɕa (sta か)	—	tsigusi

子音	s	s	s	s	ɬ,z
番号	a078	a076	a122	a185	a002
地域	鳥の巣	豚などの肉	帯	村	髪 of 毛
池間	tuinusɪ:	sɪ:sɪ	sɯku: ~ sɯku:	mmariɬɪma	ki:
狩俣	sɪ:	sɪ:sɪ	sɪp ^h ugw	sɪma	karadɪ
島尻	ssɿ	ɕi:sɿ	safug ^ɰ ~ sapug ^ɰ	sɿma	k ^h aradɿ
大浦	sɿ:	sɿ:sɿ	subagɿ	sɿma	k ^h aradɿ
久貝	ssɪ	ɕi:sɪ	sɪpugz	sɪma	k ^h ara ^d zɪ
与那覇	tu:nussɿ	sɿ:sɿ	s ^ɰ pug ^ɰ	NR	k ^h ara ^d z
上地	tuɿ no si	si:si	supuɰw(supigi か)	NR	karadɪ
来間	t ^h uɿnussɪ	sɪ:sɪ	sɪpuɬɪ	bantaɬɪma	k ^h aradɪ
砂川	sɿ: ~ sɿ:	ɕi:s ~ ɕi:sɿ	sɸugz	sma ~ s ^ɰ ma	karadɿ ~ k ^h aradɿ
保良	sɿ:	sɿ:sɿ	spu ^d zɿ	sɿma	k ^h aradɿ
伊良部	sɿ:	sɿ:sɿ	sɿkub ^ɰ	sɿma	k ^h aradɿ
国仲	si:	si:si	sɯkub ^ɰ i ~ sɯkubi	mura	karadɪ

子音	ɬ	ɬ	ɬ	ɬ	ɬ,g,b
番号	a023	a024	a049	a067	a123
地域	肘	傷	妻	ミミズ	襟
池間	hiɬɪ	ndari	tudɪ	ɬɪmi:ɬɪ	tsɪnnufudɪ
狩俣	piɬɪ	NR	tudɪ	mi:miɬɪ	fugw
島尻	piɬɿ	k ^h iɬɿ	t ^h uɬɿ	mi:miɬɿ	fug ^ɰ
大浦	p ^h iɬɿ	k ^h iɬɿ	t ^h u ^d ɬɿ	mi:ma ^d ɬɿ	fugɿ
久貝	p ^h iɬɪ	k ^h iɬɪ	t ^h uɬɪ	mi:mi ^d ɬɪ	k ^s ɪnnufugz
与那覇	p ^h iɬɿ	k ^h iɬɿ	t ^h uɬ ^ɰ	mi:mi ^d ɬɿ	fug ^ɰ
上地	piɬɪ	kiɬɪ	midum ~ miðum	mimiɬɪ	fugw (fugi か)
来間	piɬɪ	NR	midumu	mi:miɬɪ	fudɪ
砂川	pi ^ɰ ɬɿ ~ piɬɿ	ki ^ɰ ɬɿ ~ kiɬɿ	tudɿ	mindɿ	eri
保良	p ^h i ^d ɬɿ	k ^h i ^d ɬɿ	t ^h uɬɿ	mimɬɿ	fugɿ~fuɬɿ
伊良部	p ^h iɬɿ	k ^h iɬɿ	t ^h uɬɿ	mimiɬɿ	k ^h ub ^ɰ
国仲	p ^h iɬɪ	k ^h iɬɪ	tɯɬɪ	ɬimiɬɪ	fudɪ

子音	ɖ	ɖ,g	ɖ,g	ɖ,g	ɖ,g
番号	a127	a091	a118	a116	a033
地域	水	砂糖黍	釘	鋸	あし(脚)
池間	miɖi	bu:ɖi	kanifuɖi	nukuɖi	haɖi
狩俣	mi(d)zi	bu:gi	fugi ~ fugu	nukagi	p ^h agu
島尻	miɖɿ	bu:gi ~ bu:gɿ	fugɿ	nukagɿ	p ^h agi ~ p ^h agɿ
大浦	miɖɿ	bu:gi ~ bu:gɿ	k ^h anifugɿ	nukagɿ	p ^h agi ~ p ^h agɿ
久貝	miɖi	bu:g ^z i	k ^h anifugz / fugz	nukugz	p ^h aɖi
与那覇	mi ^d ɿ	bu:gɿ	fugɿ	nukugɿ	p ^h agɿ
上地	miɖi	bu:gi	fugi	nukugi ~ nufugi	pagi
来間	miɖi	bu:ɖi	fudzi / k ^h anfuɖi	nukuɖi	p ^h aɖi
砂川	miɖɿ	bu:gɿ	fugɿ	nukugɿ	pagɿ
保良	mi ^d ɿ	bu:g ^z i ~ bu:ɖi	fugɿ	nukugɿ	p ^h a ^d ɿ ~ p ^h agɿ
伊良部	mi ^d ɿ	bu:ɖi	fudɿ	nuk ^h aɖi:	p ^h aɖi
国仲	miɖi	bu:ɖi	kanifuɖi / fudzi	nuk ^h uɖi	pazi (paz 力)

子音	ɖ,g,b,ts	ɖ,g,b	ts	ts	ts
番号	a010	a122	a006	a025	a031
地域	欠伸	帯	口	血	乳
池間	afuɖi	suku: ~ si ^h ku:	futsi	akatsi	tsi:
狩俣	afu	si ^h pu ^h gu	futsi	ha:tsi	tzi:
島尻	afk ^z i ~ afk ^s i	safug ^z i ~ sapug ^z i	ftsɿ	aχatsɿ	tssɿ
大浦	NR	subagi	futsɿ	ha:tsɿ	tsɿ
久貝	afug ^z i	si ^h pu ^h g	ftsɿ	akatsi	tsi ^h
与那覇	afuk ^z i	s ^h i ^h pu ^h g ^z i	futsɿ	ak ^h atsɿ	tsɿ:
上地	akubi	supu ^h gu (supigi 力)	futsi	aχatsi ~ akatsi	tsi
来間	afuɖi	si ^h puɖi	ftsɿ	akatsi// a ^k xatsi	tsi // tssi
砂川	akubi ~ ak ^h ubi	spug ^z i	fts ~ ftsɿ	akatsɿ ~ ak ^h atsɿ	tsɿ:
保良	afutsɿ	spu ^d ɿ	futsɿ	ak ^h atsɿ	tssɿ
伊良部	akuv	ɿkub ^z i	futsɿ	aχatsɿ ~ ahatsɿ	tsɿ:
国仲	afutsi (aftsɿ 力)	sukub ^z i ~ sukubi	futsi (ftsɿ 力)	ak ^h atsi	tsi

子音	ts,s	ts	ts	ts	ts
番号	a032	a073	a125	a142	a150
地域	膝	角	火	月	道
池間	sīgusi	nnu	umatsi	tsitsi	ntsi
狩俣	tsīgasī / p ^h idza	ts _u u	umatsi	tskssu	ntsi
島尻	tugus ₁ ~ tugas ₁	ts ₁ nu	mmats ₁	tsk ₁ ~ tsk ^s ₁	nts ₁
大浦	sugas ₁	ts ₁ nu	mmo:ts ₁	tsk ₁	nts ₁
久貝	tsīgusi	tsīnu	umutsi	tskssu	mtsi
与那覇	ts ₁ gus ₁	ts ₁ nu	umats ₁	ts ₁ k ^s ₁ / ts ₁ k ^s ₁ nuju:	mts ₁
上地	tsīgusi	tsīnu	umatsi	ts ₁ k ₁ ju:	mtsi
来間	tsīgusi	tsīnu	umatsi	tsitsi// tsitsīnuju:	mtsi
砂川	ts ₁ gus ₁ ~ ts ₁ gus ₁	tsnu ~ ts ₁ nu	umats ~ umats ₁	tsk ₁	mts ~ mts ₁
保良	ts ₁ gus ₁	ts ₁ nu	mmats ₁	tsk ₁	mts ₁
伊良部	ts ₁ gus ₁	ts ₁ nu ~ ts ₁ no	umats ₁	ts ₁ su ~ ts ₁ tsu(?)	mts ₁
国仲	tsīgusi	tsinu	umatsi	ts ₁ ttu	ntsi

子音	ts	ts	k,ts	k,ts	k,ts
番号	a153	a115	a009	a030	a121
地域	露	福木	息	肝・心臓	着物
池間	tsi:	kutsigi	iki	tsimu (肝臓)	tsiŋ
狩俣	tsiju	p ^h ukagagi:	iku	k ^s imu	k ^s iŋ
島尻	tɕiv	k ^h upag ^z gi:	—	k ^s ₁ mu	k ^s ₁ ŋ
大浦	ts ₁ v	p ^h ukagi	ik ₁	k ^s ₁ mu	k ^s ₁ ŋ / fuku (服)
久貝	tsiv	p ^h ukadzgi:	ik ^s i	k ^{sz} imu	k ^s iŋ
与那覇	ts ^s ₁ v	p ^h ukugi:	—	k ^s ₁ mu/basana ₁	k ^s ₁ ŋ / k ^s ₁ munu
上地	NR	pukukugi	—	k ^s imu ~ k ₁ mu	k ₁ ŋ
来間	tɕuf	pukutsigi:	i ^t si // itsi	tsimu	tsiŋ
砂川	ts ₁ v ~ ts ₁ v	pukukuki:~ pukukugi	—	k ₁ smu ~ k ^s ₁ mu	k ₁ ŋ
保良	tsuv ~ ts ₁ v	fukukugi: [新]	ik ^s ₁	k ^s ₁ mu	k ^s ₁ ŋ
伊良部	ts ₁ v	kuputsigi	its ₁	ts ₁ muuts ₁ (心臓) /ts ₁ mu (肝)	t ^s ₁ ŋ
国仲	tuv	pukutsigi:	itsi	tsimu	tsiŋ

子音	k,ts	ゼ口	ゼ口	ゼ口	ゼ口
番号	a163	a081	a092	a001	a012
地域	昨日	魚	鎌	頭	顎先
池間	nnu	zzu ~ ɖu	zzara ~ ^d zara	kanamai	utugai
狩俣	ksɯ̥u	izu	izara	kanamaw ~ k ^h anamaï/aha	utugaw ~ tugai
島尻	k ^s ɿnu	zzu	zzara	aɣa	agu
大浦	k ^s ɿnu	ɿzu	^z ɿzara	k ^h anamaɿ	utuguɿ
久貝	ksinu	zzu	zzara	k ^h anamaz ⁱ	staguz
与那覇	k ^s ɿnu	zzu ~ ɿzu	zzara	k ^h anama ^z ɿ	st ^h uga ^z ɿ
上地	k ⁱ inu	ⁱ zzu	ⁱ zzara	kanamaɣe	agu
来間	tsino	zzɯ̥	zzara	k ^h anamaɿ // x ^h anamaz	s ^w tugaɿ
砂川	kʂnu:	zzu	zzara	k ^h anamaɣ ~ k ^h anamaɿ	agu
保良	k ^s ɿnu:	zzu ~ ɿzu	zzara	k ^h anama ^z ɿ ~ k ^h anamaɿ	agu / utugaɿ ~ utugaɖɿ
伊良部	tsɿnu:	^z ɿzu	ɿzara	k ^h anamaɿ (ɿ が l に聞こえることもある)	agu / utugaɿ
国仲	tsinɯ̥	(ⁱ)zzu:	ⁱ zzara	kanamaɿ	ɯ̥tugaɿ

子音	ゼ口	ゼ口	ゼ口	ゼ口	ゼ口
番号	a057	a066	a077	a082	a099
地域	姪	蟻	鳥	鱗	米
池間	m ^j u:i	akai	tui	tsi:ɖi / i:ki	mai
狩俣	m ^j u:i	ha:w	tuw	i:ki	mau
島尻	mju: ^z ɿ	aɣa ^z ɿ	t ^h u ^z ɿ	—	maɿ ~ ma ^z ɿ
大浦	m ^j u:ɿ	ha:ɿ ~ xa:ɿ	t ^h uɿ	—	maɿ
久貝	m ^j u:z	aɣa: ^z	t ^h uz	izki	namamaz / maz
与那覇	m ^j u: ^z ɿ (甥・姪)	aka: ^z ɿ	tu ^z ɿ	—	ma ^z ɿ
上地	mjuə ^z / mjuəffa	ak ^x a: ^z ɿ	tou	—	mal
来間	m ^j u:i ~ m ^j u:z	akaɿ // akaz	t ^h uz	izki	maz//maɿ
砂川	m ^j u:z	azgara	tuz	—	maz ~ maɿ
保良	m ^j u:ɿ ~ m ^j u: ^z ɿ	a ^z ɿgara // ak ^h a: ^z ɿ	t ^h uɿ	ɿ ^z :ki	ma ^z ɿ
伊良部	m ^j u: ^z ɿ	aha:ɿ	t ^h u ^z ɿ ~ t ^h uɿ	i ^z ɿkja	maɿ
国仲	mju: ^z ɿ ~ mju: ^z	aka: ^z ɿ	tɯ̥ɿ	iɿki	maɿ

子音	ゼ□	ゼ□	ゼ□	ゼ□	ゼ□
番号	a100	a103	a112	a120	a126
地域	椀	にんにく	実	針	灰
池間	makai	hi:	mi:	hai	karahai
狩俣	ma:u	p ^s i:	n:ta	p ^h au	karapau
島尻	maχa ₁ ~ maχa ^z ₁	p ^h i ^z ₁	mi ^z ₁ / na ^z ₁	pi ^z ₁	karapa ^z ₁
大浦	maka ₁	p ^h i ₁	na ₁	pi ₁	k ^h arapa ₁
久貝	mak ^h az ⁱ	p ^h iz	naz	piz	k ^h arap ^h az / p ^h az(i)
与那覇	mak ^h a ^z ₁	p ^h i ^z ₁	ki:nuna ^z ₁	p ^h i ^z ₁	k ^h arapa ^z ₁
上地	mak ^χ al	p ^h il / p ^h iltɕi ₁ kina	na ^z ~ naβ ~ nau	p ^h i ^z ~ p ^h iɿ ~ p ^h iũ	karap ^h aɿ ~ karap ^h a ^z
来間	maka ₁ // makaz	piz	(ki:nu) naz	p ^h iz	karaba ₁ // karabaz
砂川	makaz ~ [sic.]	pi ^z ~ pi ^z	naz	p ^h i ₁ z	karapaz
保良	maka ^z ₁	p ^h i ^z ₁	na ^z ₁	p ^h ja ^z ₁	k ^h arapa ₁ ~ k ^h arapa ^z ₁
伊良部	maxa ₁ ~ maha ₁	p ^h i ₁	na ₁	p ^h a ₁	k ^h ara pa ₁
国仲	maka ₁	p ^h il	na ₁	pa ₁	karapa ₁

子音	ゼ□	ゼ□	ゼ□	ゼ□	ゼ□
番号	a139	a143	a145	a148	a137
地域	光	東	西	左	稲光
池間	çikai	agai	i:	çidai	kannai
狩俣	pskaw	a:u	nisi	bīdaw ~ bzdaw	nnapskaw
島尻	pska ^z ₁	aβa ₁	i ^z ₁	b ^z ida ^z ₁	nnapska ^z ₁
大浦	pska ₁	(aga ₁ ~) a:ɿ	i ₁ / ni ₁	b ^z ida ₁	nnapɕka ₁ / k ^h anna ₁ (雷)
久貝	pskaz	aḡaz	i ^z	pzdaz	m:napskaz
与那覇	p ^s ka ^z ₁	aga ^z ₁	i ^z ₁	p ^s ida ^z ₁	nnap ^s ka ^z ₁
上地	p ^s kal	aɣal	l: (ɿ:カ)	pidal ~ pida	mnap ^s ɣal (1 は舌背)
来間	pska ₁	aga ₁ // agaz	i ₁ // iz	p ^h ida ₁ // psdaz	nnabi ₁ ka ₁ // nnapska ₁
砂川	pɕka ^z ₁	agaz	z:	pɕda ^z ~ pɕda ₁	nnapɕkaz
保良	pska ₁	aga ₁	i ^z ₁	p ^s ida ₁ ~ p ^s ida ^z ₁	nnapska ^z ₁
伊良部	p ^s ka ₁	a ^ɕ a ₁	i ^z ₁	p ^h idi ₁	mnapska ₁
国仲	pi ₁ ka ₁	aga ₁	i ₁	p ^s ida ₁	mnapika ₁

基礎語彙 b

子音	p	p	b	g,z,ɕ
番号	b013	b047	b111	b010
地域	筋（すじ）	昼	紙	脛・足（あし）
池間	hais	hi:ma (正午)	kabi:	hazɿ (膝から下)
狩俣	p ^s ikibaü	p ^s ima	kabi	pagi
島尻	p ^h aɕiɕɿ	pssuma ~ pɿsuma	kab ^z ɿ	karasɿni
大浦	pskipaɿ	p ^s ɿ:ma	kab ^z ɿ	pagɿ
野原	psɿkɿpaɿ (丁寧) ~ psɿkupaɿ (普通)	pɿru	kab ^z ɿ	pagɿ (足)
保良	p ^s kɿpaɿ ~ p ^s k ^z paɿ ~ p ^s kɿpaɿ ^z	p ^t si:ma	kabl ^z	pagw
伊良部	paztsɿ:	p ^s ɿ:ma	kabz	paz
国仲	paltsi:	pilma	kabi:	paɕi

子音	g,z	s	s	s	s
番号	b081	b012	b049	b052	b061
地域	麦（むぎ）	肩（かた）	星（ほし）	島（しま）	牛（うし）
池間	muzɿ	katamuɕi:	hoɕi	ɕima	uɕɿ
狩俣	mugi	katamusi	psi	ɕima / sima	usi / usi
島尻	mugz ~ mugɿ	ibira / k ^h ata	psɿ ~ puɿsɿ	sɿma	usɿ
大浦	mug ^z ɿ	katamusu	psɿ	sɿma	usɿ
野原	mug ^z ɿ (摩擦弱い)	kɕatamusɿ ~ kɕatamusɿ / kɕata	puɿsɿ	sɿma	usɿ
保良	mgɿ ^z	k ^h ata	psi ~ psɿ	sima	ussi
伊良部	nuz	kɕatamurasɿ	puɿ ~ puɿs	ɕma	usɿ
国仲	mugi	katamusu	puɿsi	sima	usi

子音	s	ts	ts	ts	ts
番号	b136	b076	b021	b022	b024
地域	下（した）	ソテツ	三つ	四つ	六つ
池間	ɕita/ɕita:ra	ttɕu:tsɿ	mi:tsɿ	ju:tsɿ	m:tsɿ
狩俣	sita:ra	sisudɕu / stitsw / ssudɕu	mi:tsi / mi:tsu	ju:tsi / ju:tsu	n:tsi / n:tsu
島尻	sta	NR	mi:tsɿ	ju:tsɿ	n:tsɿ
大浦	sta:ra	—	mi:tsɿ	ju:tsɿ	nntsɿ
野原	sɿta / sɿta:ra	sutitsɿ	mi:tsɿ	ju:tsɿ	m:tsɿ
保良	sɿta	ɕuk ^h atsi	mi:tsi	ju:tsi	mmtsi
伊良部	ɕta:ra	sditsɿ	mi:tsɿ	ju:tsɿ	m:tsɿ
国仲	sita:ra	sɕtetsi	mi:tsi	ju:tsi	m:tsi

子音	ts	ゼ口
番号	b033	b101
地域	五人	薬（くすり）
池間	itsunuçitu	fusui
狩俣	itsinuφtu / ?itsinuputu	φswi / φusujw
島尻	itsɿ nu ttu	ssuɿ
大浦	itsɿnupstu	fsui / ssui
野原	itsɿnupstu	fusu:ɿ
保良	guniŋ	fsi:z ~ fsiɿ ^z
伊良部	itsɿnu pstu	fɿz
国仲	itsunup ^s itu	φusul

そのほか、「a162 やに（来年）」「a172 ふに（船）」「b070 に（根）」「b74 たに（種）」「b083 ふにん（ミカン）」「b116 に（荷）」などの語の「に」も調査担当者により表記が異なる。これには、**ni**, **ɲi**, **nʲi** の 3 通りの表記が使われているが、この違いは発音の違いではなく、担当者の音韻論的解釈の違いであると思われる。調査者（グループ）による表記の特徴を表 3 にあげておく。

表 3 「やに（来年）」などの「に」の表記の違い

基礎語彙 a

地域	調査者	表記の特徴	a162	a172
			来年	船
池間	ローレンス, 荻野, 平子, 青井	ni	ja:ni	funi
狩俣	ローレンス, 中澤	ni	ja:ni	funi
島尻	白田, ペラール	ni	ja:ni	funi
大浦	林, 竹村	ni	ja:ni	funi
久貝	ローレンス, 仲原, 川瀬, 久保園	ni	ja:ni	funi
与那覇	白田, 小川	ni	ja:ni	foni
上地	新田, 井上, 川瀬	nʲi	ja:nʲi	funʲi
来間	ローレンス, 平子	ni	ja:ni	funi
砂川	狩俣, 木部, 平山, 竹村	nʲi	ja:nʲi	φunʲi
保良	白田, 徳永, ペラール	ni	ja:ni	foni
伊良部	ペラール, 竹村	ni	jaini	funi
国仲	新田, 中澤	ni	ja:ni	funi

基礎語彙 b

地域	調査者	表記の 特徴	b070	b074	b083	b116
			根	種	ミカン	荷
池間	新田, 平山, 松浦, 川瀬	ni	ni:	tani	fun ¹ u:	ni:
狩俣	中島, 竹田	ni	nibaɭ	tani	ɸniŋ/ɸniw/ɸn ¹ w	ni:
島尻	下地, 林	ɲi	ɲi:	tapi	fwnŋ	ɲimutsɯ
大浦	平子, 久保蘭	ni	ni:	tani	funi ¹ ɯ	ni:
野原	野原, 徳永, 又吉, 平山	ni	ni:	sani	funiŋ	ni:
保良	新田, 平子, 中澤	ni	ni:	t ^h ani	funiɭ ^z	ni:
伊良部	木部, 仲間(博), 當山	n ^ɲ i	n ^ɲ i:	tan ^ɲ i	f(u)n ^ɲ iz	n ^ɲ i:
国仲	諸岡, 徳永	n ^ɲ i・ni	ni:	tani	ɸun ^ɲ iu	ni:

文法

〈項目〉	〈地域〉	〈調査者〉	〈表記〉
文法 (前)	池 間	野原, 仲原, デイビス, 内海	: ɲi
文法 (後)	池 間	又吉, 山田, 白田, 當山	: n ^ɲ i
文法 (前)	狩 俣	仲原, 松本	: ɲi
	(中)	狩 俣: 仲間(恵), デイビス, 内海	: ni
文法 (前)	久 貝	野原, 林, 仲間(博), 松本	: ni
文法 (前)	与那覇	下地	: ni
	(中)	与那覇: 林	: n ^ɲ i
文法 (前)	来 間	狩俣, 内海, デイビス	: n ^ɲ i
	(中)	来 間: 金田, 井上, 竹田	: ni
文法 (前)	宮 国	金田, 竹田	: ni
	(中)	宮 国: 田窪, 中島	: ni
文法 (前)	砂 川	仲間(恵), 井上, 荻野	: ni
	(中)	砂 川: 西岡, 内海, デイビス	: ni
文法 (前)	保 良	狩俣, 當山	: n ^ɲ i
	(中)	保 良: 下地, 諸岡	: n ^ɲ i
	(後)	保 良: 狩俣, 金田, 山田, 諸岡	: n ^ɲ i
文法 (後)	国 仲	中島	: ni

宮古方言基礎語彙 a データ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a001	頭	kanamai	kanamaɯ ~ k ^h anamaï /aha (ɯ は非常に後ろ寄り。i は摩擦がない)	aɣa
a002	髪の毛	aka (体毛) / ki:	karadzï	k ^h aradzɿ
a003	櫛	fusi (feiにあらず)	fusi = f ^w si	ssɿ
a004	額	ftai (tは無気)	ftai	—
a005	涙	nada	nada	—
a006	口	futsi	futsi	fɬɿ
a007	唇	futsi	siba (「上唇」は wa:siba, 「下唇」は ştasiba	ʔba
a008	舌	sta	şa (「下」は sta:ra)	ʔda
a009	息	iki	iku	—
a010	欠伸	afudzï	afu	afk ^ʔ ~ afk ^h
a011	声	kui	k ^h ui	—
a012	顎先	utugai	utugaw ~ utugaï	agu
a013	顎 (の骨)	utugaibuni (「頬」は kamatsi)	kamagida	agubuni (「頬」は k ^h amatsɿ)
a014	歯茎	hadzisi	p ^h abasï (「歯」は p ^h a:)	p ^h abasɿ (「歯」は p ^h a:)
a015	首	fudzï / nudu	nubai	nubai
a016	髭・毛	higi	bzgu ~ bzgi ~ bigi	b ^ʔ gi
a017	腕	ti: (「手首」は kaina)	kaina	udzi (「肩」は ibira)
a018	力	taja	taja	ɬkara ~ ɬɿkara / t ^h aja
a019	脇の下	jakata	bagida	baksta
a020	指	ujubi	uɸi	uibi
a021	手	ti:	ti:	—
a022	拳	NR	NR	ɬɿfuŋ
a023	肘	hidzi	pidzi	pidzɿ
a024	傷	ndari	NR	k ^h idzɿ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a001	頭	k ^h anamaŋ	k ^h anamaz ⁱ	k ^h anamaŋ
a002	髪の毛	k ^h aradzŋ	k ^h ara ^d zī	k ^h ara ^d z
a003	櫛	s: ~ sŋ:	fsi (f は平唇)	fŋʊ
a004	額	fuŋtai ~ ftai	ftai	—
a005	涙	nada	nada / mi:nada	—
a006	口	fuŋtsŋ	fŋtsi	fŋtsŋ
a007	唇	NR	sība	s ^ʔ ba
a008	舌	ŋda ~ ^ʔ da	sīda	s ^ʔ da
a009	息	ikŋ / ikssu (息を)	ik ^ʔ i	—
a010	欠伸	NR	afug ^ʔ i	afŋk ^ʔ
a011	声	—	kui	—
a012	顎先	utugun (「えら」 k ^h ujun)	staguz (t は無気)	st ^h ugaŋ
a013	顎 (の骨)	NR (「頬」は k ^h amatsŋ)	agubuni (「頬」は k ^h amats)	k ^h amatsŋ
a014	歯茎	p ^h a:nuni:	p ^h asī ~ p ^h aŋsī	pazŋtsŋ
a015	首	nubaŋ (「のど」は nudu)	nubui / nudu (「首の後ろの方」を nudufugz)	nŋʊbui / fŋg ^ʔ (後ろの方)
a016	髭・毛	p ^ʔ gi ~ pŋgi	psgi (体毛も)	p ^ʔ gi
a017	腕	udi	t ^h i: / udi (「肩の痛み」を k ^h aina)	k ^h aina
a018	力	t ^h aja	tskara / t ^h aja	tsŋkara / t ^h aja
a019	脇の下	baksta	bak ^ʔ idana	bak ^ʔ da
a020	指	wi:bi	ujabi	uibi
a021	手	—	t ^h i:	—
a022	拳	NR	tsiftsim	t ^h iʊtsŋm
a023	肘	p ^h idŋ	p ^h idzī	p ^h idŋ
a024	傷	k ^h idŋ	k ^h idzī	jummai / k ^h idŋ (「できもの, はれもの」はnibuta)

番号	単語	上地	来間	砂川
a001	頭	kanamaŋe	k ^h anama[[A]// x ^h anamaz [B]	k ^h aŋamaz ~ k ^h anamaŋ
a002	髪の毛	karadzī	k ^h aradzī	karadzŋ ~ k ^h aŋadzŋ
a003	櫛	fu (fɸa?)	fuŋi	fɸ ~ fɸŋ ~ fuŋŋ (u は唇歯の接近音で母音の役割。・は前半が無声で遅れて有声の意)
a004	額	—	fteɸ	—
a005	涙	—	nada	—
a006	口	fuɸsi	fɸi	fɸ ~ fɸŋ
a007	唇	siba (「大きな口」 は ofɸsiba)	sība	sɸa ~ spa
a008	舌	sida	sīda	sɪda ~ sɪda (or sɪda)
a009	息	—	i'si [A]// itsi [B]	—
a010	欠伸	akubi	afudzī	akubi ~ akuɸi
a011	声	—	kui	—
a012	顎先	agu	s ^w tuga[(s ^w tugaz と発音しない) (「頬」 は k ^h amats)	agu
a013	顎 (の骨)	kamatsi (あご全体) / agubuni (あごの骨)	k ^h amagida(buni)	k ^h amagita ~ kaŋmagita
a014	歯茎	paɸi:sɪ (「歯」 は pa:)	p ^h asī:sī	pabasŋ ~ pabas
a015	首	nubuɸi	nubui / nudu	nubui
a016	髭・毛	p ^ɸ igi	psgi (体毛も)	psgi ~ p ^ɸ gi
a017	腕	udi / kaina (ひじより先) / ti: (手)	ude / k ^h aina (肘から手首まで)	kaina
a018	力	ɸikara / taja (「力が強い」 は tajaŋunu)	taja	taja
a019	脇の下	bakiŋa (bakiðaか)	bak ^ɸ ida [古] / bitta [新]	bakɸda
a020	指	uibi	u.ibi	ujubi ~ ujubɸi
a021	手	—	t ^h i:	—
a022	拳	ti:sim	tivɸsim	ɸadzŋfɸm ~ ɸadzŋfɸm
a023	肘	pidzi	pidzi	piɸdzŋ ~ pidzŋ
a024	傷	kidzi	NR	kiɸdzŋ ~ kidzŋ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a001	頭	k ^h anamaŋ ~ k ^h anamaŋ	k ^h anamaŋ (ɿ が l に聞こえることもある。以下同じ)	kanamaŋ
a002	髪の毛	k ^h aradzŋ	k ^h aradzŋ	karadzɿ
a003	櫛	fʊŋa	fʊŋa (ʊ は u ほど円唇性が強くなく ɿ と異なる)	fsu
a004	額	fʊtai	fʊtai	fʊtai
a005	涙	nada	nada	nada
a006	口	fʊtsa	fʊtsa	fʊtsɿ (ftsɿカ)
a007	唇	saba	saba	sɨbaɣa
a008	舌	sada	sta	sɨta (staカ)
a009	息	ikʰa	itsa	itsɨ
a010	欠伸	afʊtsa	akuʊ	afʊtsɨ (aftɨカ)
a011	声	k ^h ʊi	k ^h ui	kuɛ
a012	顎先	agʊ / ʊtʊgaŋ ~ ʊtʊgadʌŋ	agu / utugaŋ	uʔugaŋ
a013	顎 (の骨)	agʊ / 頬 k ^h amatsa	p ^h agita (「頬」は t ^h aa ^ʰ kamadʌŋ)	kamagita(buni) / kamagi(buni)
a014	歯茎	p ^h apasŋ ~ p ^h abʌsŋ	p ^h ʌsŋ:sa	—
a015	首	nʊbʊi	nudu / nubui	nuɖu
a016	髭・毛	p ^ʰ ʌgi	p ^ʰ ʌgi / fʊtsap ^ʰ ʌgi	p ^h ɨgi
a017	腕	ʊdi / k ^h aina (腕の付け根の背中側, 肩の近く)	k ^h aina	udi / katna (誘導)
a018	力	t ^h aja	t ^h aja (「強い」は t ^h u:munu)	taja
a019	脇の下	bak ^ʰ ada [保良] // bitta [新城]	batta	batta
a020	指	ʊibi	uibi ~ oibi	wuɰbi
a021	手	ti: / ʊdifʊdzŋ (手首)	t ^h i:	t ^ʰ i: / t ^ʰ ibira
a022	拳	t ^h iʊtsam ~ t ^h iʊtsam	t ^h iʊtsam	tizifumɿ ~ tizfumɿ
a023	肘	p ^h i ^d zŋ (「肘」を p ^h ittsʊ ~ p ^h i ^d zʊ)	p ^h idʌŋ	p ^h idzɨ
a024	傷	k ^h i ^d zŋ	k ^h idʌŋ	k ^h idzɨ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a025	血	akatsi	ha:tsi (「赤い」は ha:munu)	aχatsɿ
a026	膿	ŋ:ku	n:ku	—
a027	痒い	kaumunu	ko:gaŋ / paʃkʰo:munu (軽い痒さ)	—
a028	骨	huni	pʰuni	pʰuni
a029	腹 (はら)	bata	bada	—
a030	肝・心臓	tsimu (肝臓) (fu: (臓の一 つ))	kʰimu	kʰamu
a031	乳	tsi:	tzi:	tsɿ
a032	膝	siɡusi	tsiɡasi / pʰidza	tugusɿ ~ tugasɿ
a033	あし(脚)	hadzi	pʰagw / karasuni (脛)	pʰagɿ ~ pʰagʷ
a034	あし(足)	stabija (靴を履く部分)	pssa	pssabʷa / pssa (足の裏)
a035	あし(脛)	kuvva	kuʊʊa	kuvva ~ kuʊʊa
a036	くるぶし	amambuni	amambuni	—
a037	体	du:	du:	—
a038	肛門	tsi:nun	tsibirun	tsiburun
a039	屁	hi:	pʰi:	—
a040	辜丸	tani fugui	tʰani / fugaw (全体は fugazdani ~ fuguidani) (「男根」は mara)	—
a041	私	ba:	ban (bano:ba: (私は))	ban
a042	私たち	banti	banta	bantɕi
a043	お前	vva	ʊva (vは弱い)	vva
a044	お前たち	vvadu:	ʊata:	vvatɕi
a045	叔父	budza (親戚) / uja ~ uibituuja (年上の人) (buba (親戚の叔母) / ha:mma (年上の人))	budza (「叔母」は buba, 「年寄り男性」は ɕu:)	buda/budasa (「一番下の 叔父」 budaga: / 「一番上 の叔父」 upuzza / 「(叔 母」 buba ~ bubama)
a046	叔父たち	—	budzata	budata
a047	父	zza ~ dza	uja / iza (稀)	—
a048	母	mma	anna	—

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a025	血	ha:ʦɿ	akatsi	ak ^h aʦɿ
a026	膿	—	m:ku	—
a027	痒い	—	k ^h o:munu	—
a028	骨	p ^h uni	p ^h uni	puni
a029	腹（はら）	—	bat ^h a	—
a030	肝・心臓	k ^ɣ mu	k ^{sz} imu	k ^ɣ mu/basana
a031	乳	ʦɿ	ʦi:	ʦɿ:
a032	膝	sugasɿ	ʦi ^g usi	ʦa ^g ʊsɿ
a033	あし(脚)	p ^h agɿ ~ p ^h ag ^ɣ	p ^h adzi	p ^h ag ^ɣ
a034	あし(足)	pssa	psa	p ^ɣ ʂa / p ^ɣ ʂafu ^g ɣ (足首)
a035	あし(脛)	NR	kuvva (摩擦は強い)	k ^h ʊ:ʊa
a036	くるぶし	—	amambuni	—
a037	体	—	du:	—
a038	肛門	ʦiburuŋ	ʦibinum	ʦibinʊm
a039	屁	—	p ^h i:	—
a040	辜丸	—	t ^h ani (「男根」は mara)	—
a041	私	baŋ / ba: (私の) / baja (私 は)	baŋ	baŋ
a042	私たち	baga: / бага: (私達の)	banta	banta:
a043	お前	ʊʊa	vva	ʊʊa
a044	お前たち	ʊda ~ uda	vvata	ʊʊata:
a045	叔父	budza	budza	budza
a046	叔父たち	budza:ta	budzata:	budzat ^h a:
a047	父	—	a:za	—
a048	母	—	ani	—

番号	単語	上地	来間	砂川
a025	血	aχaṭsi ~ akaṭsi	akatsi [A]// a ^h xatsi [B]	akaṭsa ~ akaṭsa
a026	膿	—	m:ku	—
a027	痒い	—	koʔoko:	—
a028	骨	puni	p ^h uni	puni ~ p ^h uni
a029	腹（はら）	—	bata	—
a030	肝・心臓	k ^h imu ~ kimu	tsimu	k ^h smu ~ k ^h imu
a031	乳	tsi	tsi [A]// tssi [B]	tsa:
a032	膝	tsigusi	tsigusi	tsigusa ~ tsigusa
a033	あし(脚)	pagi	p ^h adzi	pagz
a034	あし(足)	p ^h idza / piṣa	p ^h adziḃzza	pssa ~ pssa
a035	あし(脛)	—	kuvva	kuyva ~ kuyva
a036	くるぶし	—	amambuni	—
a037	体	—	du:	—
a038	肛門	tsibinum	tsibinum	tsibinum
a039	屁	—	p ^h i:	—
a040	睾丸	—	t ^h ani / fugu[~ fuguz	t ^h ani ~ taŋi/fugu ^h (あまり使わない)
a041	私	du (長母音か?) / ban	baŋ	baŋ
a042	私たち	banta: (「同じ仲間」は du:θa: / dzara:ka)	banta:	bant ^h a
a043	お前	vva	vva	vva (vbaに聞こえるくらいの狭めがある感じ)
a044	お前たち	vvata:	vvata:	vvataja
a045	叔父	butsagama (budzagama もか)	budza, budzasa	budza ~ bu ^d za
a046	叔父たち	butsagamata: (budzagamata: もか)	budzata: / budzasata:	budzata: ~ bu ^d zata:
a047	父	—	uja	—
a048	母	—	anna	—

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a025	血	ak ^h aʔɬa	axaʔɬa ~ ahaʔɬa / ahamunu (赤い)	ak ^x aʔɬi
a026	膿	m:kʊ (「おでき」は nʊbʊta)	umku	ŋ:kʊ
a027	痒い	k ^h aʊkaʊ	k ^h oːmunu	kaʊmunu
a028	骨	p ^h ʊni ~ pʊni	p ^h uni	puni
a029	腹 (はら)	bata	bata	bata
a030	肝・心臓	k ^ɤ mʊ	ʔamuʊʔa (心臓) / ʔamu (肝)	ʔimu
a031	乳	ʔa / ʔssʊ (乳を)	ʔaː	ʔi
a032	膝	ʔagʊʔa	ʔagusʔa	ʔigusi
a033	あし(脚)	p ^h a ^d ʔa ~ p ^h ag ^ɤ	p ^h a ^d ʔa	pazi (paz力)
a034	あし(足)	pssa / k ^h arasʔni (脛)	pssafʊʔa	psafuzi
a035	あし(脛)	kʊvva / mʊmʊta (腿)	k ^h uvva	kʊʊʊa
a036	くるぶし	amambuni	amambuni	—
a037	体	dʊː	up ^h uduː	amambuni / dʊː
a038	肛門	ʔibirʊm	ʔibinum	ʔibinum
a039	屁	p ^h iː	p ^h iː	piː
a040	睾丸	t ^h ani (人間の) / fʊgʊʔa	fugu(ʔ)ʔa	fugul
a041	私	bʔaŋ / bʔaja (私は)	aŋ	baŋ
a042	私たち	bʔantaː / bʔantaːja (私たち は) / bʔantaga (私たちの)	duːga ^d ziːna / duː ^d ziːnaː / duː	duːta / aʊʔa / duʔa
a043	お前	vva ~ ʊva	jaː	ʊʊa
a044	お前たち	ʊvataː / ʊvataːja (お前た ちは)	iti	ʊʊato
a045	叔父	bʊ ^d ʔa / bʊ ^d ʔagama / sʊ ^d ʔa (兄さん)	budʔa	buda (「伯父」は up ^f ubuda / up ^f uoja, 「叔 父」は budagama)
a046	叔父たち	bʊ ^d ʔata	budʔati	budata
a047	父	zza (高齢の方のみ使う)	ʊja	uja / asa / ˈzza (平民)
a048	母	anna (祖母) は mma)	anna	anna (士族) / mma

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a049	妻	tudzī	tudzī	t ^h udzŋ
a050	美しい	aparagi (「美しい女」を aparagimiduŋ)	ap ^h aragi	—
a051	夫	butu	budu	butu
a052	夫婦	tudzibutu	mi:tuɾa	mju:tu / mju:taɾa
a053	子供 (子孫)	ffa	ffa	fa: / mmaga (孫)
a055	子供 (未成年)	jarabi	jarabi	—
a054	生まれる	mmarigamatado: (生まれ そうだ)	ffo: naʂgumuta (子を産む だろう)	mmariʔ / mmarigumata (生まれるべき)
a056	老人	uibitu	uipstu	—
a057	姪	m ^h u:i	m ^h u:i̥	mju:ʔ
a058	男	bikiduŋ	bigiduŋ	bikiduŋ
a059	女	miduŋ	miduŋ	miduŋ
a060	人	p ^h i̯tu ~ ɕtu ~ ɕto	pstu	ttu
a061	皆	m:nanai (皆で)	n:na	n:na
a062	蚊	kacɬaŋ	ga ^d zaŋ	gadaŋ
a063	蜘蛛	kumo	ku:	k ^h uma
a064	蜘蛛の巣	kumonuja:	ku·gasī̥	k ^h umanussŋ
a065	蝶々	ɬo:ɬo:	ɬo:ɬo:	ɬo:ɬo:
a066	蟻 (あり)	akai	ha:ɯ	aɣaʔ
a067	ミミズ	ɕimi:ɕi	mi:miɕi	mi:miɕŋ
a068	カタツムリ	harunna	n:na	nna / p ^h arinna (小さい種 類)
a069	猫	maju	maju	—
a070	鼠	jumunu	jamunu	jamunu
a071	馬	nu:ma	nu:ma	nu:ma

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a049	妻	t ^h u ^d zɪ	t ^h udzi	t ^h ɔdzɪ
a050	美しい	—	(花の場合は) k ^h agimunu / (人の場合は) aparagi	—
a051	夫	butu	but ^h u / biki ^ɾ a [古]	bɔt ^h ɔ
a052	夫婦	mju:tu	t ^h udzi ^ɪ butu / m ^j u:t ^h u	m ^j ɔ:t ^h ɔ / m ^j ɔ:tɔra
a053	子供 (子孫)	fa:	ffa	ffa
a055	子供 (未成年)	jarabi	jarabi [新]	—
a054	生まれる	mmari	mmari	mmari:
a056	老人	—	uipstu	—
a057	姪	m ^j u:ɪ	m ^j u:z	m ^j u:ɪ (甥・姪) / bikim ^j u:ɪ (甥) / midɔmɔm ^j u:ɪ (姪)
a058	男	bikiduɲ	bikidum	bikidɔmɔ
a059	女	miduɲ	midum	midɔmɔ
a060	人	pstu	pstu	p ^ɕ t ^h u
a061	皆	n:na	m:na	m:na
a062	蚊	ga ^d zaɲ / ga ^d zammu (蚊を)	gadzam	gadzam
a063	蜘蛛	k ^h umu	k ^h uv	k ^h ɔ: ~ k ^h ɔɔ (昆布と同じ)
a064	蜘蛛の巣	k ^h umunusɪ:	k ^h uvnuk ^h a:paz / k ^h uvnuga dzaparasi	k ^h ɔ:nɔssɪ
a065	蝶々	NR	tso:tso:	NR
a066	蟻 (あり)	ha:ɪ ~ xa:ɪ	aka:z (k ₂ = 後ろ寄りの k)	aka:ɪ
a067	ミミズ	mi:ma ^d zɪ	mi:mi ^d zi	mi:mi ^d ɪ
a068	カタツムリ	nna ~ n:na	m:na	nna / p ^h iɕinna (サザエ)
a069	猫	maju	maju	—
a070	鼠	jumunu	jumunu	jɔmɔnɔ / ɔjadza
a071	馬	numa	nu:ma	nɔ:ma

番号	単語	上地	来間	砂川
a049	妻	midum ~ miðum (女, 妻) (tudzi は沖縄本島の言葉)	midumu (t ^h udzi は使わな い)	tudʒɪ
a050	美しい	—	k ^h agi (花が) / ap ^h aragi (女 が)	—
a051	夫	bikidum ~ bikidzum	bikidumu (butu は使わな い)	but ^h u
a052	夫婦	mju:tu	m ^h u:tu	mju:t ^h u
a053	子供 (子孫)	ffa	ffa / ffa:ma	ffa
a055	子供 (未成年)	jarabi	jarabi	jarabi
a054	生まれる	naɕu:	naɕi(-du) / ffo:-du nas (子 を産む)	m̥marɪŋ
a056	老人	—	uipstu	—
a057	姪	mjuə ^z / mjuəffa (「姪つ 子」では z 落ちる)	m ^h u:i ~ m ^h u:z	m ^h u:z
a058	男	bikidum	bikidumu	bikidum̥ ~ bikidum̥
a059	女	midum ~ mi ^d ðum	midumu	midum̥
a060	人	pɪʃu	pstu	pstu ~ pstu
a061	皆	m̥:na	muztu (z はきしみ声の z) / m̥:na	m̥:na
a062	蚊	gadʒam	gadʒam	gadʒam̥
a063	蜘蛛	kumo (共通語形)	ja:barigaŋ	jamakuɔ ~ jamakuɔ
a064	蜘蛛の巣	ku:gasi (kaʃi は「糸」の 意)	ja:bari / ja:barigannussi	NR
a065	蝶々	tso:tso (共通語形)	tso:tso	tso:tso:
a066	蟻 (あり)	ak ^ʒ ɔ:l	aka [A] // akaz [B]	azgara
a067	ミミズ	mimidzi	mi:midzi	mindʒɪ
a068	カタツムリ	m̥:na	m̥:na	nna
a069	猫	—	maju	—
a070	鼠	jumunu	jumuna [A] // jumudʒa [B]	jumura
a071	馬	nu:ma	nu:ma	nu:ma

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a049	妻	t ^h udɯ	t ^h udɯ	tudzi
a050	美しい	ap ^h aragi	ap ^h aragimunu	kagimunu (美人) / aparagi
a051	夫	b ^u t ^h u	butu	bu ^u tu
a052	夫婦	m ⁱ u:t ^u ra	m ⁱ u:tura	mju:tu/ mju:tura / tudzi ^u tu
a053	子供 (子孫)	ffa	ffa	ffa
a055	子供 (未成年)	jarabi	jarabi	jarabi
a054	生まれる	mmari	mmari	m ^u mmari / (ffa)nasi
a056	老人	oipst ^u	uipstu ~ oipstu	ui ^u pi ^u tu
a057	姪	m ⁱ u:ɿ ~ m ⁱ u:ɿ	m ⁱ u:ɿ	mju:ɿ ~ mju:ɿ ^z
a058	男	bikid ^u m	bikidum	bikidum ^u
a059	女	mid ^u m	midum	midum ^u
a060	人	pst ^u	pstu	p ^h i ^u tu (ptuカ)
a061	皆	m:na	m:na	m ^u :na
a062	蚊	ga ^d zam	gadzam	kadam ^u
a063	蜘蛛	k ^h uɯ ~ k ^h uɯ / k ^h uɯvɯ ~ k ^h uɯvɯ (蜘蛛を)	NR	ja:kuɯ
a064	蜘蛛の巣	k ^h uɯvɯɯ:	NR	ja:kuɯnusi
a065	蝶々	p ^h abin (大きくて黒い)	ɬo:ɬo:	ɬo:ɬo
a066	蟻 (あり)	a ^ɰ gara [保良]// ak ^h a:ɿ [新城]	aha:ɿ	aka:ɿ
a067	ミミズ	mimidɯ	mimidɯ	dзимидзи
a068	カタツムリ	nna / ma:nna (小さい種 類) / parinna (稀)	ɬanami	pa ^u runna
a069	猫	maj ^u	maju	maju
a070	鼠	j ^u m ^u ɯɯ	jumunu	jumunu
a071	馬	n ^u :ma	nu:ma	nu ^u :ma

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a072	雄山羊	bikihindza / hindza (山羊) / mi:hindza (雌山羊)	bigipindza / pindza (山羊) / mi:bindza (雌山羊)	—
a073	角	nnu	ɬnu (n̥ は最初無声の意)	ɬnu
a074	尾	dzu:	dzu:	du:
a075	豚	wa:	wa:	ʋa:
a076	豚などの肉	si:si	mi:/ si:si (脂のない肉)	ɕi:ɾ
a077	鳥	tui	tuu	tʰuʔ
a078	鳥の巢	tuinusi: / tuinuja:	si:	sɾ
a079	卵	tunuka	tunuga	tʰunaɕa
a080	鳩	hatu	pʰatu	—
a081	魚	zzu ~ dzu	izu	zzu
a082	鱗	tsi:dzi / i:ki	i:ki	—
a083	亀	kami	kami	—
a084	蟹	kaŋ (「ヤシガニ」は makugaŋ)	kaŋ	kʰaŋ
a085	貝	nna	pɕinna (さざえ) (n:naはかたつむり)	piɕinna (さざえ) / tʰaɕanna
a086	ウニ (バフン ウニ)	uŋ / kaczĩsi	ju:uŋ / kacziki / bigiju:uŋ ~ bzgiju:uŋ / kaczikiju:uŋ	uŋ / aɕauŋ
a087	ウニなどの 肉・身	mi:	mi:	miʔ
a088	塩	ma:su	ma:su	—
a089	塩辛い	sukaramunu	sukuraŋ (karaŋは胡椒の 味)	—
a090	砂糖	sata	sata (「甘い」は a ^d zimaŋ)	—
a091	砂糖黍	bu:dzi	bu:gi	bu:ɡɾ ~ bu:ɡʔ
a092	鎌 (かま)	zzara ~ ^d zara (「斧」は ju:tsi)	izara	zzara
a093	食べる	faifiiru (食べてください)	fai (目上には ŋkegisamadzi)	fau
a094	食べ物	faimunu	faumunu	faumunu
a095	油	avva	aʋva	—
a096	粥	ju:	NR	juv

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a072	雄山羊	—	bikip ^h indza / p ^h indza (山羊) / mi:p ^h indza (雌山羊)	—
a073	角	ʦanu	ʦinu	ʦanɔ
a074	尾	dzu:	dzu:	dzɔ:
a075	豚	wa: (「牛」は usɔ)	va:	ʋa:
a076	豚などの肉	sɔ:sɔ (赤身)	miz (集合) / ɕi:si (部位ごと)	sɔ:sɔ
a077	鳥	t ^h uɔ	t ^h uz	tɔʔ
a078	鳥の巢	sɔ:	ssi	tɔ:nɔssɔ
a079	卵	t ^h unaka	tunak ^h a	t ^h ɔnaka
a080	鳩	—	m:batu (「燕」は p ^h aʔu)	—
a081	魚	ɔzu	zzu	zzu ~ ɔzu
a082	鱗	—	izki	—
a083	亀	—	k ^h ami	—
a084	蟹	k ^h aŋ	k ^h aŋ	k ^h aŋ
a085	貝	butara	kaigara (「かたつむり」は m:na)	k ^h aʔ
a086	ウニ (バフンウニ)	k ^h aʔsɔ	kadza'sa	uŋ (総称) / k ^h adzɔk ^s (バフンウニ)
a087	ウニなどの肉・身	miɔ	kadza'sanumiz	mʔ:
a088	塩	—	ma:su	—
a089	塩辛い	—	sukarasukara	—
a090	砂糖	—	sata (「甘い」は adzimamunu)	—
a091	砂糖黍	bu:gɔ ~ bu:gʔ	bu:gʔi	bu:gʔ
a092	鎌 (かま)	ʔzara	zzara	zzara
a093	食べる	fo:	foʔ	fo:
a094	食べ物	fo:munu	fo:munu	fo:mɔnɔ
a095	油	—	avva	—
a096	粥	juɔ	juv	jɔ:

番号	単語	上地	来間	砂川
a072	雄山羊	—	bikip ^h indza / p ^h indza (山羊) / mi:p ^h indza (雌山羊)	tsnu ~ tsɲu
a073	角	tsinu	tsinu	tsnu ~ tsɲu
a074	尾	dzu:	dzu:	dzu:
a075	豚	wa:	wa:	ʋa:
a076	豚などの肉	si:si (赤身) / avva (脂身)	si:si	ɕi:s ~ ɕi:sɪ
a077	鳥	tou	t ^h uz	tuzɿ
a078	鳥の巢	si / tuɿ no si (鳥の巢)	t ^h uɿnussi	sɲɿ ~ sɪ:
a079	卵	tunaka	t ^h unuka	tɯnaka
a080	鳩	—	p ^h atu / m:batu (山鳩) / aubatu (青鳩)	—
a081	魚	i ^h zu	zzuɿ	zzu
a082	鱗	—	izki (「ふけ」も)	—
a083	亀	—	k ^h ame	—
a084	蟹	k ^x aŋ (気音を伴う k か)	kaŋ	kaŋ
a085	貝	mɲa ~ mɿna	asaɿ ~ asaz (mɿna は貝の一種)	NR
a086	ウニ (バフン ウニ)	akxo:ŋ	uŋ (akaŋ, ffuŋ, bo:ɕiŋ がある)	uŋ
a087	ウニなどの 肉・身	mi:	mi:	mzɿ:
a088	塩	—	ma:su	—
a089	塩辛い	—	sukura	—
a090	砂糖	—	sata (「甘い」は azi ^h ma, azima)	—
a091	砂糖黍	bu:gi	bu:ɕi	bu:gɿ
a092	鎌 (かま)	i ^h zara	zzara	zzara
a093	食べる	fo:	ŋkjagisamatsi (目上に、食 べなさい) / fe: (目下に、 食べなさい)	fau ~ faʋ
a094	食べ物	fa'munu	foɿmunu	faumunu
a095	油	—	avva	—
a096	粥	juv / dzu:ɕwi (おじや)	juv	juvɿ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a072	雄山羊	b̥kipindza	bikipindza / p ^h indza (山羊)	bikipinda
a073	角	ʦɾɒʊ	ʦɾɒu ~ ʦɾɒno	ʦɾɒu
a074	尾	dʒɐ:	^d zu:	du: (「体」もdu:)
a075	豚	ʊa: ~ wa:(?)	wa:	wa:
a076	豚などの肉	ɾa:ɾa	ɾa:ɾa	si:si (赤身) (動物名で言うのが普通)
a077	鳥	t ^h ɒ	t ^h uʔ ~ t ^h u	tu
a078	鳥の巢	ɾa:	ɾa:	si:
a079	卵	t ^h ɒnaka	k ^h u:ga	tunuka
a080	鳩	m:batɐ ~ m:bɒtɐ	p ^h ɒtu	pata
a081	魚	zzɐ ~ ɾɐ	^ɾ zu	(ⁱ)zzu: (切った発音は[-ɬu])
a082	鱗	ɾ ^ɾ :ki	i ^ɾ kja	i ki
a083	亀	k ^h ami	k ^h a:mi	kami
a084	蟹	k ^h ɒŋ	k ^h ɒŋ	kaŋ
a085	貝	NR / pɛɛinna (さざえ)	pɛɛima / mna / nigo:(しゃこうがい)	sina
a086	ウニ (バフンウニ)	k ^h adɾak ^ɾ / ak ^h aɐŋ (非食用)	ohouŋ / k ^h a ^d ɾɒʦɾ	akaum / kadziɬi (シラヒゲウニ)
a087	ウニなどの肉・身	m ^ɾ :	mi	tsimu (ウニ) / mi:
a088	塩	ma:sɐ (ʊpɐʊʊ (潮))	ma:su	ma:su
a089	塩辛い	sɐkara (mɐnɐ)	sukaramunu	sukaramunu
a090	砂糖	sata ~ saɬa (「甘い」は a dɾama:)	sata	saɬa
a091	砂糖黍	bɐ:g ^ɾ ~ bɐ:dɾ	bu:dɾ	bɐ:dɾi
a092	鎌 (かま)	zzara	ɾara	ⁱ zzara
a093	食べる	faɐ / fa:di (食べよう)	fo: / fai(食べなさい)	fau
a094	食べ物	faɐmɐnɐ	faɐmunu	faɐmunu
a095	油	avva ~ aɐva	avva	aɐva
a096	粥	jɐv ~ jɐ	dzu:ɛa	ju:ɐ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a097	飯	munu (ご飯) (「おにぎり」を i: / maii:)	mišmau	mannuʔ (握り飯) / n:nuʔ (芋のお握り)
a098	味噌	nsu	nsu	nsu
a099	米	mai	mau	maʔ ~ maʔ
a100	椀	makai	ma:u	maχaʔ ~ maχaʔ
a101	茶碗	ʔabaŋ	ʔabaŋ	—
a102	(お茶を) 捨てる・こぼす	augi: / ʔtiru ~ stiru	stiru (捨てる)	aʊgiʔ / itaʔin
a103	にんにく	hi:	pʔi:	pʔiʔ
a104	韭 (にら)	mi:na	mizza	miʔna
a105	芽	mi:	bakami: / pʔaʔʔiki (発芽)	—
a106	瓜	ui (西瓜) / ŋgʔaui (胡瓜) / gaura (苦瓜)	uu (「苦瓜」は go:ra)	—
a107	畑	hai	pʔaʔagi / pʔari	pʔataki (pʔari はあまり使わない)
a108	野原・草原	nu:	nu:	nu:naχa / nu: / abarinu: (「荒れた畑」は abaribari)
a109	クワズイモ	bibi:gassa	biugassa ~ bʔu:gassa	bju:gassa
a110	木	ki:	ki:	ki:
a111	枝	juda	ida (juda とは言わない)	juda
a112	実	mi:	n:ta	miʔ / naʔ
a113	草	fuʔa (= fʷsa)	fuʔa / (家畜用) juʔsa	ssa
a114	植える	ibi: fi:ru (植えてください)	ibiru (植えろ)	—
a115	福木	kutʔigi (k は無気非喉頭音)	pʔuʔkagagi:	kʔupagʔgi:
a116	鋸	nukudʔi	nukagi	nukagʔ
a117	板	tana	ita	ita
a118	釘	kanifudʔi	fugi ~ fuguu	fugʔ
a119	大工	sajafu	sajafu	sajafu
a120	針	hai	pʔau	piʔ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a097	飯	NR	maz (「おにぎり」は nnaz)	NR (「にぎり飯」は ma ^ʔ nu ^ʔ)
a098	味噌	ntsɯ	msu	mtsɯ
a099	米	maŋ (ssumaŋ (白いご飯))	namamaz / maz	ma ^ʔ
a100	椀	makaŋ	mak ^h az ⁱ	mak ^h a ^ʔ
a101	茶碗	—	tɕ ^h abaŋ	—
a102	(お茶を) 捨 てる・こぼす	o:giŋ / skja:sŋ (ぐちゃぐ ちゃにする?)	stirɯ (捨てる)	o:gi / it ^h ati ~ itɕti
a103	にんにく	p ^h iŋ	p ^h iz	p ^h i ^ʔ (針も)
a104	韭 (にら)	mi ^h na	mizza	m ^ʔ :na
a105	芽	—	mi:	—
a106	瓜	—	uzgama (「苦瓜」は go:ra)	—
a107	畑	p ^h atagi / p ^h ari	p ^h ari	p ^h ari
a108	野原・草原	nu:	nu:	nɯ: (荒地)
a109	クワズイモ	biɯ (「クワズイモの葉」は biɯgasa~bju:gasa)	bivgasa	biɯgassa
a110	木	k ^h i:	ki·	ki:
a111	枝	ida	juda	jɯda
a112	実	naŋ	naz	ki:nuna ^ʔ
a113	草	ssa	fsa	fsa
a114	植える	—	ibiru (植えろ)	—
a115	福木	p ^h ukagi	p ^h ukadzgi:	p ^h ɯkɯgi:
a116	鋸	nukag ^ʔ	nukugz	nɯkɯg ^ʔ
a117	板	ita	itsa	NR
a118	釘	k ^h anifugŋ	k ^h anifugz / fugz	fɯg ^ʔ
a119	大工	sajafu	sajafu	sajafɯ
a120	針	piŋ	piz	p ^h i ^ʔ

番号	単語	上地	来間	砂川
a097	飯	NR / goharj (共通語)	maz (「おにぎり」は zz [古], nnari [新] (芋のも ご飯のも))	(maz, z: は使わない)
a098	味噌	mşu	m: su [A] // m: so [B]	mşu ~ mşu
a099	米	mal	maz [A] // mał [B]	maz, ~ mał
a100	椀	mak ^z al	makał [A] // makaz [B]	makaz, ~ [sic.]
a101	茶碗	—	tcabarj	—
a102	(お茶を) 捨 てる・こぼす	sitiru / sitirun	stiz	jaz, ~ stiz,
a103	にんにく	p ^h il / p ^h iltɕikina	piz (pil と発音しないとい う)	piz, ~ piž,
a104	韭 (にら)	miłɕla ~ miłna	mi: na	n ^h ira / mizna ~ miłna
a105	芽	—	mi:	—
a106	瓜	—	uz (「苦瓜」は go: ra)	—
a107	畑	p ^h ari	p ^h ari	paři paři
a108	野原・草原	nu:	t ^h usari (草ぼうぼうの土 地) / nu: (草の種類)	nu:
a109	クワズイモ	bivgassa	biv (その葉は bivgassa)	bivgassa
a110	木	ki:	ki:	ki: ~ ki:
a111	枝	juda	ida	juda
a112	実	na ^z ~ nał ~ nau	(ki: nu) naz,	naz,
a113	草	fuša	fsa	fša
a114	植える	—	—	—
a115	福木	pułkukugi (g に口蓋化な し)	pukutsigi: (bungi: と も?)	pułkukuki: ~ pułkukugi
a116	鋸	nukugi ~ nufugi	nukudzi	nukugz,
a117	板	jufa ~ juk ^z a (「壁板」は kabejuk ^z a)	itca	it ^h a, itsa
a118	釘	fugi	fudzi / k ^h anfudzi	fgz,
a119	大工	sajafu	sajafu	sajafu ~ sajafu
a120	針	p ^h iz ~ p ^h ił ~ p ^h ił [~] (にん にくと同じ)	p ^h iz (裁縫のは tsinnubiz)	p ^h iz,

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a097	飯	ʔaː / nigʔa (おにぎり)	maɪnuɪʔː / um	maɪnuʔi (おにぎり) (「米の飯」の意)
a098	味噌	mtɕɯ	msu	nʂu
a099	米	maʔa	maɪ	maɪ
a100	椀	makaʔa	maxaɪ ~ mahaɪ	makaɪ
a101	茶碗	tɕabaɲ	tɕabaɲ	—
a102	(お茶を) 捨てる・こぼす	itaʔi	waːgiɪ / itakiɪ	itaʔiɪ (誤ってこぼす) / itaʔiːsitiɪ
a103	にんにく	pʰiʔa	pʰiɪ	pʰiɪ
a104	韭 (にら)	ʂaɯna ~ ʂaɯna (「ねぎ」は maɪzna)	nubiɪ (「ねぎ」は ʂaɯmaɪna)	miɪna
a105	芽	miː	bahabura / miː	uju / wakameɕ
a106	瓜	ɕʔa	uʔa	uɪ (「苦瓜」は gaɔra)
a107	畑	pʰari	pʰataki / pʰaru	paʔaki
a108	野原・草原	nɕː	nuː	nuɪ
a109	クワズイモ	biɯgasa	biɯgassa	biɯgassa
a110	木	kʰiː	kʰiː	kiː
a111	枝	jɕda	ida	juda
a112	実	naʔa	naɪ	naɪ
a113	草	fɕʂa	fɕʂa	fʂa
a114	植える	ibi / ibiɕ (命令形?)	ibiɪ	—
a115	福木	fɕkɕkɕgiː [新]	kuputsɕgi	pɕkɕtsigiː
a116	鋸	nɕkɕgʔa	nukʰadʒaː	nɕkɕdʒi
a117	板	itsa [保良]// ita [新城]	itsa	ita
a118	釘	fɕgʔa	fudʒa	kanifudʒi / fudʒi とち
a119	大工	sajafɕ	sajafu	saɪfu ~ sajafu
a120	針	pʰjaʔa	pʰaɪ	paɪ

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a121	着物	tsiŋ	kʰiŋ	kʰiŋ
a122	帯	sukuː ~ si̯kuː	si̯pʰugɯ	safugʷ ~ sapugʷ
a123	襟	tsinnufudzī	fugɯ	fugʷ
a124	鏡	kagaŋ	kʰagaŋ	kʰaʷaŋ
a125	火	umatsi	u̯matsi	mmatsɔ
a126	灰	karahai	karapaɯ	karapaʷ
a127	水	midzī	mi(ᵀ)zi	midzɔ
a128	濡れる	mmi(j)ui (濡れている)	mmi-	mːmi
a129	風	kʰadi	kʰadzi	kʰadzi
a130	竜巻	amaunau	inoː	amainoː
a131	地震	nai	naɯ	nai
a132	雲	m̥mu(「雨雲」は amimmu)	fumu	fuma(「空」は ɬiŋ)
a133	雨	ami	ami	—
a134	虹	NR	oːnatsi (青大将も)	NR
a135	色	iru ~ iro	iru	—
a136	青い	aumunu	oː	aukaŋ(「黒い」 ffu, 「赤い」 aɣa)
a137	稲光	kannai	nnapskaɯ	nnapskaʷ
a138	眩しい	mi̯ɸu̯taimunu ~ mi̯p̥ɸu̯taimunu	mipadaːsimunu	miːputɕikaŋ
a139	光	ɕik̚ai	pskaɯ	pskaʷ
a140	蔭	kagi	kagi	kʰagi
a141	太陽	tida	tida	ɬida
a142	月(天体・暦)	tsi̯tsi(「一ヶ月」を ɕi̯totsi̯tsi)	ɬkssu	ɬkɔ ~ ɬkʷ(「来月」は ŋgitantɬkɔ, 「先月」は kʷɬkɔ)
a143	東	agai	aːɯ / 「東風」 aːgadzi	aʷaŋ
a144	北	ni̯ci	ui / 「北風」 uigadzi	ui
a145	西	iː	ni̯si / 「西風」 niskadzi	iʷ
a146	南	haibara	pʰai / 「南風」 pʰaigadzi	pʰai
a147	右	migi	ŋgɯ	ŋgʷ

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a121	着物	kʰaŋ / fuku (服)	kʰiŋ	kʰaŋ / kʰamʊnʊ
a122	帯	subaŋ	sipugz	sʰipʊgʰ
a123	襟	fugʰ	kʰinnufugz	fʊgʰ
a124	鏡	kʰagaŋ / kʰagammu (鏡を)	kʰagam	kʰagam
a125	火	mmo:ʦʰ	umuʦi	ʊmaʦʰ
a126	灰	kʰarapaŋ	kʰarapʰaz / pʰaz(i)	kʰarapaʰ
a127	水	midʰ / mitʦu (水を)	midʰi	miʰʰ
a128	濡れる	mmiŋ / mminja:ŋ (濡れてしまった)	mmi	mmi:
a129	風	kʰadʰi	kʰadʰi	kʰadʰi (「火事」も同じ)
a130	竜巻	amaino:	ama.ino:	amaino:
a131	地震	nai	nai	nai
a132	雲	kʰumu	fumu	fʊm
a133	雨	—	ami	—
a134	虹	timpau ~ timpau (pau は「ヘビ」)	tʰimbav	timpau ~ timpau
a135	色	—	iru	—
a136	青い	o:o: / o:munu / o:kaŋ	o:	o:nʊ
a137	稲光	nnapʰakaŋ / kʰannaŋ (雷)	m:napskaz	nnapʰakaʰ
a138	眩しい	mipudasʰmunu	makʰi:maks	mipʰʊʦaʰnʊ
a139	光	pskaŋ	pskaz	pʰʊkaʰ
a140	蔭	kʰagi	kʰagi	kʰagi
a141	太陽	tʰida	tʰida	tʰida
a142	月(天体・暦)	ʦkaŋ	ʦkssu	ʦkaʰ / ʦkaʰnʊʦʰ:
a143	東	(agaŋ ~) a:ŋ	ag⁻az (g⁻ = 後ろ寄りのg) / 「東風」 ag⁻azkʰadʰi	agaʰ
a144	北	tʰuranpa: / ni:nupa:	nisi ~ nsi / uinagi / 「北風」 nsikʰadʰi	nisi
a145	西	iŋ / nisi	iʰ / 「西風」 iʰkʰadʰi	iʰ
a146	南	mmanupa: / pʰai	pʰai / 「南風」 pʰaikʰadʰi	pai
a147	右	n:ŋʰ	ŋgz	ŋgʰ

番号	単語	上地	来間	砂川
a121	着物	kɪŋ	tsɪŋ	kʂɲ
a122	帯	supuɣu (supigi か)	sɪpuɖzi	spugzɿ
a123	襟	fugu (fugi か)	fudzi	eri
a124	鏡	kagamɿ	kagam	kagamɿ
a125	火	ɯmatsɪ	umatsɪ / pʰɪ [古]	umats ~ umatsɪ
a126	灰	karap ^h aʌ ~ karap ^h aʑ	karabaʌ [A]// karabaz [B]	karapazɿ
a127	水	midzi	midzi	midzɪ
a128	濡れる	mɪmidu ~ mɪmiðu	mɪmi:(du:)	mɪmi
a129	風	kadzi	k ^h adzi	kadzi
a130	竜巻	amainou ^ʊ	ama.ino:	amainau
a131	地震	nai	nai	nai
a132	雲	kumu / fumu (誘導)	fumu	ɸuɰmu
a133	雨	—	ami	—
a134	虹	timbau (pau は「蛇」)	nidzi (timbav は死語)	timbaʊ ~ timpau
a135	色	—	iru	—
a136	青い	o:か (「青空」は o:diŋ , 「青海」は o:umi)	au / auiru	au ~ aʊ
a137	稲光	mɲap ^ʰ ɣal (1 は舌背)	nnabikaʌ [A]// nnapskaʌ [B]	nnapʂkazɿ
a138	眩しい	mɪptuʊʑ/ mɪptɰ	mi:pɯtiʌ [A]// mi:pɯtiz [B]	mɪpɯtuɪ
a139	光	p ^ʰ kal	pskaʌ	pʂkazɿ
a140	蔭	kagi (やや中舌的)	kagi	kagi ~ kagi
a141	太陽	tɪda (「ひなた」は p ^ʰ imu)	tida	tɪda ~ tida
a142	月(天体・暦)	tsɪkiju:	tsitsi [A]// tsitsinuju: [B]	tskɿ
a143	東	aɣal	agaʌ [A]// agaz [B]	agazɿ
a144	北	ninupa / nisi	nisi	nɪɪ ~ nis
a145	西	ɪ: (ʌ:か)	iʌ [A]// iz [B]	zɪ:
a146	南	p ^h ai	p ^h ai	p ^h ai
a147	右	ŋgi	ndzi	ŋgzɿ

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a121	着物	kʰɿŋ	tʰɿŋ	tsɿŋ
a122	帯	spɯʔɰ	sɿkubʰɿ	sɿkubʰɿ ~ sɿkubʰi
a123	襟	fɯŋ ~ fɯɰ	kʰubʰɿ	fudʑi
a124	鏡	kʰagam	kʰaaʼm	kagamɿ
a125	火	mmatsɿ	umatsɿ	ɯmatsɿ
a126	灰	kʰarapaɿ ~ kʰarapaʰɿ	kʰara paɿ	karapaɿ
a127	水	miʔɰ	miʔɰ	midʑi
a128	濡れる	mmi:	mmi: / ni:ŋ (ぬれてしまった) / mnuddo (ぬれるよ)	m̥mi
a129	風	kʰaʔɰ	kʰadʑi	kadʑi
a130	竜巻	amaino:	amaino:	amaɪnaʊ
a131	地震	nai	nai	dʑiɿŋ / nai (誘導)
a132	雲	fɯmɯ	fumu	fumu
a133	雨	ami	ami	—
a134	虹	tʰimbaʊ ~ tʰimbaʊ (pav ~ pauは「蛇」)	tʰimbav (pʰav は「ヘビ」)	tsimbaʊ (tsɿŋ は「空」、pau は「蛇」)
a135	色	iru	iru	—
a136	青い	aʊaʊ / aʊka:	o: / o:iro / o:hriɸa / o:haɿ	aũ
a137	稲光	nnapaskaʰɿ	mnapskaɿ	m̥nabikaɿ
a138	眩しい	mipɯtɯ / mipɯtɯ:ŋ mipɯtɯ	mi:pʰutiŋ / mi:pʰutiŋmunu	mipɯtɯɿ
a139	光	pskaɿ	pʰskaɿ	p̥ikaɿ
a140	蔭	kʰagi	kʰa:gi	ka:gi
a141	太陽	pssɯma	tʰida	tsida
a142	月(天体・暦)	tskɿ	tsɯ ~ tsɯtsu(?) (「来月」は tʰatatɯtsɯ)	ts̥ittɯ
a143	東	agaɿ	aʼaɿ	agaɿ
a144	北	nis: ~ nis̥	ui	nisi
a145	西	iʰɿ	iʰɿ	il
a146	南	pʰai	pʰai	paɪbara
a147	右	ŋgʰɿ	mi:tsɿ	n̥tsi

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a148	左	çidai	bīdau ~ bzdaʷ	bʰdaʔ
a149	前	mai (「後ろ」を tibi)	mafka (「後ろ」は tibi)	—
a150	道	ntsī	ntsī	ntsɔ
a151	嶺	mmi	mmi	mmi
a152	霧	NR	NR	kʰa:
a153	露	tsi:	tsiju	tsiʊ
a154	朝	çitumuti	stumuti	stumatsi
a155	昼間	hi:ma	psma	pʰnaχa / pʰma
a156	夕方	jusarabi	jusarabi	—
a157	夜	junaka	ju:na:	ju:ʔ
a158	今	nnama	nnama	nnama
a159	今日	kʰu:	kju:	kʰju:
a160	明日	atca	atsa	ata
a161	明後日	mmʰa mi:ka	asadi	astci
a162	来年	ja:ni	ja:ni	ja:ni
a163	昨日	nnu	ksnu	kʰnu
a164	去年	kudzu	kudzu	kʰudu
a165	昔	ŋkʰa:ŋ	ikja:ŋ	ŋkja:ŋ
a166	夏	—	natci	—
a167	暖かい	nfumunu	fumuraŋ	nufkaŋ
a168	寒い	ɕimunu	pɕimunu	piɕikaŋ
a169	冷たい	higurumunu	bzguʷ	bʰguru
a170	海	iŋ	iŋ	iŋ
a171	濁る	mugairi: du:i (濁っている)	mugari	janavvi / mugairi
a172	船	funi	funi	funi
a173	珊瑚礁	piɕi	urubuni (海に生えているもの) (「瀬」は pɕei)	piɕi
a174	砂	nnagu	nnagu	nnagu

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a148	左	bʰdaŋ	pzdaz	pʰdaʔ
a149	前	—	mai (「後ろ」は tsibi)	—
a150	道	nʈa	mʈi	mʈa
a151	嶺	mmi	mmi	mmi
a152	霧	kʰa:vva	ksi	kʰa:
a153	露	ʈav	ʈiv	ʈav
a154	朝	stumuti	ʂtumuti	ʂaʈʉmʉti
a155	昼間	pʰama	psima	pʰama
a156	夕方	—	jusarabi	—
a157	夜	ju:ŋ	junʰa:ŋ	jʉ: / jʉnai
a158	今	nnama	nnama	nnama
a159	今日	kʰu:	kju:	kʰʉ:
a160	明日	atʂa	attʂa (「下駄」も attʂa)	atʂa
a161	明後日	asatti	asati	asatʰi
a162	来年	ja:ni	ja:ni	ja:ni
a163	昨日	kʰnu	ksinu	kʰnʉ
a164	去年	kʰuʰzu	kudzu	kʰʉʈʉ
a165	昔	ŋkʰa:ŋ	ŋkja:ŋ	ŋkʰa:ŋ
a166	夏	—	natʂi	—
a167	暖かい	nufkaŋ / atʂkaŋ	ŋko.ŋku	nʉʰnʉ (ぬるい?)
a168	寒い	pʂʂikaŋ	pʂimunu	pʰiʂi:nʉ
a169	冷たい	bʰgʉrʉkaŋ	psigʉrumunu	pʰgʉʉʉ:nʉ
a170	海	iŋ / immu (海を)	im	im
a171	濁る	mugʰa:ri	ŋgʉvju: (海が濁る) / mug jaz (コップの水が濁る)	—
a172	船	funi	funi	fʉni
a173	珊瑚礁	pʂʂi	jamo:ra (「瀬」は pʂʂi)	ʂi: / pʰiʂi
a174	砂	nnagu	m·nagu	nnagʉ:

番号	単語	上地	来間	砂川
a148	左	pidal ~ pida	p ^h ida[[A]// psdaz [B]	psdaz _i ~ psda _i
a149	前	—	mai	—
a150	道	m _i tsi	m _i tsi	m _i ts ~ m _i ts _i
a151	嶺	m _i m _i (↔suku)	m _i :ni	m _i mi
a152	霧	k ^h i:u _i	NR	ks _i :
a153	露	NR	t _i uf	tsu _i ~ tsu _i
a154	朝	situmuti (「朝食」は asamunu	stumuti	stumuti _i ~ stumuti
a155	昼間	p ^h ima (「昼食」は aci、10時頃の間食は sanaka _i)	pssima	p ^h a:ma
a156	夕方	jusarabi (夕食) は jul ~ ju _i)	jusarabi	—
a157	夜	junaka	june:	junai
a158	今	n _i nama	n _i nama	n _i nama
a159	今日	kju:	k ^h u:	kju: ~ kju _i :
a160	明日	aca / at _i	at _i sa	at _i sa _i
a161	明後日	asa _i ti	asate	asa _i ti
a162	来年	ja:n _i	ja:ni	ja:n _i
a163	昨日	k ^h inu	ts _i no	ks _i nu:
a164	去年	kud _i zu	k ^h ud _i zu	ku _i ^d zu
a165	昔	ŋkja:ŋ	ŋkja:ŋ	ŋkja:ŋ
a166	夏	—	na _i tsi	—
a167	暖かい	atsisa / nufsa (誘導)	nuffu: / nuffu:u nuffu:	nu _i φu: ~ nu _i φu _i / nu _i φu:nu _i φu _i (これは reduplicate の形で形容詞)
a168	寒い	p ^h isa	p _i simunu	pi _i si:pi _i si
a169	冷たい	p ^h isa ~ p ^h isa	pzguro:	ps _i guru:ps _i guru
a170	海	im _i	im	im _i
a171	濁る	mugail _i ~ mugai _i	mug ^h a:ri (濁っている)	n _i iguri / cf. mugairi (川や 海の水がかき混ざってい る)
a172	船	fun _i	funi	φun _i
a173	珊瑚礁	p _i ci ~ p _i ci	p _i ci	pi _i ci
a174	砂	m _i nagu / (「粉」は ku)	m _i :nagu	n _i nagu

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a148	左	p ^h ada ~ p ^h da ^h	p ^h idi ^h	p ^h ida ^h
a149	前	mai	mauki: (「後ろ」は tɕibi)	–
a150	道	mɕa	mɕa	nɕi
a151	嶺	mmi	mni	m ^h mi
a152	霧	k ^h ɔ:	k ^h iri	tɕi: / ak ^h ɔ ^h tɕi (黄砂) (ak ^h a 茶) 「白い霧」は au ^h tɕi)
a153	露	ɕɔv ~ ɕaɔ	ɕaɔ	tuɔ
a154	朝	s ^h ɔmɔti	stumuti	sɕumutɕi
a155	昼間	p ^h ɔ:ma	p ^h ɔ:ma	p ^h ɕ:ma
a156	夕方	jɔsarabi	jusarabi	–
a157	夜	jɔnai / 夕飯jɔ:ɔ	ju ^h na ^h	jɔnai
a158	今	nnama	nnami	n ^h nama
a159	今日	k ^h ɔ:	k ^h ju:	k j u
a160	明日	aɕa	aɕa	ata
a161	明後日	asatti	asatti	ataɕi
a162	来年	ja:ni	jaini	ja:ni
a163	昨日	k ^h ɔnɔ:	ɕaɔnɔ:	ɕinɔ
a164	去年	k ^h ɔɕɔ	k ^h udu	kuɔdu
a165	昔	ŋk ^h a:ŋ	mki:ŋ	ŋkja:ŋ
a166	夏	naɕa	naɕa	–
a167	暖かい	nɔfɔ:nɔ	nufumunu	nufumunu / aɕsumunu
a168	寒い	pɕɕi:pɕɕi ~ piɕi:piɕi	pɕɕimunu	piɕimunu
a169	冷たい	p ^h ɔgɔɔ:nɔ	p ^h ɔgɔrumunu	p ^h ɕigɔrumunu
a170	海	im	im	im
a171	濁る	mɔga / mɔgari (中止 形)	muga ^h	kinuɔvi ~ kinuɔi
a172	船	fɔni	funi	funi
a173	珊瑚礁	pɕɕi ~ piɕi	pɕɕi	saŋgo / uɔuɔuɕi (枝サン ゴ) (「浅瀬」は piɕi)
a174	砂	nnagɔ:	mnagu	m ^h nagu

番号	単語	池間	狩俣	島尻
a175	行く・去る	haitti (行つて)	p ^{hi} a:ri	ikʷ / piʷ
a176	速い	h'a:munu (𐄌 にあらず)	p ^{hi} a:munu	pja:munu
a177	土	nta ~ mta (m は m̃n)	nta	nta
a178	庭	minaka	a:ra / mina:	—
a179	家	ja:	ja:	—
a180	埃	ɸu̯ki	p ^{hi} u̯ki	—
a181	汚い	ɕiɕana	ɕɕanaŋ	ɕɕana
a182	戸	jadu	jadu	—
a183	門	muŋ / dzau	dzo:	dau (「入り口」 paʷftɔ)
a184	前・正面	mauk'a:	taŋka: / maukja: (前の家)	mafkja: (「向かい」 は ŋkaʷ)
a185	村	mmaridzima	sima	sɔma
a186	墓	haka	pa̯ka	pa̯ɕa
a187	あそこ	kama	kama	kama
a188	そこ	uma	uma (「ここ」 も同じ)	—
a189	ない	n'a:ŋ	n'a:ŋ	—

番号	単語	大浦	久貝	与那覇
a175	行く・去る	p ^h irin ^h a:ŋ (行ってしまった)	p ^h iri (行け) / p ^h izdus (行くよ)	p ^h i ^h ɿ
a176	速い	p ^h a:kaŋ	p ^h ja:munu	p ^h a:nu
a177	土	nta	m̥ta	mt ^h a
a178	庭	—	minaka	—
a179	家	ja:	ja:	—
a180	埃	—	p ^h u ^h ki / ja:buki (わたぼこり)	—
a181	汚い	ɕɕana / sputaŋ	ɕɕana	ɕɕana:nu
a182	戸	—	jadu	—
a183	門	dzo:futsɿ (入口)	tsimbu (建造物) / dzo: (門柱間の空間)	dzo:
a184	前・正面	mai (maibara (前の家), ɕɕibara (後ろの家))	maf ^h k ^h a ~ maf ^h ɿk ^h a	mau ^h k ^h a:
a185	村	sɿma	buraku (sima は宮古島全体)	NR
a186	墓	p ^h aka	p ^h a ^h ka	p ^h aka
a187	あそこ	k ^h ama	k ^h ama	k ^h ama
a188	そこ	NR (「それ」は ui)	uma (「ここ」は kuma)	—
a189	ない	—	n ^h a:ŋ	—

番号	単語	上地	来間	砂川
a175	行く・去る	ikʰi / kʰi / paʷ ~ palʷ	pʰiri (行け!)	piʷ ~ piʷʔ
a176	速い	pja:munu	pja:munu	pja:munu
a177	土	m̥ta ~ m̥taʔ (「石」は isi)	mta	m̥ta
a178	庭	—	minaka	—
a179	家	—	ja:	—
a180	埃	—	pʰuʔki	—
a181	汚い	ɕ:ana / ɕ:anamunu	ɕɕana	jaɾimunu
a182	戸	—	jadu	—
a183	門	dʒoʰ	dʒo:	dʒau
a184	前・正面	mafɕja: (「後ろ」は ɕi:bara)	mo:tʰu / mo:tʰumai / maibara	mavɕja: ~ maʊɕja:
a185	村	NR	bantadzima	ʂma ~ ʂma
a186	墓	paka	paka	paka
a187	あそこ	kama	kama	kʰama:
a188	そこ	kuma (umaは不使用) / amakuma (あちこち)	uma (「ここ」は kuma)	—
a189	ない	—	nʰa:ŋ	—

番号	単語	保良	伊良部	国仲
a175	行く・去る	p ^h iŋ	p ^h iŋ / p ^h iri (行け)	ifu ~ iki / pjaŋi
a176	速い	p ^h a:mõnõ / p ^h a:p ^h ja	p'a:munu	pja:munu
a177	土	mta	mta	ŋta
a178	庭	minaka	minaha	—
a179	家	ja:	ja:	—
a180	埃	p ^h ũki / mtabũki (土のほこり)	gumi / p ^h uki	—
a181	汚い	ẽẽana	ẽẽanamunu	ẽẽanamunu / si:gatamunu
a182	戸	jadõ	jadu	—
a183	門	dzo: [保良]// dzaõ [新城]	dzo:vtsɔ	dau
a184	前・正面	maũk'a: / maibara (前の家)	maũkja:	maũkja: / mai
a185	村	sɔma	sɔma	mura (sɔmaとは言わない)
a186	墓	p ^h aka	p ^h a: ~ p ^h a:	paka
a187	あそこ	k ^h ama	k ^h ama ~ k ^h ama:	kama
a188	そこ	õma (「ここ」は k ^h õma)	umahama (あっちこっち)	kũma
a189	ない	n'a:ŋ	no:mai ni:ŋ (何もない)	—

宮古方言基礎語彙 b データ

番号	単語	池間	狩俣
b001	目 (め)	me:	[mi/[mi:]
b002	歯 (は)	ha:	[pa
b003	爪 (つめ)	tsume (共通語の可能性あり)	tsu[me (氣息なし)
b004	鼻 (はな)	hana	pana (ゆつくりの時 pa[na)
b005	臍 (へそ)	m̥:busu	[m:bu
b006	胸 (むね)	m̥miut̥su	miφ[tsu (または miφu[tsu)
b007	面 (かお)	mihana	mipa[na
b008	耳 (みみ)	min	[min
b009	皮 (かわ)	ka: (木や果物の皮も)	[ka:
b010	脛・足 (あし)	haz̥ (膝から下) (「腿」はmumu)	pa[gi
b011	尻 (しり)	ts̥i:nun/ts̥i:nun	ts̥i[bidḁ (ゆつくりの時 ts̥ibida)
b012	肩 (かた)	katamu̥si:	ka[tamusi (ゆつくりの時 ka[tamusi)
b013	筋 (すじ)	hait̥s	p̥si[kibaü (ゆつくりの時 pi[kibai)
b014	眉 (まゆ)	maju	[maju (または ma[ju)
b015	汗 (あせ)	ḁsi	a[si
b016	鼻血 (はなぢ)	hanats̥i	pa[nats̥u (「鼻汁」は [mbana)
b017	涎 (よだれ)	judai	ju[dḁ (ゆつくりの時 judai)
b018	刺青 (いれずみ)	NR	NR (オバアの頃。[iredzuumi)
b019	一つ	si:ts̥a	p[ti:ts̥u (または pu̯[ti:ts̥u ただし p の あと母音殆ど聞こえない)
b020	二つ	fta:ts̥a	φ[ta:ts̥u (φ のあと母音がほとんど聞こ えない)
b021	三つ	mi:ts̥a	[mi:ts̥i (または [mi:ts̥u ただし u~i の 間で揺れる)
b022	四つ	ju:ts̥a	ju:[ts̥i (または ju:ts̥u)
b023	五つ	i̯ts̥a	[i̯ts̥u (または [i̯ts̥u)
b024	六つ	m:ts̥a	[n:ts̥i (または n:ts̥u)
b025	七つ	nanats̥a	na[nats̥u (または nanats̥u)
b026	八つ	ja:ts̥a	[ja:ts̥u (または ja:ts̥u)
b027	九つ	ku̯kunu̯ts̥a (語頭の k 破裂弱い)	ku̯[kunu̯]ts̥u (または kukunu̯ts̥u ただし 円唇性がはっきりしているのは nu のみ)
b028	十 (とお)	tu:	to:
b029	一人	tauka:	[taφk̥a:
b030	二人	h̥u̯ta:i	φ[ta:l/φta:u
b031	三人	n̥ts̥a:i	n̥[ts̥a:l
b032	四人	juta:i	ju[ta:u
b033	五人	i̯ts̥unu̯ç̥i̯tu	[i̯ts̥inu̯φtu (または ?i̯ts̥inu̯pu̯[ti)
b034	六人	mujunu̯ç̥i̯tu	mu[inu̯φtu (φ が p に近い)

番号	単語	島尻	大浦
b001	目（め）	mi:	mi:
b002	歯（は）	p ^h a:	pa:
b003	爪（つめ）	ʦami	ʦami
b004	鼻（はな）	p ^h ana	pana
b005	臍（へそ）	m:bu	m:bu
b006	胸（むね）	mmɪ	mni
b007	面（かお）	mipana	nipana
b008	耳（みみ）	miŋ	miŋ
b009	皮（かわ）	ka:	ka:
b010	脛・足（あし）	karasɯŋi	pagɯ
b011	尻（しり）	ʦibitaɳ ~ ʦibitaŋ	ʦibitai
b012	肩（かた）	ibira / k ^h ata (k ^h ata は共通語という認識)	katamusu
b013	筋（すじ）	p ^h aɕidʒa	pskipaɳ
b014	眉（まゆ）	maju	maju
b015	汗（あせ）	aɕi	aɕɕi
b016	鼻血（はなぢ）	p ^h anatsɯʦa	panatsɯ
b017	涎（よだれ）	judaɳ ~ judaŋ	—
b018	刺青（いれずみ）	ʂantsɯka ~ ʂantsɯks (おそらくこれであろうという回答)	—
b019	一つ	ttu:ʦa	p ^h iti:ʦa
b020	二つ	fta:ʦa	ɸuʦa:ʦa
b021	三つ	mi:ʦa	mi:ʦa
b022	四つ	ju:ʦa	ju:ʦa
b023	五つ	iʦaʦa	iʦaʦa
b024	六つ	n:ʦa	nnʦa
b025	七つ	nanatsɯ	nanatsɯ
b026	八つ	ja:ʦa	ja:ʦa
b027	九つ	kukunutsɯ	kukunutsɯ
b028	十（とお）	tu:	t ^h u:
b029	一人	t ^h afkja:	tavk ^h a: (vの摩擦弱め)
b030	二人	fta:ɳ	ɸuta:ŋ (ŋの摩擦弱い。舌尖の方の母音)
b031	三人	mita:ɳ	mits ^h a:ŋ (ŋの摩擦弱い)
b032	四人	juta:ɳ	juta:ŋ
b033	五人	iʦa nu ttu	iʦanupstu
b034	六人	muju nu ttu	mɯinupstu

番号	単語	野原	保良
b001	目 (め)	mi:	mi:
b002	歯 (は)	pa:	p ^h a:
b003	爪 (つめ)	tsami	tsimi
b004	鼻 (はな)	pana	p ^h ana
b005	臍 (へそ)	mbu / mbusu	m:bu
b006	胸 (むね)	mmiutsa	mnigu: (mn の同時調音 ?)
b007	面 (かお)	mipana	mip ^h ana
b008	耳 (みみ)	mim	mim
b009	皮 (かわ)	ka: (手の皮)	k ^h a
b010	脛・足 (あし)	pagi (足) (「脛」は karasuni)	pagu / tsigusi (膝) / mumu(ni) (腿) / psa:bza 足 (靴を履く部分) / amangu: buni (くるぶし)
b011	尻 (しり)	tsibigu: / tsibitan とち	tsibiruŋ
b012	肩 (かた)	kaṭamusu~ kaṭamusu / kaṭa	k ^h ata
b013	筋 (すじ)	psuṭapa (丁寧) ~ psuṭupa (普通)	p ^s klpaḷ ~ p ^s k ^z paḷ ~ p ^s klpaḷ ^z
b014	眉 (まゆ)	maju	maju
b015	汗 (あせ)	aṣi	aṣi
b016	鼻血 (はなぢ)	panatsuṭa	pandaḷ ^z
b017	涎 (よだれ)	juda ^ʔ (摩擦強い)	judaḷ
b018	刺青 (いれずみ)	piṇsuṭa	p ^h i ^d zik ^h u
b019	一つ	p ^ʔ ti:tsi	psti:tsi
b020	二つ	futa:tsi	fta:tsi
b021	三つ	mi:tsu	mi:tsi
b022	四つ	ju:tsi	ju:tsi
b023	五つ	itsiṭu	itsiṭsi
b024	六つ	m:tsi	mmtsi
b025	七つ	nanatsi	nanatsi
b026	八つ	ja:tsi	ja:tsi
b027	九つ	kukunutsi	kukunutsi
b028	十 (とお)	tu:	t ^h u
b029	一人	taṭkja:	taṭk ^ʔ a:
b030	二人	fuṭa:ʔ (摩擦強い)	fta:l ^z
b031	三人	mitsa:ʔ	mitsa:l ^z
b032	四人	juta:ʔ	juta:l ^z
b033	五人	itsunupstu	guniŋ
b034	六人	mujunupstu	rukuniŋ

番号	単語	伊良部	国仲
b001	目（め）	mi:	mi:
b002	歯（は）	pa:	pa:
b003	爪（つめ）	ʦami	ʦimi
b004	鼻（はな）	pana ~ paŋa	pana
b005	臍（へそ）	m:busu	m:bu
b006	胸（むね）	mniʊʦa	mniʊʦi
b007	面（かお）	mipana ~ miɸana	mipana
b008	耳（みみ）	mim	mim
b009	皮（かわ）	ka:	k ^h a:
b010	脛・足（あし）	paz / ʦaŋʊʦa (ひざ) / karasun'i (すね)	padʒi
b011	尻（しり）	ʦibitaz̥	ʦibital
b012	肩（かた）	kaʦamurasʌ	katamusu
b013	筋（すじ）	pazʦa:	palʦi:
b014	眉（まゆ）	mi:nu maju	matsigi
b015	汗（あせ）	aɕi	aɕi
b016	鼻血（はなぢ）	panatsa:	panatsi
b017	涎（よだれ）	judaz̥ ~ judaʌ	judal
b018	刺青（いれずみ）	pazʦʊʦa	palɕumi
b019	一つ	pitʊʦa	pititsi
b020	二つ	ɸta:ʦ	ɸuʦa:ʦi
b021	三つ	mi:ʦa	mi:ʦi
b022	四つ	ju:ʦa	ju:ʦi
b023	五つ	iʦaʦa ~ itsutsa	itsiʦi
b024	六つ	m:ʦa	m:ʦi
b025	七つ	nanatsa	nanatsi
b026	八つ	ja:ʦa	ja:ʦi
b027	九つ	kukunutsa	koʦoʦotsi
b028	十（とお）	tu:	tu:
b029	一人	taʊki:	taʊkja:
b030	二人	ɸta:z̥	ɸuta:l
b031	三人	mita:z̥	m ^s ta:l
b032	四人	juta:z̥	juta:l
b033	五人	iʦanu pstu	itsunup ^s itu
b034	六人	mujunu pstu	mujunup ^s itu

番号	単語	池間	狩俣
b035	七人	nananuçiŋtu	na[na]nuŋtu
b036	八人	ja:nuçiŋtu	[ja:nuŋtu
b037	九人	kununuçiŋtu/kukununuçiŋtu	ko[konu]nuŋtu
b038	十人	tu:nuçiŋtu	[tu:nuŋtu
b039	いくら	ikassaga: (値段。いくらか)	[no]np[sa: (または nonnupsa: 終助詞 sa: は分離すべきだったがしていない。おそらく nonpũ が当該語形と思われる。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b040	いつ	itsɔga: (いつか)	nanɔzi ni / itsu nu (ni, nu は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b041	だれ	taruga:/taruga (だれか)	ta[ru:
b042	どこ	idzanuçiŋtu (どこの人)	n[ɔzai / n[ɔzan / n[ɔza
b043	どれ	idiga (どれか)	n[ɔzaga du / n[ɔziga du (du は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b044	なぜ	naujahi:ga (なぜか)	no[sun]tsi du / no:[sun]tsi [du] (du は終助詞。分離すべきだったがしていない。疑問詞が単独で出にくいようだった)
b045	なに	nauga (なにか)	[no:
b046	いくつ	ifutsu (uvaga tussa ifutsuga (お前の歳 (はいくつか))	[iŋtsu
b047	昼 (ひる)	hi:ma (正午) (「真夜中」は junaka)	pʰi[ma (ゆっくりの時 pʰu[ma)
b048	田 (た)	ta: (田んぼは無い)	[ta: / ɸa[ta]gi / pa[tagi
b049	星 (ほし)	hoɕi	p[si (ゆっくりの時 pu:[si)
b050	道 (みち)	nts	n[tsi / n:[tsu
b051	山 (やま)	jama	ja[ma (cf. 坂sa:[ma)
b052	島 (しま)	ɕima	ɕi[ma / si[ma (自由会話では中舌になっている)
b053	浜 (はま)	hida	bi[ɔza / pa[ma
b054	花 (はな)	hana	pa[na
b055	泡 (あわ)	awa	a[wa
b056	穴 (あな)	ana	a[na
b057	空 (そら)	sora (共通語形か)	ti[N (cf. 「土地」は ɔzi:)
b058	烏賊 (いか)	ika	i[ka
b059	海老 (えび)	ibi	e[bi
b060	羽 (はね)	hani	pa[ni

番号	単語	島尻	大浦
b035	七人	nana nu ttu	nananupstu
b036	八人	ja: nu ttu	ja:nupstu
b037	九人	kukunu nu ttu	kukunupstu
b038	十人	tu: nu ttu	tu:nupstu
b039	いくら	{nau ~ nou} nu pssa (これはいくらか?)	no:nu psaga
b040	いつ	itsɿ	itsɿ ga
b041	だれ	t ^h aɾu	taru ga
b042	どこ	nda	n ^d za ga
b043	どれ	ndzi	n ^d zi ga
b044	なぜ	noui ~ nau	no: sttiga
b045	なに	nou ~ nau	ure no:ga
b046	いくつ	iftɿ	iftɿ ga
b047	昼 (ひる)	pssuma ~ pɿsuma	pɿ:ma
b048	田 (た)	ta:	ta
b049	星 (ほし)	psɿ ~ puɿ	psɿ
b050	道 (みち)	ntɿ	ntɿ
b051	山 (やま)	jama (木があるところ)	mmi
b052	島 (しま)	sɿma	sɿma
b053	浜 (はま)	p ^h ama	pama
b054	花 (はな)	p ^h ana	pana
b055	泡 (あわ)	awa (共通語?)	saɸuŋ
b056	穴 (あな)	ana	abu·
b057	空 (そら)	tɛin	tiŋ
b058	烏賊 (いか)	ik ^h a	ika
b059	海老 (えび)	ɿɾgan ~ ɿʔgan (イセエビ) / saɿ ~ saʔ (小さいエビ)	saʔ
b060	羽 (はね)	p ^h aɾi	pani

番号	単語	野原	保良
b035	七人	nananupstu	nananiŋ
b036	八人	ja:nupstu	haʔɛiniŋ
b037	九人	kukunupstu	kuniŋ
b038	十人	tu:nupstu	dʒu:niŋ
b039	いくら	no: nu pusa ga (いくらか?) / iska (いくら)とも	isaʔka
b040	いつ	itsɿ / itsɿ ga kʲɔŋga (いつ来るの?)	itsi
b041	だれ	to:ga ga kʲɔŋgumatarja: (誰が来るの?)	tʰau
b042	どこ	ndza / ndzaŋ kairʰa: (どこにか?) / ndzaŋga (どこで)	ndʒa
b043	どれ	ndʒi / ndʒinuga zo:karja: (どれが良いの?)	ndʒi
b044	なぜ	{no:ʔɛiga / no:tiga} nakju:rja: (何故泣いているの?)	naoʔti:
b045	なに	no: / no:ju ga puʂkarja: (何が欲しいの?)	naoŋu ~ no:nu
b046	いくつ	ifutɿ ga ka:tʔa: (いくつ買う?)	ifuʔtsi
b047	昼 (ひる)	pɿru	pʰsi:ma / stumuti (朝) / junai (夜)
b048	田 (た)	ta: (「畑」は pari)	tʰa:
b049	星 (ほし)	puʂɿ	psɿ ~ psɿ
b050	道 (みち)	mtsɿ	mʰtsi
b051	山 (やま)	jama	jama
b052	島 (しま)	sɿma	sɿma
b053	浜 (はま)	pama	pʰama
b054	花 (はな)	pana	pʰana
b055	泡 (あわ)	aʊa ~ awa//abuku	a:tsiʊ ~ a:tsiβ
b056	穴 (あな)	a:na	a:na
b057	空 (そら)	tin~tiŋ	tiŋ
b058	烏賊 (いか)	ikʰa	ikʰa
b059	海老 (えび)	saʔ (摩擦弱い)	ɪβz / pʰau (蛇)
b060	羽 (はね)	pani	pʰani

番号	単語	伊良部	国仲
b035	七人	nananu pstu	nananup ^s itu
b036	八人	ja:nu pstu	ja:nup ^s itu
b037	九人	kukununu pstu	ko ^h ko ^h no ^p op ^s itu
b038	十人	tu:nu pstu	tu:nop ^s itu
b039	いくら	is̥kiga (いくらか?)	kurja: ikassa ga (これはいくらか?)
b040	いつ	its̥ɿ	its̥ɿdu ɸu:ga (いつ来るか?) 音声環境によりtsではなくsのようになる。
b041	だれ	taruga (誰か?)	uua taru ga: (あなた誰?)
b042	どこ	n ^(d) za	idaŋ kai ga: (どこ行くの?)
b043	どれ	nd̥zi	id̥ziŋkai du a ^h ɸud̥zi ga: (どれにするの?)
b044	なぜ	no:sti:ga	na ^h u ^h ts̥i: du namagami ga: (なぜ遅れたの?)
b045	なに	no:	na ^h u judu a ^h su: ga (なにやってるの?)
b046	いくつ	if(u)ts̥ɿ	i ^h ɸuts̥i du al ga: (いくつあるの?)
b047	昼 (ひる)	p ^h ɿ:ma	p̥ilma
b048	田 (た)	ta:	ta
b049	星 (ほし)	pu ^h ɿ ~ pu ^h ɿ	pu ^h ɿ
b050	道 (みち)	mts̥ɿ	mts̥i
b051	山 (やま)	jama	jama
b052	島 (しま)	s̥ma	s̥ima
b053	浜 (はま)	pama	pama
b054	花 (はな)	pana	pana
b055	泡 (あわ)	abuku	awa
b056	穴 (あな)	ana	ɸu ^h guŋ
b057	空 (そら)	tim̥	sofa
b058	烏賊 (いか)	ik ^h ɿa	ika
b059	海老 (えび)	saz̥ (総称) / ɿbzgaŋ (大きいもの)	ebi
b060	羽 (はね)	pani	pani

番号	単語	池間	狩俣
b061	牛 (うし)	uᵛᵛkaːdi~ussukaːdi (牛を飼う))	u[sɪ / ʷ[sɪ
b062	蠅 (はえ)	hai	pai / paʷ
b063	犬 (いぬ)	in	i[n̩ (in と書いてもよい)
b064	蛸 (たこ)	taku	tā[ko̞ / ta[ku̞
b065	蚤 (のみ)	nun	[nun̩
b066	烏 (からす)	garasa	ga[rasʷ / ga[ra]sa
b607	雀 (すずめ)	ffadura	[utʂa
b068	葉 (は)	haː	kiːnu[paː
b069	穂 (ほ)	huː	[puː / [maʷnupuː ~ maʷnupuː (稲の穂)
b070	根 (ね)	niː	niba[l̩
b071	竹 (たけ)	taki	ta[ke
b072	松 (まつ)	matʂ	ma[ʂʷ
b073	藁 (わら)	NR	ba[ra
b074	種 (たね)	tani (サネも)	ta[ni]
b075	くば (びろう樹)	kuba	ku[ba
b076	ソテツ	tʂuːʂ	ʂ[su]dʷ / s[tʂ]ʂʷ / s[su]dʷ
b077	こずえ・砂糖黍の先端	nai	su[ra (buː]gʷanusʷ[ra)
b078	菜 (な)	naːzu/naːzuː	[paːdʷː (葉物野菜。cf. 「野菜」 は suː)
b079	酒 (さけ)	saki	sa[k̩j̥
b080	豆 (まめ)	mami	ma[me
b081	麦 (むぎ)	muz̩	mu[g̩
b082	餅 (もち)	mutʂiː	mu[ʂi
b083	ミカン	fun̩uː	ʕni[n̩ / ʕni[ʷ / ʕ[n̩ʷ
b084	糸瓜 (へちま)	naʔaːra	na[b̩aːra
b085	親 (おや)	uja (「父」は uza, 「母」は m̩ma)	ʷ[dʒaʷ[ma / oja (父親) / ʷ[dʒaʷ[ma (父母) / ojaʔaː (親子)
b086	いとこ	itʂuʔu	i[ʂuʔu
b087	兄 (あに)	suza (男第一子) / uzaɡama (男末っ子) / nakasuza (第一子と末っ子の間の人 (達))	a[dʒa
b088	姉 (あね)	haːni (女第一子) / ʊbaɡama (女末っ子) / anigama (女末っ子の一つ上) / ʊbaɡama (女末っ子、最初の音は labiodental approximant, not a vowel)	[aŋ]ga
b089	兄弟 (きょうだい)	utuza (男女とも)	NR / [k̩oː]dai (?)
b090	親戚 (しんせき)	utuza (itʂumu (お祝いの時))	u[ja]ku
b091	鉢 (はち)	hatsi	NR / ha[ʂi
b092	瓶・甕 (かめ)	kami	ka[mi / mi[dʒʷɡami

番号	単語	島尻	大浦
b061	牛（うし）	usɿ	usɿ
b062	蠅（はえ）	paz ~ paɿ	paʔɿ
b063	犬（いぬ）	iŋ	iŋ
b064	蛸（たこ）	tʰǎku	takʰu
b065	蚤（のみ）	nuŋ	nuŋ
b066	烏（からす）	garasa	ga:r(r)sa
b607	雀（すずめ）	maɕa	padɰi
b068	葉（は）	pa:	ki·nupa: (木の葉)
b069	穂（ほ）	pu:	pʰu:
b070	根（ね）	ɲi:	ni:
b071	竹（たけ）	tʰǎki	taki
b072	松（まつ）	matɕiki:	matɕiki
b073	藁（わら）	bara	bara
b074	種（たね）	tajɿ	tani
b075	くば（びろう樹）	kuba	kuba
b076	ソテツ	NR	—
b077	こずえ・砂糖黍の先端	sura	sɿ:ra nu pa / sɿ:ra
b078	菜（な）	NR / (野菜なら su:)	na·zu:
b079	酒（さけ）	saki	saki
b080	豆（まめ）	mami	mami
b081	麦（むぎ）	mugz ~ mugɿ	mugʔɿ
b082	餅（もち）	mutɕɿ	mutɕɿ
b083	ミカン	fɯnɿ	funiʔɿ (ʔ 摩擦弱い)
b084	糸瓜（へちま）	nabja:ra	nab'o:ra
b085	親（おや）	ujamma:sa	nd za mma (mma の最初の m は m と n の同時調音)
b086	いとこ	itufɯ	itɕɸu
b087	兄（あに）	suda / adza	azza:
b088	姉（あね）	anga	aŋga
b089	兄弟（きょうだい）	k'o:dai	—
b090	親戚（しんせき）	utʰada	utɿdza
b091	鉢（はち）	NR	patɕɿ (oɕziŋ お膳 ?)
b092	瓶・甕（かめ）	kʰami	kami

番号	単語	野原	保良
b061	牛 (うし)	usɿ	ussi
b062	蠅 (はえ)	paʔ (摩擦弱い)	paz ~ paiz
b063	犬 (いぬ)	in~iŋ	iŋ
b064	蛸 (たこ)	taɰu	taɰu
b065	蚤 (のみ)	num	num
b066	烏 (からす)	garasa	karasi ~ garasi / garasa
b067	雀 (すずめ)	maɕa	pʰaduɕa
b068	葉 (は)	pa:	ki: nu pʰa (木の葉) / upu ni nu pʰa (大根の葉)
b069	穂 (ほ)	pu:	a: nu pʰu: (粟の穂)
b070	根 (ね)	ni:	ni:
b071	竹 (たけ)	taɰi	taɰi
b072	松 (まつ)	matɕɿ	matɕigi:
b073	藁 (わら)	wara / bara	bara
b074	種 (たね)	sani (sanʰu: makɿ (種をまく)) / sanimunu	tʰani
b075	くば (びろう樹)	kuba	kuba
b076	ソテツ	sutitsɿ	fukʰatsɿ
b077	こずえ・砂糖黍の先端	surapana	(bu:zɿnu (砂糖黍の)) baram
b078	菜 (な)	na:	na:
b079	酒 (さけ)	saki	saki
b080	豆 (まめ)	mami	mami
b081	麦 (むぎ)	mugʔ (摩擦弱い)	mgɿʔ
b082	餅 (もち)	mutɕɿ	mɿtsɿ
b083	ミカン	funiŋ (摩擦弱い)	funilʔ
b084	糸瓜 (へちま)	nabja:ra	nabʰa:ra
b085	親 (おや)	uja (「父」は uja, 「母」は anna)	zzamma / uja (父) / anna (母)
b086	いとこ	itsɿfu	itsɿfu
b087	兄 (あに)	atɕsa	siʰ(ʰ)za / attsa
b088	姉 (あね)	aŋga	aŋga
b089	兄弟 (きょうだい)	kjo:dai	kʰo:dai (標準語形か?)
b090	親戚 (しんせき)	utɕutɕsa	ututɕsa
b091	鉢 (はち)	hatsɿ // paɰtsɿ	paɰtsɿ
b092	瓶・甕 (かめ)	kami	kʰami

番号	単語	伊良部	国仲
b061	牛（うし）	usɿ	usi
b062	蠅（はえ）	paz̥	paʔi
b063	犬（いぬ）	in (im (海))	in
b064	蛸（たこ）	tḁku	tʰḁko
b065	蚤（のみ）	num̥	num
b066	烏（からす）	garasa	garasi
b607	雀（すずめ）	f(u)saduʔa mat̤sa	ffadorja
b068	葉（は）	pa:	pa:
b069	穂（ほ）	pu:	pu:(少し口唇の震えを伴う)
b070	根（ね）	nʰi:	ni:
b071	竹（たけ）	tḁki	tʰḁke
b072	松（まつ）	mat̤sɿgi	mat̤sɿgi:
b073	藁（わら）	gara	gis̥iʔi
b074	種（たね）	tanʰi	tani
b075	くば（びろう樹）	kuba	kuba
b076	ソテツ	sdit̤ɿ	soʔet̤sɿ
b077	こずえ・砂糖黍の先端	bu:z̥nu s̥ɾa	ki:nu sura(*木の先)
b078	菜（な）	na: / su: (やさい)	pa:
b079	酒（さけ）	s̥ḁki	sake
b080	豆（まめ）	mami	mami
b081	麦（むぎ）	nuz̥	mu̥gi
b082	餅（もち）	mut̤ɿ:	mut̤sɿ
b083	ミカン	f(u)nʰiz	ɸunʰiu
b084	糸瓜（へちま）	nabʰa:ra	nabja:ra
b085	親（おや）	uja	uja / uja anna
b086	いとこ	it̤fu	itʰo̥ko
b087	兄（あに）	a ^(d) za	ada
b088	姉（あね）	ani	ani
b089	兄弟（きょうだい）	kʰo:dai / bikitu (^d)zara / mi:tu (^d)zara	kʰo:dai
b090	親戚（しんせき）	ujaku	utuda
b091	鉢（はち）	pḁt̤ɿ(ɿ)	pʰḁt̤sɿ
b092	瓶・甕（かめ）	kami	kami

番号	単語	池間	狩俣
b093	篋 (へら)	hira	pi[ra
b094	笠・傘 (かさ)	sana	sa[na / mi[nokaša = ku[ba:sa
b095	糸 (いと)	itu	[i]tsu
b096	緒 (お)	bu: / atša nu bu: (下駄の鼻緒)	[bu: / pa[nabu:
b097	柄 (え)	juɾu	[ʔi]:
b098	網 (あみ)	an	[ʔaɳ
b099	桶 (おけ)	taɾu	NR / ta[rɯ
b100	枕 (まくら)	maffa	maɸ[ɸa
b101	薬 (くすり)	fuɣui (視覚的に唇歯性低い。接触弱い。huɣui か)	ɸ[sɯi / ɸusujɯ
b102	斧 (おの)	jutsɿ	na[ta (その場で書いた絵を見せて確認したが斧のことらしい)
b103	鎌 (かま)	zzara (最初の z は初め摩擦性低い)	ɯ[za]ra
b104	鍬 (くわ)	ffatsɿ	[ɸɸatsɯ
b105	箆 (ざる)	sauki	[so:gi
b106	鋤 (すき)	NR (牛がいなかった)	NR (sɯ[ki 絵を示したがNR。男の人なら分かる。馬につける)
b107	釜 (かま)	hagama	pa[gama (「かまど」は o[kama)
b108	しゃもじ	kina	miɯski[na (「メシのしゃもじ」は miɯ[sɯ, 「お玉」は ki[na)
b109	杖 (つえ)	di:gi:	gu[ɕan
b110	欠		
b111	紙 (かみ)	kabi:	ka[bi (s 音はついていない)
b112	綱 (つな)	ŋna:/ŋna	tsɯ[na
b113	煙管 (きせる)	tʰi: (tti: か)	kʰi[siɯ
b114	名 (な)	namai	[na:
b115	帆 (ほ)	hu:	[pu:
b116	荷 (に)	ni:	[ni:
b117	金 (かね)	kani	ka[ni
b118	金銭 (かね)	din	ɕzi[n
b119	音 (おと)	NR (...nu narijun (...が鳴る) の形で出た)	u[tu
b120	歌 (うた)	a:gu	[a:]gu
b121	橋 (はし)	NR (橋は存在しなかった。「栈橋」は sambaɕi)	ha[ɕi
b122	石 (いし)	iɕi	i[sɯ (たくさんだと [issadzari)
b123	糞 (くそ)	ɸuɣu	ɸ[sɯ (ゆっくりの時 ɸɯ[sɯ)
b124	粒 (つぶ)	NR	dü:[ɕɯ / ɕü:[ɕü (「米粒」は mawdudzu, 「石鹸粒」は sekkendzudzu)

番号	単語	島尻	大浦
b093	篋（へら）	píra	píra
b094	笠・傘（かさ）	sana	sana
b095	糸（いと）	itu	itu
b096	緒（お）	bu:	bu:
b097	柄（え）	i:	i:
b098	網（あみ）	aŋ	aŋ
b099	桶（おけ）	kubadɯ:	tagu (g の閉鎖弱め)
b100	枕（まくら）	maffa	maffa
b101	薬（くすり）	ssuŋ / ssuŋzu ~ ssuzzu (薬を)	fsui / ssui
b102	斧（おの）	jukɬa	jukkʰa
b103	鎌（かま）	zzaɾa	zzaɾa
b104	鍬（くわ）	ffatsɯ	ffatsɯ
b105	笊（ざる）	ba:ki (深いもの) / so:ki (浅いもの)	—
b106	鋤（すき）	ski	ma:jama
b107	釜（かま）	ukama	ukama
b108	しゃもじ	kina	kʰina
b109	杖（つえ）	guɕaŋ	—
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabʰa	kabʰa
b112	綱（つな）	tsɯna	tsɯna
b113	煙管（きせる）	kiɕiŋ	kiɕiʰ (ʰ 摩擦弱い)
b114	名（な）	na:	na:
b115	帆（ほ）	pu:	pu:
b116	荷（に）	ɲimutsɯ	ni:
b117	金（かね）	kaji	kani
b118	金銭（かね）	ɕziŋ	ɕziŋ
b119	音（おと）	NR / (oto)	kannaʰ (かみなり)
b120	歌（うた）	a:gu	a:gu(:)
b121	橋（はし）	pʰasɯ	pasɯ
b122	石（いし）	isɯ	isɯ
b123	糞（くそ）	ssu	ssu
b124	粒（つぶ）	tsɯbu	gumadani

番号	単語	野原	保良
b093	篋（へら）	píra	p ^h íra
b094	笠・傘（かさ）	sana	sana
b095	糸（いと）	itu / kaɕi (織糸)	nuzzu: ~ nuzju:
b096	緒（お）	bu:	p ^h anabu: (下駄の鼻緒)
b097	柄（え）	i:	ʔi·
b098	網（あみ）	am	am
b099	桶（おけ）	u:ki / tagu (頭に乘せて水を運ぶもの)	t ^h aru
b100	枕（まくら）	maffa	maffa
b101	薬（くすり）	fuɕu:ɳ	fsi:z ~ fsil ^z
b102	斧（おの）	ju:kɳ	juks
b103	鎌（かま）	ɽara	zzaɾa ~ ɽara
b104	鍬（くわ）	ffatsɽ (f 弱い)	ffatsi
b105	笹（ざる）	so:ki / ba:ki	sauɕki
b106	鋤（すき）	ma:jama (小さく掘り起こすもの) / sɽki	s(ɰ)ki / jama
b107	釜（かま）	pagama	ʔukama
b108	しゃもじ	miskai	kina
b109	杖（つえ）	guɕaŋ	guɕaŋ
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabɳ	kabl ^z (kabitul ^z 「凧」 = 紙 + 鳥)
b112	綱（つな）	tsana	tsina
b113	煙管（きせる）	kiɕiɳ	k ^h iɕi:l ^z
b114	名（な）	na: (名前)。「自分の名前」は du:ga na:	na:
b115	帆（ほ）	pu:	(funi nu) pu:
b116	荷（に）	ni:	ni:
b117	金（かね）	kani	k ^h ani
b118	金銭（かね）	ɕziŋ	ɕziŋ
b119	音（おと）	utu	nal ^z
b120	歌（うた）	a:gu	a:gu
b121	橋（はし）	paɕɳ	NR
b122	石（いし）	isɳ	isi
b123	糞（くそ）	fuɕu	fsu
b124	粒（つぶ）	ɳɕɕɳ	NR

番号	単語	伊良部	国仲
b093	篋（へら）	píra	píra
b094	笠・傘（かさ）	sana / kuba:sa（クバ笠）	sana
b095	糸（いと）	itu	ito
b096	緒（お）	bu:	bu: (唇の開きが非常に狭いので、やや震えることあり)
b097	柄（え）	i:	ji:
b098	網（あみ）	am _ɿ	am
b099	桶（おけ）	u:ki / tarai（たらい）	NR / u:ki とは言わない。使ったことなし
b100	枕（まくら）	maf(u)ra	maφφa
b101	薬（くすり）	fʃz _ɿ	φusul
b102	斧（おの）	bu:nu	ono
b103	鎌（かま）	zzaɾa	lzara
b104	鍬（くわ）	ffatsɿ	φφatsi
b105	笹（ざる）	so:ki / ba:ki	so:ki
b106	鋤（すき）	sʉki	siki
b107	釜（かま）	ukama / ukuma	ukama
b108	しゃもじ	kina	kina
b109	杖（つえ）	guɕaŋ	guɕan
b110	欠		
b111	紙（かみ）	kabz	kabi:
b112	綱（つな）	tsna	tsina
b113	煙管（きせる）	tɕ(ɿ)z	tsil
b114	名（な）	na:	na:
b115	帆（ほ）	pu:	pu: (少し口唇の震えを伴う)
b116	荷（に）	n'i:	ni:
b117	金（かね）	kani	
b118	金銭（かね）	ɕziŋ	ɕziŋ
b119	音（おと）	na:z _ɿ	utu
b120	歌（うた）	ajagu ~ ajago	a:gu
b121	橋（はし）	pasz ~ pasʉ:	pʰaʃi:
b122	石（いし）	isɿ	isi
b123	糞（くそ）	φuʃu	φuʃi
b124	粒（つぶ）	tsubu	tsibu

番号	単語	池間	狩俣
b125	命 (いのち)	n̄nutsɿ	u[nutsu
b126	豚小屋、便所	wa:nuɕɕi	[tu:wa / [tu ^h :wa / wa:nuja
b127	病気 (びょうき)	jamijuɿ (動詞)	ja[mi]u / jamiju (名詞が出にくい)
b128	柱 (はしら)	hala (l は歯茎より少し後ろか。hassa は「帆柱」)	pa[ra
b129	真似 (まね)	ma:bi	m'a:[bi
b130	うそ	bakurau/bakuro: (r は l か)	da[ra]ɸu
b131	匂い	kadzɐ	ka[dzɐ / ka[basu]kɐɳ
b132	表 (おもて)	a:gi (裏表の表) (「裏」は ɕita, ɕita:ra)	[ma:sima (cf. 裏 kaisima)
b133	外 (そと)	ara	[a:]ra
b134	内 (うち)	naka (中(なか))	na: (中。「家の中」は [ja:na]:)
b135	上 (うえ)	a:gi	[wa:gu
b136	下 (した)	ɕita/ɕita:ra	si[ta:ra
b137	も (助詞)	ha[na]mai (鼻も) / ha[na]mai (花も)	—
b138	少し (+ 指小辞)	hi:tɕagama	[pi:ŋ]ka:
b139	もっと	m̄m'ahi	—
b140	たくさん	ha:sa	u[po:]sa
b141	小さい	imiimi	i[miŋ]ka: / i[miŋ]ga
b142	大きい	gaba:	u[ɸo:bi / u ^p ɸo:bi
b143	低い	ssabana/ssamunu (munu は形容詞形か)	—
b144	同じ	junosui / junuɕɕi (同じ歳)。ɕɕi は「歳」	—
b145	短い	ma:ku	—
b146	丸い	ma:ku / ma:ra	—
b147	それ	ui (範囲は不明。cf. 「遠く」は ka:ma)	—
b148	もの、物	munu	—
b149	くださる	fi:sama	ɸi:samai
b150	貸す	karasɿ	—

番号	単語	島尻	大浦
b125	命 (いのち)	nnutsɿ	nnutsɿ
b126	豚小屋、便所	wa: nu ja:	wa: nu ja: / ɸuʔ (ʔ 摩擦弱い)
b127	病気 (びょうき)	jaŋ	jaŋ/bʰoʔdza
b128	柱 (はしら)	para	para
b129	真似 (まね)	ɲa:bi	na:bi
b130	うそ	daraxa	daraɸu
b131	匂い	kʰada	kaddza
b132	表 (おもて)	a:ra	wa:bi
b133	外 (そと)	a:ra / puka (puka は誘導による)	pʰuka
b134	内 (うち)	naxa ~ naka (自然な発話では x)	naka
b135	上 (うえ)	wa:gi	wa:bi
b136	下 (した)	sta (ゆっくりだと s:ta)	sta:ra
b137	も (助詞)	—	—
b138	少し (+ 指小辞)	pittaga:	pittɕa:
b139	もっと	—	—
b140	たくさん	—	—
b141	小さい	imikaŋ	imittɕa (「小さい島」) は imisɿma / imizɿma)
b142	大きい	u:gatakaŋ	upujarabi (「大きい子」の意) (「とても大きい」は upo:upu)
b143	低い	—	—
b144	同じ	—	—
b145	短い	—	—
b146	丸い	—	—
b147	それ	—	—
b148	もの、物	—	—
b149	くださる	fi:samaŋ	fi:(ʔ) (ʔ 摩擦弱い)
b150	貸す	—	—

番号	単語	野原	保良
b125	命 (いのち)	nnutsɿ	nnutsi
b126	豚小屋、便所	wa:nu ja: (トイレの意味は含まない) 「便所」は fu:n という。	NR
b127	病気 (びょうき)	jam	jam
b128	柱 (はしら)	para	para ~ para
b129	真似 (まね)	na:bi	na:bi
b130	うそ	janadzai / damasai (だまされ) / daraka ともいう。	daraka
b131	匂い	kacza	k ^h acz ^(j) a
b132	表 (おもて)	umuti	ma:sma / kaisma (うら) (着物ののみ、 紙の表裏は wa:bi と si:ta)
b133	外 (そと)	pu:ka // a:ra	ara:
b134	内 (うち)	naka / utsɿ	(ja:) naka
b135	上 (うえ)	wa:bi / wa:gu	wa:bi
b136	下 (した)	si:ta / si:ta:ra	si:ta
b137	も (助詞)	—	—
b138	少し (+ 指小辞)	ipi:ʔtagama	ipittɕa ~ ipi:tɕa / ipi:ttɕagama
b139	もっと	—	—
b140	たくさん	—	—
b141	小さい	imi:tta	imi:mi / imimunu (「小さいもの」は imi:mi nu munu , imi:mi munu とはあ まり言わない)
b142	大きい	upo:upu	upu:pu / upumunu (「大きいもの」は upu:pu nu munu)
b143	低い	—	—
b144	同じ	—	—
b145	短い	—	—
b146	丸い	—	—
b147	それ	—	—
b148	もの、物	—	—
b149	くださる	fi: (くれる) / fi:samaɿ (くださる)	fi:samal _ɿ (敬語) / fi:
b150	貸す	—	—

番号	単語	伊良部	国仲
b125	命 (いのち)	nnutsɿ	nnutsi
b126	豚小屋、便所	wa:nu ja: / NR (便所)	ɸuʃi mal tsubu (求められている回答ではないようだ)
b127	病気 (びょうき)	jamɿ	jam
b128	柱 (はしら)	para	para
b129	真似 (まね)	ma:bi	ma:bi
b130	うそ	skasɿ / darafu	taraɸu
b131	匂い	kacɰa	kusamunu / kbasumunu (臭い匂い / いい匂い)
b132	表 (おもて)	umuti	maɛ <cf.> 裏はɰibi
b133	外 (そと)	ari:	puɰa
b134	内 (うち)	naka (中)	naka
b135	上 (うえ)	wa:ra	ɸa:ra
b136	下 (した)	ʃta:ra	sita:ra
b137	も (助詞)	—	
b138	少し (+ 指小辞)	jo: tʰa:i (ffiru)	ipi:ta gama
b139	もっと	—	
b140	たくさん	—	
b141	小さい	imi:imi	imimunu gama
b142	大きい	upo:up ~ opo:up	opo.opu (母音はu~oで揺れがある)
b143	低い	—	
b144	同じ	—	
b145	短い	—	
b146	丸い	—	
b147	それ	—	
b148	もの、物	—	
b149	くださる	ffiz	fi:samatal (くださった)
b150	貸す	—	

宮古方言文法項目 データ

N-155B-1	共通語	鳩も 鷹も 飛ぶ。	調査者
N-155B-1	池間	ffjaduramai (雀も) takamai tubi (当該方言の/h/は h~φ~f で揺れている。インフォーマントは何度が言い直しや言い淀み等があり、調査者 4 人のデータもまちまちである。この報告では仮に f で統一する)	N,N,D,U
N-155B-1	狩俣	p ^h a ^u mai t ^h a ^u kamai tubi	N,M
N-155B-1	久貝	m:batumai ta ^u kamai tub ^u	N,H,N,M
N-155B-1	与那覇	tu ^u ja tubansuga mbata: tub ^u du s ^u (鳥は飛ばないが鳩は飛ぶ)	S
N-155B-1	来間	pa ^u tume: ta ^u kame: {tubz / tubz ^u du} s ^u : ta ^u kanudu tubz	K,U,D
N-155B-1	宮国	{tuzmai/tu ^u mai} ta ^u kamai butuki ^u	K,T
N-155B-1	砂川	m ^u batumai takamai tuvi:du u ^u	N,I,O
N-155B-1	保良	mbatumai takamai tubz	K,T
N-155B-2	共通語	今日は 天気が 悪いから 飛行機は 飛ばない。	
N-155B-2	池間	kju:ja {teŋkinu / suranu} baikaiba tubimunumai tuban	N,N,D,U
N-155B-2	狩俣	kju:ja {teŋkinu / u ^u a:ts ^u ikinu} u ^u asi ^u kariba ^u çiko:kja tubampa ^u i	N,M
N-155B-2	久貝	k ^u :ja va:ts ^u ak ^u nu {baska:ba / bas ^u ka:ba} hiko:kja: tubaŋ	N,H,N,M
N-155B-2	与那覇	k ^u :ja wa:ts ^u ak ^u nu ba ^u kariba ^u çiko:k ^u a: tuban	S
N-155B-2	来間	k ^u :ja tints ^u nu bazkariba ^u çiko:k ^u a: tubaŋ k ^u :ja va:ts ^u ts ^u nu janakariba ^u çiko:k ^u a: tubaŋ	K,U,D
N-155B-2	宮国	kju:ja tiŋki {bazkaiba / ba ^u kaiba} hi ^u ko:kja ituŋ	K,T
N-155B-2	砂川	k ^u :ja wa:ts ^u ba ^u kariba ^u çiko:k ^u a: tubaŋ	N,I,O
N-155B-2	保良	k ^u :ja wa:ts ^u ak ^u nu bazkariba ^u çiko:kja: tubaŋ	K,T
N-155B-3	共通語	風で 帽子が 飛んだ。	
N-155B-3	池間	kadiçi: kavvimunumai tubaharija:N	N,N,D,U
N-155B-3	狩俣	kadz ^u i ndu bo:çinu {tubi ^u i / tubju:}	N,M
N-155B-3	久貝	kadz ^u içidu bo:çinu tubin ^u a:ŋ (tub ^u ta: は未確認)	N,H,N,M
N-155B-3	与那覇	k ^u na: ^u çiko:k ^u a: {tub ^u du s ^u ta: / tub ^u ta:} (昨日は飛行機は飛んだ)	S
N-155B-3	来間	kadz ^u inu ts ^u :karibadu bo:çime: tubi kadz ^u inu {ts ^u :karibadu / ts ^u :karibadu} bo:çime: {tubz ^u taz / tubz ^u ta}	K,U,D
N-155B-3	宮国	kazindu bo:sinu {tubipi:/tubasarija:}	K,T
N-155B-3	砂川	kadz ^u içidu bo:çinu tuv ^u ta ^u	N,I,O
N-155B-3	保良	kadz ^u içi: bo:çinu tubz ^u ta:	K,T
N-155B-4	共通語	親鳥が 飛んで、小鳥が 飛んだ。	
N-155B-4	池間	mmaduinu tubi ffaduinu tubiui	N,N,D,U

N-155B-4	狩俣	mmadu ^{ri} nu tubidu ffa:du ^{ri} nu du bju:	N,M
N-155B-4	久貝	mmadu ^{ri} nu tubibadu ffadu ^{ri} mai tub ^{ri} (シテ形 tubis ^{ri} 採れず)	N,H,N,M
N-155B-4	与那覇	mmadu ^{ri} nu tubitti ffadu ^{ri} mai {tub ^{ri} ta:/ tub ^{ri} taN} (tub ^{ri} taN でなく tub ^{ri} ta ^{ri} か)	S
N-155B-4	来間	mmaduz ^{ri} nu tubittidu ffaduzza {tubz ^{ri} taz / tubz ^{ri} ta ^{ri} }	K,U,D
N-155B-4	宮国	mmaduzdu tubi: ibi:nu tuzgamanu tubipirija:	K,T
N-155B-4	砂川	ujadu ^{ri} nu tuvitti(du) ffadu ^{ri} nu tub ^{ri} ta ^{ri}	N,I,O
N-155B-4	保良	mmadu ^{ri} nu tubitt ^{ri} ffadu ^{ri} nu tubz ^{ri} ta:	K,T
N-155B-5	共通語	そこから 飛んで みろ。	
N-155B-5	池間	umakara tubi mi:ru	N,N,D,U
N-155B-5	狩俣	uma:ra tubi mi:ru	N,M
N-155B-5	久貝	umakara tubi mi:ru	N,H,N,M
N-155B-5	与那覇	umakara tubi mi:ru	S
N-155B-5	来間	umakara tubi mi:ru	K,U,D
N-155B-5	宮国	umakara tubimiru	K,T
N-155B-5	砂川	umakara tubi mi:ru	N,I,O
N-155B-5	保良	umakara tubi mi:ru	K,T
N-156B-1	共通語	みんなで 舟を 漕ぐ。	
N-156B-1	池間	nnaçi fu ^{ri} nu: kugi	N,N,D,U
N-156B-1	狩俣	n:naçi fu ^{ri} nu kugi	N,M
N-156B-1	久貝	m:naçi: fun ^{ri} u: kug ^{ri}	N,H,N,M
N-156B-1	与那覇	m:naçi: fun ^{ri} u kug ^{ri} (fun ^{ri} u の iu は曖昧な二重母音)	S
N-156B-1	来間	ha:ri:nu fu ^{ri} u:ba: muztuçi:du kud ^{ri} / <cf.> muztuçi: fu ^{ri} u: kuge (皆で舟を漕げ)	K,U,D
N-156B-1	宮国	m:naçi f ^{ri} nu kugi	K,T
N-156B-1	砂川	m:naçi: {fun ^{ri} ju / fun ^{ri} u:} {kugu ^{ri} / kugu ^{ri} }	N,I,O
N-156B-1	保良	m:naçi fu ^{ri} u: kug ^{ri}	K,T
N-156B-2	共通語	誰も 舟を 漕がない。	
N-156B-2	池間	{tarumai / n:na} {fu ^{ri} na: kugan / fu ^{ri} nu:ba kugadza:N}	N,N,D,U
N-156B-2	狩俣	tarumai fu ^{ri} ni(:)ba kugan	N,M
N-156B-2	久貝	ta:mai fun ^{ri} u:ba: kugan	N,H,N,M
N-156B-2	与那覇	to:mai fun ^{ri} iuba: kugan	S
N-156B-2	来間	to:me: fu ^{ri} u:ba: kugan	K,U,D
N-156B-2	宮国	to:mai f ^{ri} iuba: kugan	K,T

N-156B-2	砂川	taɾu:mai fun ¹ u: kugaŋ	N,I,O
N-156B-2	保良	ta:mai fɔŋ ¹ u:ba: kugaŋ	K,T
N-156B-3	共通語	昔は よく 舟を 漕いだ。	
N-156B-3	池間	ŋkja:nna ju:du fuŋu:ba kugitai	N,N,D,U
N-156B-3	狩俣	ŋkja:nna ju:du fuŋu:ba ku:daï	N,M
N-156B-3	久貝	ŋk ¹ a:nna ju:du fun ¹ u: kug ² ta:	N,H,N,M
N-156B-3	与那覇	ŋk ¹ a:nna ju:du fun ¹ iuba: kug ² ta:	S
N-156B-3	来間	ŋk ¹ a:nna fn ¹ u:ba: ju:du kudztaŋ	K,U,D
N-156B-3	宮国	ŋkja:nna urusiŋu fniuba: kugiuta	K,T
N-156B-3	砂川	ŋk ¹ a:nna ju:du fun ¹ u: kug ² ta ²	N,I,O
N-156B-3	保良	ŋk ¹ anna jaudu fn ¹ u: kugzta:	K,T
N-156B-4	共通語	舟を 漕いで、そのあと 休め。	
N-156B-4	池間	fuŋa: kugittikara jukui	N,N,D,U
N-156B-4	狩俣	fuŋu: kugidu atupi juko:dai	N,M
N-156B-4	久貝	fun ¹ u: kugittikara jukui	N,H,N,M
N-156B-4	与那覇	fun ¹ a: kugitti: uriga atun jukui (fun ¹ a:は「舟は」)	S
N-156B-4	来間	fn ¹ u: kugitti unu atu:ba: jukui	K,U,D
N-156B-4	宮国	fnia {kugicci / kugiccja:} unuato: bugarikaiba jukui	K,T
N-156B-4	砂川	fun ¹ u: kugittikara jukui	N,I,O
N-156B-4	保良	fn ¹ a: kugittai unu atuŋ jukui	K,T
N-156B-5	共通語	一人で 舟を 漕いできた。	
N-156B-5	池間	{taɔka:çi: / tavka:çi:} fuŋa: {kugi:fi:ru(漕いでくれ) / kugittai (漕いだ) }	N,N,D,U
N-156B-5	狩俣	taɔkja:ɕidu fuŋu: kugikiɕi	N,M
N-156B-5	久貝	taŋk ¹ a:ɕidu fun ¹ u: kugik ² ta:	N,H,N,M
N-156B-5	与那覇	taɔk ¹ a:ɕi:du fun ¹ a: kug ² du s ² ta: (fun ¹ a:は「舟は」)	S
N-156B-5	来間	{taŋk ¹ a:ɕi:du / taŋk ¹ a:ɕi:dɔ} fn ¹ u: kugitstaŋ	K,U,D
N-156B-5	宮国	taɔkja:sidu fniu kugiksta:	K,T
N-156B-5	砂川	tavk ¹ a:ɕidu {funiju / fun ¹ u:} {kugi ¹ staŋ / kug ² i ¹ staŋ}	N,I,O
N-156B-5	保良	taɔk ¹ a:ɕidu fn ¹ u: kugiksta:	K,T
N-157-1	共通語	毎日 海へ 行く。	
N-157-1	池間	juiçi: iŋkai ifu	N,N,D,U
N-157-1	狩俣	mainitsi iŋgai ifu	N,M
N-157-1	久貝	mainitsa imkai ik ²	N,H,N,M

N-157-1	与那覇	mainiʔitsɯdu imkai ikʰa (強調して ma:inʔitsɯdu と同発音される)	S
N-157-1	来間	mai:nʔits imke:du {its / itsʰ}	K,U,D
N-157-1	宮国	mai:nici imkai ikʰgamata	K,T
N-157-1	砂川	{itsʰ:mai / mainitsʰ} imkai {ikʰ / ikʰs}	N,I,O
N-157-1	保良	mai:nʔits imkai {iks / piz}	K,T
N-157-2	共通語	父は 天気が 悪いから 海へは 行かない。	
N-157-2	池間	(oto:uʰa) kju:ja tenkinu baikaiba ingkaija ikan	N,N,D,U
N-157-2	狩俣	uja: uʰa:tsʰikinu basʰkariba ingaija ikan	N,M
N-157-2	久貝	ʰza: ʰa:tsʰikʰ javvi:du imkaija ikan *但し N-165-3 で「父」は a:dʰa ということ言い替えた。ʰza: → a:dʰa:	N,H,N,M
N-157-2	与那覇	ujaʰ: wa:tsʰakʰnu baʰkaribadu imkaija ikan	S
N-157-2	来間	uja: ʰa:tsʰʰnu bazkariba imke:ja ikan	K,U,D
N-157-2	宮国	uja: {cinʰkzga / cinʰkʰga} bazkaiba imkaija ikazjan	K,T
N-157-2	砂川	uja: wa:ʰskʰnu baʰkariba imkaija ikan	N,I,O
N-157-2	保良	uja: wa:tsʰkʰnu bazkariba imkaija ikan	K,T
N-157-3	共通語	昨日も 海へ 行った。	
N-157-3	池間	fʰnu: ingkai ifʰtai	N,N,D,U
N-157-3	狩俣	kinumaidu ingai {ifʰtai / iftai}	N,M
N-157-3	久貝	kʰnumai imkai pi:ta:	N,H,N,M
N-157-3	与那覇	kʰnumaidu imkai ikʰʰta:	S
N-157-3	来間	tsnume: ʰa:tsʰʰnu bazkariba imke: itstaʰ tsno: ʰa:tsʰʰnu bazkaribadu imke: itstaʰ	K,U,D
N-157-3	宮国	kʰnu:mai imkai iksta:	K,T
N-157-3	砂川	kʰnu:mai imkai {iksʰtaʰ / iksta:} (ks はほぼ同時調音、以下同様)	N,I,O
N-157-3	保良	tsʰnu:mai imkai {iksʰta: / pizʰta:}	K,T
N-157-4	共通語	海へ 行って、泳いで きた。	
N-157-4	池間	ingʰi iki: u:gittai	N,N,D,U
N-157-4	狩俣	ingai ikidu uigi {fʰtai / ftai}	N,M
N-157-4	久貝	imkai iki:du u:gi kʰʰta: *シテ形採れず	N,H,N,M
N-157-4	与那覇	im ikidu ʰ:gitti kʰʰ (ikidu はアリ中止。im ikitti: ʰ:gidu kʰʰ はどうかと聞き返したら OK が出た。但し話者はこの例文を発話していない)	S
N-157-4	来間	imke: {iki:du / ikittidʰ} u:gi tsan	K,U,D

N-157-4	宮国	{imkai / immikidu} ikiçcie u:ɟʒ:ta:	K,T
N-157-4	砂川	imkai ikitti u:gi {ksɔta: / ksta}	N,I,O
N-157-4	保良	imkai ikittɔidu u:gi ksta:	K,T
N-157-5	共通語	海へは 一人で 行って こい。	
N-157-5	池間	iŋkaija {taʊka: / tauka:} {iki: / iki: ku:} (ɸ は後舌 (中舌寄り) 狭 (半狭寄り) 母音。ɸ は唇歯接近音)	N,N,D,U
N-157-5	狩俣	iŋgaija taʊkja:ɕi iki ku:	N,M
N-157-5	久貝	imkai taʃke:ɕi: iki ku:	N,H,N,M
N-157-5	与那覇	imkaija taʊk'a:ɕi: {ikitti ku: / iki fuɟ'a:nna} (ikitti はシテ中止、後者 iki fuɟ'a:nna 「行ってくれないか」の iki がアリ中止)	S
N-157-5	来間	imke:ja taʃk'a:ɕi: {ikitti ku: / iki ku:}	K,U,D
N-157-5	宮国	imkaija taʊkja: iki ku:	K,T
N-157-5	砂川	imkaija taʊk'a:ɕi: ikiku:	N,I,O
N-157-5	保良	imkaija taʊk'a:ɕi iki ku:	K,T
N-158-1	共通語	今日は 父が 家に 来る。	
N-158-1	池間	kju:ja ʔizagadu ja:ŋkai fu:	N,N,D,U
N-158-1	狩俣	kju:ja uja:du ja:ju ffu	N,M
N-158-1	久貝	k'u:ja ʔzanudu ja:ŋkai {kʔɟʒ / ks:}	N,H,N,M
N-158-1	与那覇	k'u:ja ʊjagadu ja:ŋkai kʔɟʒ	S
N-158-1	来間	k'u:ja ʊjagadu ja:ŋke: mm'a / mm'aʔ (いらっしやる) <cf.> dusnudu ja:ŋke: ʔsɔ (友が家に来る)	K,U,D
N-158-1	宮国	kju:ja ʊjagadu ja:ŋkai ki:	K,T
N-158-1	砂川	k'u:ja ʊjagadu ja:ŋkai {ksɔ / ks'a:} (mm'aʔ いらっしやる(敬語))	N,I,O
N-158-1	保良	k'u:ja ʊjagadu ja:ŋkai k'a:	K,T
N-158-2	共通語	今日は 母は 来ない。	
N-158-2	池間	kju:ja mmagadu ku:N	N,N,D,U
N-158-2	狩俣	kju:ja anna: {ku:N / fu:N}	N,M
N-158-2	久貝	k'u:ja ane: ku:ŋ	N,H,N,M
N-158-2	与那覇	k'u:ja anna: ku:N	S
N-158-2	来間	k'u:ja anna: ku:ŋ	K,U,D
N-158-2	宮国	kju:ja anna: ku:ŋ	K,T
N-158-2	砂川	k'u:ja anna: ku:ŋ	N,I,O
N-158-2	保良	k'u:ja anna: ku:ŋ	K,T
N-158-3	共通語	昨日 父が 家に 来た。	

N-158-3	池間	{funu:/nu:/} ʔizaga ja:ŋkai {tai / t'ai}	N,N,D,U
N-158-3	狩俣	kinudu uja: jai kici	N,M
N-158-3	久貝	kʰno: ʔazanudu ja:ŋkai kʰta:	N,H,N,M
N-158-3	与那覇	kʰna: ʊjagadu {ja:ŋke: / ja:ŋkai} kʰta:	S
N-158-3	来間	ʔno: ʊjagadu ja:ŋke: mmʰanta (いらっしやった) / {ʔsta / ʔta} (来た)	K,U,D
N-158-3	宮国	kʰnu:du ʊjaga ja:ŋkai ki:ta:	K,T
N-158-3	砂川	ksʰnu: uja: ja:ŋkai {ksʰta: / ksʰtaʔ}	N,I,O
N-158-3	保良	ʔnu: ʊjagadu ja:ŋkai ksʰta:	K,T
N-158-4	共通語	こっちへ 来て、家に 戻った。	
N-158-4	池間	kumattikara ja:ŋkai muduitai	N,N,D,U
N-158-4	狩俣	umai {kici / kici} jai muduta	N,M
N-158-4	久貝	kumaŋkai {kʰittikara / kʰittikara} ja:ŋkai pi:ta:	N,H,N,M
N-158-4	与那覇	kumaŋkai kʰittidu ja:ŋkai pi:ta:	S
N-158-4	来間	kumaŋke: ʔittidu ja:ŋke: {pinta / piʔta}	K,U,D
N-158-4	宮国	kumaŋkai kʰiccidu ja:ŋkai mudunta:	K,T
N-158-4	砂川	kumaŋkai kʰittidu ja:ŋkai muduri piʔtaʔ (戻って行った)	N,I,O
N-158-4	保良	kumaŋkai kʰittidu ja:ŋkai pi:ta:	K,T
N-158-5	共通語	こっちへ 早く 来い。	
N-158-5	池間	kumaŋkai hajamari ku:	N,N,D,U
N-158-5	狩俣	umai ha:ri ku:	N,M
N-158-5	久貝	umaŋkai pe:pe:ti: ku:	N,H,N,M
N-158-5	与那覇	kumaŋkai pʰa:kai ku:	S
N-158-5	来間	kumaŋke: pʰa:kari ku:	K,U,D
N-158-5	宮国	kumaŋkai pja:pja: ku:	K,T
N-158-5	砂川	kumaŋkai pʰa:pʰa:ti ku:	N,I,O
N-158-5	保良	kumaŋkai pʰa:kari ku:	K,T
N-158-5	共通語	こっちへ 来て みろ。	
N-158-5	池間	umatti mi:ru	N,N,D,U
N-158-5	狩俣	{umai / uma:i} kici mi:ru	N,M
N-158-5	久貝	umaŋkai {kʰi / kʰi} mi:ru	N,H,N,M
N-158-5	与那覇	kumaŋkai kʰi mi:ru	S
N-158-5	来間	kumaŋke: {ʔi:mi:ru / ʔi:mi:ro}	K,U,D
N-158-5	宮国	kumaŋkai kʰi mi:ru	K,T

N-158-5	砂川	kumaŋkai {kiɕi / kiɕi} mi:ru	N,I,O
N-158-5	保良	kumaŋkai kiɕi mi:ru	K,T
N-159-1	共通語	2月は よく 雨が 降る。	
N-159-1	池間	{fu:ɕiʔsɪnna / fu:ɕiʔsɪnda} ju:du {aminu / amja:} fu:	N,N,D,U
N-159-1	狩俣	ɲigatsunna ju:du aminu {ffu/fu:}	N,M
N-159-1	久貝	nigatʂa ju:du aminu fuʔ	N,H,N,M
N-159-1	与那覇	nʲigatʂa ju:du aminu ffʊ	S
N-159-1	来間	nʲigatʂʌnna aminudu ju: ffʊ	K,U,D
N-159-1	宮国	nigacunna unusikʷu aminu fun	K,T
N-159-1	砂川	nigatʂa ju:du aminu fuʔ	N,I,O
N-159-1	保良	nʲigatʂa: ju:du aminu fuʔz	K,T
N-159-2	共通語	明日は 雨は 降らない。	
N-159-2	池間	atʂa: amja: ffan	N,N,D,U
N-159-2	狩俣	atʂa: amja: ffan	N,M
N-159-2	久貝	atʂa: ame: furan	N,H,N,M
N-159-2	与那覇	atʂu: amʲa: ffan (atʂu:は「明日」(Ø格)か)	S
N-159-2	来間	atʂa: amʲa: ffaŋ	K,U,D
N-159-2	宮国	acʲa: amja: ffaŋ	K,T
N-159-2	砂川	atʂa: amʲa: ffaŋ	N,I,O
N-159-2	保良	ata: amʲa: ffaŋ	K,T
N-159-3	共通語	昨日は 雨が 降った。	
N-159-3	池間	nnu: amja: fu:taɪ	N,N,D,U
N-159-3	狩俣	kino: aminudu {ffi / fuʔi}	N,M
N-159-3	久貝	kʷno: aminudu fuʔta:	N,H,N,M
N-159-3	与那覇	kʷna: aminudu ffʊtta:	S
N-159-3	来間	ʂʌno: aminudu fʃʃtaɪ	K,U,D
N-159-3	宮国	kʲinu:ja aminudu fuzta:	K,T
N-159-3	砂川	ksʌnu:ja aminudu {ʃʔtaʔ / ʃʔta:}	N,I,O
N-159-3	保良	ʂʌnu:ja aminudu fuʔzta:	K,T
N-159-4	共通語	大雨が 降って、日照りが 続いている。	
N-159-4	池間	gaba: aminu ffi: ntanu (土が) ka:kijui (乾いている)	N,N,D,U
N-159-4	狩俣	upu aminudu fiɕite pja:inu ʂiɕziki:jun	N,M
N-159-4	久貝	{abʔzaʼami / abʔza:mi} furi:du pʲa:ʔnu ʂadʂʌkʲu: (‘ は切れ目 (ヒアートウス) の意)	N,H,N,M

N-159-4	与那覇	upu aminudu ffitti p'ar̥nu tsuzukiu (tsuzukiu の iu は曖昧な二重母音。tsuzuk'iu: のように聞こえる)	S
N-159-4	来間	upuaminu ffittid̥ p'a:rinu tsu:kaŋ <cf.> p'a:rinu {tsɯɖʌk'iu: / tsɯɖʌk'iu:} (日照が強い)	K,U,D
N-159-4	宮国	up.aminu ficcidu wa:cij̥kinu cuzukiu	K,T
N-159-4	砂川	upu: aminu ffitti(du) ato: p'a:ŋ tsɖʌki uz (日照が続いている)	N,I,O
N-159-4	保良	upuaminu ffitt̥id̥u p'a:rinu tsɯɖʌk'iu:	K,T
N-159-5	共通語	いま 雨が 降っている。	
N-159-5	池間	n:nama aminu ffju:ui	N,N,D,U
N-159-5	狩俣	nnama: aminudu {fju: / ffju:}	N,M
N-159-5	久貝	nnama: aminudu fur̥u:	N,H,N,M
N-159-5	与那覇	nnamadu aminu ffii: (ffii: の iu は曖昧な二重母音。ff'iu:のように聞こえる)	S
N-159-5	来間	n̥nama: aminudu {ff'iu:ŋ / ff'iu:ŋ}	K,U,D
N-159-5	宮国	nnama aminu fju:	K,T
N-159-5	砂川	nama: aminudu {ffiu:ŋ / f'iu:ŋ}	N,I,O
N-159-5	保良	n̥namadu aminu ff'iu:	K,T
N-159-5	共通語	雨が 降って きた。	
N-159-5	池間	aminu ffi: fu:do:	N,N,D,U
N-159-5	狩俣	aminudu ffi ki̥ɕi	N,M
N-159-5	久貝	aminudu fur̥i {k'ŋ: / ks:}	N,H,N,M
N-159-5	与那覇	aminudu ffi kŋŋ	S
N-159-5	来間	aminudu ffi̥ tsɯɖu:ŋ (降ってきている)	K,U,D
N-159-5	宮国	aminudu ffikʒ	K,T
N-159-5	砂川	aminudu ffi ksŋ:	N,I,O
N-159-5	保良	aminu ffi: k'ŋ:	K,T
N-160-1	共通語	みんな ここで 降りる。	
N-160-1	池間	n:nanai umakara uriru	N,N,D,U
N-160-1	狩俣	n:na umandu uriui (uripaŋ 降りるはず。uraci 降ろせ)	N,M
N-160-1	久貝	m:na umaŋ uriŋ	N,H,N,M
N-160-1	与那覇	m:na kumaN uriru (uriru は命令形か)	S
N-160-1	来間	mu:ʒtu kumaŋke: uriŋ mu:ŋto kumaŋke: uriŋ	K,U,D
N-160-1	宮国	m:na {kumau / kumaŋkai} uriru	K,T

N-160-1	砂川	m ₁ :na kumaŋ urittsa: (おりるよ; 意志。断定採れず)	N,I,O
N-160-1	保良	m ₁ :na umaŋdu uri	K,T
N-160-2	共通語	私は ここでは 降りない。	
N-160-2	池間	ba: umanna uridza:N	N,N,D,U
N-160-2	狩俣	ba: umanna uridaraN (「降りられない」か?)	N,M
N-160-2	久貝	baja: umanna urin	N,H,N,M
N-160-2	与那覇	baja: kumanna {urud ^h an / u ^h rdzan}	S
N-160-2	来間	aba: kumaŋke: {uruŋ / uruŋ / urudza:ŋ}	K,U,D
N-160-2	宮国	baja: kumaŋkaija uruzja:ŋ	K,T
N-160-2	砂川	baja: kumaŋna ōru {ɽaŋ / d ^h aŋ}	N,I,O
N-160-2	保良	baja: umaŋna uruŋ	K,T
N-160-3	共通語	ここで バスを 降りた。	
N-160-3	池間	umandu basukara uritai	N,N,D,U
N-160-3	狩俣	uma uridu bassudu uritai (uridu の uri はよく分からない)	N,M
N-160-3	久貝	umandu bas: urita:	N,H,N,M
N-160-3	与那覇	kumandu {bassu / basukara} urita: (basukara は「バスから」に対応)	S
N-160-3	来間	kumaŋke:du bassa {uritaz / urita}	K,U,D
N-160-3	宮国	kumaŋkaidu {bassu / basukara} urita:	K,T
N-160-3	砂川	kumaŋdu bassu: {urita:/urita ^h }	N,I,O
N-160-3	保良	umaŋdu bassu urita:	K,T
N-160-4	共通語	バスを 降りて、電話 かけろ。	
N-160-4	池間	basukara uri: denɯau ja:ŋkai kakiru	N,N,D,U
N-160-4	狩俣	bassu uriciti de ^h ɯau aci ku:	N,M
N-160-4	久貝	bas uritti demɯo: ka ^h kiru	N,H,N,M
N-160-4	与那覇	basupa uritti demɯo: kakiru	S
N-160-4	来間	baskara urittidu demɯao ka ^h kiru	K,U,D
N-160-4	宮国	basukara uritte de ^h ɯau ka ^h kiru	K,T
N-160-4	砂川	bassu uritti demɯaubā: ka ^h kiru	N,I,O
N-160-4	保良	basa: urittai demɯau ka ^h kiru	K,T
N-160-5	共通語	妹が バスから 降りて きた。	
N-160-5	池間	uttunu midunnu basukara urittsu:i	N,N,D,U
N-160-5	狩俣	utudunudu basukara uri ki ^h ci	N,M
N-160-5	久貝	ututunudu bas: uri ks:	N,H,N,M

N-160-5	与那覇	bunaɾnudu basuɕkara uri kɯʂɯ	S
N-160-5	来間	utuɕunudu baskara uri {tsɯɾ / tsɯɾa}	K,U,D
N-160-5	宮国	utuɕu basuɕkara uri kiɕta:	K,T
N-160-5	砂川	aŋgaga (姉が) basuɕkara {urikɕtaʔ / urikɯtaʔ}	N,I,O
N-160-5	保良	utuɕunudu baskara uri kɕta:	K,T
N-161-1	共通語	猿も 木から 落ちる。	
N-161-1	池間	sarumai ki:kara uti:jui	N,N,D,U
N-161-1	狩俣	sarumai ki:garadu {utidu / utɕi}	N,M
N-161-1	久貝	sarumai ki:kara utiʔ	N,H,N,M
N-161-1	与那覇	itsu:maidu ki:kara uti: (「(枝が弱いから)いつも木から落ちる」)	S
N-161-1	来間	sarume: ki:kara {utidus / utidusɯ} (落ちぞする) <cf.> antɕi: itaɕɯraɕu:ka: umakara utimdo: (そんないたずらをしているとそこから落ちるぞ)	K,U,D
N-161-1	宮国	sarumai ki:kara uci	K,T
N-161-1	砂川	saru:mai ki:kara utidu {sɯ: / sɯʔ} (utiʔ では言いにくいとのこと。sɯ:は僅かに摩擦を伴うことあり)	N,I,O
N-161-1	保良	sarumai ki:kara utɕi	K,T
N-161-2	共通語	木を 揺らしても 実(蜜柑)は 落ちない。	
N-161-2	池間	ki: jurugaɕimmai ki:nunaija ɕɕi:ŋkaija utin	N,N,D,U
N-161-2	狩俣	ki:ju jurugaɕɕa:mai n:ta: utin	N,M
N-161-2	久貝	ki:ju jurasi:mmmai naʔza utiŋ	N,H,N,M
N-161-2	与那覇	ki:ju jurugaɕa:mai funʔizza utuN	S
N-161-2	来間	ki:ju jurugaɕa:me: mikanna utuɕ	K,U,D
N-161-2	宮国	ki:u jurugasibam mikanna utuɕ	K,T
N-161-2	砂川	ki:ju ujukasabaŋ nazʔa utuɕ	N,I,O
N-161-2	保良	ki:ju jarasa:mai nazza utuɕ	K,T
N-161-3	共通語	兄が 木から 落ちた。	
N-161-3	池間	sudzanu ki:kara sandzari ɲa:N (ka:ranu utitai 瓦が落ちた)	N,N,D,U
N-161-3	狩俣	addza: (兄は) ki:gara uti addzandu (兄が) ki:gara utɕi	N,M
N-161-3	久貝	sudzanudu ki:kara utita:	N,H,N,M
N-161-3	与那覇	azagadu ki:kara utita:	S
N-161-3	来間	aɕzanadu ki:kara {utiɕ / uti: / utiɕaz}	K,U,D
N-161-3	宮国	azʔaga ki:kara ucɕta:	K,T
N-161-3	砂川	azagadu ki:kara {utitaʔ / utita:}	N,I,O

N-161-3	保良	adzagadu ki:kara utɕita:	K,T
N-161-4	共通語	兄は 木から 落ちて、今は 病院に いる。	
N-161-4	池間	sudzaga ki:kara sandzari:ti nnama icanuja:n urui	N,N,D,U
N-161-4	狩俣	addza ki:gara utidu nnama bjo:indu uʔi	N,M
N-161-4	久貝	sudza: ki:kara utitidu nnama: bjo:in u:	N,H,N,M
N-161-4	与那覇	aza: ki:kara utɕittidu nnama: bjo:in u (u の ɾ は 噪音弱い)	S
N-161-4	来間	adzanadu ki:kara utitti paʔtsu jamaɕitti bjo:inke: piztaŋ	K,U,D
N-161-4	宮国	aza: ki:kara uciccidu nnama: bjo:indu u:	K,T
N-161-4	砂川	aza: ki:kara utittidu nama: bjo:in uʔi	N,I,O
N-161-4	保良	adza: ki:kara utɕittidu nnama: bjo:in u:	K,T
N-161-5	共通語	雨は 天から 落ちて くる。	
N-161-5	池間	ami tinjara uti: fu:	N,N,D,U
N-161-5	狩俣	amja: tinjaradu utɕi: ku:	N,M
N-161-5	久貝	ame: tinjaradu uti ks:	N,H,N,M
N-161-5	与那覇	am ¹ aa tinjaradu uti kʔʔ.	S
N-161-5	来間	am ¹ a: {tinjaradu / tinjaradu} {ffitʔsʔ / utitʔsʔ}	K,U,D
N-161-5	宮国	amja: cinjara uciku:	K,T
N-161-5	砂川	am ¹ a: tɕinjaradu utiksʔ	N,I,O
N-161-5	保良	am ¹ a: tɕinjaradu utɕi kʔʔ:	K,T
N-162-1	共通語	猿が 木の実を 落とす。	
N-162-1	池間	saru ki:nunai utaɕi:jui	N,N,D,U
N-162-1	狩俣	sarunudu ki:nu n:tau {utasʔ: / utas}	N,M
N-162-1	久貝	sarunudu ki:nu naʔzuba: utasʔ	N,H,N,M
N-162-1	与那覇	sarunudu ki:nu nazzu utusʔ	S
N-162-1	来間	sarunudu ki:inke: nu:ri: iki (木にのぼっていった) ki:nu {nazzu / nazzu} utuʔʔ	K,U,D
N-162-1	宮国	saruga ki:nu nazzu utuʔʔ	K,T
N-162-1	砂川	sarua ki:nu {nazʔʔ / nazʔʔ} utusʔ	N,I,O
N-162-1	保良	sarunudu ki:nu nazzu {utuʔʔ / utusʔ}	K,T
N-162-2	共通語	この 猿は 木の実を 落とさない。	
N-162-2	池間	kunu saru: ki:nunaiju:ba utahan	N,N,D,U
N-162-2	狩俣	kunu {saro: / sar ^u o} ki:nu n:tau utasan	N,M
N-162-2	久貝	kunu saro: ki:nu naʔzuba: utasaŋ	N,H,N,M
N-162-2	与那覇	kunu sara: ki:nu naʔruba: utasan	S

N-162-2	来間	kuru saro: ki:nu nazzuba: utusaŋ	K,U,D
N-162-2	宮国	kunu saro: ki:nu mi:uba: utusaŋ	K,T
N-162-2	砂川	kunu sarua ki:nu naz ^h ba: utusaŋ	N,I,O
N-162-2	保良	kunu sara: ki:nu nazzuba: utusaŋ	K,T
N-162-3	共通語	昨日 井戸に 石を 落とした。	
N-162-3	池間	nnu ka:ŋkai issi utaɕitai	N,N,D,U
N-162-3	狩俣	kinu:ndu ka:i issu utaɕitai	N,M
N-162-3	久貝	k ^h anu: ka:ŋkai issu utasta:	N,H,N,M
N-162-3	与那覇	k ^h anu:du issu ka:ŋkai utus ^h ta: (「昨日石を井戸に落とした」の意)	S
N-162-3	来間	tsno: issudu ka:ŋke: {utus ^h taz / utus ^h ta}	K,U,D
N-162-3	宮国	kunu ka:ŋkai issu utus ^h ta:	K,T
N-162-3	砂川	k ^h anu: ka:ŋkai issu: {utus ^h ta ^h / utus ^h ta}	N,I,O
N-162-3	保良	ts ^h anu:du ts ^h a:ŋ ^h a:ŋkai issu utus ^h ta:	K,T
N-162-4	共通語	帽子を 落として、取りに 行った。	
N-162-4	池間	kavvimunu d ^h i:ŋkai utaɕi tuiga ikitai	N,N,D,U
N-162-4	狩俣	bo:ɕiu utaɕidu tuiga iki	N,M
N-162-4	久貝	bo:ɕu: utaɕitudu tu ^h ga ik ^h ta:	N,H,N,M
N-162-4	与那覇	bo:ɕa: utuɕittidu tu ^h ga ik ^h ta: (bo:ɕa:は「帽子は」か)	S
N-162-4	来間	bo:ɕu: utuɕitudu tuzga {ik ^h u:taz / ik ^h u:ta}	K,U,D
N-162-4	宮国	bo:sju: utuɕitt ^h i tunga ik ^h ta:	K,T
N-162-4	砂川	bo:ɕu: utuɕitti tu ^h ga iks ^h ta ^h	N,I,O
N-162-4	保良	bo:ɕu: utuɕitudu tuzga ik ^h u:ta: (行っていた)	K,T
N-162-5	共通語	木に 登って 実を 落として くれ。	
N-162-5	池間	ki:nu hanan ^h kai nu:ri: naimunun utaɕi fi:ru	N,N,D,U
N-162-5	狩俣	ki:ŋgai nu:ri n:tau utaɕi {fi:ru / firu}	N,M
N-162-5	久貝	ki:ŋkai nu:ri iki: na ^h zu u taɕi fi:ru	N,H,N,M
N-162-5	与那覇	ki:ŋkai nu:ri: nazzu utuɕi ffiru	S
N-162-5	来間	ki:n na ^h u:z mikannu turi utuɕi fi:ru (木に成っているみかんをとっておとしてくれ) ki:n nu:ri iki utuɕi fi:ru (木にのぼって行っておとしてくれ)	K,U,D
N-162-5	宮国	ki:ŋkai nu:ricci nazzu utuɕi fi:ru	K,T
N-162-5	砂川	ki:ŋkai nu:r ^h itti {naz ^h / naz ^h ŋkai} utuɕi ffiru	N,I,O
N-162-5	保良	ki:n nu:ri: nazzu utuɕi fi:ru	K,T
N-163-1	共通語	馬も 人を 蹴る。	

N-163-1	池間	nu:mamai {fi̯tu / fi̯tu} uba ki: tausu	N,N,D,U
N-163-1	狩俣	nu:mamai p ^h i̯tuudu ki:	N,M
N-163-1	久貝	nu:mamai pstu: kiʔ	N,H,N,M
N-163-1	与那覇	nu:ma:mai p ^h tu:ʔu {kɔ:ɖusu / kizɔ}	S
N-163-1	来間	nu:mame: pstu:du {kiz / kiɲ}	K,U,D
N-163-1	宮国	nu:mamai {pi̯tuba: / pi̯tu:} kiz	K,T
N-163-1	砂川	nu:mamai pstu:ba: {kiʔ / kiʔdu sʔ} (utiʔ では言いにくいとのこと。sʔは僅かに摩擦を伴うことあり)	N,I,O
N-163-1	保良	nu:mamai pstu: kiz	K,T
N-163-2	共通語	おとなしい 馬は 人を 蹴らない。	
N-163-2	池間	manai nu:ma: fi̯tu uba kiran	N,N,D,U
N-163-2	狩俣	nu:ma: p ^h i̯tuuba kiran	N,M
N-163-2	久貝	nuka:nukanu nu:ma: pstu:ba: kiran	N,H,N,M
N-163-2	与那覇	nuka:nu nu:ma: p ^h tu:ba kiran	S
N-163-2	来間	nuka:nu nu:ma: p ^h tuba: kiɲ	K,U,D
N-163-2	宮国	nuka:nukanu nu:ma: {pi̯tuba: / pi̯tuba} kiran	K,T
N-163-2	砂川	nuka:nukanu nu:ma: p ^h tu:ba: {kɔsaɲ / kɔsaɲ}	N,I,O
N-163-2	保良	manai:manainu nu:ma: pstu: kiran	K,T
N-163-3	共通語	昨日 あの 馬は 人を 蹴った。	
N-163-3	池間	nnu: kanu nu:ma: ki:taɪ	N,N,D,U
N-163-3	狩俣	kino: kanu nu:ma: p ^h i̯tuudu kiri (p ^h i̯tu は pstu~p ^h tu か?)	N,M
N-163-3	久貝	kʔnu: kanu nu:ma: pstu:du {kiʔta: / kiʔta:}	N,H,N,M
N-163-3	与那覇	kɔna: kanu nu:ma: p ^h tu:du kizɔta: (kɔna:は「昨日は」)	S
N-163-3	来間	tsnudu kanu nu:ma: pstu: {kizta: / kizta:}	K,U,D
N-163-3	宮国	kīnu: kanu nu:ma: pi̯tu: kizta:	K,T
N-163-3	砂川	ksnu: kanu nu:ma: p ^h tu: kʔtaʔ	N,I,O
N-163-3	保良	tsanu:ja kanu nu:ma: pstu: kizta:	K,T
N-163-4	共通語	主（あるじ）を 蹴って、逃げ去った。	
N-163-4	池間	nussu kiri: ɕiŋgi: hari:ja:N	N,N,D,U
N-163-4	狩俣	nussidu kiriɕiti piŋgitai	N,M
N-163-4	久貝	nussu kiritidu piŋgi pi̯ta:	N,H,N,M
N-163-4	与那覇	aruziba kirittidu piŋgi pi:ta:	S
N-163-4	来間	nu:manu nussudu kirittidu nussu ki̯rittidu piŋgi pi̯ta: (うまの主をけてぞにげていった)	K,U,D

N-163-4	宮国	aruzzadu kʒri piŋgasi piraʃita:	K,T
N-163-4	砂川	nussɹ: kirittidu piŋgita:	N,I,O
N-163-4	保良	nussu kirittɛi piŋgi pizta:	K,T
N-163-5	共通語	その ボールを ここに 蹴って くれ。	
N-163-5	池間	unu ma:iju kumaŋkai kiri: fi:ru	N,N,D,U
N-163-5	狩俣	unu bo:ru umai kiri fi:ru	N,M
N-163-5	久貝	unu {bo:ru: / bo:ru'o} umaŋkai kiri fi:ru (bo:ru'o は方言では ない)	N,H,N,M
N-163-5	与那覇	unu ma:ʔu kumaŋkai kiri firu	S
N-163-5	来間	unu ma:zzʊ (まりを) kiri fi:ɾʊ kumaŋke kiri jaraɛe (け ってくれ) <cf.> vvaga kire (おまえがけれ)	K,U,D
N-163-5	宮国	unu ma:zzu kumaŋkai kiri fi:ru	K,T
N-163-5	砂川	unu bo:ru: kumaŋkai kiri jaraɛi	N,I,O
N-163-5	保良	unu bo:ru: kumaŋkai kiri fi:ru	K,T
N-163B-1	共通語	父が 毎日 ゴミを 捨てる。	
N-163B-1	池間	{ʔizaga / zzaga} mainitsi gumiuba: siti:	N,N,D,U
N-163B-1	狩俣	uja: mainitsi gomiu {siti/sitidu} (sitiui 捨てている)	N,M
N-163B-1	久貝	ʔzanudu mainitsɹ gumʲu: stiʔ	N,H,N,M
N-163B-1	与那覇	ujaga mai:nʲitsɹ gumiu sutiʔ	S
N-163B-1	来間	ujanadʊ gʊmʲu:ba: mainʲitsɹ {stiŋ/stiz}	K,U,D
N-163B-1	宮国	ujagadu mai:niɕi gumiu sɕiu	K,T
N-163B-1	砂川	ujagadu mainʲitsɹ gumʲu: ʃti	N,I,O
N-163B-1	保良	ujagadu mainʲitsɹ gumʲu:ba: ʃtɛi	K,T
N-163B-2	共通語	祖母は 古い 着物も 捨てない。	
N-163B-2	池間	oba:ja jari dʒim (nu ?) mai sitiŋ	N,N,D,U
N-163B-2	狩俣	oba:ja jari kinnuba sɕiŋ	N,M
N-163B-2	久貝	a:ma: fuʔkʲaŋnumai sɕiŋ	N,H,N,M
N-163B-2	与那覇	mma: furu:nu kʲaŋnumai sutuŋ	S
N-163B-2	来間	pa:mma: fuɾumi: ʔnnume: stuŋ	K,U,D
N-163B-2	宮国	mma: fz:fznu kʲinnumai sɕuŋ	K,T
N-163B-2	砂川	mɕma: fuʔfuʔnu ksɔnumai ʃtuŋ	N,I,O
N-163B-2	保良	mma: fz:fznu ʔaŋnumai ʃtuŋ	K,T
N-163B-3	共通語	古い 道具は おととい 捨てた。	
N-163B-3	池間	jari daʊgu mi:kanai sitiŋ	N,N,D,U

N-163B-3	狩俣	jari dovva bututu ^z idu s ^h iti	N,M
N-163B-3	久貝	fu ^z do:ɔɔuba: bututu ^z idu s ^h ita:	N,H,N,M
N-163B-3	与那覇	furu:nu do:guba: bututundu s ^h ita:	S
N-163B-3	来間	f ^h uf ^h u ^h nari:nu tska:ru ^h do:vva: (古くなった使えない道具は) {tsnudu stita ^h / buttuz ^h du {st ^h itaz ^h / st ^h ita ^h }}	K,U,D
N-163B-3	宮国	{fz:fznu / f ^h :f ^h nu} do:guba: bututundu s ^h ita:	K,T
N-163B-3	砂川	fu ^z fu ^z nu do:ɔba: bututu ^z {st ^h ita ^h / stita:}	N,I,O
N-163B-3	保良	fz:fznu da:vvuba: bututuz ^h s ^h ita:	K,T
N-163B-4	共通語	古いものは捨てて、新しいものを 買え。	
N-163B-4	池間	jari munuba s ^h iti: mi: munu kai	N,N,D,U
N-163B-4	狩俣	jari munuba s ^h iti ^h ci m ^h :mi: munu: kai	N,M
N-163B-4	久貝	fu ^z munuba: s ^h iti me: ^z munu:ba kai	N,H,N,M
N-163B-4	与那覇	furu:nu munu:ba: sutitti: ara:nu munu: kai	S
N-163B-4	来間	f ^h umunu:ba: st ^h iti aramunu: ke:	K,U,D
N-163B-4	宮国	{fz:fznu / f ^h :f ^h nu} munu:ba: s ^h ic ^h ic ^h i kagi:nu munu: kai	K,T
N-163B-4	砂川	fu ^z fu ^z nu munuuba: stitti m ^z :m ^z :nu munu: kai	N,I,O
N-163B-4	保良	fzmunu:ba: s ^h it ^h ic ^h i m ^h :m ^h :nu munu: kai	K,T
N-163B-5	共通語	ゴミを そこに 捨てて くれ。	
N-163B-5	池間	janamunuba: kuma ^h kai s ^h iti: ku: (捨てて来い) s ^h it ^h iru (捨てる)	N,N,D,U
N-163B-5	狩俣	gumju:ba umai s ^h iti fi:ru	N,M
N-163B-5	久貝	gumju : uma ^h kai s ^h iti fi:ru	N,H,N,M
N-163B-5	与那覇	gumiu uma ^h kai s ^h iti firu	S
N-163B-5	来間	gum ^h u:ba: uma ^h ke: stifi:ro <cf.> stiro 捨てろ (命令形)	K,U,D
N-163B-5	宮国	gumiu uma ^h kai {s ^h it ^h iru / s ^h it ^h i fi:ru}	K,T
N-163B-5	砂川	gumiuba: uma ^h s ^h iti f ^h iru	N,I,O
N-163B-5	保良	gum ^h u: uma ^h kai st ^h i fi:ru	K,T
N-164-1	共通語	長い 木の 枝を 切る。	
N-164-1	池間	ki:nu judau kiri	N,N,D,U
N-164-1	狩俣	naga ki:nu idau kiri	N,M
N-164-1	久貝	naga:naganu ki:nu judo: ki ^h ci	N,H,N,M
N-164-1	与那覇	naga:nu ki:nu judo:du k ^h ɔ ^h ɔ ^h (「枝」のØ格形式は juda)	S
N-164-1	来間	naga:nu ki:nu ido:ba: ts ^h ice (切れ) ba ^h ja tsade (私が切ろう) bam ^h me: ts ^h tu s ^h to (私も切りぞするよ) kanu pstunudu {ts ^h / ts ^h ɔ ^h } (あの人切る)	K,U,D

N-164-1	宮国	naga:nu ki:nu itau̯ ki̯si	K,T
N-164-1	砂川	naga:naganu ki:nu judau ksʔ	N,I,O
N-164-1	保良	naga:naganu ki:nu judau kʔ:	K,T
N-164-2	共通語	夜には 爪を 切らない。	
N-164-2	池間	junaka: ʔsimjuba kiraN	N,N,D,U
N-164-2	狩俣	ju:nanna ʔsimiuba ki̯saN	N,M
N-164-2	久貝	june:nna ʔami:uba: kʔʂaŋ	N,H,N,M
N-164-2	与那覇	junainna ʔsumiuba kʔsaN	S
N-164-2	来間	june:ja (夜は) ʔmʲu:ba: ʔsaŋ	K,U,D
N-164-2	宮国	junainna cumiuba: ki̯saŋ	K,T
N-164-2	砂川	junaija ffaffunari:karaja ʔʔmijuba: {kʔʂaŋ / kʔsaŋ}	N,I,O
N-164-2	保良	junainna ʔamʲu:ba: kʔʂaŋ	K,T
N-164-3	共通語	私が ガジマルは 切った。	
N-164-3	池間	bagadu gadzimarunu ki:ja kiritaido:	N,N,D,U
N-164-3	狩俣	ba:du gadzimarudu ki:sita	N,M
N-164-3	久貝	ba:du gadzamagi:juba: kʔʂa:	N,H,N,M
N-164-3	与那覇	bagadu gazamagi:uba kʔʂa:	S
N-164-3	来間	bagadu gadzimaruki:ju {ʔʂa / ʔʂaʔ}	K,U,D
N-164-3	宮国	baga gazimaruba: ki:ta:	K,T
N-164-3	砂川	bagadu gadzimaruba: {kʂaʔ / kʂa:taʔ}	N,I,O
N-164-3	保良	bagadu gadzamagi:juba: kʔʂa:	K,T
N-164-4	共通語	その 長い 髪は 切って、お祝いに 行けよ。	
N-164-4	池間	kunu nagai karadzʲi: (ba?) kiri: ju:ŋkai ikija:	N,N,D,U
N-164-4	狩俣	unu naga karattsuba ki̯ʔiti jo:ŋgai ikijo	N,M
N-164-4	久貝	unu nagagaradzuba ki̯ʔiti jo:ʔfo:ga iki	N,H,N,M
N-164-4	与那覇	unu naga karazzuba kʔʔiti jo:ŋkai iki	S
N-164-4	来間	nagakara ^d zuba: {ffacitti / ʔʔʔiti} jo:ŋke:ja iki	K,U,D
N-164-4	宮国	unu naga:nu karazziuba: ki̯ʔitte jo:ŋkaija ikʲi	K,T
N-164-4	砂川	unu naga:naganu karattsuba: {ki̯ʔiti / ki̯ʔiti} jo:ʔŋkai(ja) iki jo:	N,I,O
N-164-4	保良	unu nagakaradzuba: ki̯ʔiti ja:ʔŋkai pirijo	K,T
N-164-5	共通語	この 紐を 三つに 切って くないか。	
N-164-5	池間	kunu bo: (棒を) mi:ʔŋkai kiri: fi: samati (samati の ti は 不詳)	N,N,D,U

N-164-5	狩俣	unu na:ju (縄を) mi:tsingai kiçi fi:ru	N,M
N-164-5	久貝	kunu himo: mi:tsarkai kiçi fi:ɕa:nna	N,H,N,M
N-164-5	与那覇	kunu tsuno: mi:tsun'kai kɕi fur'a:nna (tsuno:は「綱を」)	S
N-164-5	来間	unu bu:juba: mi:tsarkke: tsɕifi:ru	K,U,D
N-164-5	宮国	kunu cinau mi:cun'kai kiçi fu:zjanna	K,T
N-164-5	砂川	kunu ts'nauba: mi:ts'arkai {kiçi / kiçi} ffi'anna	N,I,O
N-164-5	保良	unu bu:juba: mi:tsarkai kiçi fi:ru	K,T
N-165-1	共通語	鶏が 逃げないように (両) 足を 縛る。	
N-165-1	池間	mja:tuiju ɕingijjo:n simai	N,N,D,U
N-165-1	狩俣	tuinu pingijjo:m pagiju simari	N,M
N-165-1	久貝	tu'nu pingij jo:ŋ fuɕapag'zu s'ma'	N,H,N,M
N-165-1	与那覇	tunnu pingun' jo:N pagu s'ma	S
N-165-1	来間	tunnu pingun jo:ndu patɕu s'ma'u:ts(ɾ) karigadu patɕuba: sama (彼が足をしばる)	K,U,D
N-165-1	宮国	mmadunga pingiraruŋ ftapagu fuzziukiba	K,T
N-165-1	砂川	tu'nu pingunjoŋ ftapag'du s'mari	N,I,O
N-165-1	保良	tuznu pingun jo:ŋ padɕu: {s'maz / fɕts}	K,T
N-165-2	共通語	足も 羽も 縛らない。	
N-165-2	池間	hazimai hajimai simaran	N,N,D,U
N-165-2	狩俣	pagju:mai panju:mai simaran	N,M
N-165-2	久貝	pag'mai pan'u:mai s'maraŋ	N,H,N,M
N-165-2	与那覇	pag'umai pan'iumai s'maran	S
N-165-2	来間	patɕume: pan'u:me: {s'maraŋ / s'maraŋ}	K,U,D
N-165-2	宮国	pagi'mai paniumai fuzzjaŋ	K,T
N-165-2	砂川	pag'mai paniumai s'maraŋ	N,I,O
N-165-2	保良	padɕamai pan'u:mai {s'maraŋ / fɕtaŋ}	K,T
N-165-3	共通語	父が 鶏を 縛った。	
N-165-3	池間	zzaga mja:tuiju simaritari	N,N,D,U
N-165-3	狩俣	uja:du tu'i {simari: / simaida (simaidai か?) }	N,M
N-165-3	久貝	a:ɕagadu tu'zu s'marta:	N,H,N,M
N-165-3	与那覇	ujagadu tuzzu s'ma'ɾa:	S
N-165-3	来間	ujanadu tuzzu {s'marta / smazta}	K,U,D
N-165-3	宮国	ujaga tuzzu {fuzta: / fɕta:}	K,T
N-165-3	砂川	ujagadu tu'ba: s'ma'ɾa'	N,I,O

N-165-3	保良	ujagadu tuzzu {smaz̥ta: / f̥t̥sta:}	K,T
N-165-4	共通語	鶏を 縛って、籠に 入れてね。	
N-165-4	池間	mja:tui simari: hakunu nakaŋkai iriŋa:	N,N,D,U
N-165-4	狩俣	tuʔi simari: pʰaŋkɯŋgai (箱に) id̥zi uki	N,M
N-165-4	久貝	tuʔazu s̄maritti kagun̄kai ʔzi fi:ru	N,H,N,M
N-165-4	与那覇	tuzzu s̄maitti: kagun̄kai ʔzi firu	S
N-165-4	来間	tuzzu {smari kagun̄ke z̄zitaŋ / smaritti kagun̄ke z̄ziro}	K,U,D
N-165-4	宮国	tuzzu simari kagun̄kai zzi fi:ru	K,T
N-165-4	砂川	tuzʔa s̄maritti kagun̄kai {iz̄irujo: / id̥z̄irujo:}	N,I,O
N-165-4	保良	tuzzu {smaritt̄si / f̥t̄sitt̄si} kagun̄kai {z̄zi:ru / iz̄i:ru}	K,T
N-165-5	共通語	おまえが 鶏を 縛って くれ。	
N-165-5	池間	vvaga tuijuba simari: fi:ru	N,N,D,U
N-165-5	狩俣	vva tuʔʔi (tuʔiuba か?) simari uki	N,M
N-165-5	久貝	vvaga tuʔazu s̄marifi:ru	N,H,N,M
N-165-5	与那覇	vvaga tuzzu s̄marifi:ru	S
N-165-5	来間	vvaga tuzzuba: {smari / s̄marifi:ro} vvaga smare (おまえがしぱれ)	K,U,D
N-165-5	宮国	vvaga tuzzu simari fi:ru	K,T
N-165-5	砂川	vvaga tuʔaba s̄marifi:ru	N,I,O
N-165-5	保良	vvaga tuzzuba {smari / f̄t̄si:} fi:ru	K,T
N-166-1	共通語	毎日 芋を 掘る。	
N-166-1	池間	kju: (今日) ka:ju (井戸を) furadi	N,N,D,U
N-166-1	狩俣	abu: {p̄ɸa / p̄ɸ:}	N,D,U
N-166-1	与那覇	NR/「いつもここを掘る」 itsu:me: kumaudu puz̄a	H
N-166-1	来間	main̄ts̄a mmu: puŋ (i は a に統一して書いた)	K,I,T
N-166-1	宮国	main̄ts̄i m̄mo: {pozka / pol̄ka}	T,N
N-166-1	砂川	main̄ts̄i ka:u (井戸を) puʔi its̄i:mai (いつも) puriuʔi (掘っている)	N,U,D
N-166-1	保良	mai:n̄its̄a a:bu:du puz̄a (a:bu は「穴」)	S,M
N-166-2	共通語	母親は 今日 芋を 掘らない。	
N-166-2	池間	kju:ja ka:juba furad̄za:N	N,N,D,U
N-166-2	狩俣	{abuba / abuβa} p̄ɸuraŋ	N,D,U
N-166-2	与那覇	NR / 「ここでは穴は掘らない」 kumanna ano:ba puran	H
N-166-2	来間	anna k̄u:ja mmuba pr̄aŋ	K,I,T

N-166-2	宮国	anna k'u:ja mmo poʃan	T,N
N-166-2	砂川	anna: kju:ja {ka:u/ka:uba} puran	N,U,D
N-166-2	保良	anna: k'u:ja mmuba puran (puzʔta: は puzʔtaɪ のように聞こえる)	S,M
N-166-3	共通語	昔 井戸を 掘った。	
N-166-3	池間	ŋkja:ŋ ka:ju fuitai	N,N,D,U
N-166-3	狩俣	abuba puridə (də は[u]より前舌の音色)	N,D,U
N-166-3	与那覇	NR/「犬が穴を掘った」 innudu ano: puzta:	H
N-166-3	来間	ŋka:nna ka:judu puztaɪ	K,I,T
N-166-3	宮国	ŋk'a:ŋ ka:ju poʃta:	T,N
N-166-3	砂川	ŋkja:nna (昔は) ka:udu puʔtaʔ	N,U,D
N-166-3	保良	ŋk'a:N ka:ju puzʔta:	S,M
N-166-4	共通語	穴を 掘って、休め。	
N-166-4	池間	ana: furi: jukui	N,N,D,U
N-166-4	狩俣	abo: puriʃiti jukui	N,D,U
N-166-4	与那覇	NR/「穴を掘ってから休め」 ana: puritti jukui	H
N-166-4	来間	ana: puri juke:	K,I,T
N-166-4	宮国	anaw poʃittɕi jukui	T,N
N-166-4	砂川	anau puritti jukui	N,U,D
N-166-4	保良	a:nau purittɕi jukui	S,M
N-166-5	共通語	あそこの 地面を 掘って こい。	
N-166-5	池間	kamanu dʒi: furi: ku	N,N,D,U
N-166-5	狩俣	anu abu puri (形はアリ中止, 意味は命令)	N,D,U
N-166-5	与那覇	NR/「あっちを掘ってこい」 kamau puri ku:	H
N-166-5	来間	kamanu zz puriku:	K,I,T
N-166-5	宮国	kamano dʒizoo poʃi ko:	T,N
N-166-5	砂川	kamanu dʒi:u puri ku:	N,U,D
N-166-5	保良	kama:nu dʒa:ju {purittɕi ku: / puri fi:ru} (purittɕi はシテ中止、後者 puri fi:ru 「ほってくれ」の puri がアリ中止)	S,M
N-167-1	共通語	庭に 荷物を 出す。	
N-167-1	池間	minakanʔkai ja:nu (家の) dauvu (道具を) idasi	N,N,D,U
N-167-1	狩俣	a:raŋkai {muʃi / məʃi} ki	N,D,U
N-167-1	与那覇	minakanke: nimuttsuba: idasɪ	H

N-167-1	来間	minakaŋke: nimuttɕu idae: (k はかなり奥の方で h と聞き間違う)	K,I,T
N-167-1	宮国	niwaŋkai {nimottɕu / nimottɕu} idaei (前庭 = minaka とち)	T,N
N-167-1	砂川	minakaŋkai ni:ju idaei	N,U,D
N-167-1	保良	uru:ba ututunudu idasɔ (「それは弟が出す」の意)	S,M
N-167-2	共通語	雨の ときには 外には 荷物を 出さない。	
N-167-2	池間	aminu tukjanna minakaŋkai (庭に) idanan	N,N,D,U
N-167-2	狩俣	NR / nimutɕba idasna (出すな 命令禁止 * 否定の形とれず)	N,D,U
N-167-2	与那覇	amifuunu tukjanna nimutɕba ara:nke: idasan	H
N-167-2	来間	ami fnna puŋaŋkeɛ {idasan (3 人称) / idasad'a:ŋ (1 人称) } (eɛ は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-167-2	宮国	ameno tʰoŋ'a:nna puŋaŋkai nimottɕu idasad'a:ŋ	T,N
N-167-2	砂川	aminu tukja:nna puŋaŋkaija ni:juba idasan	N,U,D
N-167-2	保良	aminu tuk'a:nna ara:ŋkaija attaubā idasan (atta は「ゲタ」)	S,M
N-167-3	共通語	友達が 荷物を 外に 出した。	
N-167-3	池間	duŋinu davvu idaeitai	N,N,D,U
N-167-3	狩俣	ʰsnudu nimutɕuba: a:raŋkai idaei	N,D,U
N-167-3	与那覇	duŋnu nimutɕu ara:nke: idasita:	H
N-167-3	来間	duŋunudu nimuttɕu puŋaŋke: idastan	K,I,T
N-167-3	宮国	dosɔnodo/dosɔno nimottɕu puŋaŋkai {idaeita / idasita}	T,N
N-167-3	砂川	duŋnudu ni:ju puŋaŋkai idasitaʔ	N,U,D
N-167-3	保良	duŋnudu issu ara:ŋkai idasuta: (iss は「イス」)	S,M
N-167-4	共通語	荷物を 外に 出して、それから 帰れ。	
N-167-4	池間	minakaŋkai davvu idaeikara ja:ŋkai (家へ) iki (行け)	N,N,D,U
N-167-4	狩俣	a:raŋk'ai idaeite {jukui (休め) / ŋgiru (帰れ)}	N,D,U
N-167-4	与那覇	nimutɕu ara:nke: idasitti piri	H
N-167-4	来間	nimuttɕu huŋaŋkeɛ idasiti pire (eɛ は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-167-4	宮国	nimottɕu puŋaŋkai idaeitei kara pʰiri	T,N
N-167-4	砂川	ni:ju puŋaŋkai idafitti uŋkara piri	N,U,D
N-167-4	保良	issu ara:ŋkai idaeitei nnamakara piri (iss は「イス」)	S,M
N-167-5	共通語	早く 荷物を 出して こい。	
N-167-5	池間	hajamariti: nimutɕi idaei: ku:	N,N,D,U
N-167-5	狩俣	isgi idaei ku:	N,D,U

N-167-5	与那覇	pja:kariti nimuttsu idasitti kuu (シテ中止がでており、アリ中止 をとり損ねた)	H
N-167-5	来間	p'a:kari nimuttsu idasi ku: (1 つ目の k はかなり奥の方で h と 聞き間違ふ)	K,I,T
N-167-5	宮国	p'a:p'a:tei nimottsu idacitei ku:	T,N
N-167-5	砂川	pja:pja:ti ni:ju {ida:fi / idafitti} ku:	N,U,D
N-167-5	保良	p'a:p'a:tei issu idaci: ku: (iss は「イス」)	S,M
N-168-1	共通語	弟は いつも 荷物を 一人で 持つ。	
N-168-1	池間	utugama: itsimai tavka:ci: muti: fu	N,N,D,U
N-168-1	狩俣	mainits {tafk'a: / tafg'a:} ci:du nimotsuba mutsɔ	N,D,U
N-168-1	与那覇	ututa: itsu:me: nimuttsu tauke:si: mutsɔ	H
N-168-1	来間	utuɬua itsume: nimuttsuba tafk'a:sidu mutsu (ua は曖昧な二重 母音)	K,I,T
N-168-1	宮国	ot ^h ut ^h oo itsɔmai {tavk'a:ci / tauk'a:ci} nimottsu motɕi	T,N
N-168-1	砂川	utsuto: itsi:mai ni:ju taukja:fi mutfu:ɬ (持っている。 mutɕi 持 つ)	N,U,D
N-168-1	保良	utut ^h a: itsɔ:mai issuba to:k'a:ci:du mutsɔ (iss は「イス」)	S,M
N-168-2	共通語	祖母は 荷物を 持たない。	
N-168-2	池間	ha: mma: ni:juba: mutɕan	N,N,D,U
N-168-2	狩俣	NR / ni:ba mutsna (持つな 命令禁止 * 否定の形とれず)	N,D,U
N-168-2	与那覇	mma: nimuttsuba: mutan	H
N-168-2	来間	pa:mma nimuttsuba {mutɕuna / mutɕan}	K,I,T
N-168-2	宮国	mɕma: {nimottsu / nimotts'u} motɕa:ɲ	T,N
N-168-2	砂川	mma: {ni:juba / ni:ju} mutadɕa:ɲ (mutan は他部落 / mutadi 持とう / mutattɕa: これから持つよ)	N,U,D
N-168-2	保良	mma: kabannuba mutan (kaban は「カバン」)	S,M
N-168-3	共通語	祖父が むしろを 持った。	
N-168-3	池間	ujaga mussuuba muttai	N,N,D,U
N-168-3	狩俣	{ɕu:gado / ɕu:gadu} musso:ba:də mutsɔ	N,D,U
N-168-3	与那覇	sju:ga mussuu mutsita:	H
N-168-3	来間	ɕu:ga mussu: mutɕiɔ	K,I,T
N-168-3	宮国	ɕu:ja mussu: motɕita:	T,N
N-168-3	砂川	{ɬu:ga / ɬu:gadu} mussu: mutɕitaɬ	N,U,D
N-168-3	保良	ɕu:gadu mussu ^ɾ u mutɕita(:)	S,M

N-168-4	共通語	父が 酒 持って、母が 食べ物を 持つ。	
N-168-4	池間	uzaga saki muti: mma: faimunu muttai	N,N,D,U
N-168-4	狩俣	ɕu:ɡadu (祖父が) {ɕakɨba / ɕakeba} mutɕi: usaijuba: oba:ga (祖母が) mutɕi	N,D,U
N-168-4	与那覇	ujaga sakju: mutɕitti annaga fo:munuu mutsɨta:	H
N-168-4	来間	ujaga sakɰu: mutɨɾ: annaga to:munu: mutɨɾ	K,I,T
N-168-4	宮国	ojaa sak ^h eo _ɥ motɕu annaa {ɸoomono / ɸoumono} motɕu	T,N
N-168-4	砂川	uja: sakju: {mutɕitti / mutɕi} anna: faumunu: mutɕi	N,U,D
N-168-4	保良	ujaga sakiu mutɕittɕi annaga fau munu ^ɾ u mutɨɾ (fau は ɨ: の ように聞こえる)	S,M
N-168-5	共通語	早く 酒を 持って こい。	
N-168-5	池間	hajamari: sakju: muti: ku:	N,N,D,U
N-168-5	狩俣	p'a:riti ɕaki mutɕi {k'u: / gu:}	N,D,U
N-168-5	与那覇	pja:kariti sakju: mutɕi ku:	H
N-168-5	来間	p'a:ɲkari sakɰu: mutɕi ku:	K,I,T
N-168-5	宮国	p'a:p'a:tsi sak ^h eu motɕi ku:	T,N
N-168-5	砂川	pja:pja:ti sakju: mutɕi ku:	N,U,D
N-168-5	保良	p'a:p'a:tsi sakiu mutɕi ku:	S,M
N-169-1	共通語	太郎は いつも 煙草を 買う。	
N-169-1	池間	taro:ja itsimai tabuku: kau	N,N,D,U
N-169-1	狩俣	ba: (私は) issɨmai tabakudu ko: (issɨmai の ɾ の左肩に摩擦無 し)	N,D,U
N-169-1	与那覇	taro:ja itsu:me: tabako: ko:	H
N-169-1	来間	taro:ja itsume: tabuku:du ko:	K,I,T
N-169-1	宮国	tarooja itsi ^ʔ u ^ɥ mai tabuk ^ɥ o _ɥ kau	T,N
N-169-1	砂川	taro:ja itsi:mai {tabako: / tabaku:du} {kau / kaiu ^ʔ (買って いる)}	N,U,D
N-169-1	保良	taro:ja itsɨ:mai tabakoudu k ^h au	S,M
N-169-2	共通語	誰も 芋を 買わない。	
N-169-2	池間	tarumai n:nuba ka:n	N,N,D,U
N-169-2	狩俣	taɯmai mɰmuba ka:ɲ	N,D,U
N-169-2	与那覇	to:me: m:muba ka:n	H
N-169-2	来間	^ʔ to:me: mmuba ka:ɲ	K,I,T
N-169-2	宮国	to ^ʔ omai mɰmo ka:n	T,N

N-169-2	砂川	to:mai m:uba ka:ŋ	N,U,D
N-169-2	保良	taɔmai m:ba k ^h a:N	S,M
N-169-3	共通語	昨日 魚を 買った。	
N-169-3	池間	nnu zz: kautai	N,N,D,U
N-169-3	狩俣	ksno: ɾʔnudu kai (ɾʔ の最初の ɾ の左肩に摩擦無し)	N,D,U
N-169-3	与那覇	ksna: zzuu ko:ta:	H
N-169-3	来間	ʔɾnu z:ba: ko:taŋ	K,I,T
N-169-3	宮国	k ^s inoo zzu: kauta:	T,N
N-169-3	砂川	k ^s inu: ɪzu: kauta ^ʔ	N,U,D
N-169-3	保良	ʔɾnu: ɾzu ^ɾ u kaɔta(:) (ɾzu は zzu とも撥音される)	S,M
N-169-4	共通語	私が 魚を 買って、友達は 肉を 買った。	
N-169-4	池間	baga ʔi: kai dusija butaniku kaɔtai	N,N,D,U
N-169-4	狩俣	ba: ɾʔ kai dussa {mʔ:du / mə:du} kai (mʔ: は弱い摩擦で mə: は摩擦無し)	N,D,U
N-169-4	与那覇	baga zzuu kaitti dussa nikuu ko:ta:	H
N-169-4	来間	aba: zzu:kai dussa niku:du ko:taŋ	K,I,T
N-169-4	宮国	{baga / baja} zzu: kau doʃsa niku kauta:	T,N
N-169-4	砂川	baja ɪzuu {kauta ^ʔ / kau / kaittidu} dussa niku: kauta ^ʔ	N,U,D
N-169-4	保良	baja: ɾzu: kaitʔi(du) dussa ɔa:ju kaɔta(:) (ɔa: は「豚(肉)」)	S,M
N-169-5	共通語	油を 買って こい。	
N-169-5	池間	avvau kaiku:	N,N,D,U
N-169-5	狩俣	ʔaɣ ^h u: (酒を) kai k'u:	N,D,U
N-169-5	与那覇	avvo: ke: ku:	H
N-169-5	来間	avva kai ku:	K,I,T
N-169-5	宮国	avvaɔ ₁ k ^h ai ku:	T,N
N-169-5	砂川	aɔɔau kai ku: (ɔ は弱い唇歯音)	N,U,D
N-169-5	保良	avvau kai ku:	S,M
N-170-1	共通語	毎日 野菜を 売る。	
N-170-1	池間	sɪ:ju vvju:	N,N,D,U
N-170-1	狩俣	mainiʔ su:nu pa:idu ɔ: (ɔ に摩擦無し)	N,D,U
N-170-1	与那覇	mainiʔɾ jasaiju {ɔ:ta: / u:ta:} (ɔ: と発音しているようだが、u: でも許容される)	H
N-170-1	来間	mainiʔɾ su:judu v:	K,I,T
N-170-1	宮国	ma ^ʔ initsi su:ju {u: / uv} (uv の v は弱い)	T,N

N-170-1	砂川	itsi:mai su:ju {ʊ: / ʊʊ}	N,U,D
N-170-1	保良	itsɿ:mai su:judu vɿ	S,M
N-170-2	共通語	彼は 自分の 豚を 売らない。	
N-170-2	池間	kara: naraga ɯa:juba: vvan	N,N,D,U
N-170-2	狩俣	NR / {kaɽa: / kanu} psto: waiba uɔadaraŋ (ɕu:do:)	N,D,U
N-170-2	与那覇	karja: unagaduunu wa:juba {vvan / vvadja:n}	H
N-170-2	来間	kaɽa: nara wa:juba vvaŋ	K,I,T
N-170-2	宮国	kaɽa: do:a wa:iba ʰvaŋ	T,N
N-170-2	砂川	karja: du:nu {ʊa:ju / ʊa:uba} ʊʊaŋ	N,U,D
N-170-2	保良	kaɽa: du:ga ʊa:juba: vvan	S,M
N-170-3	共通語	去年 山羊を 売った。	
N-170-3	池間	kudzu ɕindzau vvitai	N,N,D,U
N-170-3	狩俣	{ku ^{dʒ} du / k ^{dʒ} du} pinzo: {ʊ:da ^{dʒ} / ʊpi / ʊ:dan}	N,D,U
N-170-3	与那覇	kudza: pinzo:ba ʊ:duɽa:	H
N-170-3	来間	kuzu pindzau u:taŋ (au は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-170-3	宮国	kudzu p ^h indzau {u:ta: / u ^h ta: / uʊta:}	T,N
N-170-3	砂川	kudzu pindzau ʊ:taʔ	N,U,D
N-170-3	保良	kududu pindau vvita(:)	S,M
N-170-4	共通語	山羊を 売って、豚を 買った。	
N-170-4	池間	ɕindzau vvi: ɯa:ju: kaitai	N,N,D,U
N-170-4	狩俣	pinzo: uɔiɕitidu waju ko:ta ^{dʒ} (dʒ の摩擦弱い)	N,D,U
N-170-4	与那覇	pinza: vvittidu wa:ju ko:ta:	H
N-170-4	来間	pindzao vvitti wa:ju ko:taŋ (ao は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-170-4	宮国	p ^h indzau uvittɕi wa:ju kauta:	T,N
N-170-4	砂川	pindzau ʊittidu ʊa:ju kautaʔ	N,U,D
N-170-4	保良	pindau vvittɕidu ʊa:ja kauta:	S,M
N-170-5	共通語	その 豚を 売って ください。	
N-170-5	池間	kunu ɯa:ju vvi: fi: samati	N,N,D,U
N-170-5	狩俣	kanu ba:ju uʊʊi fi:ru	N,D,U
N-170-5	与那覇	unu wa:ju vvi firu	H
N-170-5	来間	unu wa:ju vvifi:ru	K,I,T
N-170-5	宮国	unu wa:ju uvi ɸiiru	T,N

N-170-5	砂川	unu {ʊa:ju / ʊa:u} {ʊʊi fi:ru (売ってくれ) / ʊʊadʒa:na (売ってくれませんか) }	N,U,D
N-170-5	保良	unu ʊa:ju vvi(:) ffi:ru (ffi:ru は fi:ru と同発音される)	S,M
N-170B-1	共通語	いつも 私は 弟に お菓子を やる。	
N-170B-1	池間	iʈmai ba: uttuN ka:ssu {fi: / fi: ui / fi: jui}	M,Y,S,T
N-170B-1	狩俣	iʈmai utudunʒadu ka:s {f / f _h } (ʈ の帯気音強い。F ₁ の有声弱い)	N,D,U
N-170B-1	与那覇	itsʊ:me: banun ututa: ka:sʌ firu (「弟は私にお菓子をくれる」になってしまっている可能性がある)	H
N-170B-1	来間	iʈme: aba: ututuŋ ko:suba fi:ʌ	K,I,T
N-170B-1	宮国	iʈ ² mai baja: ɔ ^h utuŋ koosu ɸi: (菓子単独 = koosʊ)	T,N
N-170B-1	砂川	iʈi:mai baja: {ututuŋkai / uʈutuŋkai} ko:si {ffiu ^ʔ / ffju ^ʔ }	N,U,D
N-170B-1	保良	iʈai:mai baja: ututuŋkaidu ka:ssu ffi:	S,M
N-170B-2	共通語	弟は 兄に お菓子を やらない。	
N-170B-2	池間	uttu: suʒanna ka:ssuba: fi:N	M,Y,S,T
N-170B-2	狩俣	NR / ba: azanna ka:sʒa fi:daŋ (くれない)	N,D,U
N-170B-2	与那覇	ututa: adzanke: ka:sʌ fudja:n (「やらない」が意志否定の形になっていて、単純な否定形がとれていない)	H
N-170B-2	来間	utuʒoa {azanna / suʒanna} ko:suba: fu:ŋ (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-170B-2	宮国	ɔ ^h uʒoo adzan koosuba ɸu:ŋ	T,N
N-170B-2	砂川	uʈuʒo: azanʒai ko:ssu ffuʒanʒ	N,U,D
N-170B-2	保良	utu ^h a sudaŋkaija ka:ssuba fu:N (suda の s は氣息が強め。また ɬuda と同)	S,M
N-170B-3	共通語	昨日 弟に 飴を やった。	
N-170B-3	池間	nɸu: uttuN am ^h u: fi:taɪ	M,Y,S,T
N-170B-3	狩俣	ksnudu utudunʒ amidzato: fi:t'aʒ	N,D,U
N-170B-3	与那覇	ksna: ututun amjo: fi:ta:	H
N-170B-3	来間	ʈnu: ututuŋna amiu fi:taɪ	K,I,T
N-170B-3	宮国	k ^s inu: ɔ ^h utuŋ am ^h u: ɸiita:	T,N
N-170B-3	砂川	k ^s inu: uʈutuŋkai amju: ffita ^ʔ	N,U,D
N-170B-3	保良	ʈnu: ututuŋkai am ^h u: ffi:ta:	S,M
N-170B-4	共通語	馬に 草を やって、畑に 行った。	
N-170B-4	池間	nu:man ʃsa: fi: haiŋkai ikitai	M,Y,S,T

N-170B-4	狩俣	nu:man̄nu ifso: fi:ɕiti par ɲkai {ifta / ista} (ɾ ɾ に摩擦無し、 ta ɾ に弱い摩擦)	N,D,U
N-170B-4	与那覇	nu:man fsa: fitti parinke: pi:ta:	H
N-170B-4	来間	nu:maŋ fsa: fi:tti pariŋke: pizta	K,I,T
N-170B-4	宮国	nuumaŋ ɸsau ɸitti pariŋkai ikʰta:	T,N
N-170B-4	砂川	nu:maŋkai fuɕsau ffitti pariŋkai ikʰtaʔ	N,U,D
N-170B-4	保良	nu:maŋkai fsau fi:tɕi(du) pariŋkai ikʰta:() (ikʰta: は ikʰta 的 ように聞こえる)	S,M
N-170B-5	共通語	牛に 草を やって ごらん。	
N-170B-5	池間	{uɕin / usɲ} fsau fi: mi:ru	M,Y,S,T
N-170B-5	狩俣	{usɲ / usɲ} {isso / ifso} fi: ku: (来い)	N,D,U
N-170B-5	与那覇	usɲ fso: fi: mi:ru	H
N-170B-5	来間	usüŋ fsoa fi:mi:ru (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-170B-5	宮国	usɲ ɸsau ɸi: mi:ru	T,N
N-170B-5	砂川	usüŋkai fuɕsau ffi mi:ru	N,U,D
N-170B-5	保良	usɲkai fsau fi: mi:ru	S,M
N-171-1	共通語	漁師から 魚を もらう。	
N-171-1	池間	iɕakara zzu: dɕɕitai	M,Y,S,T
N-171-1	狩俣	im̄muripstuʔʔ:karadu im̄munu izitaʔ	N,D,U
N-171-1	与那覇	zzusja:kara zzuu zzita:	H
N-171-1	来間	im̄ɕa:kaɕa z: muroa (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-171-1	宮国	imboo kara zzu: morauta:	T,N
N-171-1	砂川	imbo:kara {izuu / zzu: / zuu} murau <cf.> murautaʔ (もらっ た) / mura:dakanaraŋ (もらわないといけない)	N,U,D
N-171-1	保良	itsɾ:maidu imp̄tukara ɾzuu i: (itsɾ:maidu は「いつも」)	S,M
N-171-2	共通語	小さい カニは 誰も もらわない。	
N-171-2	池間	imi:imi kannuba: taru:mai {zzi / dɕɕin}	M,Y,S,T
N-171-2	狩俣	imi:n kanu kam̄muba tarumai iziŋ (iziŋ の最初の i のきこえ が弱い)	N,D,U
N-171-2	与那覇	imi:nu kannuba: to:me: zzun	H
N-171-2	来間	imi:nu kannuba: to:me: muraŋ	K,I,T
N-171-2	宮国	imiʔinu kʰannuba toʔomai moɾa:ŋ	T,N
N-171-2	砂川	imi:nu kanju:ba to:mai mura:ŋ	N,U,D

N-171-2	保良	imi:ttəanu kannuba: taʊmai ju(:)N (taʊ は ʊ: のように聞こえる)	S,M
N-171-3	共通語	隣の 家から 大根を もらった。	
N-171-3	池間	tunainu ja:kara uɸun'au dɕɕitai	M,Y,S,T
N-171-3	狩俣	tananu pstukaradu u ^p ɸun'u: izitaʔ (izitaʔ の最初の i のきこえが弱い)	N,D,U
N-171-3	与那覇	tunaŋnu pstukara upunju: zzita:	H
N-171-3	来間	tunaŋnu ja:kara upniu muro:taŋ (k はかなり奥の方で h と聞き間違う)	K,I,T
N-171-3	宮国	{tunaʔi / tunal} nu ja:kara upuniu {morauta: / moroota:}	T,N
N-171-3	砂川	tunaʔinu ja:kara upunju: {murautaʔi / muroutaʔi}	N,U,D
N-171-3	保良	tupaŋunu ja:kara upun'iu i:ta	S,M
N-171-4	共通語	大きな 魚を もらって、みんなで 分けた。	
N-171-4	池間	gaba:zɕu dɕɕi: n̄:naɕi: bakitai	M,Y,S,T
N-171-4	狩俣	u ^p ɸo:binu izidu {m̄:naɕi / n̄:naɕi} {bagət'aʔ/bagədaʔ}	N,D,U
N-171-4	与那覇	upo:nu zzuu zzitti m̄:naɕi: bakita:	H
N-171-4	来間	upo:nu z: murai m̄:naɕi bakitaŋ	K,I,T
N-171-4	宮国	upu ² unu ^z zu: moraittɕi m̄ ² naɕi naka:ʔita:	T,N
N-171-4	砂川	upu:nu {zzuu / zzu: / izuu} muraittidu m̄:naŋkai bakitaʔi	N,U,D
N-171-4	保良	upu:upunu ɾzu: i:ttɕidu m̄:naɕi: bakita(:)	S,M
N-171-5	共通語	親戚から 味噌を もらって きた。	
N-171-5	池間	harauzɕkara n̄su: dɕɕittai	M,Y,S,T
N-171-5	狩俣	ujakigaradu n̄su: iziftaʔ (ʔ の摩擦弱い)	N,D,U
N-171-5	与那覇	utudzakara ntsuu zzi ksta:	H
N-171-5	来間	utɕudzakara msu: muraitɕtaŋ (k はかなり奥の方で h と聞き間違う)	K,I,T
N-171-5	宮国	utɕudza kara du m̄ɕu morai {kʔi:ta: / kʔiʔta: / kʔita}	T,N
N-171-5	砂川	utɕidzakara msu: murai kʔi:taʔi	N,U,D
N-171-5	保良	utɕudakara msu ^ɾ i: kta(:)	S,M
N-172-1	共通語	喉が 乾いたら 水を 飲む。	
N-172-1	池間	nudunu ka:kitiga: middɕu {numi / nuN}	M,Y,S,T
N-172-1	狩俣	nudunudu kara:ʔidu mitɕi {nuŋtaʔ (飲んだ) / numari}	N,D,U
N-172-1	与那覇	ubui nu ka:rakika: middzu num	H
N-172-1	来間	nudu ka:kiba:nna mi ^ɾ ɕudu num	K,I,T

N-172-1	宮国	nubuinu ka:kitsika: midzdu noma: (単独では midzi)	T,N
N-172-1	砂川	nudunu ka:rak'itika: {mitdzu / mittsu} num	N,U,D
N-172-1	保良	nudunudu {ka:rak'u:taribadu / ka:raki uribadu} mizuu num	S,M
N-172-2	共通語	私の 夫は 酒を 飲まない。	
N-172-2	池間	baga butu: sak'u:ba: numan	M,Y,S,T
N-172-2	狩俣	ba: bigidumma əkiuba: numan	N,D,U
N-172-2	与那覇	baga bikiduma: sakju:ba: numan	H
N-172-2	来間	baga bikidumuu sak'u:ba: numan	K,I,T
N-172-2	宮国	baga bikidumma sak'juba noman	T,N
N-172-2	砂川	baga buto: sakju:ba numan	N,U,D
N-172-2	保良	{baga / baya} bikidumma sak'iuba numan	S,M
N-172-3	共通語	お茶は さっき 飲んだ。	
N-172-3	池間	tsa:ja kisadu nuntai	M,Y,S,T
N-172-3	狩俣	tsa:juba maindu numi (ヌンタズ系をとれず)	N,D,U
N-172-3	与那覇	tsa:juba: {sadaridu/pja:sidu} numta:	H
N-172-3	来間	tsaiba: nnamagatadu numutan	K,I,T
N-172-3	宮国	tsa:ja k'sa'atu nomta:	T,N
N-172-3	砂川	tja:ja nnamadu numta'i	N,U,D
N-172-3	保良	tsa:juba: kisa:du numta	S,M
N-172-4	共通語	薬を 飲んで、早く 寝ろ。	
N-172-4	池間	ffvija numi: {haimari / hajamari} n'ivvi	M,Y,S,T
N-172-4	狩俣	fusɔdu {numiciti / numiciti} p'a:ei niui	N,D,U
N-172-4	与那覇	fsu'zuba numitti pja:pja:ti nivvi	H
N-172-4	来間	fsuzu numitti p'a:ɲkari nivvi	K,I,T
N-172-4	宮国	φsuzu nomittai p'a:p'a:tei nivvi	T,N
N-172-4	砂川	{fusizzu / fusizizu} numitti pja:pja:ti nivvi	N,U,D
N-172-4	保良	fsuzzu numittai p'a:p'a:tei n'ivvi	S,M
N-172-5	共通語	この 薬は 甘いから 飲んで みなさい。	
N-172-5	池間	kunu ffvija azɔmajaiba numi: mi:ru	M,Y,S,T
N-172-5	狩俣	unu a'zmandiba numi mi:ru	N,D,U
N-172-5	与那覇	unu fsu'za adzima:nu jariba numi: mi:ru	H
N-172-5	来間	kunu fsuzza azumakariba numimi:ru	K,I,T
N-172-5	宮国	kunu φsuzza adzima:nu jaiba nomimi:ru	T,N

N-172-5	砂川	kunu {fuʃizɰa / fuʃiʔizɰa} amakariba numi miɾu	N,U,D
N-172-5	保良	kunu fsuzɰa azumakaŋa numi mi:ɾu	S,M
N-172B-1-1	共通語	ここでは ヘチマを 食べる。	
N-172B-1-1	池間	kumanna {nabʲa:ɾau / nabʲa:ɾau} {fau / fau} (両唇の摩擦 φ も唇歯の摩擦 f もある)	M,Y,S,T
N-172B-1-1	狩俣	fumaŋa nabʲa:ɾadu {fo: / φo:}	N,D,U
N-172B-1-1	与那覇	kumanna nabja:ro: fo:dusɰ ((何を食べるか?) 「砂糖を食べる」 sato:du fo:)	H
N-172B-1-1	来間	kumanna nabiaroa fo: (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-172B-1-1	宮国	kumanna nabʲa:ɾaɔba {φoodusi: / φaodoʃi:}	T,N
N-172B-1-1	砂川	kumaŋ nabja:ɾau fau	N,U,D
N-172B-1-1	保良	kumanna nabʲa:ɾaudu fɔu	S,M
N-172B-1-2	共通語	本土の人は ヘチマを 食べない。	
N-172B-1-2	池間	jamatunu ɕitu: nabʲa:ɾaua: fa:N	M,Y,S,T
N-172B-1-2	狩俣	jamatu psto: nabʲarawa {φaŋ / faŋ}	N,D,U
N-172B-1-2	与那覇	jamatunu psta: nabjaro:ba: fa:n	H
N-172B-1-2	来間	jamatunu piŋoa nabearoaba fa:ŋ (oa, ea は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-172B-1-2	宮国	naitɕi pʰito: nabʲa:ɾaɔba φa:ŋ	T,N
N-172B-1-2	砂川	jamatunu pʰito: nabja:ɾaua fa:ŋ	N,U,D
N-172B-1-2	保良	jamatu(nu) pɽta: nabʲa:ɾaua fa:N	S,M
N-172B-1-3	共通語	二ガウリは 昨日 食べた。	
N-172B-1-3	池間	gaurau nnu {faitai / fautai / faʊtai}	M,Y,S,T
N-172B-1-3	狩俣	go:ro:ba kʃnudu {fo:taʔ / φo:taʔ} (ʔ の摩擦弱い)	N,D,U
N-172B-1-3	与那覇	go:ro:ba: ksnudu fo:ta:	H
N-172B-1-3	来間	go:ɾa ɬanudu fo:ta (ɾa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-172B-1-3	宮国	gaurɔba kʰino:do φoota:	T,N
N-172B-1-3	砂川	gaura: kʰiŋu:du {fo:taʔ / faʊtaʔ}	N,U,D
N-172B-1-3	保良	gɔɔrauba: kʰiŋu:du fɔta	S,M
N-172B-1-4	共通語	昼ご飯を 食べて、寝る。	
N-172B-1-4	池間	jamatunu ɕitu: nabʲa:ɾaua: fa:N	M,Y,S,T
N-172B-1-4	狩俣	jamatu psto: nabʲarawa {φaŋ / faŋ}	N,D,U
N-172B-1-4	与那覇	jamatunu psta: nabjaro:ba: fa:n	H
N-172B-1-4	来間	jamatunu piŋoa nabearoaba fa:ŋ (oa, ea は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-172B-1-4	宮国	naitɕi pʰito: nabʲa:ɾaɔba φa:ŋ	T,N

N-172B-1-4	砂川	jamatunu p ^s ito: nabja:rauba fa:ŋ	N,U,D
N-172B-1-4	保良	jamatu(nu) pŋta: nab'a:rauba fa:N	S,M
N-172B-1-5	共通語	夕ご飯は 食べて きた。	
N-172B-1-5	池間	juiju faittai	M,Y,S,T
N-172B-1-5	狩俣	ju:ŋba faidu kuŋi	N,D,U
N-172B-1-5	与那覇	ju:ŋba fe:tidu ksta: (fe:tti でも fe:ti でもいいようだ。アリ中止 : fe: mi:ru)	H
N-172B-1-5	来間	ju:zuba faitti ʔtaŋ	K,I,T
N-172B-1-5	宮国	juzzuba φaido ₁ k ^s ita:	T,N
N-172B-1-5	砂川	juzza faidu k ^s ita ⁴	N,U,D
N-172B-1-5	保良	juzza faitt ^s idu kŋta: (faitt ^s i はシテ中止) <cf.> gɔɯrau fai mi:ru (ニガウリを食べてみろ) (fai はアリ中止)	S,M
N-172B-2-1	共通語	山羊は 草を 食う。	
N-172B-2-1	池間	çindza: {fsaudu / fsaɯdu} {fau / faɯ}	M,Y,S,T
N-172B-2-1	狩俣	pinza: {isso:ba: / ifso:ba:} {ffo: ^d zuŋ / ffo: ^d zŋŋ}	N,D,U
N-172B-2-1	与那覇	pindza: fso:du fo:	H
N-172B-2-1	来間	pindza: fso:du fo:	K,I,T
N-172B-2-1	宮国	pindza: φsaodo φau	T,N
N-172B-2-1	砂川	pindza: fuŋaudu {fou / fau}	N,U,D
N-172B-2-1	保良	pinda: fsaudu fɯ	S,M
N-172B-2-2	共通語	山羊は 紙を 食わない。	
N-172B-2-2	池間	çindza: kabijuba: {fa:N / ffa:N}	M,Y,S,T
N-172B-2-2	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-2	与那覇	pindza: kab ⁷ zuba fa:n	H
N-172B-2-2	来間	pindza: kabzba fa:ŋ	K,I,T
N-172B-2-2	宮国	pindza: k ^h abizoba φa:ŋ	T,N
N-172B-2-2	砂川	pindza: kab ⁴ zuba fa:ŋ	N,U,D
N-172B-2-2	保良	pinda: kabŋu ¹ ba fa:N	S,M
N-172B-2-3	共通語	猫が 魚を 食った。	
N-172B-2-3	池間	majun zzu: {fautai / faɯtai}	M,Y,S,T
N-172B-2-3	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-3	与那覇	majunudu zzu: fo:ta:	H

N-172B-2-3	来間	majunudu zz:ba: fo:taŋ	K,I,T
N-172B-2-3	宮国	maju: zzu:ba φoodosi:	T,N
N-172B-2-3	砂川	majunudu {zzu: / izuu} {fouta ^ɬ / fauta ^ɬ }	N,U,D
N-172B-2-3	保良	maju:nudu ɾzuu fɔta (fɔta は fo:ta のように聞こえる)	S,M
N-172B-2-4	共通語	魚を 食って、すぐに 逃げた。	
N-172B-2-4	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-4	来間	zza: fe:ttidu pja:pja:ti pi:ta:	K,I,T
N-172B-2-4	宮国	zz: faitte _ɬ sugu piŋgitaŋ	T,N
N-172B-2-4	砂川	zzu: φi:du sugu {p ^h iŋgita: / φiŋgita:}	N,U,D
N-172B-2-4	保良	ɾza: faitte _ɬ idun nama piŋgita (ɾza:は「魚は」か。)	S,M
N-172B-2-5	共通語	全部 食って しまった。	
N-172B-2-5	池間	nɳanai fai n'a:N	M,Y,S,T
N-172B-2-5	狩俣	未調査。動物が「食べる」と人間が「食べる」で、言い方は変わらないとのこと。	N,D,U
N-172B-2-5	与那覇	m:nadu fo:ta:	H
N-172B-2-5	来間	{mu:stu / mu:ɾdu} fain'a:ŋ (n ⁱ は ɲ ほどには口蓋化せず)	K,I,T
N-172B-2-5	宮国	m ^ɳ nado φaido _ɬ {p ^h i:ta: / φiita:}	T,N
N-172B-2-5	砂川	m:nadu {fai nja:ŋ / fouta ^ɬ ~fauta ^ɬ (食べた) }	N,U,D
N-172B-2-5	保良	m:na fai n'a:N	S,M
N-173-1	共通語	暗く なるまで 外で 遊ぶ。	
N-173-1	池間	ffaf _ɬ nai {k ^ɬ ata:çi: / kita:çi:} aɾaŋ {aɕibi ui / aɕib ^ɬ u:i}	M,Y,S,T
N-173-1	狩俣	faffu: nask ^ɬ a:du ^p φukanɟi asuɔi	N,D,U
N-173-1	与那覇	ffa:ffa naɾkja:gamidu minakan appɾta:	H
N-173-1	来間	ffafu naɾk ^ɬ a p ^ɬ ukan aspi	K,I,T
N-173-1	宮国	φu ^ɳ aφφa {naɔk ^ɬ a: / nazk ^ɬ a:} p ^h ukan asuɔp ^ɬ u:	T,N
N-173-1	砂川	f ^ɬ fa:ffa na ^ɬ ikja:du pukan asip ^ɬ	N,U,D
N-173-1	保良	ffa:ffa suk ^ɬ a:du aɾa:N asɾp ^ɳ (asɾp ^ɳ は asɾb ^ɳ のように聞こえる)	S,M
N-173-2	共通語	暗く なったら、誰も 遊ばない。	
N-173-2	池間	ffaf nai tu: taɾumai aɕiban	M,Y,S,T
N-173-2	狩俣	fafu nadiga: {taɔmai / tagumai} asu:baŋ	N,D,U
N-173-2	与那覇	ffa:ffa nakka: to:me: appan	H
N-173-2	来間	ffafu naɾkka: to:me: aspaŋ	K,I,T

N-173-2	宮国	φω ² αφφα nazɬɪka: to ² omai asipaŋ	T,N
N-173-2	砂川	ff:ffa na ² ɪtika: to:mai asipaŋ	N,U,D
N-173-2	保良	ffa:ffa naɾɪɬɪka: taɔmai asɪp ^h an (asɪp ^h an は asɪban のようにも聞こえる)	S,M
N-173-3	共通語	昨日は いとこと 遊んだ。	
N-173-3	池間	ŋnu: itɬuɬtu {aɕibitai / aɕu:tai}	M,Y,S,T
N-173-3	狩俣	^k sno: {itsɬsarido / itsɬsaridu} asɔda	N,D,U
N-173-3	与那覇	ksna: itsɪfzja:na appɪta:	H
N-173-3	来間	ɬɪnu: itɬifu:tu: asɪptaŋ	K,I,T
N-173-3	宮国	k ^s inu:ja {itsɔɸunuk ^j a:tu / itsɔɸutudo _ɿ } asɪp ^h ita:	T,N
N-173-3	砂川	k ^s ɪnu:ja itsɪfutu asɪp ^s ita ^ɕ	N,U,D
N-173-3	保良	k ^s ɪnu:ja itufutudu asɪpɪta: (asɪpɪta: は asɪbɪta: のようにも聞こえる)	S,M
N-173-4	共通語	学校で 遊んで、家に 帰った。	
N-173-4	池間	gakko:N aɕibi: ja:ŋkai ikitai	M,Y,S,T
N-173-4	狩俣	gakko:ŋgi asɪbiɕiti ja:ŋkai ksta ^ɳ (ɳ の摩擦弱い)	N,D,U
N-173-4	与那覇	gakko:ndu appitti ja:nke: ksta: (「帰った」でなく「来た」になっている)	H
N-173-4	来間	gakk ^ɔ o:ŋ asɪpti ja:ŋke: ɬɪtaŋ (ɔ は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-173-4	宮国	gakko:ŋ asɪpittɪdu ja:ŋkai k ^s ita:	T,N
N-173-4	砂川	gakko:ŋ asɪpittidu jaŋkai k ^s ɪ:ta ^ɕ	N,U,D
N-173-4	保良	gakko:ndu asɪpittɪ: ja:ŋkai kɪta: (asɪpittɪ: は asɪbittɪ: のようにも聞こえる)	S,M
N-173-5	共通語	外で 遊んで こい。	
N-173-5	池間	araN aɕibi: ku:	M,Y,S,T
N-173-5	狩俣	pukaŋgi asɪbi ku:	N,D,U
N-173-5	与那覇	ara: iki appi ku:	H
N-173-5	来間	pukaŋ aspɪ ku:	K,I,T
N-173-5	宮国	p ^h ukaN asɪpi ku:	T,N
N-173-5	砂川	pukaŋ asɪpi ku:	N,U,D
N-173-5	保良	ara:ŋki asɪpi: ku: (asɪpi: は asɪbi: のようにも聞こえる)	S,M
N-174-1	共通語	この 酒は すぐに 酔う。	
N-174-1	池間	kunu sak ^j a: sugu b ^j u:i	M,Y,S,T
N-174-1	狩俣	ɕuk ^j a: piŋkanu ma:ɕinai b ^j u:	N,D,U

N-174-1	与那覇	kunu sakja: nnamantidu bju:	H
N-174-1	来間	kunu sakja: sugudu bju:	K,I,T
N-174-1	宮国	kunu sakea sugu bju: dusi:	T,N
N-174-1	砂川	kunu sakja: sigudu bju:	N,U,D
N-174-1	保良	kunu sakja: sugudu bju:	S,M
N-174-2	共通語	彼は どんなに 飲んでも 醉わない。	
N-174-2	池間	kara: iŋci: numammai bju:in	M,Y,S,T
N-174-2	狩俣	kanu psto: uposa numumai {bju:in / biju:in}	N,D,U
N-174-2	与那覇	kanu psta: no:si numja:me: bja:n	H
N-174-2	来間	karja: no:si numja:me: bjo:ŋ	K,I,T
N-174-2	宮国	karea no'obaŋi nomibam bjo:ŋ	T,N
N-174-2	砂川	karja: isaŋi numibaŋ bjo:ŋ	N,U,D
N-174-2	保良	karja: nabaŋi: numaŋa:maidu bja:N (numaŋa:maidu は「飲ませても」)	S,M
N-174-3	共通語	おとといは たくさん 飲んで 酔った。	
N-174-3	池間	mi:kanainna ippai numi: bju:itai	M,Y,S,T
N-174-3	狩俣	putuduza upo:sa numidu bju:taŋ	N,D,U
N-174-3	与那覇	ututuzza masje: numittidu bju:ta:	H
N-174-3	来間	bututu:za maŋa:ŋ numitti bju:taŋ	K,I,T
N-174-3	宮国	bututuzza ja'udake_ nomittido bjo:ta:	T,N
N-174-3	砂川	{bututuzza / bututuzza} jaudaki numittidu bju:taʔ	N,U,D
N-174-3	保良	bututuza upa:ŋi numittidu bju:ta: (「おととい」は ututunza、「たくさん」は jamakaŋa と同)	S,M
N-174-4	共通語	彼は 酔って、昨日の ことを 忘れている。	
N-174-4	池間	mi:kanainna ippai numi: bju:itai	M,Y,S,T
N-174-4	狩俣	putuduza upo:sa numidu bju:taŋ	N,D,U
N-174-4	与那覇	ututuzza masje: numittidu bju:ta:	H
N-174-4	来間	bututu:za maŋa:ŋ numitti bju:taŋ	K,I,T
N-174-4	宮国	bututuzza ja'udake_ nomittido bjo:ta:	T,N
N-174-4	砂川	{bututuzza / bututuzza} jaudaki numittidu bju:taʔ	N,U,D
N-174-4	保良	bututuza upa:ŋi numittidu bju:ta:	S,M
N-174-5	共通語	酒を 飲んで 酔って しまった。	
N-174-5	池間	sakja: numi: bju:i nja:N	M,Y,S,T
N-174-5	狩俣	bju:i nja:ŋ	N,D,U

N-174-5	与那覇	sakja: numittidu bju:i uta:	H
N-174-5	来間	sak ^h ja: numitti b ^h uin ^h a:ŋ	K,I,T
N-174-5	宮国	sak ^h eo nomittai (du) b ^h o:jo:ta:	T,N
N-174-5	砂川	sakju: numi:du bju:i nja:ŋ	N,U,D
N-174-5	保良	sak ^h ja: numittidu b ^h u:i n ^h an	S,M
N-175B-1	共通語	毎日 髪を 洗う。	
N-175B-1	池間	mainitai akau arau	M,Y,S,T
N-175B-1	狩俣	mainitsu kara t ɛba aro:	N,D,U
N-175B-1	与那覇	mainitsa karaddzu aro:	H
N-175B-1	来間	mainitsa karattsu aroa (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-175B-1	宮国	ma ^h initai karaddzo arau	T,N
N-175B-1	砂川	mainitsidu karattsu arau	N,U,D
N-175B-1	保良	itsa:maidu karazuu aɾɔɔ	S,M
N-175B-2	共通語	祖父は 毎日 は 髪を 洗わない。	
N-175B-2	池間	uja: mainitai akauba: ara:N	M,Y,S,T
N-175B-2	狩俣	obaja gabamma: karats ^h ba mainits ^h ara:ŋ	N,D,U
N-175B-2	与那覇	sju:ja mainitsa karaddzuba: ara:n	H
N-175B-2	来間	su:ja mainitsa karattsuba ara:ŋ	K,I,T
N-175B-2	宮国	su:ja ma ^h init ^h sa karadzuba ara:ŋ	T,N
N-175B-2	砂川	fu:ja mainitsa karattsuba ara:ŋ	N,U,D
N-175B-2	保良	su:ja {main ^h itsa / main ^h itsa:} karazu:ba ara:N (main ^h itsa: は最近の言い方)	S,M
N-175B-3	共通語	手と 足を 洗った。	
N-175B-3	池間	ti:tu haddzu araitai	M,Y,S,T
N-175B-3	狩俣	ti:du pag ^h udu {aro:dan / aro:da}	N,D,U
N-175B-3	与那覇	ti:tu paggzuba: {aro: dusita:/aro:ta:}	H
N-175B-3	来間	ti:tu pazutu: aro:ta	K,I,T
N-175B-3	宮国	tsi:tu pagi:tu arauta:	T,N
N-175B-3	砂川	ti:tu pag ^h izu arauta ^h	N,U,D
N-175B-3	保良	tsi:tu pazudu aɾɔɔta(:)	S,M
N-175B-4	共通語	手を 洗って、ご飯を 食べろ。	
N-175B-4	池間	ti:ju arai: munu: fai	M,Y,S,T
N-175B-4	狩俣	ti:ja arai ^h iti munu: {ɸai / fai}	N,D,U
N-175B-4	与那覇	ti:ba: are:ttidu munu:ba: fe:	H

N-175B-4	来間	ti: araitti munu fe:	K,I,T
N-175B-4	宮国	tɕi:ɔ̥ araittɕi kara monoba ɸai	T,N
N-175B-4	砂川	ti:ju {araitti / araittikara} {mazzu / maʔizu} fai	N,U,D
N-175B-4	保良	tɕi:ju araittɕi munu:ba fai	S,M
N-175B-5	共通語	顔も 洗って こい。	
N-175B-5	池間	mihanaumai {arai / sɯ̌mi: / sǔmi:} ku:	M,Y,S,T
N-175B-5	狩俣	mipano: arai ku:	N,D,U
N-175B-5	与那覇	mipano:me: are: ku:	H
N-175B-5	来間	mipanoa arai ku: (oa は曖昧な二重母音)	K,I,T
N-175B-5	宮国	mipanaɔ̥ {araittɕi / arai} ko:	T,N
N-175B-5	砂川	mipanaɯ arai ku:	N,U,D
N-176-1	共通語	暑い ときは 帽子を かぶる。	
N-176-1	池間	atsukai tukʼanna {bo:ɕu: / bu:ɕu:} {kavvi / kaʊʊi}	M,Y,S,T
N-176-1	狩俣	atsikai tukinna bo:ɕiu kavvi	N,M
N-176-1	砂川	atsikaʔi tukja:na bo:fu: kaʊ	N,U,D
N-176-1	保良	atsɯ:atsɯnu tukʼa:nna bo:ɕu: {kaʊ / kaf}	K,K,Y,M
N-176-1	国仲	atsɯ: tukʼa:nna bo:ɕoo kaʊ (ʊ は本人は仮名のウだと言っている)	N
N-176-2	共通語	誰も くば笠を かぶらない。	
N-176-2	池間	tarumai kubagasauba: {kavvan / kaʊʊan}	M,Y,S,T
N-176-2	狩俣	tarumai kasauba kavvan	N,M
N-176-2	砂川	to:mai kubagasauba kaʊʊan	N,U,D
N-176-2	保良	ta:mai kubagasauba: kavvan	K,K,Y,M
N-176-2	国仲	taruɯmai koʊbagasao̥ kavvan	N
N-176-3	共通語	若い ころは くば笠を かぶった。	
N-176-3	池間	bakakaikʼa: kubagasauba: kavvitai	M,Y,S,T
N-176-3	狩俣	baka:sɯ̌kja:ja kasauba kaudai (kavvi utai かぶっていた。)	N,M
N-176-3	砂川	baxakaʔikja:ja kubagasauba {kaʊtaʔi / kaʊdu} sɯ̌taʔi	N,U,D
N-176-3	保良	baka:bakanu tukʼa:nna kubagasau kavta:	K,K,Y,M
N-176-3	国仲	bakʰamununu ju:ɾanna koʊbagasao̥ kautal (kʰ は x に近い、少し奥寄り。l は舌尖見えている。狭い o と u の区別は厳密ではない (以下同))	N
N-176-4	共通語	くば笠を かぶって、ぞうりを はいた。	
N-176-4	池間	kubagasa: kavvi: sabau mmitai	M,Y,S,T

N-176-4	狩俣	kasau kavvidu sabo: {fundai / hundai} (fummi は「はくか?」の意)	N,M
N-176-4	砂川	kubagasau kaʊʊitti sabau funtaʔi	N,U,D
N-176-4	保良	kubagasau kavvittɕi sabau funʔta:	K,K,Y,M
N-176-4	国仲	kubagasao ₂ kavvi:du sabao ₂ ɸumʔal ₁	N
N-176-5	共通語	おまえも くば笠を かぶって みろ。	
N-176-5	池間	vʋamai kubagasau kavvi mi:ru	M,Y,S,T
N-176-5	狩俣	vʋamai kasau kavvi mi:ru	N,M
N-176-5	砂川	ʊʊamai kubagasau kaʊʊi mi:ru	N,U,D
N-176-5	保良	vʋamai kubagasau kavvi: mi:ru	K,K,Y,M
N-176-5	国仲	ʊvʋamai kubagasao ₂ kavvi: mi:ru	N
N-176B-1	共通語	夜は 戸を 閉じる。	
N-176B-1	池間	junaka: jadu: ffi	M,Y,S,T
N-176B-1	狩俣	junainna jaduba ɕimiru	N,M
N-176B-1	保良	junainna jadu:du fu: (唇歯の接近音が母音のように機能している)	K,K,Y,M
N-176B-1	国仲	{julja / julʔa} jadu ₂ ɕimidʒi	N
N-176B-2	共通語	今日は 暑いから 戸を 閉じない。	
N-176B-2	池間	kʰu:ja atʃukaiba jadu:ba: ffaɕʒa:N (志向形) <cf.> kanu ɕitu: itʃmai jadu:ba: ffaN (あの人はいつも戸を閉じない)	M,Y,S,T
N-176B-2	狩俣	kju:ba atʃikariba {jadu:ba / jaduba ɕimin}	N,M
N-176B-2	保良	kʰu:ja atʃkariba jadu:ba: ffaŋ	K,K,Y,M
N-176B-2	国仲	kʰu:ja atʃakajba jadoɸ ɕimiru (「閉じろ」と回答した)	N
N-176B-3	共通語	ゆうべは 父が 戸を 閉じた。	
N-176B-3	池間	jubʰa: zzaga jadu: ffitai	M,Y,S,T
N-176B-3	狩俣	ju:bja: uja:du jaduba ɕimidai	N,M
N-176B-3	保良	jubʰa: ujadadu jadu: fu:ta:	K,K,Y,M
N-176B-3	国仲	{ju:beʰaa / jubja:} ojagadu jadu ₂ ɕimeʔal ₁	N
N-176B-4	共通語	先生が 戸を 閉じて、さきに 行った。	
N-176B-4	池間	ɕiʔɕi:ga jadu: ffi: sadari: hatai	M,Y,S,T
N-176B-4	狩俣	ɕiʔɕi:gadu jadu: ɕimi sakin ɲgi	N,M
N-176B-4	保良	ɕinɕi:gadu jadu: ffitɕi satʃɲ pizʔa:	K,K,Y,M
N-176B-4	国仲	ɕinɕi:ga jadoɸ ɕimii sadare: pʰalʔal ₁	N
N-176B-5	共通語	おまえが 閉じて こい。	

N-176B-5	池間	vvaga ffi: ku:	M,Y,S,T
N-176B-5	保良	vvaga ffi ku:	K,K,Y,M
N-176B-5	国仲	^w vaga {ɕimii / ɕimi} ko:	N
N-177-1	共通語	弟は 一人で 寝る。	
N-177-1	池間	uttu: {tauka:ɕi: / taʊka:ɕi:} n'ivvi	M,Y,S,T
N-177-1	保良	utuɕa: taʊk'a:du niv	K,K,Y,M
N-177-1	国仲	oɕtoo ta ^v k'a:do {nivviu / nivvijw / niv ^v ɰɰɰ } (確認したがこれのみ)	N
N-177-2	共通語	妹は 一人では 寝ない。	
N-177-2	池間	uttu: {tauka:ɕi:ja / taʊka:ɕi:ja} n'ivvan	M,Y,S,T
N-177-2	保良	utuɕa: taʊk'a:ja nivvan	K,K,Y,M
N-177-2	国仲	{ottoo / miduNna} ta ^v k'a:do nivvan	N
N-177-3	共通語	ゆうべは 二人で 寝た。	
N-177-3	池間	ju:b'a: fta:ɕi: n'u:tai	M,Y,S,T
N-177-3	保良	jub'a: {fta:ɕdu / ftandu} niʊta:	K,K,Y,M
N-177-3	国仲	jube ^j aa ɕuta:ldo _ɰ nivtal	N
N-177-4	共通語	9時に 寝て、8時に 起きた。	
N-177-3	池間	kudɕin nivvi: hatsidɕin ukitai	M,Y,S,T
N-177-3	保良	kudɕin nivvitɕidu hatsidɕin ukita:	K,K,Y,M
N-177-3	国仲	kudɕin nivvii hatsidɕin okital	N
N-177-4	共通語	今日は 一人で 寝て みろ。	
N-177-4	池間	k'u:ja {tau ^k a:ɕi: / taʊ ^k a:ɕi:} nivvi mi:ru	M,Y,S,T
N-177-4	保良	k'u:ja taʊk'a: nivvi mi:ru	K,K,Y,M
N-177-4	国仲	k'u:ja ta ^v k'a: nivvi: mi:ru	N
N-178-1	共通語	祖父は 毎日 6時に 起きる	
N-178-1	池間	uja: mainitɕi rukudɕin uki:	M,Y,S,T
N-178-1	保良	ɕu:ja main'itsɰ rokudɕindu uki	K,K,Y,M
N-178-1	国仲	ɕu:ja mainitsɰ rokudɕin {okil / okilli}	N
N-178-2	共通語	弟は まだ 起きない。	
N-178-2	池間	uttu: nna:ɕ'a: ukin	M,Y,S,T
N-178-2	保良	utuɕa: nɰ ^j ada ukuɰ	K,K,Y,M
N-178-2	国仲	oɕtoo mɰmada okinni:	N
N-178-3	共通語	父も 6時に 起きた。	
N-178-3	池間	zzamai rukudɕin ukitai	M,Y,S,T

N-178-3	保良	ujamai rokudzindu ukita:	K,K,Y,M
N-178-3	国仲	ojamai rokudzin okital	N
N-178-4	共通語	早く 起きて、それから 畑に 行った。	
N-178-4	池間	ça:çi: uki: uikara haiŋkai ikiŋtai	M,Y,S,T
N-178-4	保良	p'a:ɕi: uki'tɕidu uikara pariŋkai iks̥ta:	K,K,Y,M
N-178-4	国仲	p'a:ɕi: okii uikara painkai p'al̥tal	N
N-178-5	共通語	おまえも 早く 起きて こい。	
N-178-5	池間	v̥vamai ça:çi: uki: ku:	M,Y,S,T
N-178-5	保良	v̥vamai p'a:p'a: uki: ku:	K,K,Y,M
N-178-5	国仲	ʷvamai p'a:ɕi: okii ko:	N
N-179-1	共通語	高校生は 制服を 着る。	
N-179-1	池間	ko:ko:ɕeija ɕe:fku:du {ʦɾ: / ʦɾi}	M,Y,S,T
N-179-1	保良	ko:ko:ɕeija ɕeifku:du kʰɾ:	K,K,Y,M
N-179-1	国仲	ko:ko:s̥eija {s̥eij̥ɸukudu / s̥eij̥ɸukuu} {ʦɾ: / ʦɾ:i}	N
N-179-2	共通語	その服は 古いから 誰も 着ない。	
N-179-2	池間	unu fku: jarimunujaiba tarumai ttɕan	M,Y,S,T
N-179-2	保良	unu fka: gabakariba ta:mai kssar̥	K,K,Y,M
N-179-2	国仲	unu ɸukuu jarimunujaiba tarumai ʔtan	N
N-179-3	共通語	それは 昨日 着た。	
N-179-3	池間	ura: ŋnu ʦɾitai	M,Y,S,T
N-179-3	保良	unu fkʷa: (その服は) ʦɾnu:du kss̥ta:	K,K,Y,M
N-179-3	国仲	ur̥a: {ʦɾnuu / ʦɾnu / ʦɾnudu} ʦɾ:ta:	N
N-179-4	共通語	私は 赤い 服を 着て、妹は 青い 服を 着た。	
N-179-4	池間	ba: akafku: tti: uttu: aufku: {ʦɾitai / ttitai}	M,Y,S,T
N-179-4	保良	baja: aka fkʷa: kiçittɕidu utuŋa: ao fku:du kss̥ta:	K,K,Y,M
N-179-4	国仲	ba: akaju: ɸukuu t̥ɕi:du ottonna aoju: ɸukuu ʦɾ:ta:	N
N-179-5	共通語	おまえも ちょっと 着て みろ。	
N-179-5	池間	v̥vamai çi:tɕagama tti: mi:ru	M,Y,S,T
N-179-5	保良	v̥vamai pi:tta kiç̥i mi:ru	K,K,Y,M
N-179-5	国仲	ʷvamai ipi:tɕagama t̥ɕi: mi:ru	N
N-180-1	共通語	そこには 先生が 座る。	
N-180-1	池間	uman̥na ɕiŋɕi:nudu biɕi	M,Y,S,T
N-180-1	保良	uman̥na ɕiŋɕi:gadu bʰɾ:	K,K,Y,M
N-180-1	国仲	oman̥na ɕiŋɕi:ga {bɾ: / biɕi / bɾɪ}	N

N-180-2	共通語	座敷には だれも 座らない。	
N-180-2	池間	uman̄na ɕīɕi:nudu bizi	M,Y,S,T
N-180-2	保良	ɕʌʂkʰanna ta:mai {bizzaŋ / bzzaŋ}	K,K,Y,M
N-180-2	国仲	oman̄na ɕīŋɕi:ga {bɪ: / bizi / bɪzɪ}	N
N-180-3	共通語	昨日は 校長先生が 座った。	
N-180-3	池間	n̄nu: ko:ʔɕo:ɕīɕi:nudu bi:tai	M,Y,S,T
N-180-3	保良	ʔanna:ja ko:ʔɕo:ɕīŋɕi:gaɗu {bʰa:ta: / bz:ta:}	K,K,Y,M
N-180-3	国仲	ʔannuu ko:ʔɕo:ɕīŋɕi:ga bɪ:ta:	N
N-180-4	共通語	先生は 座って、子どもたちは 立っている。	
N-180-4	池間	ɕīɕi:ja bizi: jaraimmʰa: tat̄ɕu:i	M,Y,S,T
N-180-4	保良	ɕīŋɕi:ja bizzitt̄ɕidu ɕi:ta: tat̄ɕu:ta:	K,K,Y,M
N-180-4	国仲	ɕīŋɕi:ja bizi:do {jarabinmʰaa / jarabita} {tat̄ɕii otaɭ / tat̄ɕio taɭ } (ゆっくり言ったときのみ i が長かったようだ)	N
N-180-5	共通語	おまえも 座って みろ。	
N-180-5	池間	v̄vamai bizi: mi:ru	M,Y,S,T
N-180-5	保良	v̄vamai bizi: mi:ru	K,K,Y,M
N-180-5	国仲	ʷvamai bizi: mi:ru	N
N-181-1	共通語	毎日 テレビを 見る。	
N-181-1	池間	mainit̄ɕi terebʰu: mi:jui	M,Y,S,T
N-181-1	保良	mai:n̄iʔ terebʰu:du mi:	K,K,Y,M
N-181-1	国仲	{mainit̄ɕa / mainit̄ɕi} terebio / mioɭ <cf.> kjuuja terebio mi:ɕi (今日はテレビを見る)	N
N-181-2	共通語	父は 野球は 見ない。	
N-181-2	池間	zza: jakʰu:juba: mi:N	M,Y,S,T
N-181-2	保良	uja: jakʰu:juba: mʰu:ŋ	K,K,Y,M
N-181-2	国仲	oja: {jakʰu:jubaa / jakʰu:juba} mi:N	N
N-181-3	共通語	昨日 虹を 見た。	
N-181-2	池間	n̄nu: imbauju mi:tai	M,Y,S,T
N-181-2	保良	ʔannu: ʔɕimbavvu mi:ta:	K,K,Y,M
N-181-2	国仲	ʔannoo {nid̄ɕio / nid̄ɕoo} mi:taɭ	N
N-181-4	共通語	映画を 見て、家に 帰った。	
N-181-4	池間	eigau mi: ja:ŋkai ikitai	M,Y,S,T
N-181-4	保良	eigau mi:tt̄ɕidu ja:ŋkai kʰa:ta:	K,K,Y,M
N-181-4	国仲	e:ga: mi:du ja:Nkai ngitaɭ	N

N-181-5	共通語	心配だから 船を 見て こい。	
N-181-4	池間	ɕibajaiba fn̩u: mi: ku:	M,Y,S,T
N-181-4	保良	ɕa: jaɾiba fn̩u: mi: ku:	K,K,Y,M
N-181-4	国仲	{ɕuwa: / ɕiwa:} ɕi:duiba ɸun̩uu mi: ku: ɕi	N
N-182-1	共通語	彼は 毎日 同じことを 言う。	
N-182-1	池間	kara: mainitɕi junukutu: addɕi	M,Y,S,T
N-182-1	保良	kaɾa: main̩itɕɿ junu munuzzu du azɿ	K,K,Y,M
N-182-1	国仲	karea: mainitɕɿ jonogo: no kʰoɬoodo alɿ	N
N-182-2	共通語	祖母は 嘘は 言わない。	
N-182-2	池間	ha:mma: darakauba: azzan	M,Y,S,T
N-182-2	保良	m̩ma: daraku:ba: azzan	K,K,Y,M
N-182-2	国仲	m̩maa daraɸuba {azzan / alzan} (z は歯音でなく歯茎に接近、l の舌への接着が弱まったものかと思う)	N
N-182-3	共通語	友達は 嘘を 言った。	
N-182-3	池間	duɕta: darakau aitai	M,Y,S,T
N-182-3	保良	duɕɕa daraku:du azɕa:	K,K,Y,M
N-182-3	国仲	dosɕa daraɸudu alɿ *確認したがこれのみ	N
N-182-4	共通語	「ありがとう」と 言って、帰った。	
N-182-4	池間	sdigaɸu: tti addɕi: {ikiɕai / hatai}	M,Y,S,T
N-182-4	保良	puɕkarassa tɕidu azzitɕi pizta:	K,K,Y,M
N-182-4	国仲	pukarassa tɕi alɕii ngital (alɕii の l は弱い)	N
N-182-5	共通語	父に 「夕飯だよ」と 言って こい。	
N-182-5	池間	zzaŋkai juido: ti addɕi: ku:	M,Y,S,T
N-182-5	保良	ujaŋkai juzzu fai:tɕi (夕食を食べると) azzi: ku:	K,K,Y,M
N-182-5	国仲	ojaŋkai ju:ɕ tɕi az (上付) zi: ku:	N
N-183-1	共通語	蟬は すぐに 死ぬ。	
N-183-1	池間	ɕam̩a: sugu ɕin̩i	M,Y,S,T
N-183-1	保良	ga:ra: sɒgu {sɒɿ / sɒɿ}	K,K,Y,M
N-183-1	国仲	{ga:lza / ga:zza} sugudu sɒn ({ga:lza / ga:zza} の l は接着が弱い。z は歯音でなく歯茎に接近)	N
N-183-2	共通語	ゴキブリは なかなか 死なない。	
N-183-2	池間	bi:ja: nantuga ɕinan	M,Y,S,T
N-183-2	保良	ku:muja: namajaskar̩a: {sɒnaŋ / sɒnaŋ}	K,K,Y,M
N-183-2	国仲	ko:m̩ja: jo:iNna sɒnan	N

N-183-3	共通語	へビが 車に ひかれて 死んだ。	
N-183-3	池間	haunu kurumaN hikai: ɕin'i n'a:N <cf.> (ねこが死んだのでうめた) majunu sɔntaiba udʒɔmitai	M,Y,S,T
N-183-3	保良	paʊnudu kurumaŋ fa:sari: {sɔnta: / sɔnta:}	K,K,Y,M
N-183-3	国仲	{pab / paʊ} nodo _ɔ kurumaN pʰakaii sɔntal (pʰのsは余り強くない。帯気ぐらい)	N
N-183-4	共通語	ゴキブリは 死んで、ネズミも 死んでいる。	
N-183-4	池間	bi:ja: ɕin'i: jumunumai ɕin'i:jui	M,Y,S,T
N-183-4	保良	ku:mujamai sɔnʲittɕidu jumuruma sɔn'u:	K,K,Y,M
N-183-4	国仲	ko:mja mai sɔnii ju:munu mai sɔniol	N
N-183-5	共通語	カエルも 死んで しまった。	
N-183-5	池間	untamai ɕin'i: n'a:N	M,Y,S,T
N-183-5	保良	fnatamai sɔn'i {pigaizta: / piʒta:}	K,K,Y,M
N-183-5	国仲	uNta mai sɔni: n'a:N	N
N-184-1	共通語	米が たくさん ある。	
N-184-1	池間	mainu {ippai / ha:sa} ari:jui	M,Y,S,T
N-184-1	保良	maɔnudu upa:ɕi aɔ	K,K,Y,M
N-184-1	国仲	maɔ nodo opa:sa alʲul	N
N-184-3	共通語	昔 ここには 井戸が あった。	
N-184-3	池間	ŋk'a:ndu umanna ka:nu aɔu:tai	M,Y,S,T
N-184-3	保良	ŋk'a:ŋna kumanŋa ɕa:g'a:nudu ataɔ	K,K,Y,M
N-184-3	国仲	ŋk'a:Nna komaNna ka:nodo atal	N
N-184-4	共通語	東に 学校が あって、西に 公民館が ある。	
N-184-4	池間	again gakko:nu ari: ŋsɔŋna ko:miŋkandu ari:jui	M,Y,S,T
N-184-4	保良	agaŋ gakko:ja 学校は arittɕidu izɔnna bumm'a:nudu ataɔ	K,K,Y,M
N-184-4	国仲	agal nna gakko:ga arii {ilʲinna / ilʲnna} ko:miNkan nodo al	N
N-184-5	共通語	薬が あって、助かった。	
N-184-5	池間	ffoinu ari: taskaitai	M,Y,S,T
N-184-5	保良	fsuɔnu ari:du taʂkaɔta:	K,K,Y,M
N-184-5	国仲	kuʂul {nu / ga} ariido taskariol (gaの方がいい)	N
N-185-1	共通語	塩が ない。	
N-185-1	池間	ma:sunu n'a:N	M,Y,S,T
N-185-1	保良	ma:sunudu n'a:ŋ	K,K,Y,M
N-185-1	国仲	ma:so ga n'a:N	N

N-185-2	共通語	砂糖も なかった。	
N-185-2	池間	saɽamai {nʲa:ntaŋ / nʲa:ttan / nʲa:ndaŋ / nʲa:ddan}	M,Y,S,T
N-185-2	保良	saɽamai nʲa:ttam _l	K,K,Y,M
N-185-2	国仲	sata mai nʲa:ŋ	N
N-185-3	共通語	包丁が なくて、切れなかった。	
N-185-3	池間	kaɽananu na:da tɕaddan	M,Y,S,T
N-185-3	保良	kaɽananu nʲa:danaɕidu kidamaruttam _l	K,K,Y,M
N-185-3	国仲	kʰaɽana no nʲa:ŋ niba kiratta:ŋ (kʰ は x に近い。奥寄り)	N
N-186-1	共通語	我が家には 犬が いる。	
N-186-1	池間	bantiga ja:nna innu {urijui / uri:ui}	M,Y,S,T
N-186-1	保良	banɽaga ja:nna innudu uz _l	K,K,Y,M
N-186-1	国仲	banɽiga ja:nna in nodo _l ol _l	N
N-186-2	共通語	隣の家には 犬は いない。	
N-186-2	池間	tunainu ja:nna inna mi:ŋ	M,Y,S,T
N-186-2	保良	tunaɪnu ja:nna inna uraŋ _l	K,K,Y,M
N-186-2	国仲	satono ja:nna inna miin	N
N-186-3	共通語	昔は 猫も いた。	
N-186-3	池間	ŋkʲa:nna majumai uru:taɪ	M,Y,S,T
N-186-3	保良	ŋkʲa:nna majumai uta:	K,K,Y,M
N-186-3	国仲	ŋkʲa:nna maju mai do oɽa _l	N
N-186-4	共通語	彼は 弟が いて、私は 兄が いる。	
N-186-4	池間	kara: uttunu uri: ba: suɕzanu {uru:i / urijui}	M,Y,S,T
N-186-4	保良	kainna utuɽa: urittɕidu banɽa suduanudu uz _l	K,K,Y,M
N-186-4	国仲	karea: ottono ore:do ba: {ada / a:da} ga ol _l	N
N-186-5	共通語	ここに いて ください。	
N-186-5	池間	umaŋ uri {fi: / ffi:} samati	M,Y,S,T
N-186-5	保良	kumaŋ uri fi:ru	K,K,Y,M
N-186-5	国仲	koɽmaŋ ore: ɸi:ru	N
N-187-1	共通語	彼は 酒を 飲むと 変なことを する。	
N-187-1	池間	kara: saɕu: numutu: ɕinnakutu: {assɿ / aɕɕi}	M,Y,S,T
N-187-1	保良	kaɽa: saɕu: numɽɕika: pinna kuɽu:du sɪ:	K,K,Y,M
N-187-1	国仲	kʰarea: saɕʰeo _l nom _l ɽigaa pinna kʰotoodo asɪ (ea は境界が曖昧)	N
N-187-2	共通語	彼は 今日は 何も しない。	

N-187-2	池間	kara: k'ɯ:ja naumai ɸun	M,Y,S,T
N-187-2	保良	kar'a: k'ɯ:ja na:mai su:ŋ	K,K,Y,M
N-187-2	国仲	karea: k'ɔ:ja nauja: tom̩ma {ahon / ason} (ea は境界が曖昧)	N
N-187-3	共通語	昨日は たくさん 仕事を した。	
N-187-3	池間	unu: ha:sa şkamau {asɽtai / aɕitai}	M,Y,S,T
N-187-3	保良	ʦɽnu:ja upa:ɕidu sɽgutu: sɽ:ta:	K,K,Y,M
N-187-3	国仲	ʦɽnoo {opa:s'a / opa:sa} sɽgoɽoo {as'a:l / asta:l}	N
N-187-4	共通語	たくさん 仕事を して、遊びに 行った。	
N-187-4	池間	ha:sa şkama: ɕi: aɕu:ga ikitai	M,Y,S,T
N-187-4	保良	upa:ɕi skuta: ɕi:ttɕidu appsga pizta:	K,K,Y,M
N-187-4	国仲	opa:sa sɽgoɽoo ɕi:do asoɽga p'alɽal	N
N-187-5	共通語	休んでないで 仕事を しろ。	
N-187-5	池間	juku:da şkamau assu	M,Y,S,T
N-187-5	保良	juka:danacɕi: skutu: ɕi:ru	K,K,Y,M
N-187-5	国仲	jukuu da sɽgoɽoo asso	N
N-187-6	共通語	学校で 勉強して こい。	
N-187-6	池間	juku:da şkamau assu	M,Y,S,T
N-187-6	保良	gakko: iki ber̩k'o:ju ɕi: ku:	K,K,Y,M
N-187-6	国仲	jukuu da sɽgoɽoo asso	N

宮古方言基礎語彙 共通語索引

〈共通語〉	〈語彙番号〉	〈共通語〉	〈語彙番号〉
あ 青い	a136	石	b122
欠伸	a010	板	a117
顎先（あご）	a012	いつ	b040
顎（の骨）	a013	五つ	b023
朝（あさ）	a154	糸	b095
明後日	a161	いところ	b086
あし（脛・足）	b010	稲光	a137
あし（脚）	a033	犬	b063
あし（足）	a034	命	b125
あし（脛）	a035	今	a158
明日	a160	刺青（いれずみ）	b018
汗	b015	色	a135
あそこ	a187	う 上	b135
暖かい	a167	植える	a114
頭	a001	牛	b061
穴	b056	うそ	b130
兄	b087	歌	b120
姉	b088	内	b134
油	a095	美しい	a050
網	b098	腕	a017
雨	a133	ウニ（バフンウニ）	a086
蟻（あり）	a066	ウニなどの肉・身	a087
泡	b055	馬	a071
家	a179	生まれる	a054
い 烏賊	b058	膿（うみ）	a026
息	a009	海	a170
行く・去る	a175	瓜	a106
いくつ	b046	鱗	a082
いくら	b039	え 柄（え）	b097

枝	a111	鎌	a092
海老	b059		b103
襟	a123	釜	b107
お 尾	a074	紙	b111
緒	b096	髪の毛	a002
大きい	b142	亀	a083
桶	b099	瓶・甕 (かめ)	b092
叔父	a045	粥	a096
叔父たち	a046	痒い	a027
夫	a051	烏	b066
音	b119	体	a037
男	a058	皮	b009
同じ	b144	き 木	a110
斧	b102	傷	a024
帯	a122	煙管 (きせる)	b113
お前	a043	北	a144
お前たち	a044	汚い	a181
表 (おもて)	b132	昨日	a163
親	b085	肝・心臓 (きも)	a030
女	a059	着物	a121
か 蚊	a062	今日	a159
貝	a085	兄弟	b089
面 (かお)	b007	去年	a164
鏡	a124	霧	a152
蔭	a140	く 釘	a118
笠・傘	b094	草	a113
貸す	b150	櫛	a003
風	a129	薬	b101
肩	b012	糞 (くそ)	b123
カタツムリ	a068	くださる	b149
蟹	a084	口	a006
金	b117	唇	a007
金銭 (かね)	b118	九人	b037

首	a015	親戚	b090
蜘蛛	a063	じ 地震	a131
雲	a132	十人	b038
蜘蛛の巣	a064	す 鋤	b106
くるぶし	a036	少し (+指小辞)	b138
鯨	b104	筋	b013
クワズイモ	a109	雀	b607
こ 睾丸	a040	捨てる・こぼす	a102
肛門	a038	砂	a174
声	a011	そ そこ	a188
九つ	b027	ソテツ	b076
こずえ・砂糖黍の先端	b077	外	b133
子供・子孫	a053	空	b057
子供 (未成年)	a055	それ	b147
拳	a022	た 田	b048
米	a099	太陽	a141
ご 五人	b033	たくさん	b140
さ 魚	a081	竹	b071
酒	b079	蛸	b064
砂糖	a090	竜巻	a130
砂糖黍	a091	種	b074
寒い	a168	食べ物	a094
珊瑚礁	a173	食べる	a093
三人	b031	卵	a079
ざ 笊	b105	だ 大工	a119
し 塩	a088	だれ	b041
塩辛い	a089	ち 血	a025
舌	a008	小さい	b141
下	b136	力	a018
七人	b035	乳	a031
島	b052	父	a047
しゃもじ	b108	茶碗	a101
尻	b011	蝶々	a065

つ 杖	b109	ぬ 濡れる	a128
月(天体・暦)	a142	ね 根(ね)	b700
土	a177	猫	a069
綱	b112	鼠	a070
角(つの)	a073	の 鋸	a116
粒	b124	野原・草原	a108
妻	a049	蚤	b065
爪	b003	は 齒	b002
冷たい	a169	葉	b068
露	a153	灰	a126
て 手	a021	蠅	b062
と 戸	a182	墓	a186
十	b028	齒莖	a014
鳥	a077	橋	b121
鳥の巢	a078	柱	b128
ど どこ	b042	畑	a107
どれ	b043	鉢	b091
な 菜(な)	b078	八人	b036
名(な)	b114	鳩	a080
無い	a189	鼻	b004
なぜ	b044	花	b054
夏	a166	鼻血	b016
七つ	b025	羽	b060
何	b045	母	a048
涙	a005	浜	b053
に 荷(に)	b116	速い	a176
匂い	b131	腹	a029
濁る	a171	針	a120
西	a145	ひ 火	a125
虹	a134	東	a143
韭(にら)	a104	光	a139
庭	a178	低い	b143
にんにく	a103	髭・毛	a016

膝	a032	眩しい	a138
額	a004	豆	b080
左	a148	眉	b014
肘	a023	丸い	b146
人	a060	み 実	a112
一つ	b019	ミカン	b083
一人	b029	短い	b145
病気	b127	水	a127
昼	b047	味噌	a098
昼間	a155	道	a150
び びろう樹	b075		b050
ふ 夫婦	a052	三つ	b021
福木	a115	皆	a061
二つ	b020	南	a146
二人	b030	嶺	a151
船	a172	右	a147
ぶ 豚	a075	耳	b008
豚小屋、便所	b126	ミミズ	a067
豚などの肉	a076	む 昔	a165
へ 屁	a039	麦	b081
臍（へそ）	b005	六つ	b024
糸瓜（へちま）	b084	胸	b006
篋（へら）	b093	村	a185
ほ 埃	a180	め 芽	a105
星	b049	目	b001
穂（ほ）	b069	姪	a057
帆（ほ）	b115	飯	a097
骨	a028	も も（助詞）	b137
ま 前	a149	餅	b082
前・正面	a184	もっと	b139
枕	b100	もの、物	b148
松	b072	門	a183
真似（まね）	b129	や 雄山羊（やぎ）	a072

	八つ	b026
	山	b051
ゆ	夕方	a156
	指	a020
よ	涎	b017
	四つ	b022
	四人	b032
	夜	a157
ら	来年	a162
ろ	老人	a056
	六人	b034
わ	脇の下	a019
	私	a041
	私たち	a042
	藁（わら）	b073
	椀	a100

宮古方言文法項目 一覧

- N-155B-1 鳩も 鷹も 飛ぶ。
N-155B-2 今日は 天気が 悪いから 飛行機は 飛ばない。
N-155B-3 風で 帽子が 飛んだ。
N-155B-4 親鳥が 飛んで、小鳥が 飛んだ。
N-155B-5 そこから 飛んで みろ。
N-156B-1 みんなで 舟を 漕ぐ。
N-156B-2 誰も 舟を 漕がない。
N-156B-3 昔は よく 舟を 漕いだ。
N-156B-4 舟を 漕いで、そのあと 休め。
N-156B-5 一人で 舟を 漕いできた。
N-157-1 毎日 海へ 行く。
N-157-2 父は 天気が 悪いから 海へは 行かない。
N-157-3 昨日も 海へ 行った。
N-157-4 海へ 行って、泳いで きた。
N-157-5 海へは 一人で 行って こい。
N-158-1 今日は 父が 家に 来る。
N-158-2 今日は 母は 来ない。
N-158-3 昨日 父が 家に 来た。
N-158-4 こっちへ 来て、家に 戻った。
N-158-5 こっちへ 早く 来い。
N-158-5 こっちへ 来て みろ。
N-159-1 2月は よく 雨が 降る。
N-159-2 明日は 雨は 降らない。
N-159-3 昨日は 雨が 降った。
N-159-4 大雨が 降って、日照りが 続いている。
N-159-5 いま 雨が 降っている。
N-159-5 雨が 降って きた。
N-160-1 みんな ここで 降りる。
N-160-2 私は ここでは 降りない。
N-160-3 ここで バスを 降りた。
N-160-4 バスを 降りて、電話 かけろ。
N-160-5 妹が バスから 降りて きた。
N-161-1 猿も 木から 落ちる。
N-161-2 木を 揺らしても 実(蜜柑)は 落ちない。

- N-161-3 兄が 木から 落ちた。
- N-161-4 兄は 木から 落ちて、今は 病院に いる。
- N-161-5 雨は 天から 落ちて くる。
- N-162-1 猿が 木の実を 落とす。
- N-162-2 この 猿は 木の実を 落とさない。
- N-162-3 昨日 井戸に 石を 落とした。
- N-162-4 帽子を 落として、取りに 行った。
- N-162-5 木に 登って 実を 落として くれ。
- N-163-1 馬も 人を 蹴る。
- N-163-2 おとなしい 馬は 人を 蹴らない。
- N-163-3 昨日 あの 馬は 人を 蹴った。
- N-163-4 主（あるじ）を 蹴って、逃げ去った。
- N-163-5 その ボールを ここに 蹴って くれ。
- N-163B-1 父が 毎日 ゴミを 捨てる。
- N-163B-2 祖母は 古い 着物も 捨てない。
- N-163B-3 古い 道具は おととい 捨てた。
- N-163B-4 古い ものは 捨てて、新しい ものを 買え。
- N-163B-5 ゴミを そこに 捨てて くれ。
- N-164-1 長い 木の 枝を 切る。
- N-164-2 夜には 爪を 切らない。
- N-164-3 私が ガジマルは 切った。
- N-164-4 その 長い 髪は 切って、お祝いに 行けよ。
- N-164-5 この 紐を 三つに 切って くないか。
- N-165-1 鶏が 逃げないよう（両）足を 縛る。
- N-165-2 足も 羽も 縛らない。
- N-165-3 父が 鶏を 縛った。
- N-165-4 鶏を 縛って、籠に 入れてね。
- N-165-5 おまえが 鶏を 縛って くれ。
- N-166-1 毎日 芋を 掘る。
- N-166-2 母親は 今日は 芋を 掘らない。
- N-166-3 昔 井戸を 掘った。
- N-166-4 穴を 掘って、休め。
- N-166-5 あそこの 地面を 掘って こい。
- N-167-1 庭に 荷物を 出す。
- N-167-2 雨の ときには 外には 荷物を 出さない。
- N-167-3 友達が 荷物を 外に 出した。
- N-167-4 荷物を 外に 出して、それから 帰れ。

- N-167-5 早く 荷物を 出して こい。
N-168-1 弟は いつも 荷物を 一人で 持つ。
N-168-2 祖母は 荷物を 持たない。
N-168-3 祖父が むしろを 持った。
N-168-4 父が 酒 持って、母が 食べ物を 持つ。
N-168-5 早く 酒を 持って こい。
N-169-1 太郎は いつも 煙草を 買う。
N-169-2 誰も 芋を 買わない。
N-169-3 昨日 魚を 買った。
N-169-4 私が 魚を 買って、友達は 肉を 買った。
N-169-5 油を 買って こい。
N-170-1 毎日 野菜を 売る。
N-170-2 彼は 自分の 豚を 売らない。
N-170-3 去年 山羊を 売った。
N-170-4 山羊を 売って、豚を 買った。
N-170-5 その 豚を 売って ください。
N-170B-1 いつも 私は 弟に お菓子を やる。
N-170B-2 弟は 兄に お菓子を やらない。
N-170B-3 昨日 弟に 飴を やった。
N-170B-4 馬に 草を やって、畑に 行った。
N-170B-5 牛に 草を やって ごらん。
N-171-1 漁師から 魚を もらう。
N-171-2 小さい カニは 誰も もらわない。
N-171-3 隣の 家から 大根を もらった。
N-171-4 大きな 魚を もらって、みんなで 分けた。
N-171-5 親戚から 味噌を もらって きた。
N-172-1 喉が 乾いたら 水を 飲む。
N-172-2 私の 夫は 酒を 飲まない。
N-172-3 お茶は さっき 飲んだ。
N-172-4 薬を 飲んで、早く 寝ろ。
N-172-5 この 薬は 甘いから 飲んで みなさい。
N-172B-1-1 ここでは ヘチマを 食べる。
N-172B-1-2 本土の人は ヘチマを 食べない。
N-172B-1-3 ニガウリは 昨日 食べた。
N-172B-1-4 昼ご飯を 食べて、寝ろ。
N-172B-1-5 夕ご飯は 食べて きた。
N-172B-2-1 山羊は 草を 食う。

- N-172B-2-2 山羊は 紙を 食わない。
N-172B-2-3 猫が 魚を 食った。
N-172B-2-4 魚を 食って、すぐに 逃げた。
N-172B-2-5 全部 食って しまった。
N-173-1 暗く なるまで 外で 遊ぶ。
N-173-2 暗く なったら、誰も 遊ばない。
N-173-3 昨日は いとこと 遊んだ。
N-173-4 学校で 遊んで、家に 帰った。
N-173-5 外で 遊んで こい。
N-174-1 この 酒は すぐに 酔う。
N-174-2 彼は どんなに 飲んでも 酔わない。
N-174-3 おとといは たくさん 飲んで 酔った。
N-174-4 彼は 酔って、昨日の ことを 忘れている。
N-174-5 酒を 飲んで 酔って しまった。
N-175B-1 日 髪を 洗う。
N-175B-2 祖父は 毎日は 髪を 洗わない。
N-175B-3 手と 足を 洗った。
N-175B-4 手を 洗って、ご飯を 食べろ。
N-175B-5 顔も 洗って こい。
N-176-1 暑い ときは 帽子を かぶる。
N-176-2 誰も くば笠を かぶらない。
N-176-3 若い ころは くば笠を かぶった。
N-176-4 くば笠を かぶって、ぞうりを はいた。
N-176-5 おまえも くば笠を かぶって みろ。
N-176B-1 夜は 戸を 閉じる。
N-176B-2 今日 暑いから 戸を 閉じない。
N-176B-3 ゆうべは 父が 戸を 閉じた。
N-176B-4 先生が 戸を 閉じて、さきに 行った。
N-176B-5 おまえが 閉じて こい。
N-177-1 弟は 一人で 寝る。
N-177-2 妹は 一人では 寝ない。
N-177-3 ゆうべは 二人で 寝た。
N-177-4 9時に 寝て、8時に 起きた。
N-177-4 今日 一人で 寝て みろ。
N-178-1 祖父は 毎日 6時に 起きる
N-178-2 弟は まだ 起きない。
N-178-3 父も 6時に 起きた。

- N-178-4 早く 起きて、それから 畑に 行った。
N-178-5 おまえも 早く 起きて こい。
N-179-1 高校生は 制服を 着る。
N-179-2 その服は 古いから 誰も 着ない。
N-179-3 それは 昨日 着た。
N-179-4 私は 赤い 服を 着て、妹は 青い 服を 着た。
N-179-5 おまえも ちょっと 着て みろ。
N-180-1 そこには 先生が 座る。
N-180-2 座敷には だれも 座らない。
N-180-3 昨日は 校長先生が 座った。
N-180-4 先生は 座って、子どもたちは 立っている。
N-180-5 おまえも 座って みろ。
N-181-1 毎日 テレビを 見る。
N-181-2 父は 野球は 見ない。
N-181-3 昨日 虹を 見た。
N-181-4 映画を 見て、家に 帰った。
N-181-5 心配だから 船を 見て こい。
N-182-1 彼は 毎日 同じことを 言う。
N-182-2 祖母は 嘘は 言わない。
N-182-3 友達は 嘘を 言った。
N-182-4 「ありがとう」と 言って、帰った。
N-182-5 父に 「夕飯だよ」と 言って こい。
N-183-1 蝉は すぐに 死ぬ。
N-183-2 ゴキブリは なかなか 死なない。
N-183-3 ヘビが 車に ひかれて 死んだ。
N-183-4 ゴキブリは 死んで、ネズミも 死んでいる。
N-183-5 カエルも 死んで しまった。
N-184-1 米が たくさん ある。
N-184-3 昔 ここには 井戸が あった。
N-184-4 東に 学校が あって、西に 公民館が ある。
N-184-5 薬が あって、助かった。
N-185-1 塩が ない。
N-185-2 砂糖も なかった。
N-185-3 包丁が なくて、切れなかった。
N-186-1 我が家には 犬が いる。
N-186-2 隣の家には 犬は いない。
N-186-3 昔は 猫も いた。

- N-186-4 彼は 弟が いて、私は 兄が いる。
N-186-5 ここに いて ください。
N-187-1 彼は 酒を 飲むと 変なことを する。
N-187-2 彼は 今日は 何も しない。
N-187-3 昨日は たくさん 仕事を した。
N-187-4 たくさん 仕事を して、遊びに 行った。
N-187-5 休んでないで 仕事を しろ。
N-187-6 学校で 勉強して こい。

6 宮古方言研究文献目録

- 有元光彦（1997）「琉球諸方言の動詞活用形の研究データ篇 宮古方言（宮古島）」『方言規則地図の提唱とその理論的研究 平成8年度文部省科学研究費補助金 奨励研究(A) 研究成果報告書』
- 伊豆山敦子（2002）「琉球・宮古（平良）方言の文法基礎研究」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（2）「環太平洋の言語」 日本成果報告書』
- 伊豆山敦子（2002）「琉球・宮古（平良西仲）方言の名詞語末音と語形変化」『獨協大学外国語学部言語文化学科 マテシス・ユニウェルサリス』第3巻第2号
- 稲垣正幸（1966）「琉球宮古島アクセントの研究」『都留文化大学研究紀要』3,
- 岩本忠（1981）「宮古伊良部方言調査について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』2-3,
- 内間直仁（1984）「宮古諸島の方言」『講座方言学 10—沖縄・奄美地方の方言—』国書刊行会
- 内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』笠間書院
- 内間直仁（2002）「宮古伊良部島長浜方言」『平成12年度～平成13年度科学研究費補助金 研究成果報告書』
- 内間直仁（2002）「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に—」『平成12年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書』
- 内間直仁（2004）「古代日本語のワ行子音の[b]音化について—宮古・八重山方言を中心に—」『国語学』55-2
- 内間直仁・山口栄臣（2002）「宮古伊良部島長浜方言」『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—伊良部島長浜・西表島祖納方言を中心に—』
- 浦崎安常（1972）『宮古の俚諺格言』宮古の俚諺格言研究会
- 大城健（1975）「琉球宮古島の童名について」『人類科学』27, 九学会連合
- 大野眞男ほか（1998）「宮古大神島方言の音声 —単語と文法—（付．狩俣方言）」『平成8～9年度文部省科学研究費成果報告書』
- 沖縄県教育委員会（1978）『多良間島の方言＜琉球方言緊急調査第3集＞』
- 沖縄国際大学高橋ゼミ（1983）「多良間方言調査報告」『沖縄方言研究』5
- 奥平博尚（1996）『宮古方言散歩路 平良的表現』新報出版
- 垣花恵美（2003）「伊良部島長浜方言の動詞」『方言第11号下巻』沖縄国際大学野原ゼミ
- 加治工真市（1983）「沖縄県平良市方言」『全国方言辞典1』角川書店
- 加治工真市ほか（1977）「宮古大神島方言」『琉球の方言』3
- 加藤正信（1976）「宮古方言の親族名と人称詞」『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂
- 兼島和枝（2003）「宮古・平良市字島尻方言の音韻研究」『方言第11号下巻』沖縄国際大学

野原ゼミ

- かりまたしげひさ (1982) 「宮古方言のフォネームについて」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
- かりまたしげひさ (1984) 「琉球宮古島・城辺町保良方言の研究—動詞形態論のための素描—」『沖縄言語研究センター資料』52, 沖縄言語研究センター
- かりまたしげひさ (1984) 「宮古方言のフォネームはいかに記述されてきたか」『沖縄言語研究センター資料』53, 沖縄言語研究センター
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』66, 沖縄文化協会
- かりまたしげひさ (1987) 「宮古方言の成節的な子音をめぐって」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
- 狩俣繁久 (1992) 「宮古方言」『言語学大辞典 (下巻)』三省堂
- 狩俣繁久 (1992) 「[書評]『城辺町史 (第 5 巻民話篇)』城辺町史編纂委員会」琉球新報 1992 年 1 月 27 日
- かりまたしげひさ (1993) 「沖縄宮古大神島方言のフォネーム」『沖縄言語研究センター研究報告—琉球列島における音声の収集と研究—』沖縄言語研究センター
- 狩俣繁久 (1993) 「宮古大神島方言のフォネームについてのおぼえがき」『沖縄文化』78, 沖縄文化協会
- 狩俣繁久 (1993) 「大神方言のフォネームをめぐって」78, 沖縄文化協会
- 狩俣繁久 (1996) 「空気力学的な観点から見た宮古諸方言の音韻変化についてのおぼえがき」『言語学林 (1995-1996) 柴田武先生喜寿記念論文集』三省堂
- かりまたしげひさ (1996) 「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき—空気力学的な観点から見て—」『言語学林 96-97』, 三省堂
- 狩俣繁久 (1996) 「宮古研究の先駆者ニコライ・A・ネフスキー」『琉球に魅せられた人々—外からの琉球研究とその背景—』琉球大学公開講座委員会
- 狩俣繁久 (1997) 「琉球列島の言語 (宮古方言)」『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』三省堂
- 狩俣繁久 (1999) 「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』5
- 狩俣繁久 (1999) 『琉球宮古方言の音声資料の収集・研究—琉球宮古諸方言の音韻』『平成 10 年度文部省科学研究費成果報告書』
- 狩俣繁久 (1999) 「琉球宮古方言の動詞終止形について」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』5
- 狩俣繁久 (2000) 「日本の方言探訪・宮古のことば」『月刊言語』11 月号
- かりまたしげひさ (2000) 「多良間島方言の系譜—多良間島方言を歴史方言学的観点からみる—」『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研

究』琉球大学法文学部

狩俣繁久 (2002) 「宮古方言研究のこれまで・これから」『国文学 解釈と鑑賞』7月号, 至文堂

狩俣繁久 (2003) 「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき一城辺町保良方言の形容詞の活用を中心に一」『平成 15 年度文部科学省特定領域研究成果報告書 (環太平洋の消滅に瀕した言語に関する緊急調査研究)』

狩俣繁久ほか (1998) 『宮古のフォークロア』砂子屋書房

川平浩二 (1963) 「<南島のあいさつことば> 沖縄宮古郡多良間村塩川地方」『方言研究年報』6

日下部文夫 (1973) 「平良 (宮古島) における所の呼びかた」『人類科学』25, 九学会連合

日下部文夫 (1976) 「人の一生を表わすことば」『沖縄一自然・文化・社会一』弘文堂

久野マリ子 (1983) 「琉球宮古方言基礎語彙の研究報告」『国学院大学日本文化研究所所報』19-5

Chew John J. (1976) “Standard Japanese and the Hirara dialect: case study of linguistic convergence” *The Journal of the Association of Teachers of Japanese* Vol. 11, No. 2/3, pp. 235-248.

Koloskova, Yulia and Ohori, Toshio (2008) “Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language. A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan” *Studies in Language* 32-3. Special Issue on Parts of Speech: Descriptive Tools, Theoretical Constructs. pp610-636

崎村弘文 (1983) 「琉球先島方言のアクセント体系・再考」『鹿児島大学南方海域研究センター紀要』4-1

崎山理 (1963) 「琉球・多良間島・水納島の音韻」『音声の研究』10

崎山理 (1963) 「琉球宮古島の舌尖母韻について」『音声学会会報』112

崎山理 (1963) 「宮古島方言仮名表記法の歴史と一試案」『沖縄文化』10

崎山理 (1963) 「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』54

崎山理 (1964) 「琉球・多良間方言の南方的要素」『民族学研究』29-1

崎山理 (1965) 「琉球宮古方言の舌尖母韻をめぐって」『国語学』60

佐渡山正吉 (1983) 「万葉歌と方言」『地域と文化』20, ひるぎ社

サムエル・H・北村 (1960) 「宮古方言音韻論の一考察」『国語学』41, pp 94-105.

柴田武 (1971) 「琉球宮古語の音韻体系と「宮古仮名」」『言語学論叢』11

柴田武 (1971) 「語彙研究の方法と琉球宮古語彙」『国語学』87

柴田武 (1972) 「宮古方言の研究とその意義」『人類科学』24

柴田武 (1974) 「気象と言葉一沖縄・宮古島方言の風と雨一」『言語生活』275

柴田武 (1976) 「宮古の人名語彙」『沖縄一自然・文化・社会一』弘文堂

柴田武 (1976) 「沖縄平良市方言の付属語 d u および n u、g a について」『佐藤喜代治教

授退官記念国語学論集』桜楓社

柴田武（1980）「沖縄宮古語の語彙体系」『言語』9・1～12

柴田武（1981）「沖縄平良方言の音韻体系」『＜藤原与一先生古稀記念論集＞方言学論叢 1 方言研究の推進』三省堂

柴田武ほか（1974）「宮古市平良市方言における生活時間語彙」『人類科学』26

島尻沢一（1983）「琉球宮古方言の助詞—野原方言の助詞 ga と nu—」『琉球国語』2

島尻沢一（1987）「宮古野原方言の研究—格助詞を中心に—」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会

下地賀代子（2004）「宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象」『琉球の方言』28

下地賀代子（2006）『多良間方言の空間と時間の表現』千葉大学 博士論文

下地琴恵（1998）「宮古の語彙について（童名・姓・屋号・親族語彙）」『方言第 6 号上巻』沖縄国際大学野原ゼミ

下地朝良（1968）「宮古島方言に生きている古語」『沖縄文化』26・27, 沖縄文化協会

下地理則（2006）「南琉球語伊良部方言」中山俊秀・江畑冬生編『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ 1』アジアアフリカ言語文化研究所

Shimoji, Michinori（2008）*A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. オーストラリア国立大学 博士論文

Shimoji, Michinori（2011）“Quasi-Kakarimusubi in Irabu” *Japanese/Korean Linguistics* 18

Shimoji, Michinori and Pellard, Thomas [eds.]（2011）*An Introduction to Ryukyuan Languages*. Tokyo: ILCAA

下地良男（1964）“An Analysis of Pitch Interference in Japanese Spoken by the Miyako Speaker” 『琉球大学文理学部紀要人文篇』8

下地良男（1974）「南島宮古方言の音韻変化について」『言語』3・7

新里幸昭（1978）「宮古の文学」『沖縄言語研究センター資料』1

新里幸昭（1987）「ハワイ大学宝令文庫蔵『宮古の歌』語彙・索引集」『沖縄文化』69

新里幸昭（1987）「『宮古島の神歌』の研究」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会

杉村孝夫（2003）『来間島方言の記述的研究』2001 年度～2002 年度科学研究費成果報告書

高橋俊三（1993）「多良間方言の語彙（中間報告）」『多良間島調査報告書（1）』沖縄国際大学南島文化研究所

高橋俊三（1993）「多良間方言の動詞の問題点」『多良間島調査報告書（1）』沖縄国際大学南島文化研究所

高橋俊三（1994）「多良間方言の語彙（中間報告 2）」『多良間島調査報告書（2）』沖縄国際大学南島文化研究所

高橋俊三（1995）「多良間方言の語彙（中間報告 3）」『多良間島調査報告書（3）』沖縄国際

大学南島文化研究所

- 田代安定 (1888) 「沖縄宮古島及沖縄島対訳方言集」『東京人類学会雑誌』3-29
- 津波古敏子 (1979) 「多良間島塩川方言の名詞形態論 (中間報告)」『沖縄言語研究センター会報』10
- 津波古敏子 (1982) 「多良間島塩川の方言における音韻の考察」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
- 仲宗根政善 (1975) 「言語学から見た沖縄—宮古方言の語彙体型を求める—」『人類科学』27
- 仲宗根政善 (1976) 「宮古および沖縄本島方言の敬語法—「いらっしゃる」を中心として—」『沖縄—自然・文化・社会—』弘文堂
- 仲宗根政善ほか (1973) 「宮古方言の研究」『宮古諸島学術調査研究報告 (言語・文学編)』琉球大学沖縄文化研究所
- 長浜数子 (1979) 「宮古歌謡ピャーシグイ論 (上) —歌謡と場の関連を中心に—」『沖縄文化』52
- 仲原穰 (2002) 「沖縄宮古島保良方言の音韻」『琉球の方言』26
- 中松竹雄 (1972) 「琉球語文法ノート—宮古島ウルカ方言の助詞の形態と用法—」『琉球大学教育学部紀要』16, pp1-14.
- 中松竹雄 (1973) 「伊良部島のむかしばなし—音韻仮名表記の試み—」『琉球の文化』4
- 中松竹雄 (1978) 「基礎語彙の比較的研究 (3) —宮古方言・その1—」『琉球大学教育学部紀要』22
- 中松竹雄 (1979) 「基礎語彙の比較的研究 (4) —宮古諸島方言・その2—」『琉球大学教育学部紀要』23
- 中松竹雄 (1983) 「「草鎌で草を刈る」の言語地図—伊良部島の場合—」『琉大国語』2
- 名嘉真三成 (1978) 「沖縄県宮古久松方言の形容詞」『日本語研究』1
- 名嘉真三成 (1978) 「切断動詞 [sui] [ki:] [batsi] について—沖縄・宮古西原方言の例—」『日本語研究』1
- 名嘉真三成 (1978) 「琉球方言の動詞活用の研究—宮古方言を中心に (論文要旨)」『日本語研究』1
- 名嘉真三成 (1980) 「宮古西原方言の《のぼる》と《あがる》の意味」『日本語研究』3
- 名嘉真三成 (1981) 「琉球宮古方言の動詞終止形の成立」『沖縄文化』55
- 名嘉真三成 (1982) 「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58
- 名嘉真三成 (1982) 「宮古西原方言の動詞の活用」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』
- 名嘉真三成 (1982) 「宮古方言のふるさとあたらしさ」『国文学 解釈と鑑賞』47-9
- 名嘉真三成 (1982) 「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」『沖縄言語研究センター会報』

- 名嘉真三成 (1983) 「琉球宮古方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』 26
- 名嘉真三成 (1983) 「宮古西原方言の助詞」『琉球の方言』 8
- 名嘉真三成 (1984) 「宮古方言の文法」『国文学 解釈と鑑賞』 49-1
- 名嘉真三成 (1984) 「宮古西原方言の形容詞」『現代方言学の課題 (第2巻)』 明治書院
- 名嘉真三成 (1984) 「宮古のことば」『新沖縄文学』 61, 沖縄タイムス社
- 名嘉真三成 (1985) 「宮古長浜方言の動詞の活用」『琉球の方言』 9
- 名嘉真三成 (1985) 「宮古方言の上一段動詞の四段化現象」『沖縄文化研究』 11
- 名嘉真三成 (1986) 「宮古狩俣方言の動詞の活用」『琉球の方言』 10
- 名嘉真三成 (1987) 「宮古方言の代名詞」『国文学 解釈と鑑賞』 52-2
- 名嘉真三成 (1988) 「ネフスキーと宮古方言」『国文学 解釈と鑑賞』 53-1
- 名嘉真三成 (1988) 「宮古多良間島塩川方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』 32
- 名嘉真三成 (1988) 「宮古西原方言の語彙 (I)」『琉球の方言』 13
- 名嘉真三成 (1989) 「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』 18
- 名嘉真三成 (1990) 「宮古仲地方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』 36
- 名嘉真三成 (1990) 「宮古西原方言の語彙 (II)」『琉球の方言』 14
- 名嘉真三成 (1991) 「宮古西原方言のアスペクト」『国文学 解釈と鑑賞』 56-1
- 名嘉真三成 (1991) 「宮古西原方言の語彙 (III)」『琉球の方言』 15
- 名嘉真三成 (1991) 「宮古西原方言の語彙 (IV)」『琉球の方言』 16
- 名嘉真三成 (1992) 「宮古方言」『国文学 解釈と鑑賞』 57-7
- 名嘉真三成 (1995) 「西原方言の形容詞の意味論的研究」『琉球の方言』 18・19
- 名嘉真三成 (1997) 「沖縄宮古西原方言の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』 三弥井書店
- 名嘉真三成 (1998) 『琉球方言の古層』 第一書房
- 名嘉真三成 (1998) 「宮古西原方言の語彙 (VI)」『琉球の方言』 22
- 名嘉真三成 (1999) 「宮古西原方言の語彙 (VII)」『琉球の方言』 23
- 名嘉真三成 (2000) 「宮古西原方言の語彙 (VIII)」『琉球の方言』 24
- 名嘉真三成ほか (1974) 「宮古方言母韻融合の調査報告」『沖縄言語研究センター資料』 49
- 名嘉真三成・中本謙 (2001) 「宮古西原方言の語彙 (IX)」『琉球の方言』 25
- 名嘉真三成・中本謙 (2002) 「宮古西原方言の語彙 (X)」『琉球の方言』 26
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』 法政大学出版局
- 永山勇 (1966) 「先島 (宮古・八重山) 方言覚え書 (2)」『国語研究』 17
- 根間弘海 (1968) 『宮古方言における助詞の一部と代名詞の形態—日本語 (東京方言) との対応比較において—』 沖縄女子短期大学
- 根間弘海 (1969) 『宮古方言における文節音素の研究—日本語 (東京方言) を副次的に一』 沖縄女子短期大学
- 野原三義 (1990) 「来間方言の助詞 (1)」『宮古・下地町調査報告書 (地域研究シリーズ No.15)』

- (1) 』沖縄国際大学南島文化研究所
野原三義 (1991) 「来間方言の助詞 (2)」『宮古・下地町調査報告書 (地域研究シリーズ No.15)』
(2) 』沖縄国際大学南島文化研究所
野原三義 (1992) 「下地町方言助詞の研究 付 与那覇方言動物・植物語彙等」『宮古・下地町調査報告書 (地域研究シリーズ No.15)』 (3) 』沖縄国際大学南島文化研究所
野原優一 (1987) 「宮古野原方言の動詞活用」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』琉球方言論叢刊行委員会
久野マリ子 (1982) 「全国的視野から琉球宮古諸島方言を観る」『国学院大学日本文化研究所所報』 18-6
平沢洋一 (1985) 「池間方言係助詞の統語機能」『沖縄文化研究』 11
平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』 56
平山輝男 (1966) 「琉球先島方言の研究」『都立大学方言学会会報』 16
平山輝男 (1966) 「琉球先島方言のアクセント体系」『国語学』 67
平山輝男 (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
平山輝男ほか (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
Pellard, Thomas (2009) Ōgami — Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū 博士論文
外間守善 (1968) 「宮古島狩俣の神歌」『文学』 36-12
松森晶子 (2000) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』 4(1), pp61-71.
松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと「系列別語彙」」上野善道 (監) 『日本語研究の 12 章』明治書院, pp.490-503.
宮古農林高校生物クラブ (1978) 『宮古島の植物方言集』
宮良当壮 (1961) 「方言の実態と共通語の問題点—沖縄先島—」『方言学講座 (4)』東京堂
村山七郎 (1987) 「[書評] 平山輝男編著 琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究」『奄美方言基礎語彙の研究』『国語学』 149
本永守靖 (1972) 「平良方言の音韻法則」『琉球大学教育学部紀要』 16
本永守靖 (1973) 「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』 17
本永守靖 (1978) 「宮古平良方言の形容詞」『琉球大学教育学部紀要』 22-1
本永守靖 (1982) 「伊良部方言の研究」『琉球の言語と文化—仲宗根政善先生古稀記念—』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会
本永守靖 (1994) 『琉球圏生活語の研究』春秋社
山口栄臣 (2002) 「語彙」『平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金研究成果報告書』
山田進 (1972) 「現代宮古方言味覚語彙考—東京方言との比較を中心に—」『沖縄文化』 39
与儀達敏 (1934) 「宮古島方言研究」『方言』 4-10, 春陽堂
与儀達敏 (1937) 「宮古方言を中心として」『南島論叢 (伊波普猷先生還暦記念)』沖縄日報

社

吉村玄得（1974）『沖縄宮古ことわざ全集 付録 やさしい方言』

吉本隆生（1998）「夏秋冬春 夏の抄（1） ヴィブィ・ガッサァ」『EDGE No.7』APO（Art Produce Okinawa）

琉球大学沖縄文化研究所（1968）『宮古諸島学術調査研究報告一言語・文学編一』

琉球大学方言研究クラブ（1974）「宮古・久松方言の音韻と動詞の活用体系」『琉球方言』
12・13, 琉球大学方言研究クラブ

7 文化講演会

調査期間中に宮古市中央公民館で文化講演会を行った。そのときのチラシと新聞記事を以下に掲載しておく。

文化講演 & シンポジウム

「語ろう 宮古島の方言」

9月3日から7日まで、国立国語研究所、琉球大学、沖縄国際大学などの方言研究プロジェクトのメンバー約40名が、宮古島で方言調査を行います。この調査は、消滅の危機にある貴重な言語を集中的に記録・収録し、方言の保存・継承と日本語の歴史の解明に活かすことを目的としています。今回、この調査に合わせ、方言について語り合う文化講演会「語ろう 宮古島の方言」を開催いたします。市民の皆様、ふるってご参加ください。

日 時：平成23年9月6日（火）
午後5時30分～7時30分

会 場：宮古島市中央公民館 / 大ホール
〈入場無料〉

テーマ：「語ろう 宮古島の方言」

パネリスト

- 田窪 行則（京都大学教授）
- 西岡 敏（沖縄国際大学准教授）
- ウェイン・ローレンス
（オークランド大学上級講師）
- 林 由華（京都大学非常勤講師）

司 会 ○木部 暢子（国立国語研究所教授）



紅花の祭



上里のキャンプ大会



阿波舞の踊り



山田のパーンパル



地蔵堂

■主 催：国立国語研究所・宮古島市教育委員会

■連絡先：宮古島市教育委員会 生涯学習振興課（電話0980-77-4947）

宮古毎日新聞 2011年9月7日朝刊

宮古毎日新聞

2011年(平成23年)9月7日 水曜日

多様な「宮古フツ」を再確認

方言シンポジウム

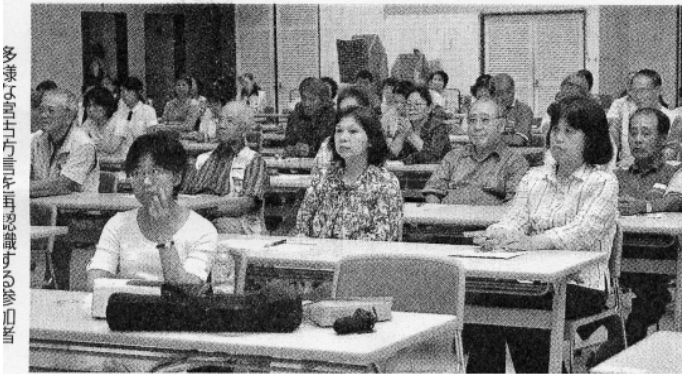
保存・継承の決意新た

研究チームが文化講演

国立国語研究所と宮古島市教育委員会が主催する文化講演&シンポジウム「語ろう宮古島の方言」が6日午後、市中央公民館で行われた。宮古島の方言を調査しているプロジェクトチームのメンバーが宮古方言の魅力を語り、独特の言語文化を有する貴重な環境の保存と継承を訴えた。会場の参加者は研究者の調査結果に耳を傾けて多様な宮古フツ(方言)文化を再確認し、次世代への継承に向けて決意を新たにしました。



方言の魅力を語る研究者の皆さん。左から司会の木部さん、パネリストの田窪さん、林さん、ローレンスさん、西岡さん＝6日、宮古島市中央公民館



多様な宮古方言を再確認する参加者

国立国語研究所と琉球大学、沖縄国際大学の教授らで構成されるプロジェクトチームは今年3月から宮古島の調査を実施。約40人が各地で受け継がれてきた方言を聴取し、併せてルールと文化を探っている。シンポジウムではチームを代表して沖縄国際大学准教授の西岡敏さん、オーク

ランド大学上級講師のウエイン・ローレンスさん、京都大学非常勤講師の林由華さん、京都大学教授の田窪行則さんがパネリストを務めた。司会は国語研究所教授の木部暢子さん。

西岡さんは、ある物語に学生たちが方言の音声を吹き込んで仕上げた紙芝居を上映し、方言を習得しようとする学生たちの学習意欲を紹介した。

その上で「若い人が継承することが大切。このような取り組みを通して、若い人が楽しみながら方言に対する意識を高めてくれれば良いと思う」と話した。

ローレンスさんは、宮古で日常的に使う「がま」という言葉を取り上げた。「これは小ささを強調するときに使言葉だが、宮古だけは動詞に付けて使用することがある。これは八重山や

沖縄本島、奄美にはない傾向と言える」と宮古独自の言語文化を強調した。

また「宮古でおもしろいのは部落ごとに発音が違うところ。発音、文法、言い回しが違うところは非常に興味がある」と述べ、多良間島にも二つの発音があることを紹介した。

林さんは、流ちょうな池間民族の方言を披露し、今も地域に残る貴重な言葉の継承を強く訴えた。地域によって発音などが違う宮古島方言については「元々の言語から多良間島の方言に分かれた後、伊良部と池間に分かれ、そこからさらに本島各地の方言に分かれたのではないか」と話した。

田窪さんはデジタル博物館を紹介。西原の方言だけでなく歴史や文化も盛り込んだという。方言で語る地域住民の動画には字幕を付

けて誰でも理解できる内容に仕上げた。「どうすればこの方言を残していけるのかを考えた。その結果としてデジタル博物館を作ってみた。完成した段階で西原の許可をもらい、世界に発信したい」と述べた。

宮古島方言の魅力につい

て木部さんは「言語の違いであり、どうしてこんなに違うのか。このルーツを突き止めたい。言葉の先祖を探したい」と話した。参加者には「皆さんはバイリンガルになれる。それが方言を守ることになる」と方言の保存を促した。

宮古新報 2011 年 9 月 7 日朝刊

宮古方言の魅力語る

シンポで保存・継承訴え

国立国語研究所 田窪行則さん（京大教授）ら講演

市中央公民館で6日、文化講演・シンポジウム「語ろう 宮古島の方言」（主催・国立国語研究所、市教育委員会）が開かれた。京都大学の田窪行則教授らをパネリストにシンポジウムを行い、宮古方言の魅力やそれを研究する者が語った。その中で「方言は力を持っている。将来に渡って受け継ぐ必要がある」と保存、継承を訴えた。多数の市民も参加し、改めて宮古方言の魅力にふれた。

田窪教授は西原地区の伝統行事や方言などが動画や図表などで紹介されているデジタル博物館「宮古シナ西原地区の文化と言語」を訴えた。

同研究所や琉球大学、沖縄国際大学などの方言研究者が3日～7日まで消滅の危機にある貴重な言語を記録、収録し、方言の保存・継承と日本語の歴史の解明に生かすことを目的に島内

で方言調査を実施している。この調査を機会とし、この文化講演・シンポジウムを開催した。司会は国立国語研究所の



宮古方言との出会いや魅力を語り、保存・継承を訴えるパネリストら＝市中央公民館

木部暢子教授。パネリストは沖縄国際大学の西岡敏准教授、オークランド大学上級講師のウェイレン・ローレンスさん、京都大学非常勤講師の林由華さん、田窪教授の4人。

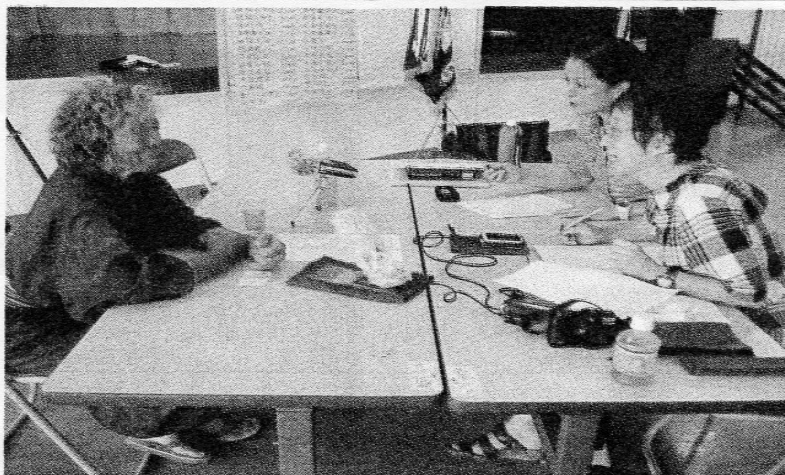
講演で西岡准教授は学生が宮古方言で製作したデジタル紙芝居「豊見氏親の大鯖魚退治」を紹介。ローレンスさんは小ささを強調する「がま」について使用例や他地域との違いを説明。「宮古だけでなく八重山にも似たものはあるが、宮古では動詞につけることがある」と話した。

林さんは「琉球語は弥生時代以前に日本語と分かれたと言われる。現在は危機に瀕した言語。辞書、文法、テキストを収集しながら調

るが、年内に公開する予定。また、シンポジウムではそれぞれが宮古方言との出会いや魅力を語った。ローレンスさんは「部落ごとに言語が異なるのはとても面白い」と話した。また、西岡准教授は「伊良部のユークイを見学して歌が全て方言で力を秘めている言葉に感動した。方言は将来に渡って受け継ぐ必要がある」と力強く語り、保存・継承を訴えた。

宮古毎日新聞 2011年9月7日朝刊

宮古新報



狩俣の住民（左）から方言の聞き取り調査を行う研究員ら＝狩俣集落センター

国立国語
研究所

宮古島方言を記録保存

狩俣などで聞き取り調査

国立国語研究所、琉球大学、沖縄国際大学など方言研究プロジェクトメンバーの研究員らが5日から宮古島方言の記録保存のための調査を実施している。狩俣地区の狩俣集落センターで花城ヒデさん（84）、根間昌明さん（78）、狩俣昌喜さん（88）、上原正行さん（68）の4人から聞き取りを行った。

研究員らは独自に宮古方言の調査をしているが、プロジェクトとしては今回が初めてとなる。国立国語研究所副所長の木部暢子さんは「方言の緊急調査で、宮古島では南部、中部、北部に分けて狩俣、久貝、宮国、来間、伊良部など12集落で同じ単語や言葉の聞き取りを行っており、それによって違いが分かる」などと話

した。

狩俣地区の調査では4班に分かれて頭、顔、足全体、髪の毛、肩、涙、顎先、足全体などを聞いた。また、言葉の作り方では「鳩も鷹も飛ぶ」、「風で帽子が飛んだ」、「みんなで舟を漕ぐ」、「父は天気が悪いから海へは行かない」などの方言の

聞き取りも行った。

また、国立国語研究所、宮古島市教育委員会主催の「語ろう宮古島の方言」をテーマにした文化講演＆シンポジウムが、6日午後5時半から市中央公民館大ホールで開催された。木部さんが司会を務め、田窪行則さん（京都大学教授）、西岡敏さん（沖縄国際大学准教授）、ウエイン・ローレンスさん（オークランド大学上級講師）、林由華さん（京都大学非常勤講師）がそれぞれパネリストとして宮古方言の魅力を語った。

執筆者紹介

木部 暢子（国立国語研究所時空間変異研究系教授）
トマ・ペラル（フランス国立科学研究所常勤研究員）
林 由華（京都大学非常勤講師）
五十嵐 陽介（広島大学大学院文学研究科准教授）
かりまた しげひさ（琉球大学法文学部教授）
松浦 年男（北星学園大学文学部専任講師）
中島 由美（一橋大学大学院社会学研究科教授）
徳永 晶子（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）
諸岡 大悟（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

国立国語研究所共同研究報告 12-02

消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書

2012年8月1日発行

編集 木部暢子（国立国語研究所時空間変異研究系）

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

Tel.042-540-4300（代表）

<http://www.ninjal.ac.jp/>

©国立国語研究所

ISBN 978-4-906055-22-7

ISSN 2185-0127

General Study for Research and Conservation of
Endangered Dialects in Japan
Research Report on Miyako Ryukyuan

Edited by
KIBE Nobuko
August 2012